

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

7
月号

奇譚クラス

KITAN CLUB

7



緊縛フォト撮影の実際

通り過程の変化

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価 百五十拾円

絢を競う艶姿115ポーズ

緊縛写真集 クラフ集

◎豪華な内容とモデル陣◎

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ……………絹川文代

荒縄全裸緊縛……………大塚啓子

落ちた腰巻九態(野外)

円い乳房……………愛川悦子

浴室におびえて九態……………愛川悦子

縄の陶酔……………絹川文代

恍惚境悦虐の末……………絹川文代

いためられた乳房……………桜井葉子

耐えられる……………桜井葉子

月経帯の強制二態……………大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態……………大塚啓子

全裸悦虐態……………大塚啓子

白痴美の誘惑……………大塚啓子

はねかえす縄……………大塚啓子

うろうろ許して……………大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態……………大塚啓子

優姿ハダカ縛り……………絹川文代

忘却の彼方……………絹川文代

股間縛り背正面二態……………絹川文代

捕われの麗人二態……………絹川文代

湯責め二態……………大塚啓子

浴室にて責める四態……………大塚啓子

何にをしようと言うの……………桜井葉子

新人書態集八景……………桜井葉子

いじめぬく二態……………絹川文代

メンスバンドの猿轡……………絹川文代

観念横臥の図二態……………絹川文代

変形手足しばり四態……………愛川悦子

裸身をさらして六態……………愛川悦子

豊満くらべ九態……………桜井葉子

亀甲縛り正背面二態……………愛川悦子

怨めしき縄目二態……………大塚啓子

後手首腰縄四態……………大塚啓子

新人緊縛ポーズ集六態……………桜井葉子

隅から隅まで四態……………愛川悦子

鏡面万華模様(裏と表)……………愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ

限定版特別号 第三弾!

『緊縛写真集クラフ集』

特価五百円 略号「クラフ」

表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

画題「縛り人形」

絹川文代
花坂道子

限定版特別号
につき一切書店
売りは致しませ
ん。直接発行所
宛お申込み願
います。厳重包
装の上急送致
します。

〓お申込先〓

大阪市阿倍野郵便局

私書函第十四号

天星社

振替口座

大阪五〇〇四二番





第一グラビヤ

驚化と婉曲美の探究……………構成 塚本鉄三
ゴム帽子……………梨花悠紀子
恍惚のムード……………絹川文代
荒……………梨花悠紀子
亀甲縛りと……………大塚啓子
姿態の変化……………大塚啓子

巻頭口絵

傑作責画特選……………四馬 孝・画
「踊子受難」……………浣腸マニヤ
「手枷足枷」……………木馬
「上玉」……………滝れい子・画
倒錯絵巻選……………
マゾヒスティック場面「女主人と丁稚どん」
憎美女性切腹「鎌腹」
サディズム・ブレイ「煙草責め」

ラビヤ

写真による散文詩……………構成 辻村 隆
破られたシャツ……………梨花悠紀子
燭……………台……………東浦ひかる
閑える女体……………小竹知子

第二グ

切腹フォト「女丈夫自刃」……………Mフォト「足で食べさせてやる」
甘美な仕置……………梨花悠紀子
公園の早朝……………絹川文代
後手を吊られて……………梨花悠紀子

緊縛フォト撮影の実際(縛り過程の変化と表情)塚本鉄三……………56
創作 狂恋の囚女……………近藤 一……………64
告白小説ダブル・ブレイ……………玉田良江……………78
奇態体験小説『正(まんじ)』……………正宗五郎……………84
連載小説「宇宙のどこかで」……………佐治麻造……………88
連載小説「狩獵者(七)」……………佐度 槐……………102
戯文 きたん怪画館……………牧 高志……………110

奇クサロン

秘密の楽しみとその守り方……………戯画 狸と姫君……………111
凌辱という名の電車……………「女装切腹」願望
玉稿落穂拾遺抄……………絵画に於ける
鼻責めノート……………緊縛の構想とアイデア
オムニバス絵物語「尿流」より……………ふんどしの歌
通信 絹川文代さまへ……………貼り薬と絆創膏
縛り方教室……………乞食鍼医の特別患者
浣腸椅子のいけにえ……………緊縛……………一番
少年受難シリーズ「いかさまの仕置」……………物干の洗濯物
尻に敷かれて死にたい……………声のサト演技
妊婦を縛る……………サロン投稿「樂りますわよ」

創作 汚れた診察室……………水野裕紀子……………135
告白 ウエスト矯正の体験……………古井慎也……………138
奇譚三十九夜物語……………辻村 隆……………140
馬化願望「彼の幻想」……………柳手智市……………152
ある切腹マニヤの告白「悪魔の日」……………黒岩鉄夫……………154
ファンタジア・マゾヒスティカ……………山本節夫……………160
旅の一座流浪記「女形緊縛」……………阪東秀美……………162
極楽天女(幽鬼の正体)……………島 俊太郎……………170
色刷頁調停ブレイ……………石田久人……………183
コント 彼女は奥様……………鶴藤 恵……………191
体験告白「令嬢の灸責め」……………橋田玄海……………194
野外アクロ残酷記……………水田真紀子……………200
浣腸によつて変わる夜のムード……………山岸悠子……………208
ぼくはジュースにあがれる(愛好者の記録)……………とよまかつひ……………213
女装の出る映画雑信……………和葦憂子……………215
イメージ「待望」……………近藤 一……………216
女斗美絵巻シリーズ No.1「勝負あった」……………雪崎京人……………219
映画回想 映画に現れたM場面……………鬼山絢策……………220
代理部案内……………223
読者通信……………231

川柳アニア七蛇心

佐保忍作
淹れ子色



曳かれゆく女囚人
おんめしうど

前手錠



今日よりは女上位と
きめにけり

脇腹に突き刺す
刃

髪くわえ

痛く
な
苦し
み
に
耐え
悶え
ぬく



海老

責は

湯巻の
乱れ奇妙なり



柔肌
に
遺恨



相撲の
いと激し

強盗
は
シエ
ズ
の
な
たり





朧化と婉曲美の探究

構成 塚本鉄三



ゴム帽子

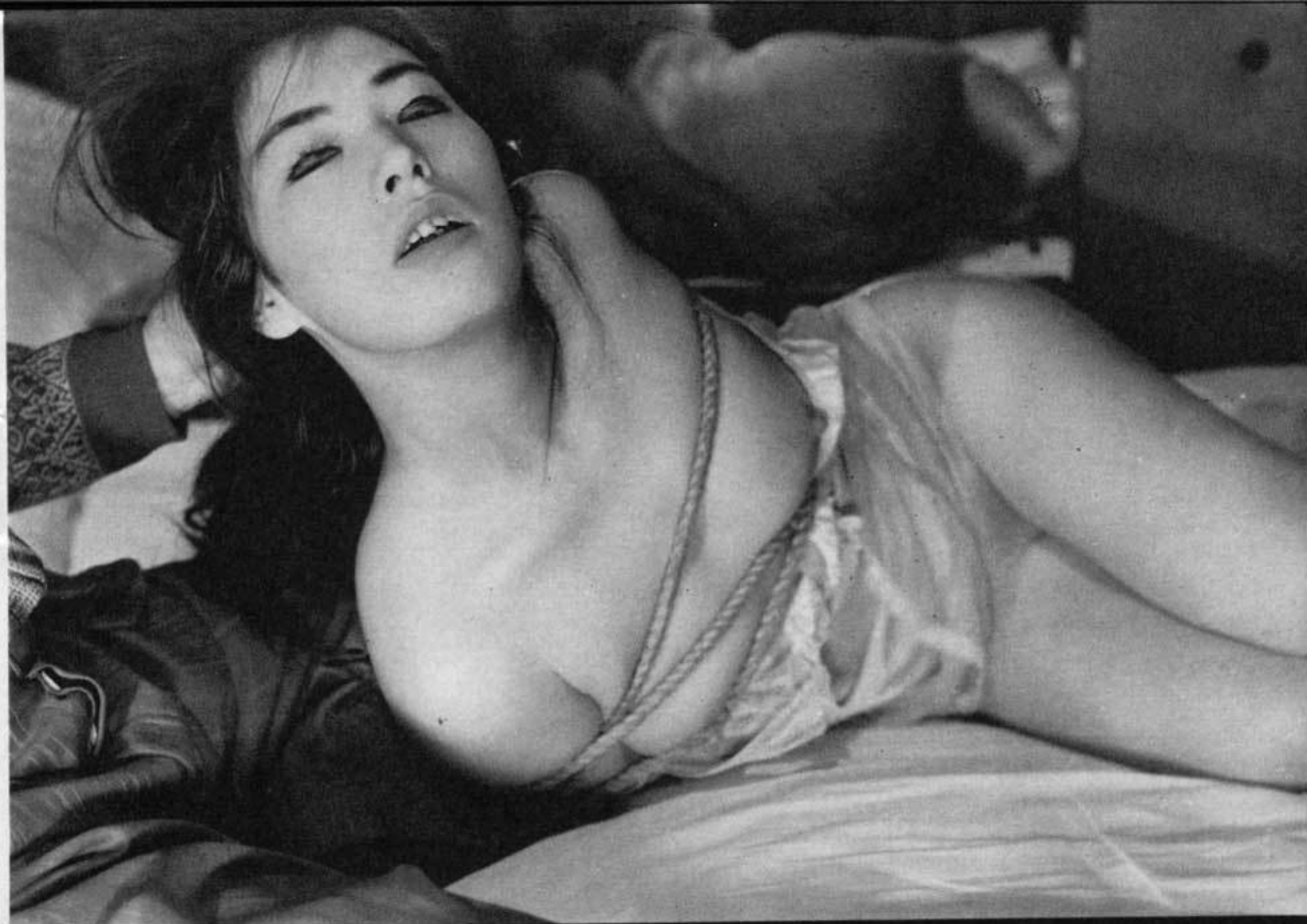
梨花悠紀子



惑溺の瞬間



梨花悠紀子

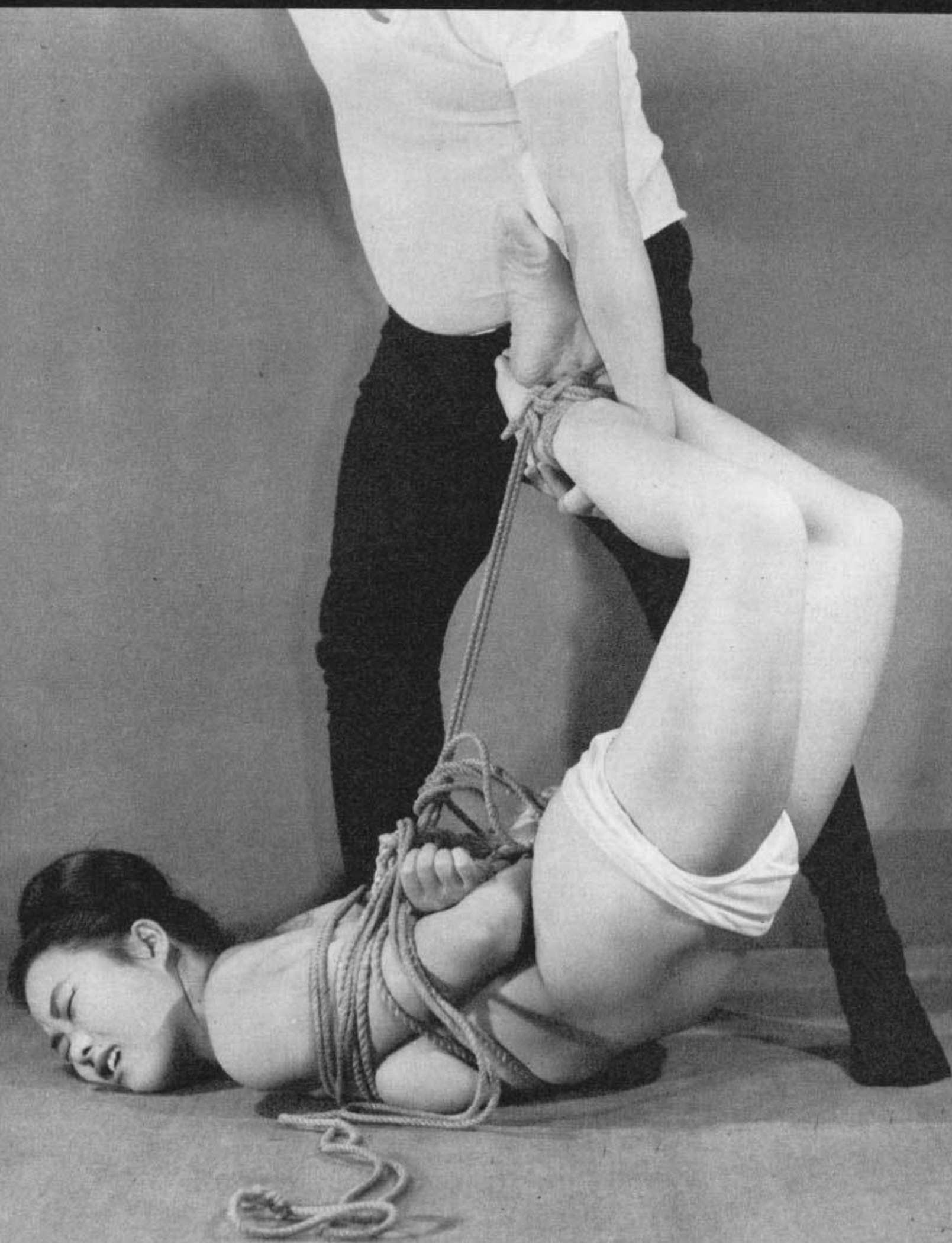


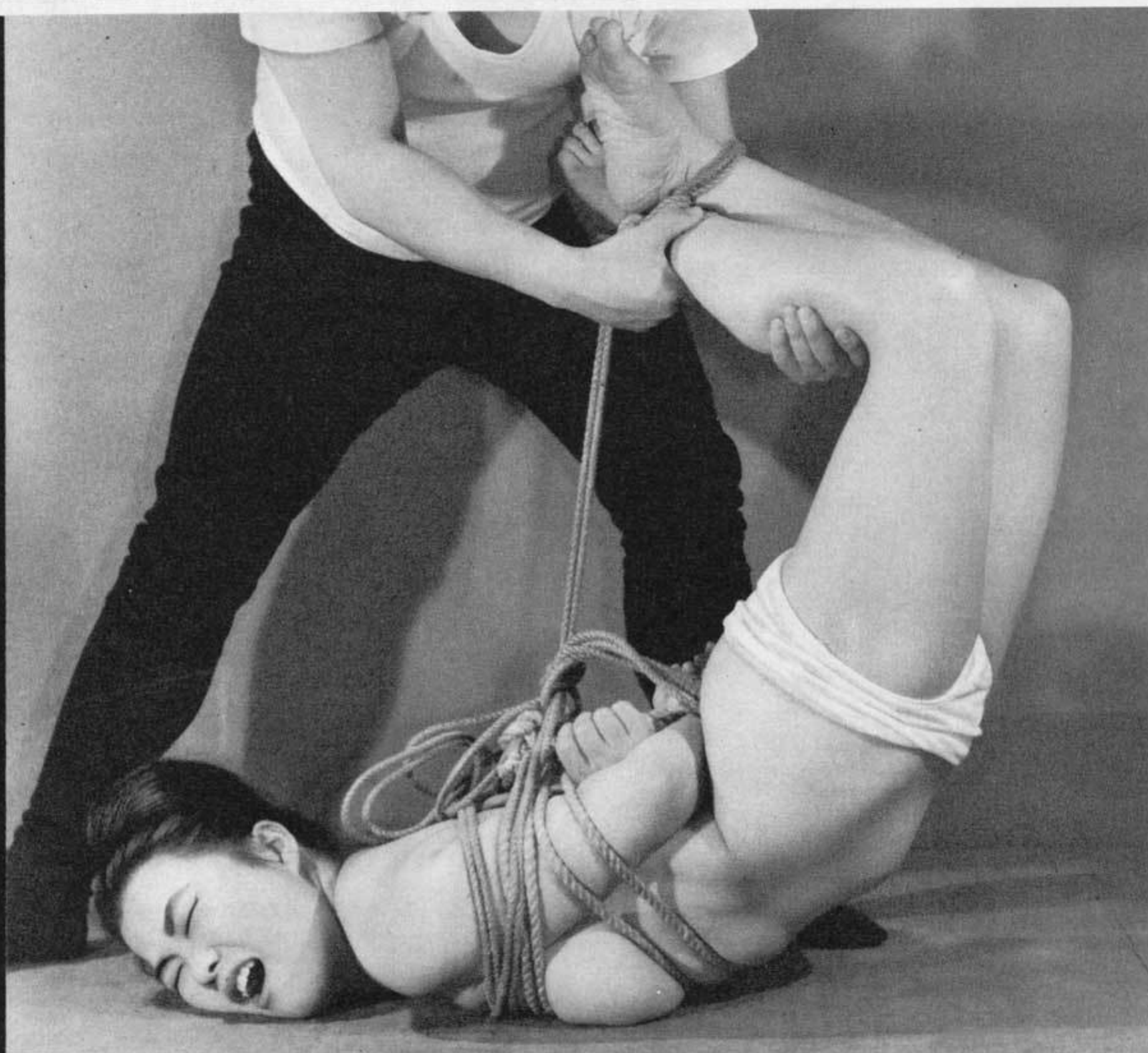
絹
川
文
代

恍惚のムード



め責老海逆









荒 縄



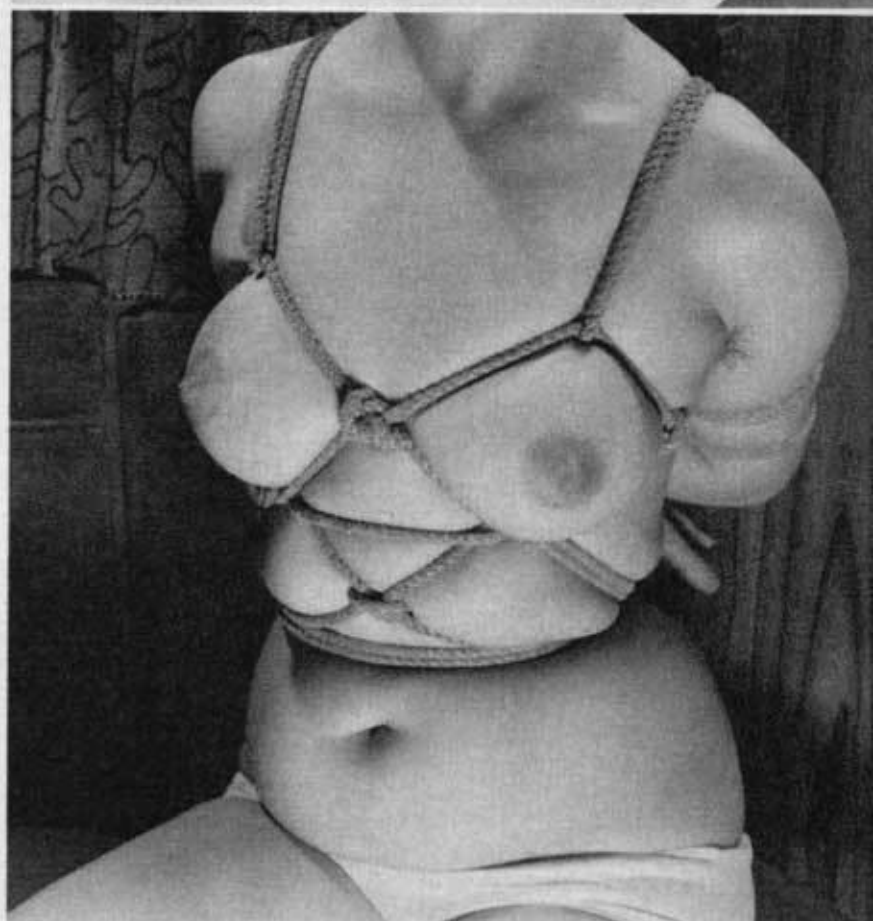
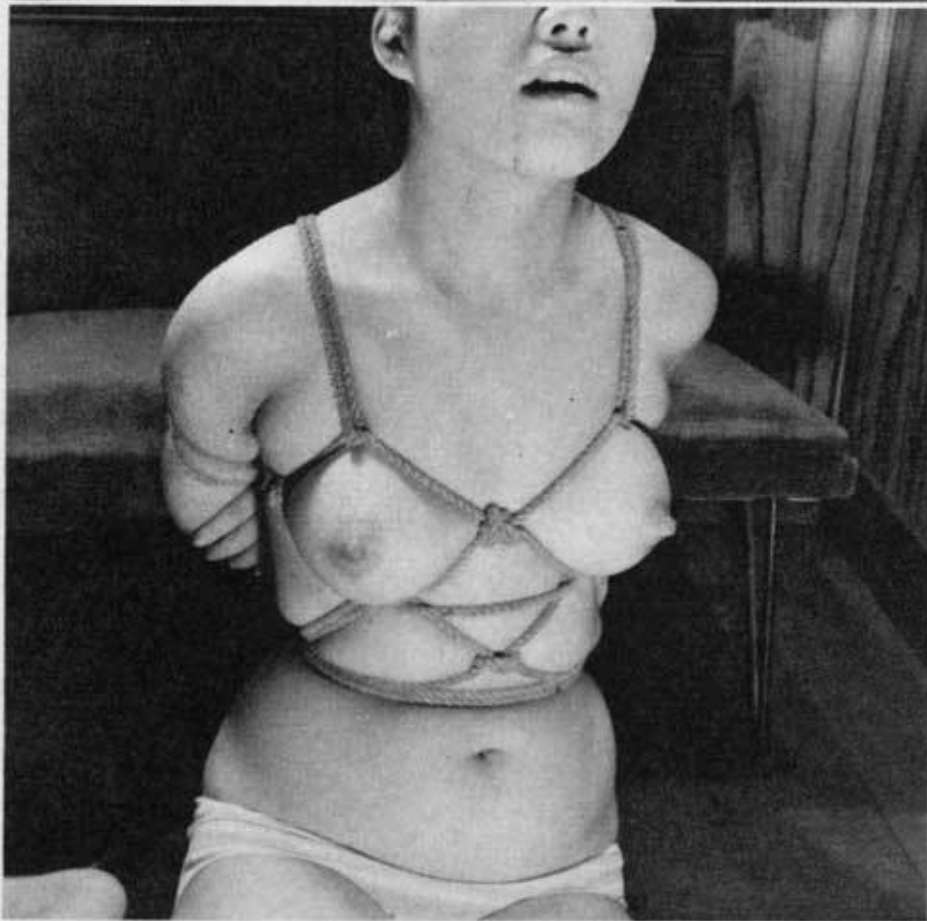
梨花悠紀子

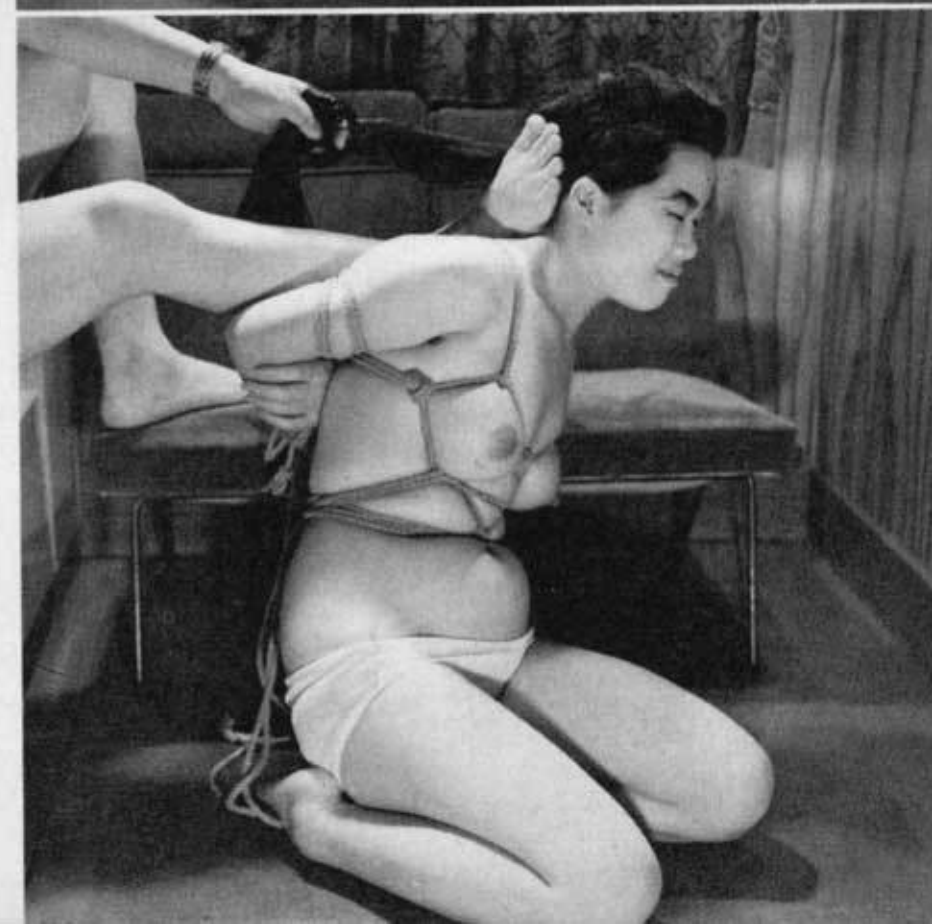
足蹴と引倒し



亀甲縛と姿態の変化









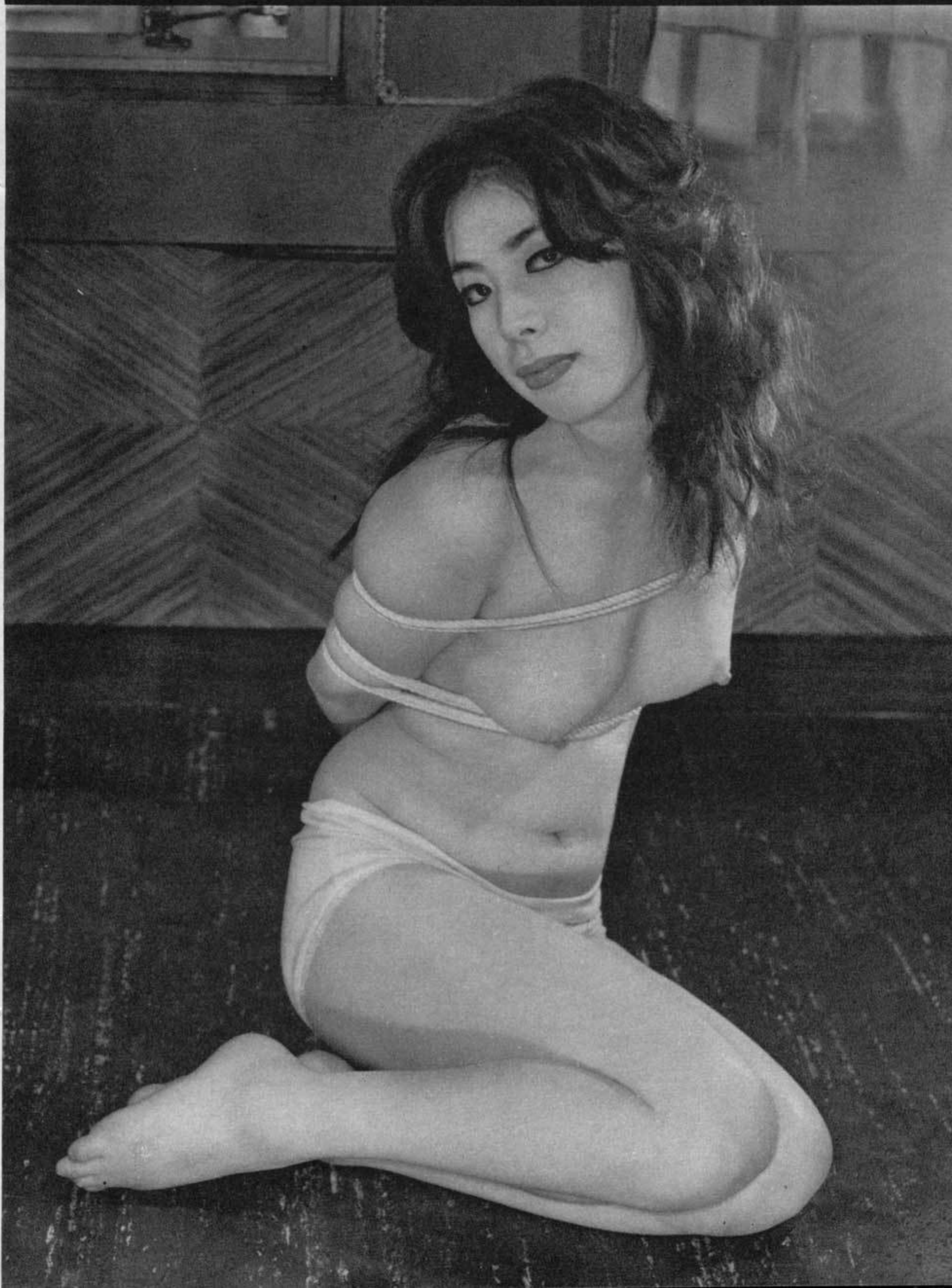
サ ル グ ツ ワ 哀 歡

四 方 清 美



艷 視

絹 川 文 代



踊子受難

ボスの意に従わぬ美貌の踊子が人知れず受けた責め場は薄汚れたビルの地下室であった。



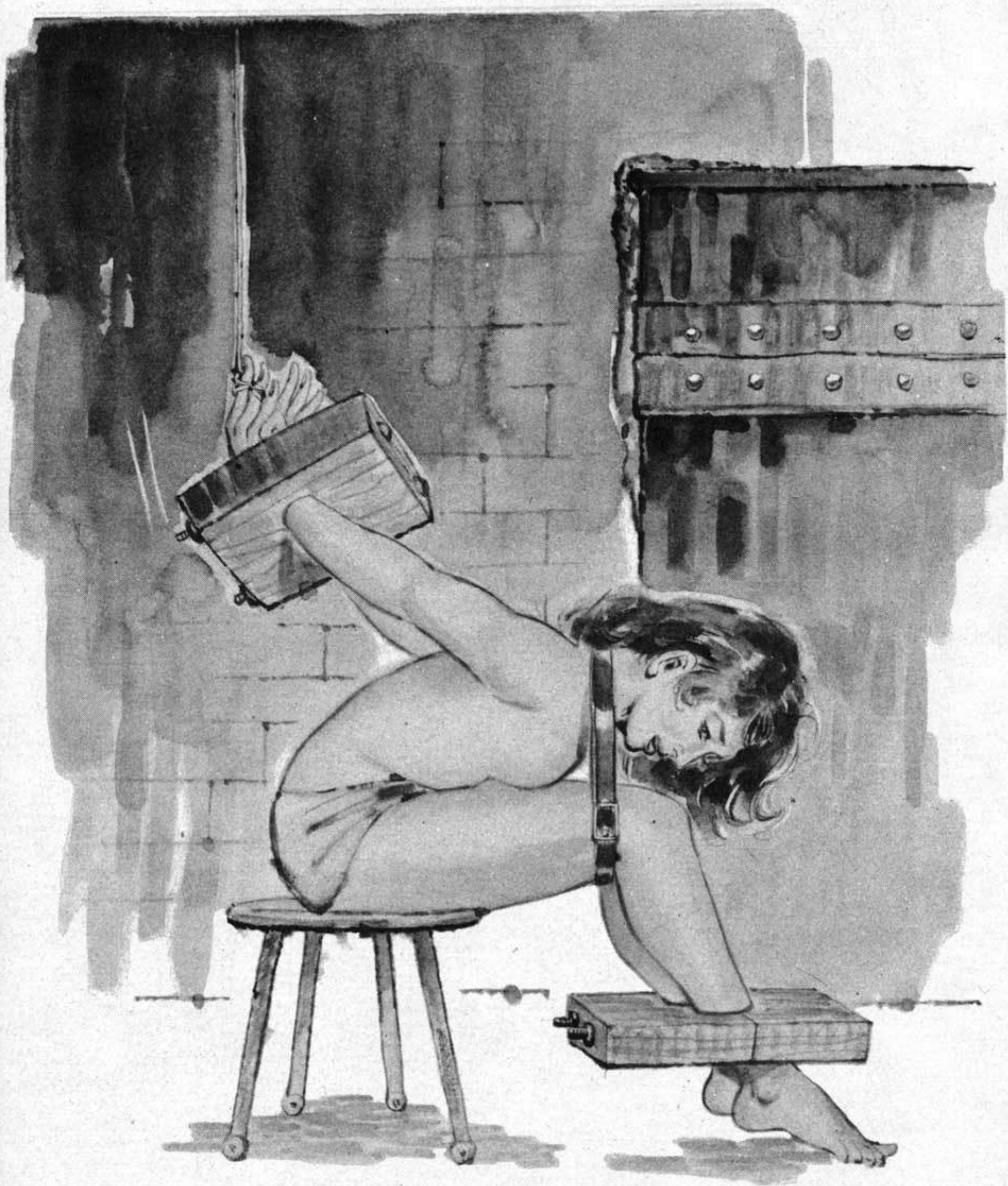


浣腸マニヤ

嬉しさにわななく手で浣腸器を操作するマニヤと恐ろしい一瞬を待つ美少女。

手枷足枷

一時間前まで華やかなステージで踊っていたダンサーが今では、このような無惨な恰好で……。



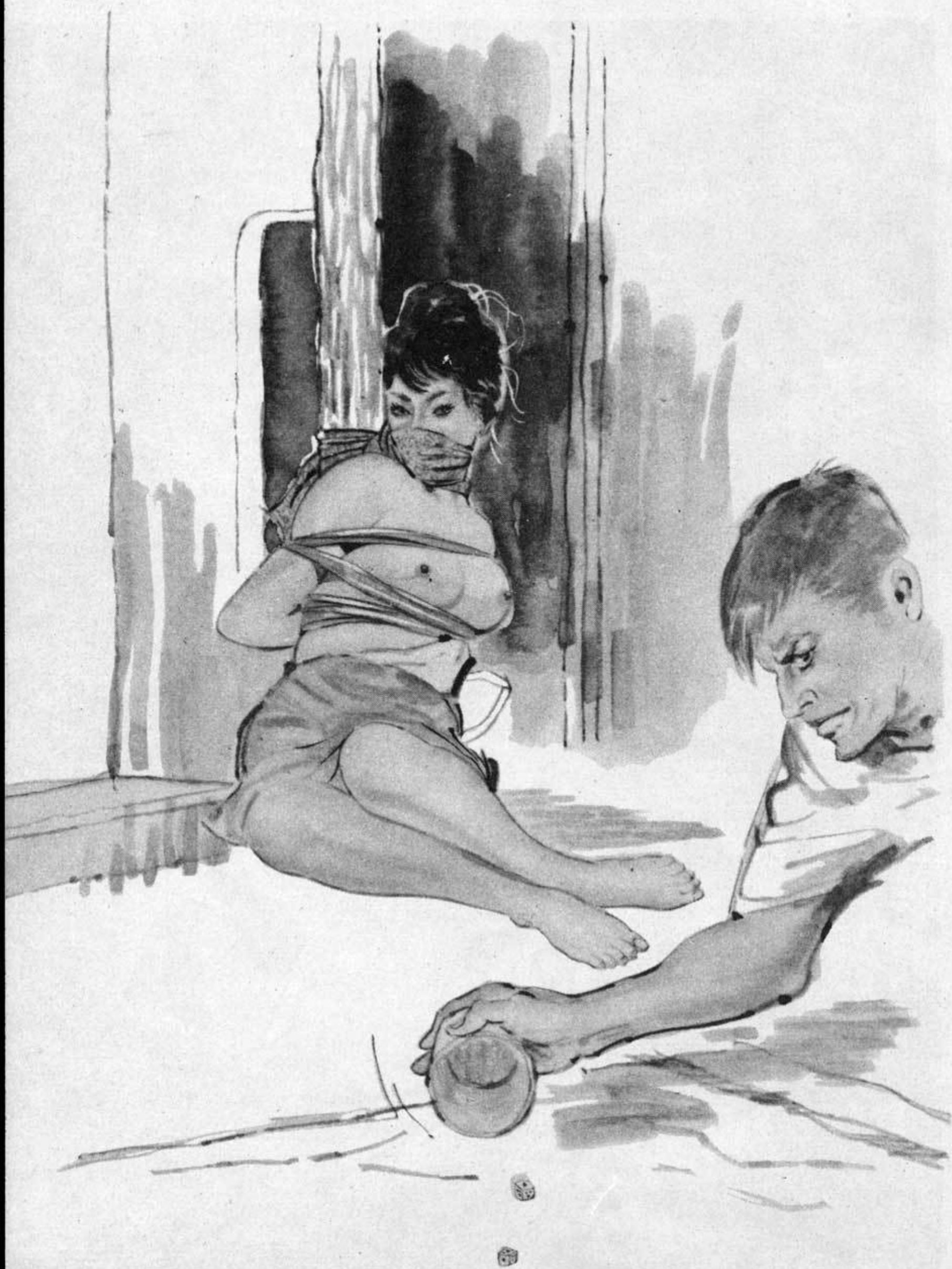


木馬

いつまでも、そうして遊んでいなよ。身体がどうかなるまではな。

上玉

丁半賭博、勝った者がこの上玉を意のままに出来るのだ。



女主人と丁稚どん

「あたしゃお前をいじめるのが大好きなんだよ。どう、動けるものなら動いてごらん」

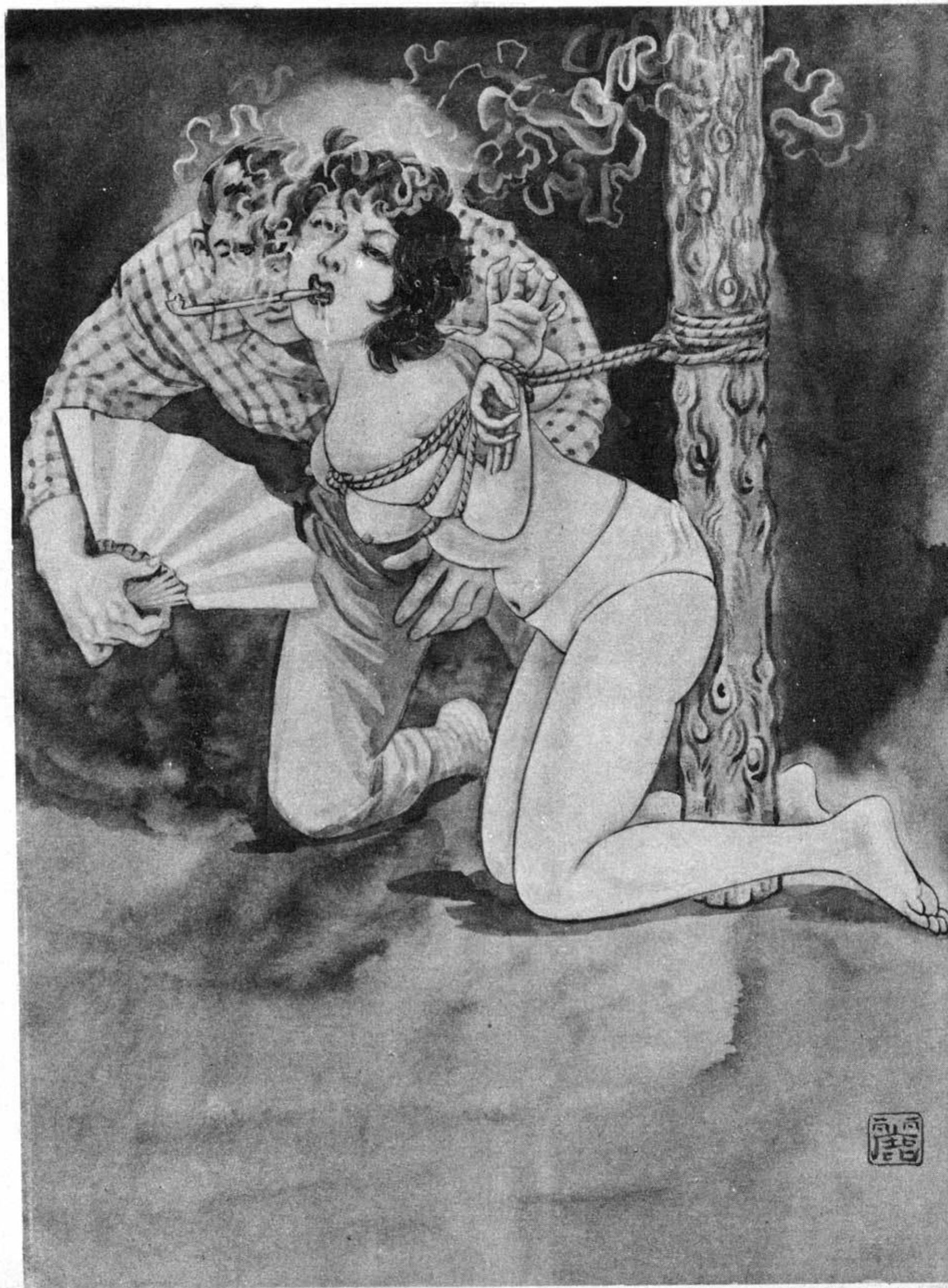




鎌 腹 〈邪恋を清算する農家のグラマー娘〉

煙管責め

煙にむせて涎をたらしても、くわえた煙管を落させぬところに責甲斐があります。



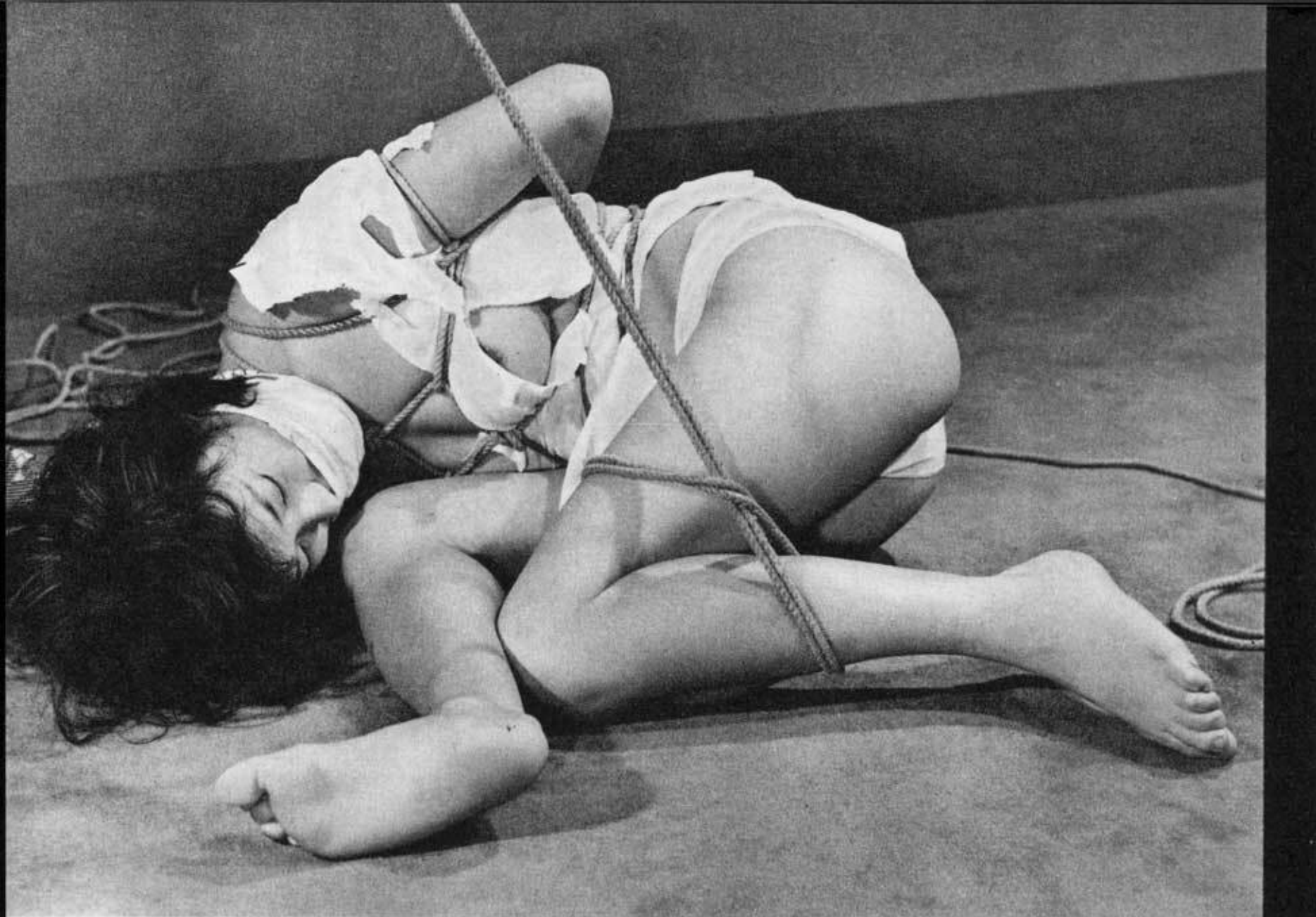
写真による散文詩

構成 辻 村 隆



破られた シャツ

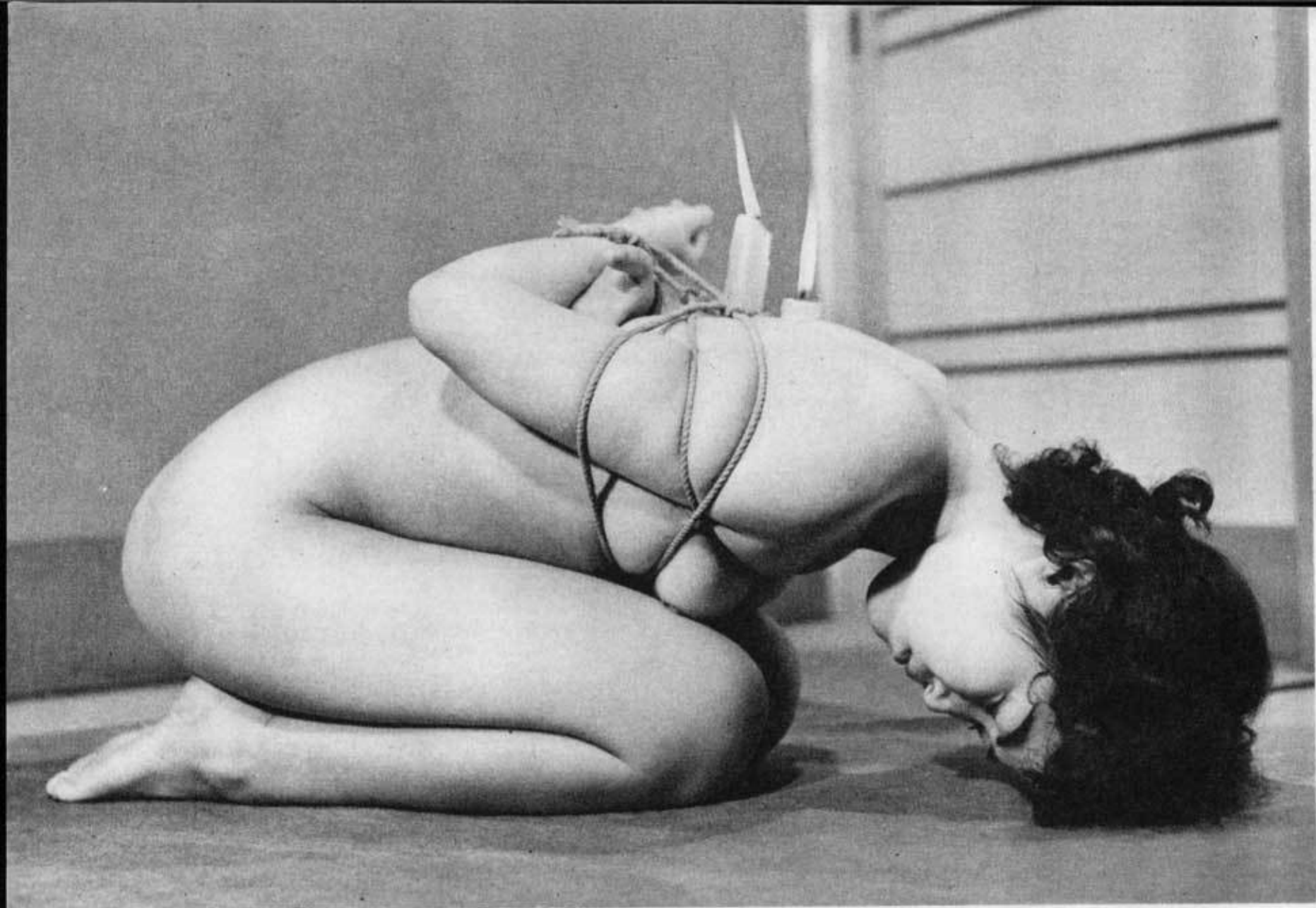




梨花悠紀子

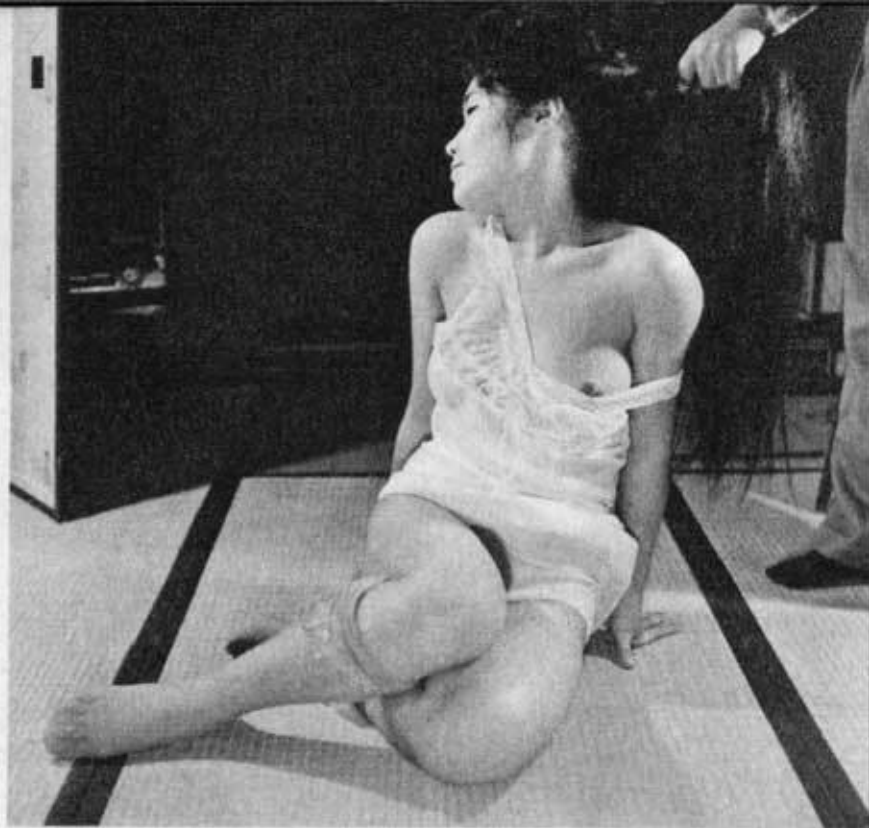
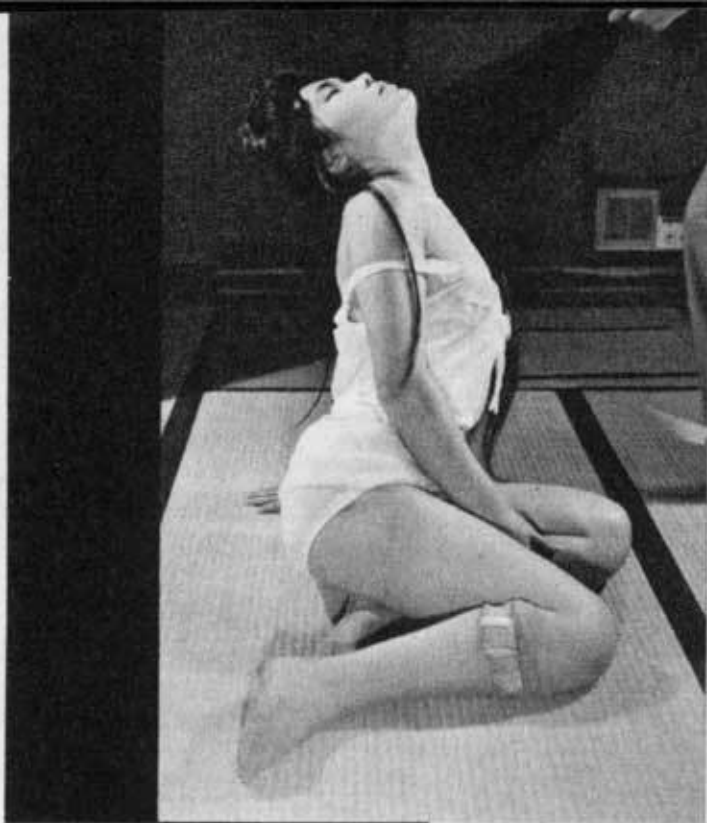
滅
茶
苦
茶



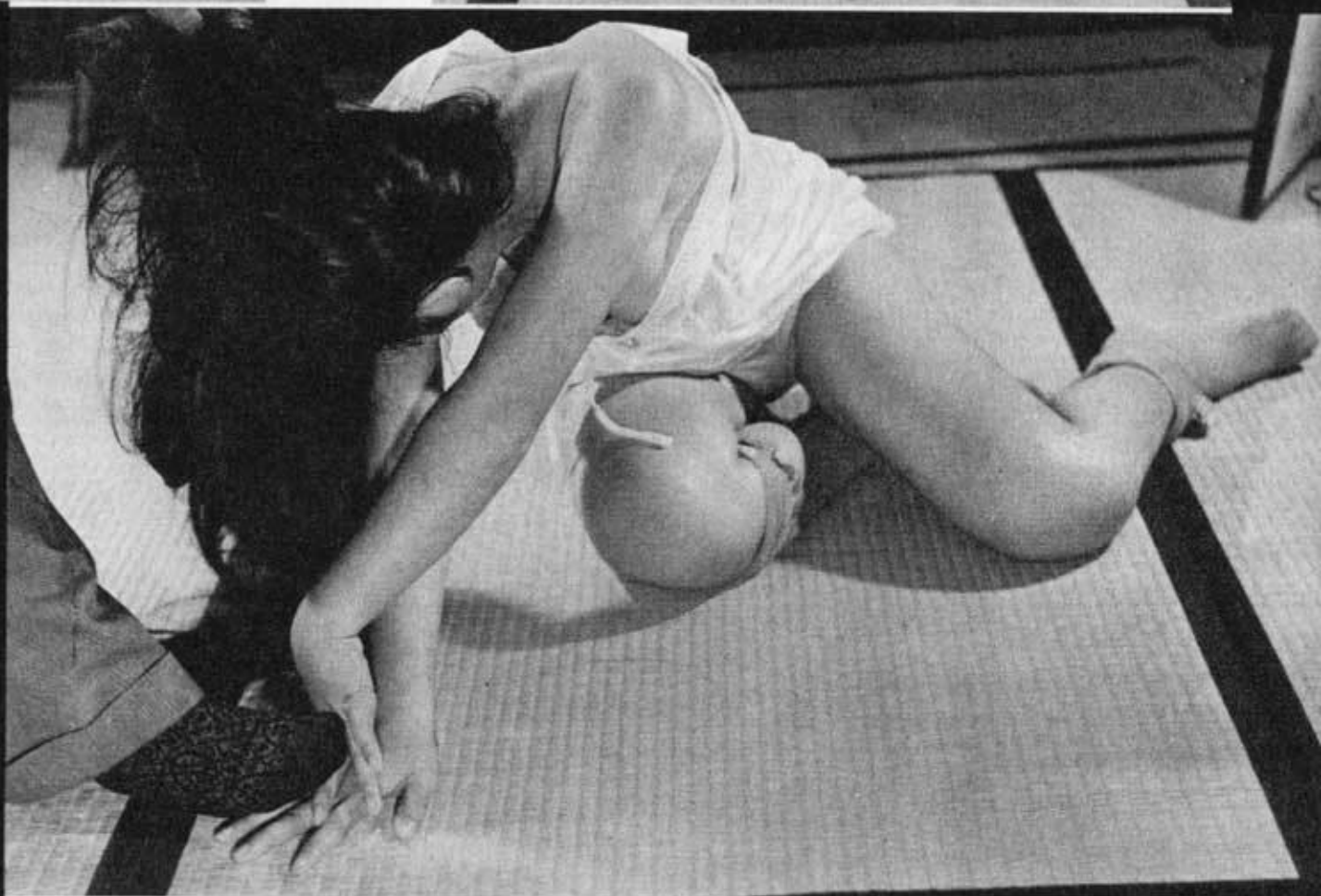


燭
台

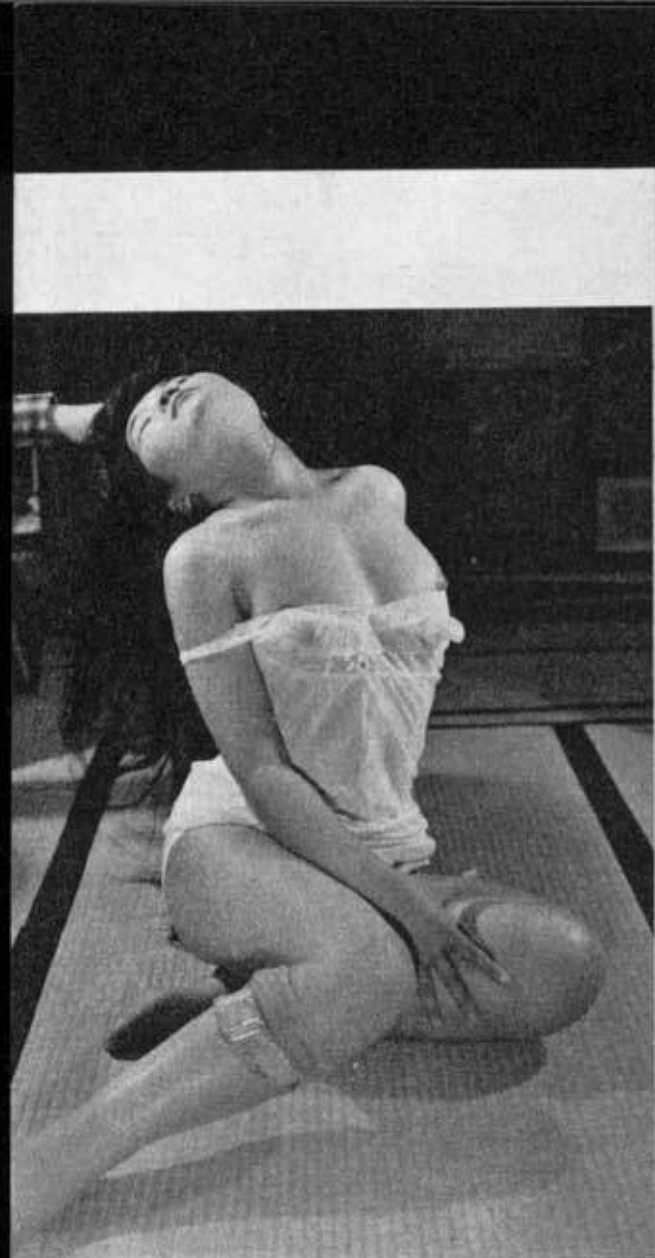
東
浦
ひ
か
る



悶える女体



小竹知子



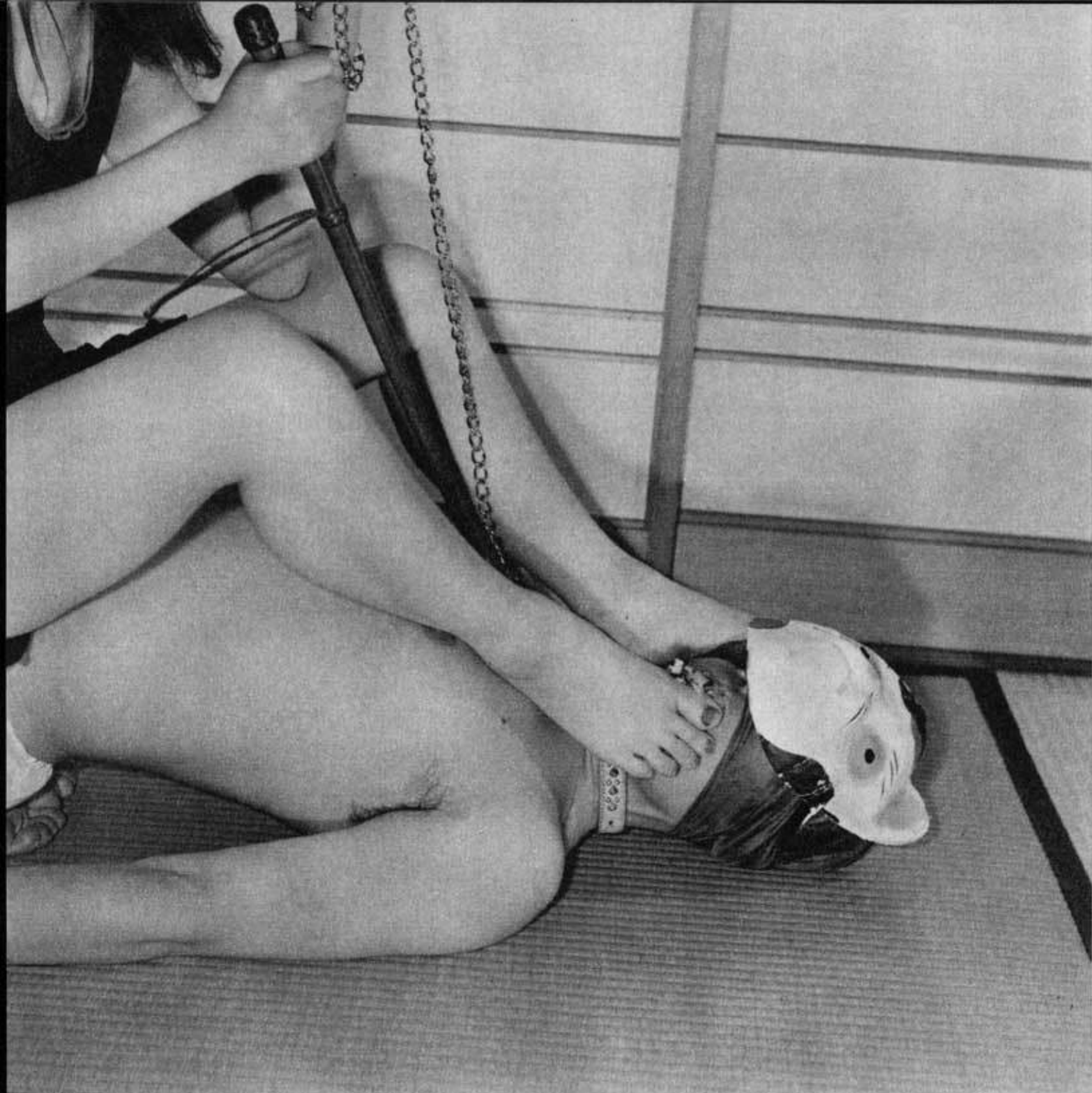
女丈夫自刃





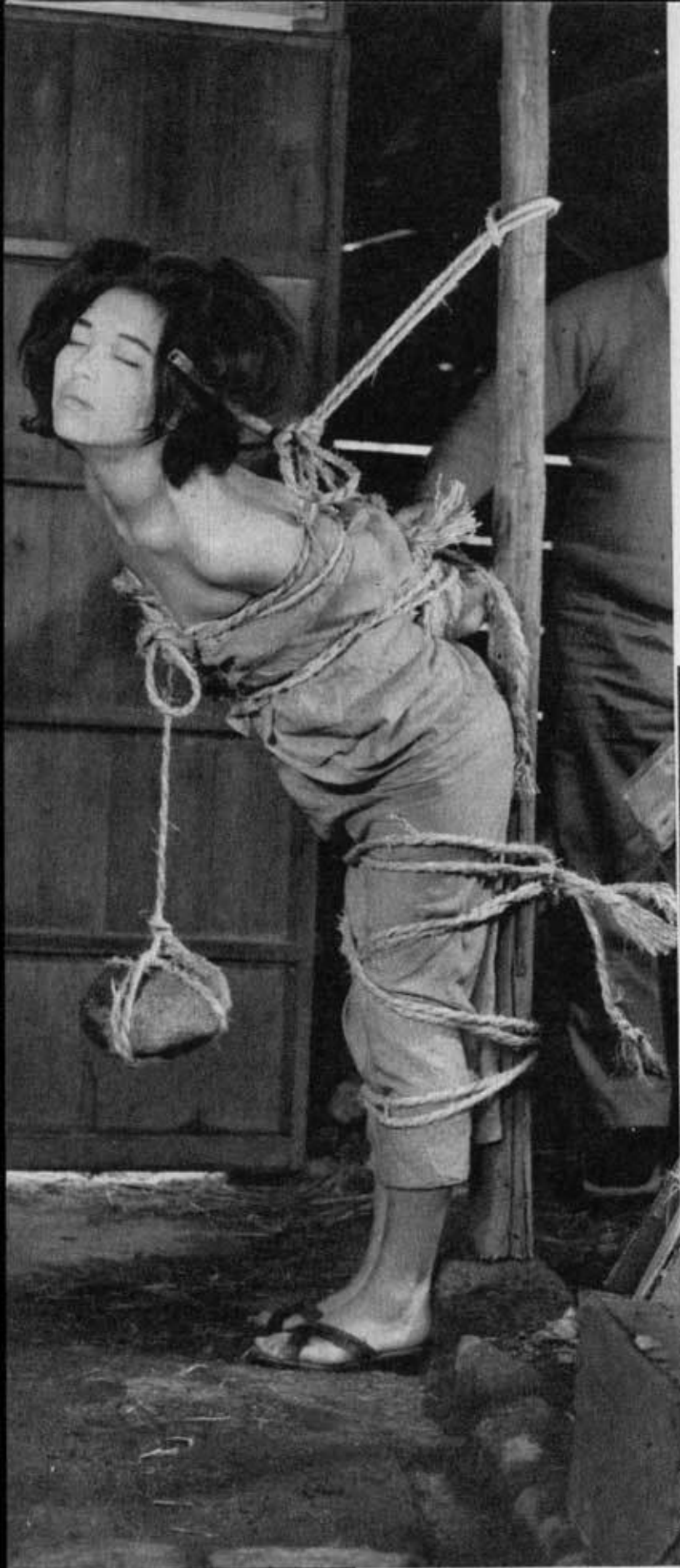


足で食べさせてやる



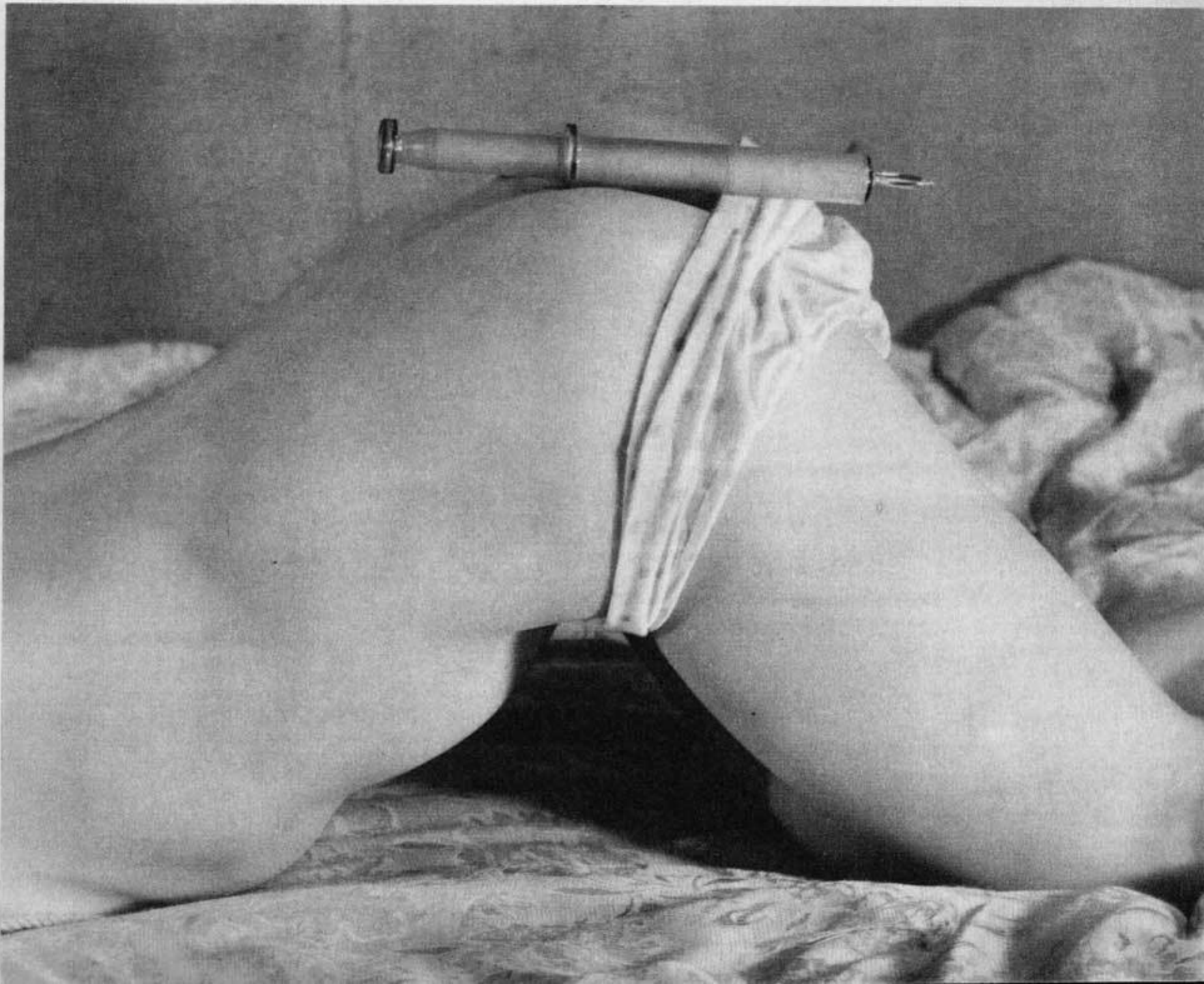
甘 美 な 仕 置





梨花悠紀子

浣腸器のある風景



公園の早朝

絹川文代



後手に吊られて

梨花悠紀子



新しい風俗文献研究誌

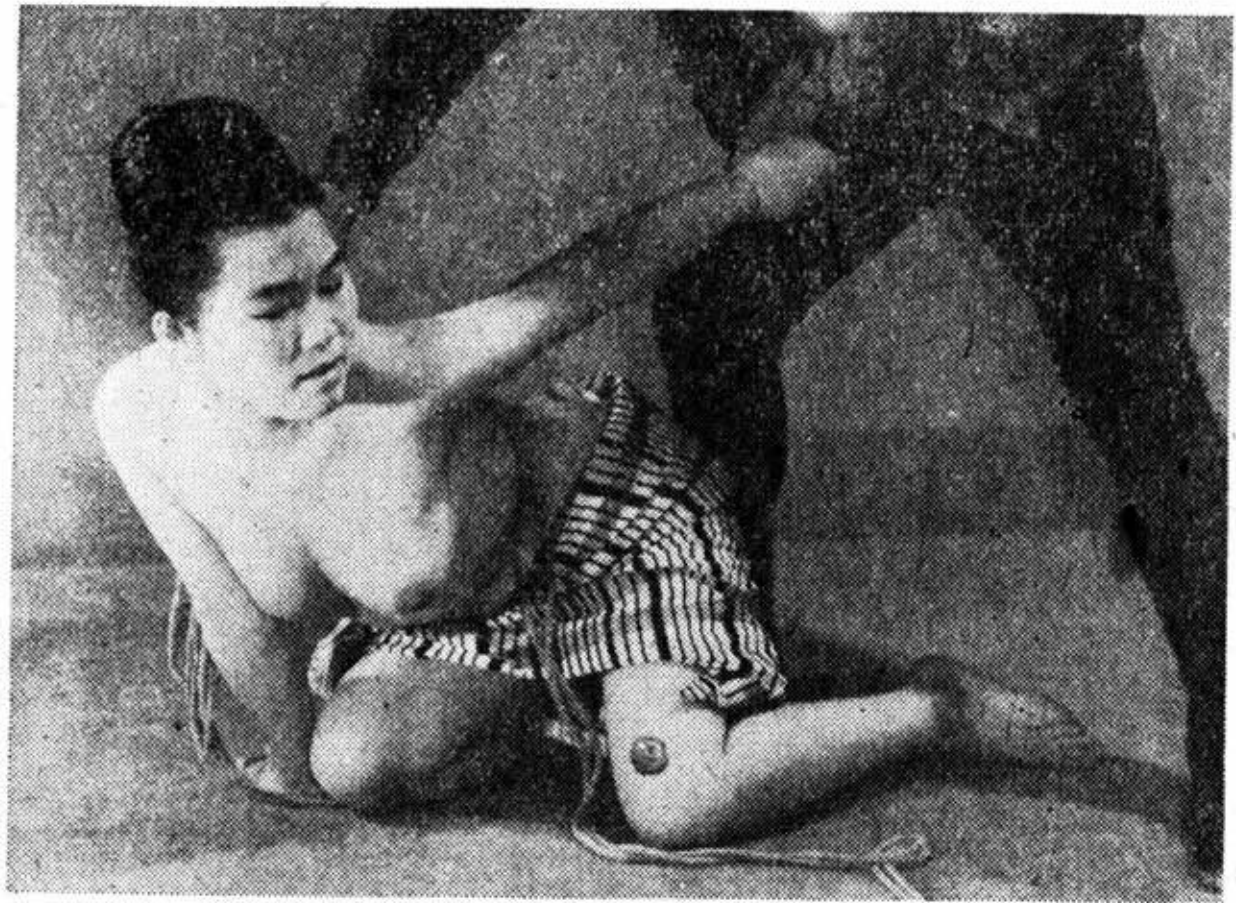
奇 譚 ク ラ ブ

新装七月特大号

1961年 7 月 号

(第15巻 第7号 通刊第155号)





緊縛フォト撮影の実際

—縛り過程の変化と表情—

塚 本 鉄 三

○モデル……………大塚啓子
○撮影……………塚本鉄三
カメラ（マミヤフレックスC2型、セコー

ルー〇五ミリF三・五付）
照明用具（アイレンブライト一台、レフレ
クターリップ三個、アイフラッド三〇〇W三

個、ベビーフラッド二五〇W二個、コード五
本、ソケット二個）

小道具（二〇米古ロープ二本、三脚、紺横
縞模様布一枚）

フィルム（ネオパンSS）

現像液（D76及びD72）

印画紙（シーガルF3）

○

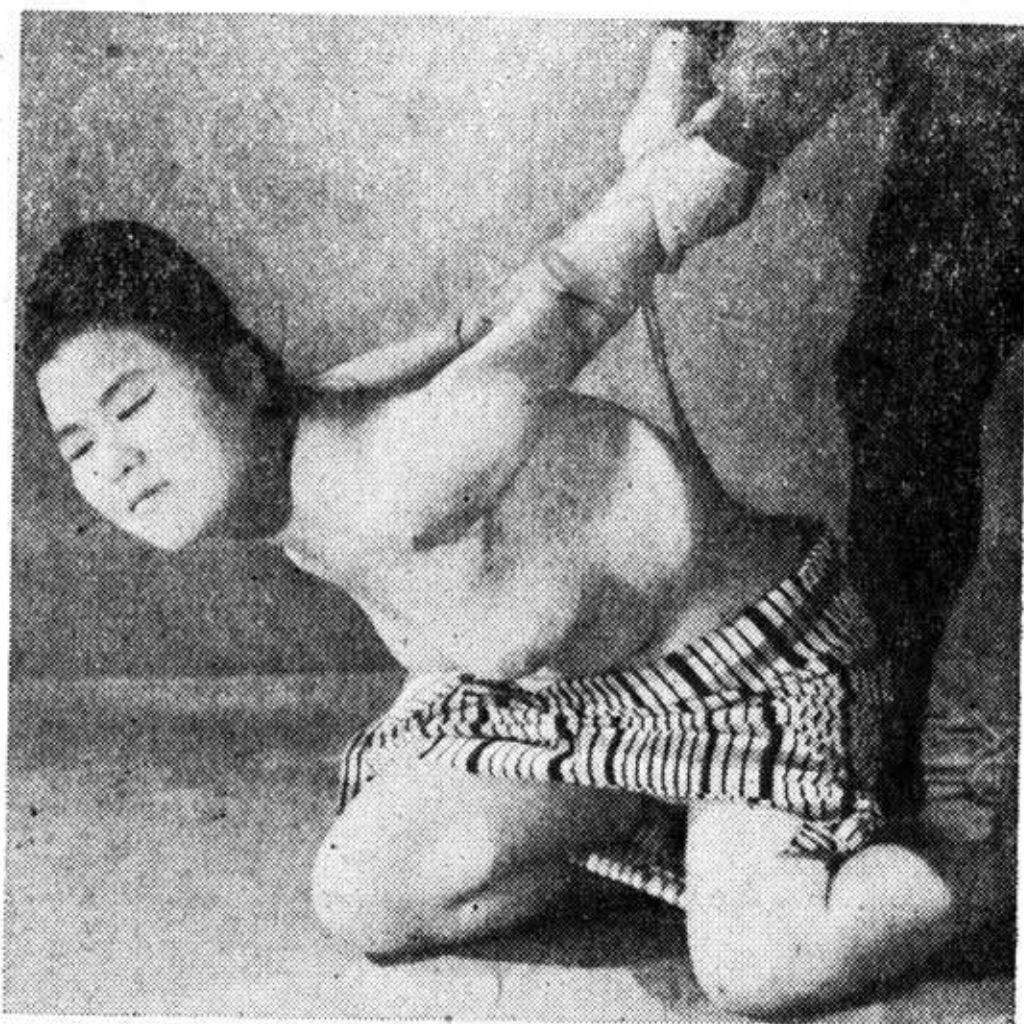
桜の花もちらほらと咲きはじめ、いよいよ
写真撮影の絶好の機会を迎えて、こゝにベテ
ラン大塚啓子嬢の縛り過程の変化を仔細に撮
影することになった。

四月二日、日曜日、晴、風は少し強く、時
々曇が陽をさえぎって花曇りのように、どん
よりとした空模様になるが、気温は平年並よ
りは高く、先ずは申し分のない撮影日和とい
うことが出来た。午後は京都まで友達とお花
見に出かけるという大塚嬢なので、九時から
十一時までの二時間で一通りの撮影を終る予
定を樹てた。

もう今迄に何度も撮影したことのある、お
馴染の大塚嬢のことなので、スタジオに入る
と肌脱ぎになって大急ぎで化粧、御自慢の黒
髪は今日は束ねたまゝ、ライト並にカメラの
準備がOKとなった頃には、彼女も衣服を脱

いで待機していてくれる。此頃一入色の白さを増し、ぼってりとした肉づきの柔かさを見せはじめた彼女は、最初のようなきこちなさがすっかりなくなって、縄づいているというのか、全く頼もしいモデルぶりである。

スタジオに十分ひけがあるので、カメラはマミヤプロフェショナルC2型の一〇五ミリレンズを使用した。ライトは三〇〇W三個と



二五〇W二個の計五個を使用した。F八に絞って二十五分の一でシャッターを切った。

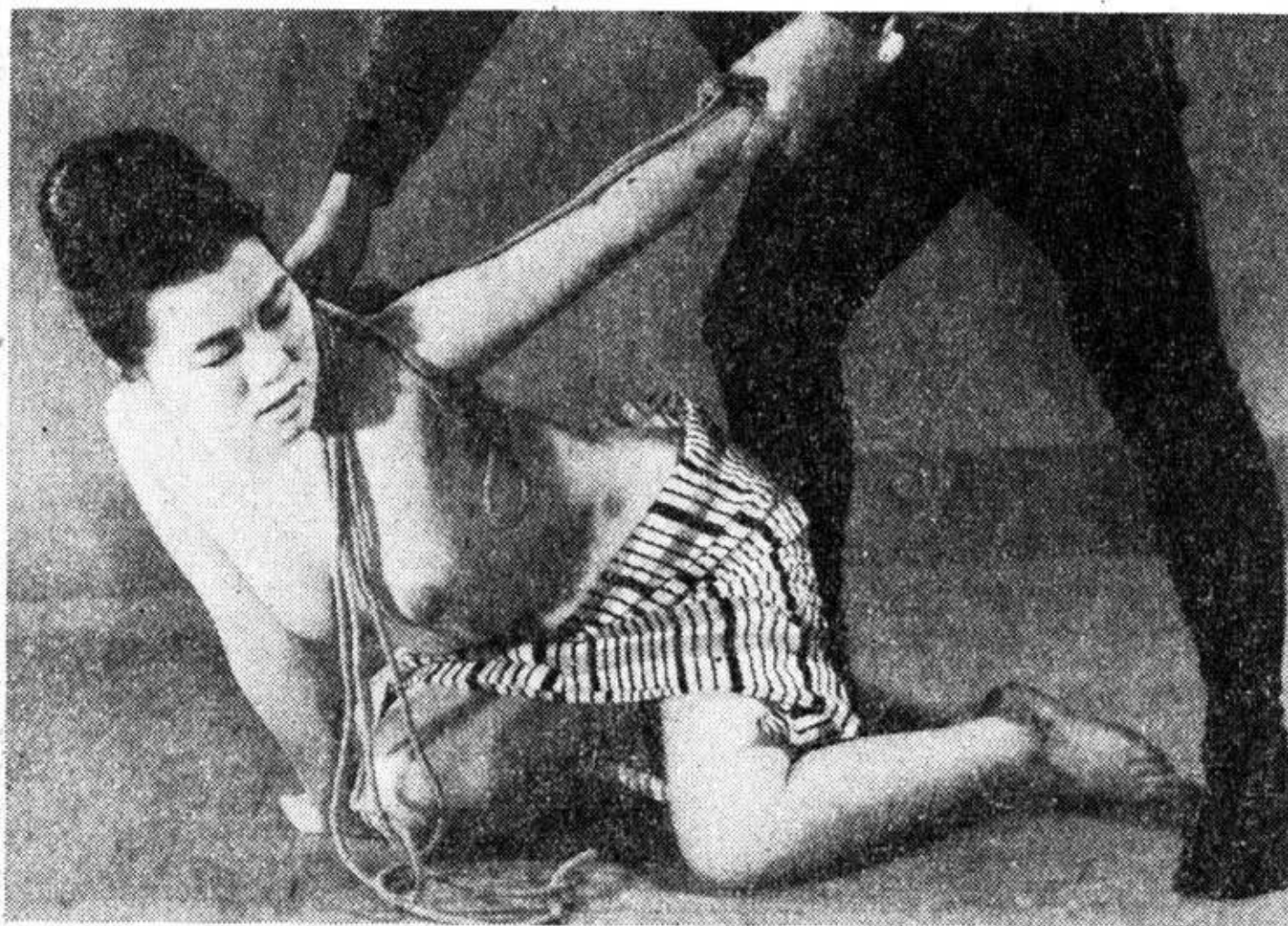
全裸だとポーズに制限されるのとアクセントをつけるため腰布代用として、写真うつりよい紺横縞模様の布片を腰に巻いて貰うことにする。

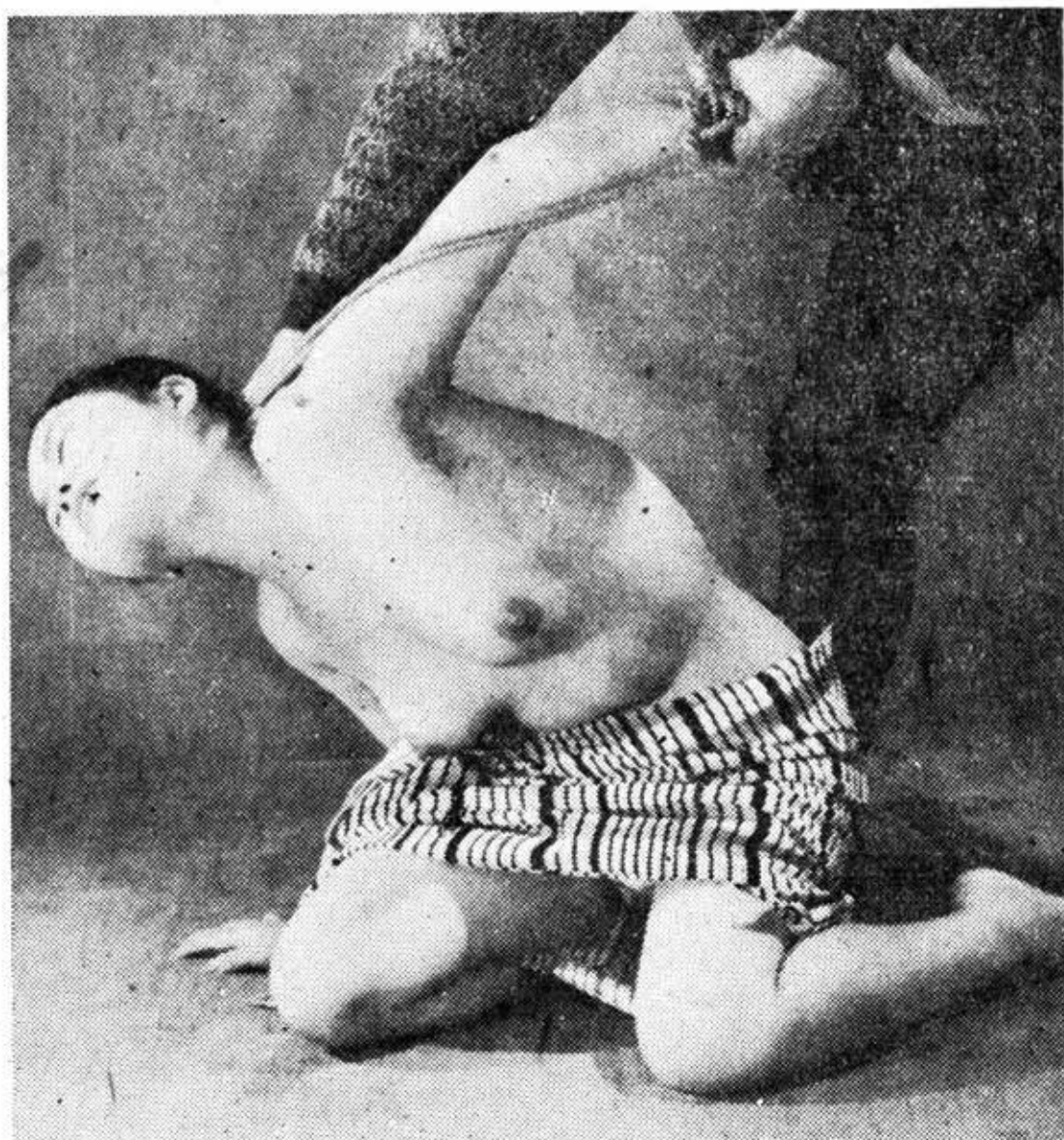
これによって単なる縛り上った完成図をお見せすることよりも、縛り過程に於ける大塚嬢の全身の変化並に苦痛を表わした表情の変化などに重点を置いて撮影することにした。

予定枚数はフィルム二本二十四枚—二十四ポーズ。

縛りはじめから後手高手縛りまで、八枚。首縄縛り、六枚、足首縛りから逆エビ固めまで、

十枚。という割合で連続撮影してゆくことにしたが、特に注意した点は、動きのあるポ





ズをキャッチしてゆくことゝ、よい表情の現れたときのシャッター・チャンス逃さないことだ。正味の撮影時間は約三十分、そして合計二十四枚のネガフィルムの中から、果して動感のある表情の出た写真がとれるだろうか。という疑問が生じてくる。

幸いに大塚啓子嬢は撮影前に話してきかせ

た当方の意図を十分に察して、その柔軟な身体を存分にくねらせ悶えさせて熟演してくれたので大助りだった。只、うまく、そのチャンスを掴んでシャッターを切っているかどうかわかるが、それは読者諸氏の方で掲載写真をごらん下さっ

て御批評頂けば幸甚である。掲載写真は十五葉、結局類似したポーズや表情のよく出ていないものそれに表情ポーズに美しさの欠けているもの等九葉をオミットした。扱て、撮影の段階について述べよう。



使用のロープは古道具屋の店先に積みかさねてあった古ロープ二十米の長さのものである。(四本百円で購入)程よく汚れて軟くなっているのが極めて使用感よし。真新しいものと違って写真効果もよい。但し余りにも長すぎるので二つ折りにして用いる。

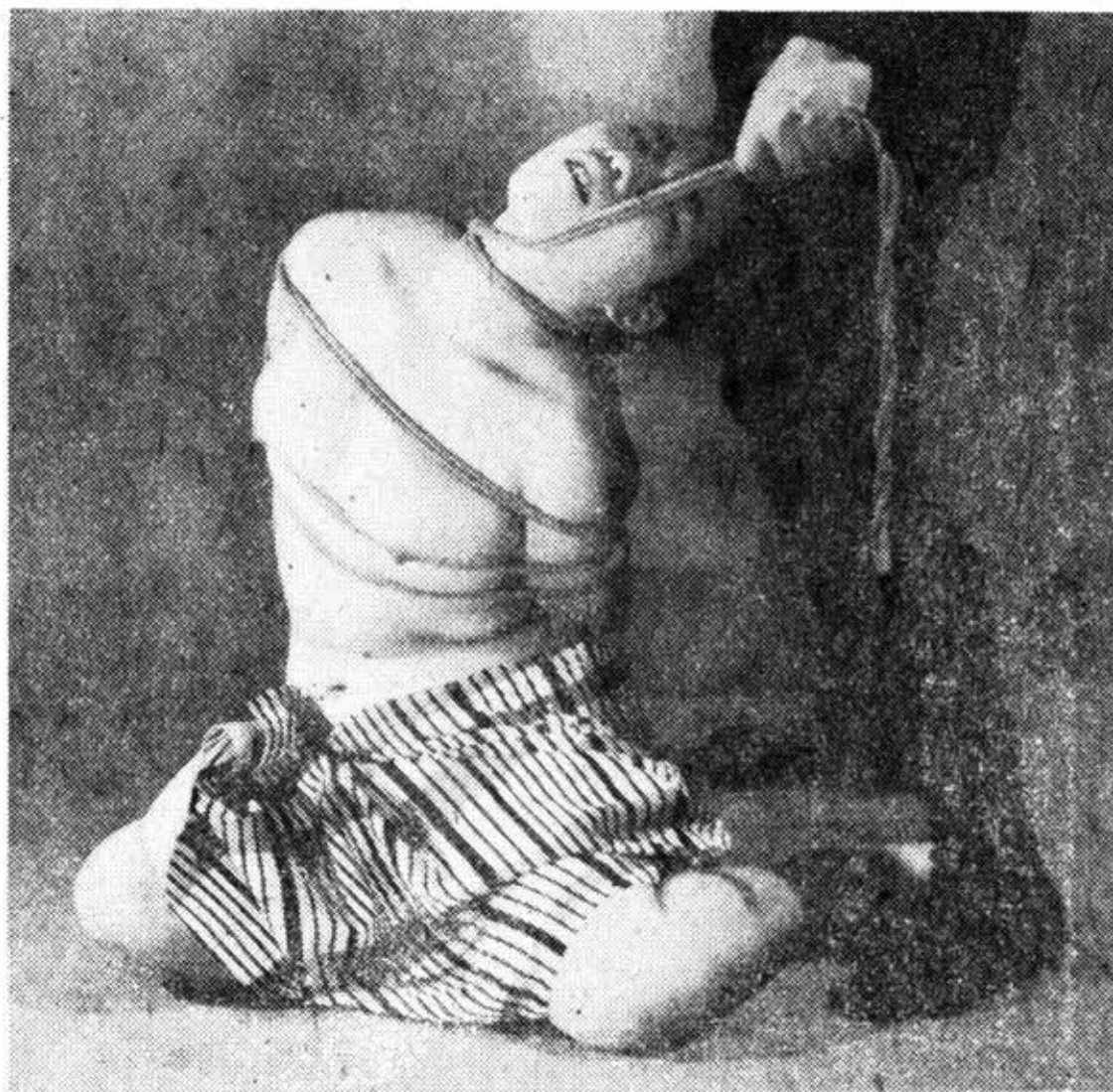
大塚啓子嬢は少々肥り気味ではあるが、身

体が柔軟なのと、少々の痛さだったら悲鳴を挙げることなく辛抱してくれるので、思いきって、どんどんポーズをつけてゆくことが出来る。逃げて行こうとするとところを手首を掴んで押さえつけ縄を掛けてゆく過程を次々とカメラによってフィルムに印してゆくのだが

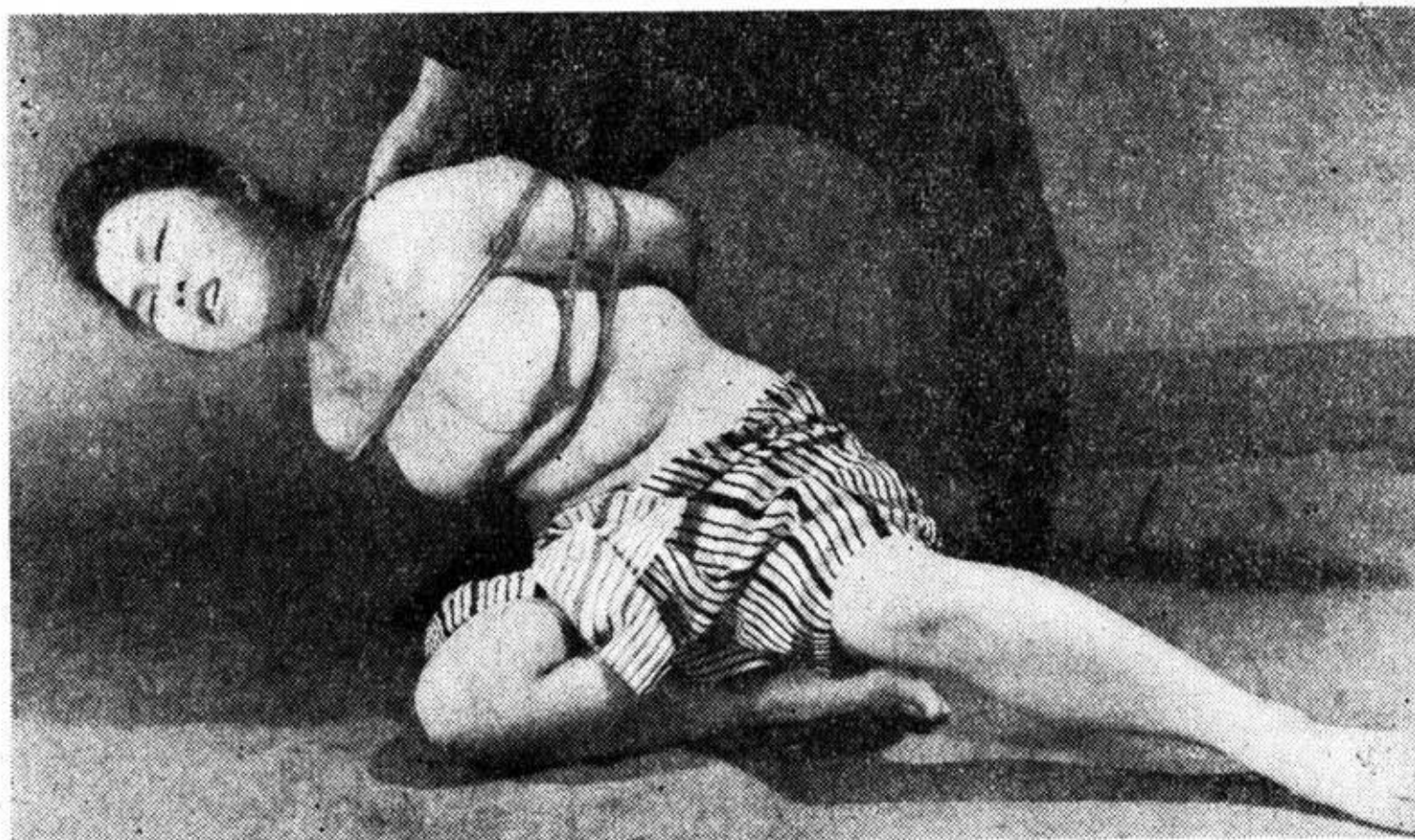


二巻き、三巻き。そのたびに、ぎゅっと殊更力をこめて締めつけ、どんな表情が出来るか試してみる。三巻き目の縄尻を背後で止めて引っぱってみ

勿論ポーズや表情に美しさが失われては何にもならない。従ってライトもつとめて陰惨にならないように心掛けて配光する。
ぐっと両手を逆に捻じ上げても、う
っと呻め
ていてこ
らえる啓
子嬢、先
ず後手首
を括りあ
げる。両
手首を交
叉するよ
うにつり
あげて胸
に一巻き



る。これでもか、これでもか。
次には首縄である。一巻き二巻き。これは首が締まるので苦しいポーズである。殊に高々と水平以上にあげた後手首と連結したなら手首を下げれば首が締まり、首の縄を緩めようとすれば手首を上げなければならないとい



う始末になる。

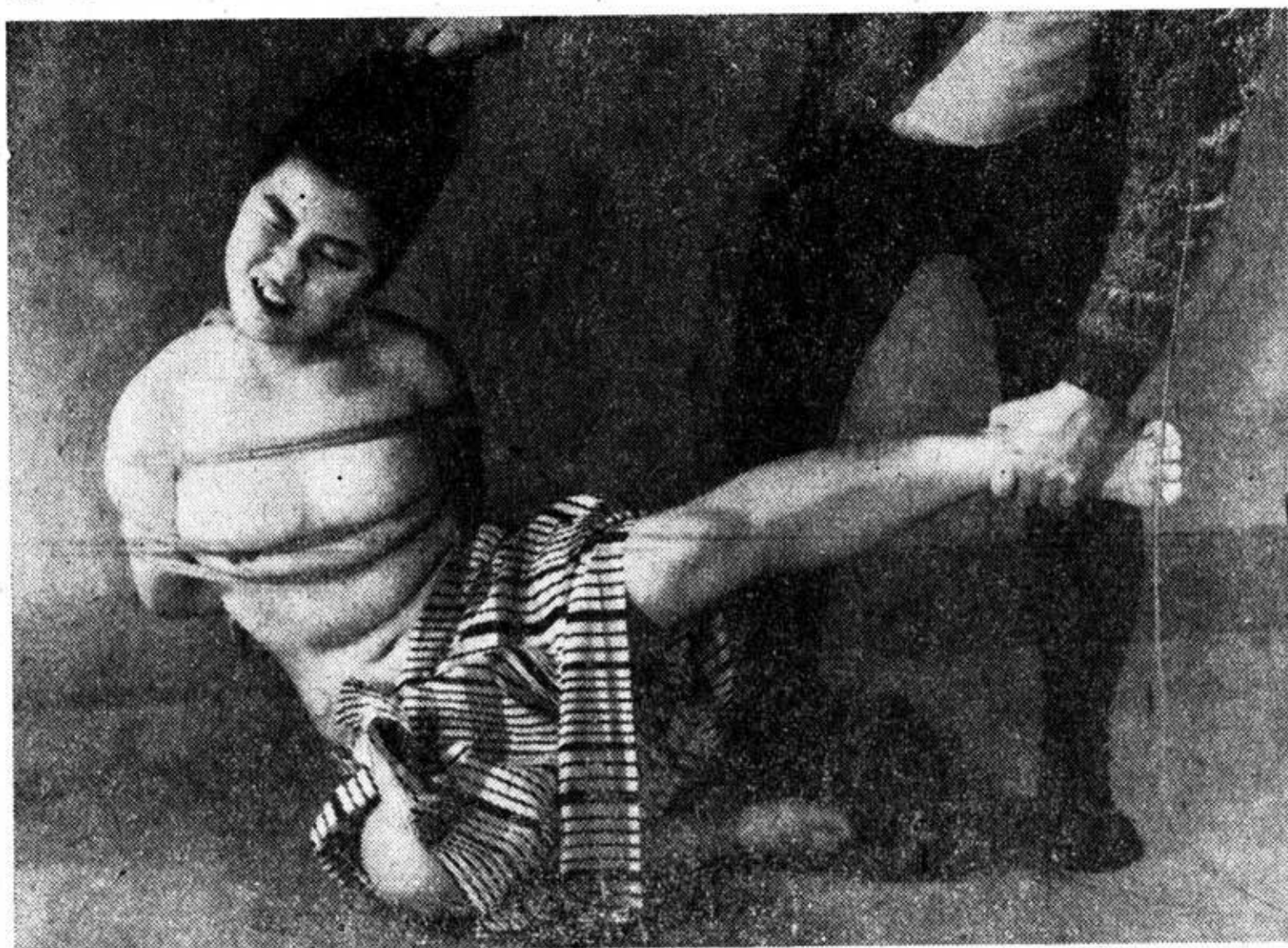
こゝで後手高小手首縄といった苦しいポーズの中で唯一の自由な足に力を加えて表情とポーズの変化を現してみよう。シャッターはエヤーレリーズを通じて、その時、その時、希望する瞬間に二十五分の一秒の早さで、切られゆく。苦しい、痛い、といった表情が果して美しく撮れているだろうか。

五枚六枚、……

……八枚、九枚……

……十二枚。

こゝでフィルムの入替えのため休憩。といっても引続いて連続撮影

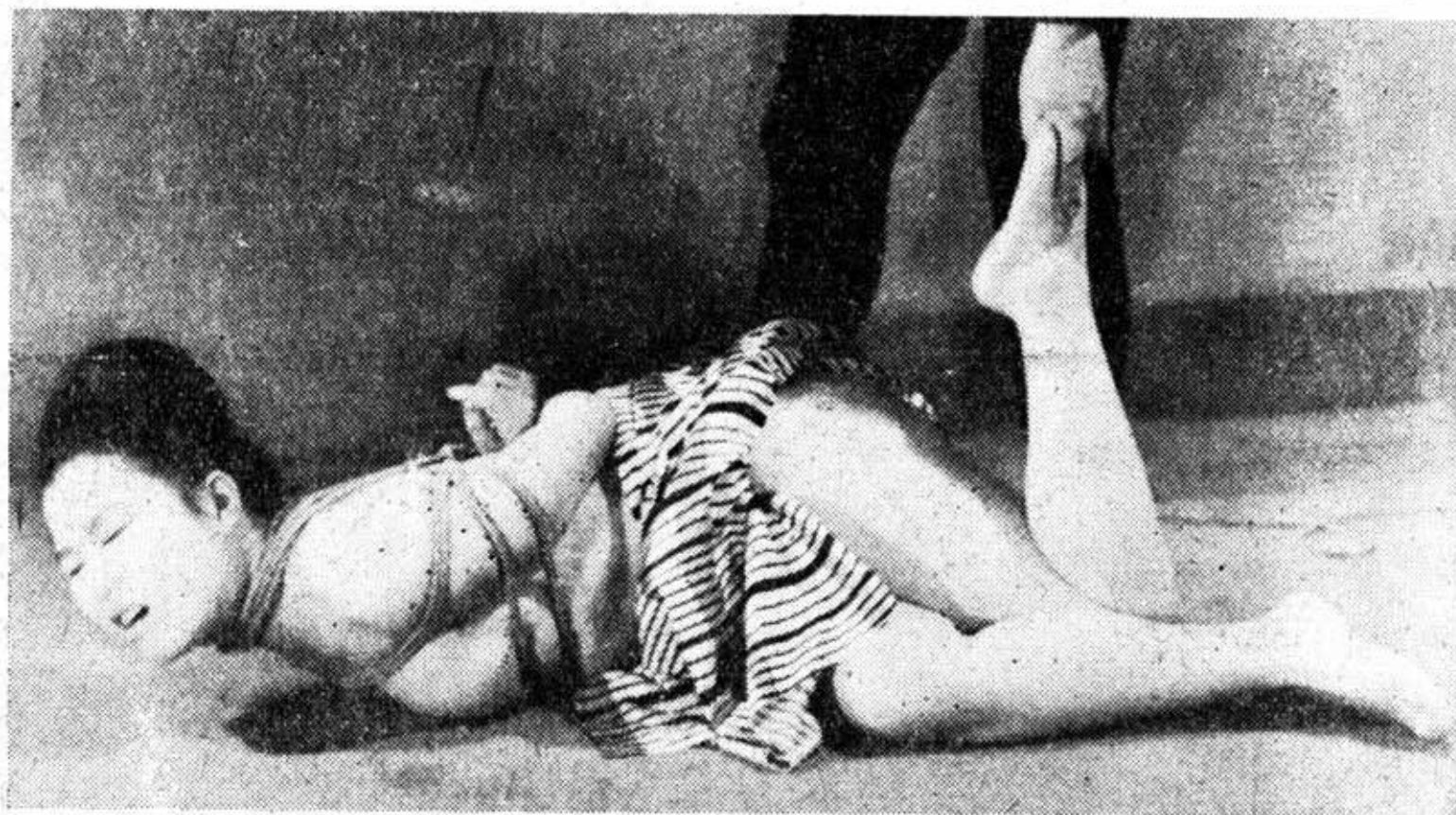




してゆくのだから、縄を解いてしまいうけにはゆかない。首縄のまゝでフィルム入れ替えの間、暫く待っていて貰うわけである。マミヤ、プロフェショナルは三脚に取りつけたまゝで入れ替えが出来るので助かる。「どうだ苦しいか」と問うと、「苦しくとも辛抱できる」という返事だ。

「よし、それならば……」と勇気百倍、引続いて、足と首とを責める。うつ伏せにして足を折り曲げると顔面から上体にかけて、そり返えってくる。ゆるめると上体もぐったりと床へつく。一度、二度三度、ぐいとそり返えったところでシャッター。うまく止まってくればよいが、動いたまゝだったら、二十五分の一秒では、ほけてしまう。

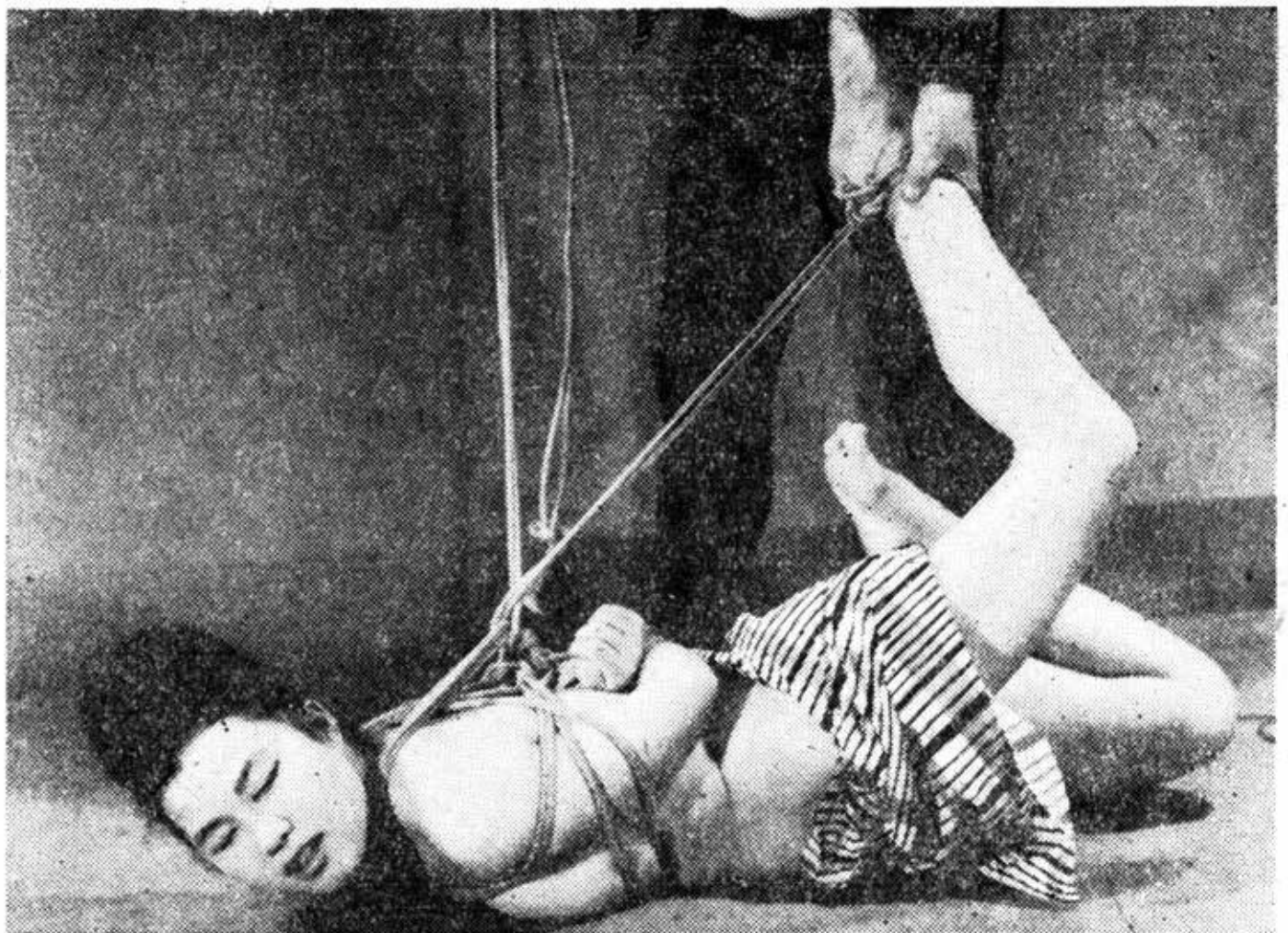
更に別の一本のロープをとりあげて、片方の足首へぐるぐると巻きつけて縛る。柔かい足の裏の感触、荒々しい縄が痛々しい。だがそれだけでは済まない。本日の予





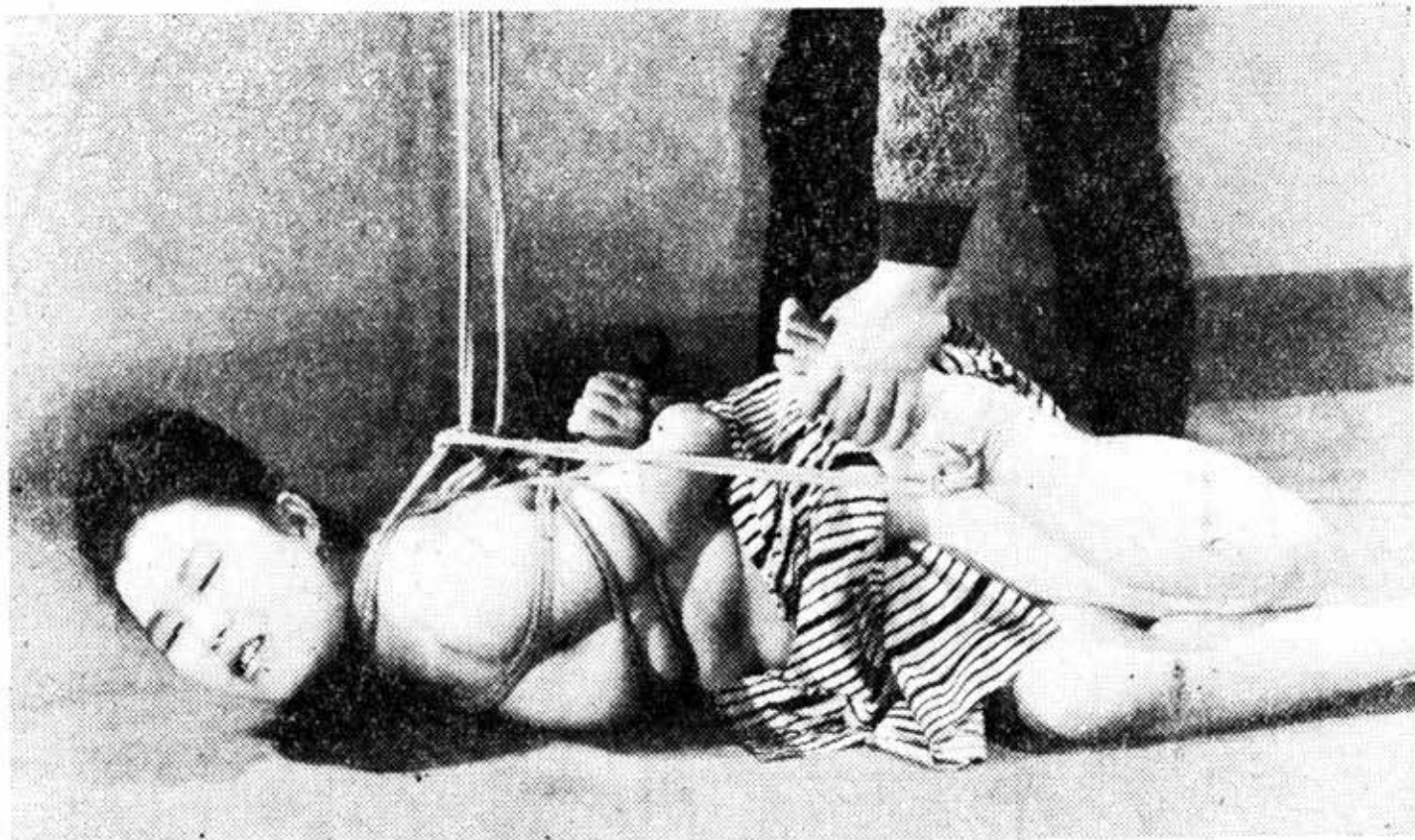
定のポーズ、逆エビ固めへの過程である足首と頸との締めつけへと進行してゆかねばならない。首が締まってくるので顔を真赤にして、う、う、う、と、声を洩らしながら耐えている。これが最後である。あと数枚で今日の予定は全部完了する。苦痛の中に醸しだされる表情美が、その数枚の中にキャッチされるだろうか。身体がエビのように逆にそり返えり、首が締って苦しい。

しかし、そこに、ポーズにも表情にも美しさを出さなければ駄目である。美しい表情が出るまで、シャッターを切らないんだから、辛抱してくれ、そして苦しかったら早く美しい表情を出すんだよ。じりじり、じりじり、足を押さえつ



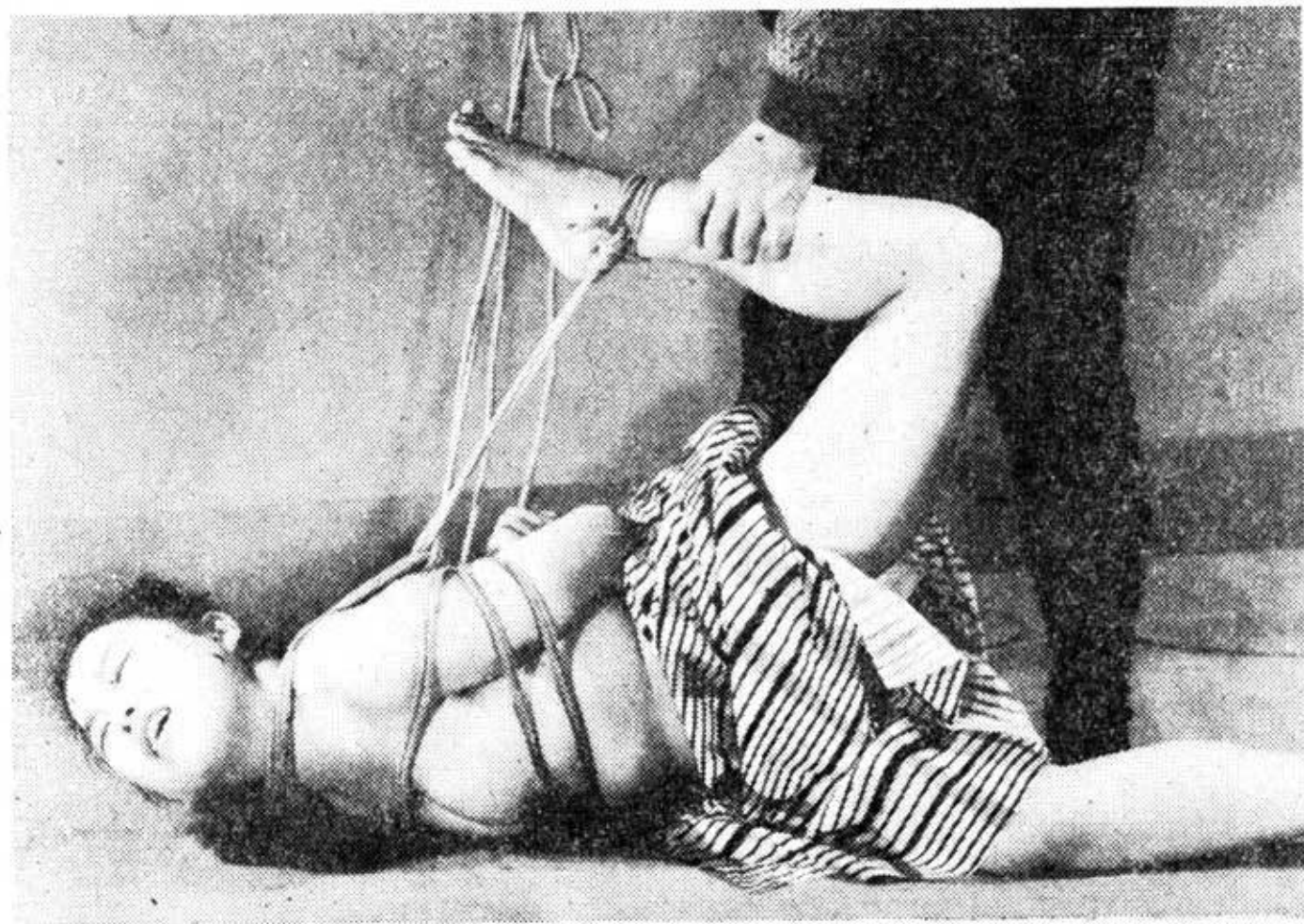
け縄を締めつけてゆく。「くく、くるしい」「それ、それ、そこで一枚」なにしろ、数

枚のフィルムで勝負だ。乱射乱撃、数十枚の中からというわけにはゆかない。さりとて、



ゆっくり落ち着いてファインダーをのぞきながら、よいところパチリというような悠長なことは勿論許されない。だから、もう辛抱のできるといふ極限に於て無理にでも表情を出させてパチリということになる。四月はじめというのにライトの熱もあってか、じっとりと額に汗がにじみ出てくる。ほんの一週間ほど前に梨花悠紀子さんで実施した時は、寒くて弱ったのに、時候の移り変わりというものは激しいものである。撮影完了が十時四十五分、二の腕や首筋に赤い縄痕を残した大塚啓子嬢は、ぐったりとソファに埋まるようにして身体を休めた。撮影者の意図をよく察し、その時その時の注意や指示をよく守って積極的に協力してくれた為、彼女の美しさを十二分に表現することが出来て嬉しい。

浴槽に身を沈めて縄の痕をもみほぐした大



塚啓子嬢は喜々として友人と待ち合わしている京阪の駅へと出かけていった。

創

作

狂

恋

の

囚

女

近

藤

一

一、松林の中で

或る肌寒い初冬の夕暮であつた。美しい和服姿の一人の娘が、メ
リンスの風呂敷包を手にして、人気のない松林の中の小道を急ぎ足
に歩いてゐた。

と、突然、叢の中から飛び出した一人の青年が、やにわに背後か
ら彼女を草の上に突き倒した。驚いた彼女が目の前に転げた風呂敷
包を拾おうとした時、むんずと青年の手がのびて、まるで豆の皮で
もむくように彼女の羽織をくりりと剥いでしまった。「あッ」彼女
はその青年の顔を見て、思わず顔を草の中に埋めてしまった。

「葉ちゃん、お前は俺という男がありながら、よくもよくも他の男
の所へ嫁いでゆく氣になれたなァ、さあ、葉ちゃん、お前の本当の

氣持を聞かしてくれ。ねエ、お願いだ」

何とかき口説いても只黙ってばかりいる娘に、たまりかねた青年
は松茸山の縄張りに使つていた縄を拾うと、嫌がる彼女を無理矢理
に抱き起して松の樹に縛りつけてしまった。

「思い直してくれ、葉ちゃん。今迄通りこの俺と仲よくしてくれ。
なァ、葉ちゃん！」

尚も堅く口をつむって無言の行を続ける娘に怒り狂った青年は、
後手に縛ったまま担ぎ上げると、その松林から程近い無人の物置小
屋の中へ運び込んだ。

どさりと荒庭の上に投げ出すように横たえると、風呂敷包がどけ
て中から、彼女が今度婚約した相手の家へ届けるらしい紙箱が顔を
出していた。

「ええいッ、よくも、この俺に恥をかかせやがったナ。こうなれば可愛さ余って憎さが百倍だ。これでもか、これでもか」

向うむきにうつぶした娘の尻を力まかせに下駄で蹴りまくるのであった。

「ああ、誰か、助けて！」

今の今迄、何と云っても一言も声を出さなかった娘が急に救いを求める大声を立てたので、慌てた青年は自分の兵児帯を解いて、ぐるぐると娘に猿轡をかませ声を出せないようにしてしまった。

彼女の頭の下になった風呂敷包の中の紙箱が、めりッという音を立ててこわれると、中から転げ出た美しい色とりどりのセロファン

の包紙の色が、殺風景な物置小屋をはなやかに彩った。

「さて、どうしてくれよう？」
餌物を前にした猫のように、縛られて身動きの出来ない娘の姿を心地よげに嗜虐的な眼ざしで眺めた青年は、じっと腕組みをしたまま考え込むのであった。

——今年の盆踊りの晩、この裏山で初めて恋を語りあってから、身も心も許しあった深い仲だというのに、この思わぬ娘の変心はなんとした事だろう。葉ちゃんが隣村へお嫁に行くという噂は単なる岡焼きの作り事であってくれ。俺は、俺は葉ちゃんがなかったら——いや、単なる噂である筈はない。それだったら葉ちゃんが、こんなに黙ってばかりいる筈はない。ちゃんと結納まで貰っているというではないか。——

青年は胸の中に燃え上るほむらに堪えかねて、納屋の隅に立てかけてあった天秤棒をつかむと、娘の腰をはしと打った。「うううう……」彼女は猿ぐつわの下で声にならない呻きを上げて棒をさ

けようとものがくのであった。

蹴って叩いて殴った挙句、もう立上ることも逃げる気もなく、ぐったりとなった彼女は本能的にうつぶせになってしまった。

——此れ程思いつめている俺の気持がわからないのか——

恋に狂った青年は更に手にした棒をふり上げようとしたが、この時、彼の頭の中に浮んできたのは過ぎ去った彼女との楽しかった逢曳きの思い出であった。あの頃は、この俺も幸福だった。その幸福を踏みにじった憎い彼女、憎いが、しかし可愛い女、身動きも出ず庭の上に転がされた女の姿に、いとしさと可憐さだけが胸に湧き上ってくるのをどうすることも出来なかった。

——ああ、俺には葉ちゃんを責めることは出来ない。いとしい、いとしい最愛の恋人なのだ。縛って殴って俺は始めて自分の彼女に対する本当の愛情を知ったのだ。ああ、とうしたらいいのだろう。憎くて可愛い女——

——（あなた、みんな妾が悪かったの。どうか浅はかだった妾を宥して。あなたのお怒りになる気持、妾によくわかるわ。ねえ、あなたの気持のすむようにどんなにでもして。ぶつだけじゃなしに、もっともっとひどく虐めて。妾、本当はあなたが一番好きなの）——
彼女は心の中で、そう繰り返していた。そして猿轡の下で、うううと物云いたげに呻いて寝返りを打った。然し、青年はそんな彼女の心中も知らぬげに、棒をその場へ投げ捨てると、そそくさと出ていった。

〇 恋に狂ったワンカット〇（昭和28年2月号所載） 口絵

あたりは一帯に静けさそのものだった。

青年が出て行つたままの小屋の中では、荒縄で厳しく縛り上げられた体を席の上に俯伏して、今の今まで彼女の上に荒狂った棒の乱打や強い足蹴の骨身に徹するような疼きを、葉子が噛みしめる思いで味わっていた。

——（浅はかだった。バカだったんだ、妾。あの人は真剣だった。本当に怒って、妾の心变りを責めていたわ。今でも、こんなに妾を想ってくれるのに、バカな妾。あの人を一生、苦しめることになる。そして、妾だって一番好きな人を裏切って、一生、苦しむことになるんだもの）——

殴られたり踏み蹴られたりした痛みも、縄目の喰入って来る痺れも、恋しい人の愛情の深さと思えば、却って快い刺激だった。「ううーう、うー、ううー」

出て行つたきりの青年を呼び戻そうとして猿轡の下から喉をふるわせた彼女は、ふっと呻きを止めた。

——（いけない！ もしも、こんな所を他人に見られたら）——

次第に夕闇が迫るのを肌を感じながら、葉子は無言で蠢いていた。男心の怒りを込めた荒縄の縛しめは、裏切女が何とかして脱けようと藻掻けば藻掻くほど、結び目を堅固にするように思えた。葉子はポロポロ涙を流して悶え続けた。口をふさぎ、顔半分をぐるぐる巻きに覆った兵児帯は、葉子の切ない後悔の涙を吸い取って行く。

不安と焦慮に追立てられる一方では、疼くよう



な痛苦と快い悔悟にひたっていた葉子が、荒縄のほつれを引摺って小屋の戸口に立現われたのは、もう星の瞬く頃になっていた。戸口に何となく立寄り、乱れた髪を指先で掻き上げ、全くもの捲げに着物の前を直して、フラフラと歩き出した葉子には精気が無かった。押潰された紙箱の風呂敷包は持っていたが、愛用のショールをしていないことまでは、葉子は気がついていなかった。

二、変心の座

葉子は嫁いだ。

ひたむきな男心を踏躪りながら、誰にも口外する筈のない男の寛い愛情に甘えて、一切知らなかったことにした。

夫の雄輔は逞しい体軀の、色の浅黒いキリッと引締った男前だった。働き者で財産はあり、若さに似合わず農協の役員として手腕を謳われていた。係累と云えば、良くできた人と評判の、優しい母親のくみがいるだけ、多少の畑仕事があっても電化の見通しがあるから、近在の適令期の娘達にとっては、今時珍しい理想的な、一寸した玉の輿とも云えるケースだった。その雄輔との縁談が、全く降って湧いたように葉子に起った時、既に体まで許した相手のある葉子が、浅臺にも簡単に変心してしまったのだ。

松林のそばの物置小屋の一時で、裏切の苦渋を身にしてみte感じた筈なのに、いざ雄輔に逢ってみると、自己の罪を打明けて赦しを乞う所か、秘密を持つ後めたささえ雲散霧消してしまい、単純に恋の歡喜に胸を弾ませてしまうのだ。

「あんなことって、あっていいもんじゃねえさ」

いかにも幸福そのものの葉子を見て、捨てられた男への同情も起るし、他の娘達の羨望嫉視も募った。口さがない噂雀や事を好む連中が葉子の醜聞を雄輔の耳許へ集めたが、然し雄輔は一切を黙殺した。それは葉子を信頼しきった姿に見え、そのような噂に一番敏感になっていた葉子には、何よりも頼母しく有難いものと思われた。

それでも葉子にとって、結婚式を挙げる迄の期間は、いつ破談に



なるか、全く不安の連続で、葉子自身は確かに自分が既に処女でないことや未来を誓った男を裏切った罪の深さを充分に知っていたのである。

式が済み、現代風に済ました披露宴も静まって、いざ床入りとなった時、誰よりも、ほんとに安堵したのは葉子自身だった。その気の緩みや穢れた身の罪滅ぼしや夫への烈しい慕情やらで、葉子は狂気のようだった。

雄輔が腕を伸ばして枕許の小さなスタンドをともした。弱い光の筈が、パアッと眩しく眼を射る。二人は何ということもなしに笑い、唇を合わせた。

葉子が手洗から戻ると雄輔は床の中で腹這いになり、うまさうに煙草をふかしていた。葉子も床に入り、雄輔の方を向いて横になった。幸福に満ち足りた視線が交わされた。

「葉子」

「え？」

「お前、男を知ってるんじゃないか？」

瞬間、葉子は薄明りの中で、頬が硬張り、血が引いて行くのを感じていた。

夫婦の間で秘密は許されないことも分る。だがお互いの幸福のために、しかも知り合う以前の出来事については、却って打明けてはならない秘密がある筈だ。葉子は、自分が既に男を知った体であることを、自分自身のためにも、そして雄輔を傷つけないためにも、云わない心算だった。風評を種に問い詰められても、たとえ責められても、あくまでシラをきり通す心の構えはできていた。

「アラ、どうして？」

精一杯、平静を繕って応じたが、やはり明らかに否定できなかった。いかなる態度をとるべきか咄嗟の名案もないまま、無防備にとぼけて反問してみた。

「どうしてって、そう思ったからさ」

「まア、いや！」

「誰だって初めての時は固くなって頓えてるものださうだよ。まして女なら尚更だ。女は男よりずっと不安が強いからさ。——でも、これはまア一般的な話だ。中には生まれつき、何もかも知りつくしている女もあるだろう。葉子はきっとそれなんだよ。初めっから情熱的で、生まれながらの女なんだよ」

葉子は俯伏に寝返って、顔を枕に埋め、雄輔の囁きをジーンと痺れるように聞いた。

○

自分の総てをむき出しにしたことは、葉子の心に何か取返しのないかない大事をしてかしたような悔を残した。自分のあやまちを自分で立証してしまったようで、もしそうでないにしても、疑われて文句の云えない状態だったと思う。

然しまた、悪戯女と思われる程の体当りで、雄輔との間には何の壁も無くなったと思った。求められればいつでも厚い胸に抱かれ、精一杯、甘えて取纏ることができたし、夫もまた、妻の肩を抱き寄せることに些かの躊躇いも持たないようだった。

「葉子は全くグラマーだな。これだけの体してんだから、うんと頑張って丈夫な子をどんどん産んでくれよ」

「うふん、いや！」

甘えてすねてみたが葉子は自分のヴォリュームを識っていたし、誇りにさえ思っていた。五尺三寸で十六貫八百近く、現代風に云うと一六三糎で六三疋というのは、女として、立派な体格を通り過ぎ、肥満体というべきだった。

「お前のこと、暗闇の牛だといった奴がいるそうだよ。のっそりしているって」

「しょうがないわ。妾がデブなんだもん。牛だっていいでしょ」

「いやア、良くないさ。葉子はよく肥えてるが、のっそりしちゃいない。それに肌の色が白くて綺麗だから、牛じゃなくて豚だ。雌の白豚だよ」

これは応えた。牛も豚も農家にとっては貴重な財産に違いない。然し、美しくありたい女心には、これにたとえられて快いものはないだろう。

「妾だってデブって云われるのは嫌だし、あなただって妾がもっとスマートな方がいいでしょ？」

「そりゃそうだな」

「妾、美容体操でもした方がいい？」

「お前の体じゃ、余程きつく絞らなきゃ効果ないだろう？ お前が美しくなるのなら、俺も大賛成だが、お前にその辛抱ができるか？」
「うん、やるわ！ その代り、あなたも手伝ってくれるでしょ？」
残酷な約束だった。

昔風の造りは何彼につけて便利だった。上り端と土間は重要な役割を果たし、囲炉裏や自在釣も重宝だし、板の間の広いことや梁や大黒柱の頑丈なことも大きな作用を持っている。農家には納屋がある。相当な広さを持ち梯子で屋根裏を使えば二階建と同じだった。

風呂場も便所も母屋の周囲にそれぞれ独立して建っていて、敷地の周囲は種々の植木で飾られているから背景は絶好だった。納屋の中にある農機具のすべても、それぞれ有用な責の道具立だった。

葉子は真剣だった。どのように辛い苦業を課されても、進んで体

当りした。恐ろしい拷問のポーズを命じられても、決して尻込みしなかったし、むしろ意欲的に受忍した。その根底には美しくありたいと希う女心も勿論あっただろう。だがそれ以上に雄輔への思慕、雄輔に捨てられたくない悲願が強く働いていた筈である。

三、雌獣の調教

肥えているために左程目立たないけれど、葉子は身長があるだけに脚は長い。腕も脚もピチピチと伸びやかで健康そのものだった。畑仕事の時でさえ衣服に包まれているボディも素敵だった。陽を浴びぬ膚は腕などに較べおかしき位に白く輝やいて、呆れる程豊かに張り出した胸の隆起や胃の腑の膨みも、純肌を誇って目を瞠らせる。痩せた女体なら妊っているといってもおかしくないほどプックリ盛り上った腹部の円形。そこだけが別の生き物のようにゆったりと息づいている逞しい臀部。決して美人とは云えない普通の顔立ちの中で際立つものと云えば秀でた額と肺活量を示すような鼻孔くらい。そんな極くありふれた葉子なのに、身に纏う布を剥ぎ取ってみると、類稀な、全く抜群の女体が露わになるのだ。背筋は真っ直に通っているが、葉子の背面はムッチリと肉感豊かで、つまり、彼女の裸身については直線的な印象を残す部分が全く無く、すべてはなだらかな曲線で飾られていたのである。

唯一の不満と云えるのはウェストの太さだろうか。自然のまま、在りのままのくびれでは若く新鮮な女体の魅力を半減してしまう。食べたいだけ食べて、恋に身の細ることも知らずに若さを謳歌して来た葉子だから、太らないための減食も美容体操も、均斉を整えるためのコルセットなども一切、無縁だったのだ。

「苦しいワ。大丈夫かしら」

「大丈夫だ。人間、腹が多少、締った位で死ぬもんじゃない。却って腰がすわって気持ちがしっかりするもんだ」

云われてみれば、そうかも知れない。正直な処、初めて身に附けたコルセットという代物は不思議な働きをした。

シビれる！

割に大きいものだったが、何せ白い雌豚の葉子が着たのだし、そして雄輔が念入りに力を籠めて締め上げたものだから、胸の双丘から腹部にかけて、体の芯がジンとシビれてしまうのだ。

正坐はおろか、しゃがむことも身を屈めることもできず、呼吸さえ胸から下へは通じない。肩と胸の柔らかな盛上りが切なく顫え、唇は自然に開いて、ハアハアと喘ぎが洩れる。只立っていることも苦痛になって、葉子は壁に凭れ、柱に縋り、ズルズルと畳に崩れて横たわった。

できるだけ息を詰め、おなかをへこまして締めつけて来る圧力を柔らげようとした。ゴロリゴロリ寝返って、少しでも全身を伸ばそうと悶える。

「アー、アアー、苦しい、アー」

葉子は板の間へ転がり出た。頑丈なコルセットの責苦は凄まじく、手足は自由なのに、一本の縄目も無いのに、葉子は苦悶し、起上れないのだ。呼吸は益々速く荒くなり、内臓のすべてが喉許に突上げて一寸したはずみでゲツ！と出そうな苦しさに、額から腋の下までベツトリと嫌な汗が噴出していた。

雄輔の足が、つつ伏した葉子の腰の辺りを踏む。のけぞる葉子の顔が、眉を寄せ、醜く歪む。上体を捻る。

ムーウ、うーん

男の足がついと離れ、女の体はずみで仰向けに転げ、男の足が今度は女の腹を踏む。

アウッ！ ムーッ！ アワッ！

女の口から、何かドロツとしたものが溢れ出た。

女は哭いた。

○

縄で腹を括って吊るしたこともある。両手両足をダラリと下げて呻いている葉子は、正に白い雌獣だった。ヴォリュームがあるだけに、この吊りは或る意味で逆吊りよりもキツかったろう。ウエストの整形としても明らかに有害無益で、葉子は苦し紛れの粗相が度重なつたし、縄の喰入った痕は暗紫色になって環を描いた。

姑のくみは葉子を案じた。

一旦、嫁に貰えば我が子と思っではいるが、若い夫婦の幸福を希う心は葉子の両親とて同じであろうし、やはり実の親の懸念には責任を感じる。

「そりゃまア夫婦の仲だから、何をしてもいいようなもんだけど、葉ちゃんはまだ若いんだし、あんまり惨いことしちゃ可哀想じゃないか」

雄輔は平然としていた。

「お母ちゃんはそう云うけど、俺達は子供じゃないから限界は知ってる心算だよ。俺達の愛情からやってることなんだし、葉子だって今よりずっと美しく丈夫になるために歡んでいるんじゃないか」

我が子に受容れられなかった姑は、嫁と二人きりの折に優しく云った。

「雄輔の云うことでネ、辛いことや嫌なことでもはっきり云えないことがあったら、遠慮しないであたしに云いなさいヨ。決して無理



革紐を締上げながら雄輔が訊く。

「ウン、ぎゅっと締まって体中が狭い箱に押込まれたみたい。ナイ

に我慢するこたア無いンだからネ」

「大丈夫ヨ、お母さん。あたしは若くて丈夫なンだもん、大概のことなら平気だし、嫌だなんて思やしないワ」

烈しい結婚生活に満足しきっている年若い嫁は却って姑をなだめるように答えた。

若く健康なせいか、葉子の体は相当に激しい運動を求め、それが満たされないと却って調子が悪くなったりする。局部的なものより全身運動が遙かに効果的で、強度の前後屈や捻転は必須だったし、葉子自身はウエストを思いきり絞り上げたまま全身を伸長させられることを特に好んだ。

コルセットが牛の革で造られた。

「どうだ、きついかな？」

ロンや布なんか問題じゃないワ。でも、苦しいけど嫌じゃない。うんと苛めて！」

若い妻は、遠くを憧れるような眼差しに早くも妖しい輝やきを見せて喘ぎ始める。

雄輔の父親の代から恩に着ている馬具屋がいて、その口の堅いのを見込んで造らせた特製の衣裳だった。吸いつくように白い絨の肌と茶褐色な革の艶とは奇妙にマッチした。充分に締上げられた革の肌着は豊満な彼女にピッタリ喰入って、大きな乳房や腹部の丸みを一層、突出させてしまった。

馬具屋に頼めば大抵の物は揃う。縄、鞭、鎖、革製の輪、ベルト、嵌口具等々。

「葉子！ 馬になれ！」

革のコルセットが鞍になって雄輔はドッシリと跨った。

「フーン、ウフーン」

豊かなヴォリュームを思いきり絞られ、その上に大の男の重圧を受けて、葉子は動物的に荒い鼻息を立て、肩で喘いだ。

「歩け、歩け！ ホレ、走るんだ！」

「叩いて！ 鞭で叩いてっ！」

鞭は鞍に当たると快く響く。だが、それでは乗手も馬も満足しない。跨って使う鞭は、勢い露わな首筋から肩や背、そして盛上ったヒップに薄桃色の線を刷く。

ピシッ！ アッ！

ピシッー アアッ！

渋い肌の音の直後に、短い悲鳴が女体馬の喉の辺りで起る。手綱代りに髪の毛を鷲掴みにされて、葉子は顔を起こしたまま匍い廻

る。畳のへりや板の間が膝小僧を責め、のび切った喉がヒクヒク慄える。

呆れる程意地っ張りな雌馬の革のコルセットは、二人分の汗を充分に吸い取ってシットリと湿った。

四、被 虐 願 望

雄輔が風呂に入っている。

ふと、夫の逞しい背を流してみたいと思いついて、葉子は風呂場へ行く。

ザブリ、ザブリ

「丁度いい加減だよ、お母ちゃん」

「そうかい」

小さな風呂小屋の中で姑のくみが薪を抛り込むらしい音がした。

葉子は何となく躊躇して小屋の外に佇んでしまう。

「あの子の籍は入れたのかい？」

「うん、まだだよ」

「早く入れた方がいいだろう？」

何か話が自分に関係を持っていそうで、葉子は聴耳を立てる。

「女房の籍なんか急ぐこともないヨ」

「そうでないヨ。きめることア早くきちんとしなきゃいけないヨ」

「だって、まだ葉子が俺の嫁としてふさわしい女かどうか、はつきり分っちゃいないからサ」

「可哀想だよ、葉ちゃんが。そんなこと云ったって、お前だって葉ちゃんは好きなんだろう？」

葉子は、そっと小屋から離れた。盗み聴きの後めたさもあった

が、これ以上、聞く必要もないと思ったのだ。夫の雄輔が一寸つれなく感じたけれど、自分の汚れた身に較べて当然のような気がしたし、それ以上に姑の暖い思いやりが有難く、何物にも変え難い味方を得た幸福感で心が一杯になった。

姑が母屋に戻ると、葉子は風呂場へ行った。小さな電光の下で雄輔の胸板は厚く、湯気に暖められて血色よく輝やいた。背を流しながら、激情に駆られた葉子は夫の背へ頬を押し当ててしまった。

「オイ！ どうしたんだ！」

「捨てないで！ ネ、お願い」

着物の濡れるのも構わず、葉子は男の背中に取縋って身悶えた。

「何でもする。あたし、あなたになら殺されたっていい。一生懸命、あなたに気に入られるようにします。云付には、どんなことだって嫌って云いません。あなたの気の済むようにどうにでもして！ ネ、いつまでも捨てないでネ！」

縋りついて狂気のように喘ぐ葉子を、雄輔はふり向きざま、髪を掴んで引寄せた。ズルズルッと曳かれ、葉子は逞しい胸に倒れ込んで眼を閉じた。

○

ムクムク盛上ったヒップには大概のパンティがピッタリして見えた。肉色のナイロン・パンティ一枚では赤裸と同じに女の匂いが立昇る。自ら衣服を脱ぎ捨てて、されるままになっている葉子のウエストを、牛革のコルセットが軋みながら絞り上げて行く。

乳房が強く張り、胸がドキドキして、葉子の白い肌がポツと上気する。

「どんなことでもするんだナ！」

葉子は、こっくり頷いた。

「土下座しろ！ いいか。土間に下りて、きちんと坐るんだ！」

背筋を伸ばしていいいと呼吸も停りそうに胸が締った。それでも命じられるまま、葉子は土間へ両手をついて平伏した。

「葉子は、あなたの奴隷です。あなたのためなら、どんな眼に遭わされても構いません。どんな云付でも喜んで肯きます。あなたの気に入らない時には、どんなお仕置だって喜んで受けます。どうか、いつまでも側に居させて下さい」

葉子は、うわ言のように本心を口走った。考えながら言葉を綴るうちに、葉子の頭の中で回想と現実と空想が、ごっちゃになって行く。

——松林の側の小屋での出来事——

荒縄でフン縛られて棒でブン殴られ、下駄のまま蹴つとばされたり踏んづけられた時の痛みが甦って身も心も疼く。

ともすれば夫の雄輔が、捨てた恋人の新吉とすり変って頭の中を暴れ廻る。尻軽女の裏切を憤って革の責具を締め、縄で縛って吊り下げ、鞭を振って女を打ちのめす新吉の姿。

（嫌な奴！ 葉子っぺの馬鹿！ 身も心も許した新ちゃんを捨てたんだもの。男の真心を踏みつけにした葉子なんか一生涯、男の人の奴隷にされて苦しむのが一番似合なんだワ。新ちゃん、ごめんネ。ぶって！ もっともっと、ぶって！）

「ネ、苛めて！ あなたの気の済むように、思いきり苦しめて！ 早く、早く、あたしを滅茶々々にしてッ！」

土間にひれ伏した女体をよじって、葉子は雄輔をふり仰いだ、その瞳に映じた男の姿は雄輔なのか新吉なのか判然としない。葉子

は男の影に向って、男の奴隷にして欲しいと嘆願していた。
「葉子は悪い女です。ハッ裂きにされてもいいような罪深い女です。せめてもの償いに思いきり酷い眼に遭わせて下さい！」

○

裏庭に桜の木が幾本もある。花吹雪のあと、暫くすると、あのおぞましい毛虫の群がウザウザ這い廻るので、葉子は桜の木自体に肌寒さを感じていた。

思うだけで背中がゾクツとする桜の樹の、中でもしつかりした枝ぶりの一本に、葉子の体は繋がれていた。洗いざらした単衣物一枚が膚を包み、乱れた裾から赤い腰巻がチラチラ覗く。両腕は強く捻じ上げられ、背に高く吊上げられているから、袖口から二の腕がすっかり露わになってしまった。もともと着付けの乱れ易い豊かな胸が、身悶えのためにはだけてしまひ。頻りに隠そうとした右の乳房は、むき出しになってしまった。

首縄が掛けられて後手の手首を吊上げている。乳房の上と下を二巻ずつ縛った縄目が、余計に膨らみを強調して、胴や腹や股の付根に廻された厳しい縛しめは、ウエストを括り腹をプックリと盛らせている。腿から膝の上を括り合わせた縄のお蔭で、単衣の裾が風に翻られても、まだ我慢ができるのだ。

のびた縄尻は太い枝を通して幹に結ばれ、葉子の重量が、ほんの爪先だけに支えられる程度の道具立なのだ。それも、樹の幹を中心に根の廻りへ土を盛上げたので、辛うじて爪先が土を掃くだけの状態だった。

ウー——ム、ウー——ム、ムウ！

力を入れると指先は土にもぐる。支えを失った重量は、すべて縄

目にかかる。捻上げられた両腕、胸、喉など吊縄に連結する縛しめの喰入る部分が、一斉に柔肌をくびり、引き千切られる痛みで呼吸も停り、顔も瞳も充血する。爪先は夢中で土を求め、被縛の女体を斜めに捻って柔らかい土を搔く。

どれ位、続いた苦悶だったろうか。

その挙句、十六貫余の女体は荒縄の緊縛を受けた姿で、桜の枝からブランと垂下った。きつい首縄にもめげず、がっくり項垂れていた。かなり太い枝が撓ってギッシギッシ鳴り、どっしりした女奴隷の爪先は地面から十糎余りの高さにあった。

大きいテルテル坊主のような姿勢の女は吊られながら、もう余り廻りもしなかった。

五、女奴隷誕生

「人間、誰しも独りじゃ生きられないのだ。周囲にある多くの力に支えられ守られている。俺だってそうだ。おふくろだってそうだ。お前もそうだ」

葉子は懐しいモンペ姿で畑に連れ出された。両の手首を背へ廻し、腰の辺で括られて、畑の中へ坐らされていた。

「まして葉子は俺の奴隷だ。俺の意志一つで毎日を過ごせるだけの女なのだ。だからお前は、あらゆる物への感謝と尊敬を片時たりとも忘れてはいけない。何時でも、何処でも、主人である俺の云付に抗ってはいけない。分ったナ」

「ハイ」

「どんなことでも誠心誠意、努力するんだぞ！」

「ハイ、葉子はどんなことでも真心こめてお仕えます」

「それから、もう一つ。大事なことでだが、お前は、あくまで百姓の女だ。どんなに電化して機械化されても百姓の心は変わらない。土を愛し、作物を愛することだ。俺はその心を忘れない。ましてお前は奴隷なんだから、土を愛し作物を敬わなければいけない。もし、お前がその気持を忘れたら厳しく懲しめることにする。いいナ」

「ハイ！」

葉子も土に対する愛着は強かった。物心ついてから、跣足の足の裏に感じ続けて来た土の肌触りには、幼い日への郷愁と今日の生活がある。それだけに、深く領いた。「畑に挨拶しろ！」

葉子は土に正坐したまま深く身を屈めた。だが雄輔は赦さない。

「葉子は貴方様の賤しい奴隷でございます。何も知らない愚かな女でございます。どうぞ、何事によらず、厳しく教えて下さいませ。これからは死ぬまで貴方様を尊敬してお仕えさせて頂きます」

葉子は土に向って誓った。雄輔の足が葉子の平伏した頭を踏み、



まともに顔を畑の土に押しつけたので、泥を掃いて、辛うじて顔を捻じ曲げて誓ったのだ。鼻や唇から額や頬に泥がこびりつき、量感溢れる女体に何の抗いも見せず誓いの言葉を云わされている葉子の

姿は見事な従順ぶりだった。

大地への敬愛の口づけもした。雄輔の足に踏みつけられたまま、畑の土を口に含み、舌に載せて味わった。

見渡す限りの大自然の中で完くの無抵抗の身を曝していることに、葉子はふと、殉教者のような清々しい歓びを感じた。

(これが本当の強さなんだ。反抗なんて幾ら強くたってたかが知れてる。どんな目に遭わされても、そんなもの何だって笑っていられるのが本当に強い人なんだ。あたしは百姓の女だもの、誰にもいわれないで、田圃だって畑だって愛している。私は雄輔の妻なんだもの、夫やお母さんのためなら命を捨てても尽すつもりだ。それに、そうすることだけが、あたしの汚れた体や心を浄めてくれるんだもの。もっと、もっと酷いことしたっていい。あたしは丈夫だし、辛抱強いんだから、もっと痛いことしても、もっと苦しいことしても、もっと惨いことしても、きっと我慢してみせる)

○

農具への尊敬も、女奴隷には忘れてならない務めだった。仮に鎌で指を傷をつけたりと二つの罪を犯すことになる。主人の所有物である自分の体を傷つけた罪と、賤しい奴隷の血で農具を汚した罪である。

女奴隷は農具の扱いに細心の注意を払うだけでなく、農具の扱いに熟達し、農事の所作に精通しなければならなかった。今は使わなくなった道具も多い。それは電化による機械に取って代られたものもあり、或いは雄輔の家の農業規模に不必要になったものもあり、或いは近代的合理化から取残されたものもあった。

ぼうち(棒打)というものがある。長柄の先の部分が扁平で叩く

に適し、一打ごとに廻転して雑穀などの皮むきに使う。大きいものだから、女の力では余程の腕力と足腰の強さを必要とする。

「いいか、どうやったら一番効き目があるか、お前の体でしっかり味わってみろ！」

裏庭の蓆の上へ寝かせ、後手の高手、小手、首縄、胸から胴、股、膝、足首まで、まるで一本の白い丸太のように括られた葉子を、雄輔は打ち続けた。

ばたっ！ ペタン、ばたっ！ ペタン

仰向けになると無防備の胸や腹を狙われ、俯伏になると尻が熱くなった。転々と悶えて、葉子はいつしか土の上をじかに転げ廻っていた。

所謂、金肥という化学肥料ばかりを使うようになっていた雄輔が、葉子には下肥をも扱わせた。柄杓の使い方、天秤棒の使い方、下肥の汲取や肥桶の担ぎ方にしても、すべては腰のバネ一つだ。見かけは大柄な葉子だが、所詮は柔肌の女の身だ。肩の骨がメリ／＼と音を立てるようで、腰がフラ／＼するし、眼の前が暗くなってしまう。

「何て態だ！ 作物にとっては何よりも大事なこやしだぞ！ お前、女奴隷の分際で、生意気に汚ないなんて思っていやがるからだ。こっちへ来い！」

葉子は襟首を掴まれてズルズル曳かれた。腕を捲り、畑のうねへ肥溜から手ですくって流して歩かされた。流れる汗や額にかかる髪の毛もそのままだった。

漸く許された時、雄輔が汗を拭き、髪を撫でつけてくれた。肥桶の下肥を畑の端の溜にあげ、近くの小川で一切の汚れを丹念に洗わ

されたのだった。

裏庭の隅に寝かしてあるゴボウを掘出す時、僅かな傷をつけたのも罪になった。

「女奴隷の癖に思い上がるなヨ！ お前、畑や野菜が口利カンことをいいことにしやがって、感謝を忘れやがったナ！」

葉子は、自分が生埋めにされるための穴を一心に掘った。相当、掘っても雄輔は、よしと云わなかった。裸に剣かれ、首から足首まで、グル／＼巻きにされ、更に蓆で巻かれて荒縄でギリギリ括られた。斜めの穴に入れられ、土をかけられると殆ど口許まで埋まった。「お前がどれだけ大きな罪を犯したか、はつきり思い知らせてやるから、覚悟しろ！」

雄輔は、いきなり葉子の眼の前に鍬を振下した、ぱっと土が飛んだ。

「あっ！ ああっ！ あなたっ！ 分りました。許して！ うわっ、ぶっ、分ったワ！ 恐いっねっ、あなた！ 赦してっ！ ごめんなさい、御免なさい！」

葉子は恐怖しかなかった。真青で、眼が吊上っていた。顔中クシヤクシヤに歪めて、喘いで、必死に哀願した、その口の中にも、鼻の孔にも、眼にも耳にも泥の粒が、とび込んだ。野菜を扱う時の葉子が、がらりと変ったのも当然だったろう。

○

腰の力が必要なので、その為に鍛えられるのは、やむを得ない。

「腰のバネは強くならなきゃいかんが、そのために石臼みたいになっちゃ困る」

鍛錬の時間が短いので、ハードな課程は当然のことだ。革のコル

セットはギューギュー絞られ、尚その上に厚いベルトが胴に喰入った。内臓も眼玉も飛び出しそうに苦しい。

「脚の太いのはしょうが無いが、鍛えりゃ形は良くなるものだ。頑張るンだナ」

両の手首に別々に縄をつけられ、Y字型に吊上げられ、辛うじて爪先立ちができる位にされた。爪先の力を強くするために、そんな体を責められる。膨れ上がった胸許を棒で突かれ、揺れながら頑張った。盛り上った尻や太腿をピシッ、ピシッと力任せに撻たれても身をよじるだけで逃げずに堪えうるようになった。

昼の仕事では、まさか革のコルセットを締めていられないので、その代りに晒をキリキリと巻締めた。女剣劇などで女優が巻くのは乳房を隠すためだし、妊婦の腹帯とも作用が違う。ウェストを極限まで絞っている葉子は野良着でさえ人目を惹いた。バストやヒップは充分に張っていた。身長もあるだけに近在のグラマーNO1であり、年寄達も、昔流の出っ尻鳩胸と違う圧倒的な肉体美には悪口も忘れて眼を瞞っていた。然し、当の葉子にとっては大変な苦業だ。屈むことさえ苦しい。慎ましく見える食事も実は体が受けつけてくれないからだ。手洗いでさえ大変な苦痛だった。

そんな葉子を陰に陽に庇ってくれるのは姑のくみだった。

「葉ちゃん、あんたは夜も碌に休めないンだから、台所はあたしに任せといていいヨ」

二人きりの時、くみはよくそう云った。葉子は本当に心から姑を尊敬し、感謝した。そのうち、馴れというのか、葉子の胴が絞られることを却って好むようになって、自ら進んでシビれる疼痛に浸ってしまふようになった。姑は頻りに嫁を案じていた。

告白小説

ダブル・プレー

玉田良江

(一)

紫煙も薄れてしまったルームからSさんが立去ると、お客は誰もいなくなりました。十時はとくに過ぎて、そろそろ看板の時刻でした。私たち三人のサービス係は、帰りの仕度を整えるとカウンターに寄りかかって、ほっと一息をつきました。軽い酔いが皆を明るい談笑に引きいれました。

「ママ、疲れやしないこと?」

「ええ、少しぐらいはね。でも大丈夫。どうこれちょっといかすと思わない?」

ママは一枚の写真をとり出して、皆に示しました。

「まあ、素敵じゃないの、ママ」

「ほんと、何処へ行ってきたの?」

「馬上豊かに、右手に手綱ゆんでつてところね」

写真を手にして眺めていた、みどりさんは「Sさんに行って来たのね」

「……」

ママは黙って微笑みました。私も、のぞきこみました。

「ちょっと、あてられるわね」

ティーン・エンジのひとみちゃんが、ませた口をききます。

「この間のお休みの日よ。××公園に馬に乗りに行ったの。」

樹林を背影にして、ママは小馬に跨っていました。外国婦人のように背が高く、大柄なママが、豊満な肉体を馬上にゆだねて、にこやかに笑っています。馬があまり小さいので大柄なママに比して、不釣合な滑稽さもありましたが、スマートな服装、ブラウスからのぞいた派手なネッカチーフもよく似合って、なかなか凛々しい乗馬姿でした。軽快な布地に包まれた逞しい大腿部の輪郭が裸線を描き出しているようでした。美貌のママが周囲にただよわせている年増の艶が写真の上にも、ほのかに匂ってくるようでした。

「十五軒は充分ある山道なのよ。殆ど一日中小馬の背に跨っていたので少し疲れちゃったけど。でも、とても気分が爽快だったわ」

「へえ。馬がよく潰れなかったわね、ママ」

「私が大きいからっていいたいんでしょう。覚えていらっしゃい。」

ママは、ひとみちゃんを睨む真似をしました。

「だけど、ちょっと小さすぎるわね、この馬。」

みどりさんも口を出しました。

「大丈夫よ。いくら小さくても馬ですよ。少



しぐらいは、もたついたり泡を嚙んだりしても、鞭で気合をいれてやるんだから。それに私は乗り慣れているの。実を言うと、これが初めてじゃないのよ。もう五、六回は行ったの。フフフ。とてもいい気持で、一度乗ったら忘れられないわ。馬に跨り鞭打つ気持ってたまらないものよ。」

「変だわ、ママ。変な言い方しないでよ」
みどりはいぶかしげに、しかし好奇の眼でママを見ました。
「だって本当なもの」

ママは大仰に、うっとりしたような眼付をしてみせました。私の眼は異様に輝きました。
「そのうちに、本格的に乗馬を習おうと思っているの。」

「私だって馬に乗ってみたいわ」

みどりは羨しそうでした。

私の胸は、さきほどから何か妖しげな感情にときめいていました。私の脳裏には小馬に鞭打って山道を行くママの姿が幻のように浮かんでいました。いつのまにか体内にぐっと煮え返った様な血が流れ始めていたのです。

深く深く心の奥底に灼きついていくマゾの性癖と愉悦が、新たな妖精を見出だしたのでした。ママはサジスチンではないだろうか。そうではなくて何故あのような云い方をするのでしよう。小馬に鞭うって喜んでいるのではありませんか。加虐の悦びを知っているに違いない。いま皆に云っていることは、ママの胸中に秘かに隠されているものに違いないのです。

あゝ、どうしよう。ママがサジスチンであるとするなれば……。

もしそうなら、私はあの美しいママに責めて頂こう。夜となく昼となく。ママが私を縛って鞭打って下さったら、どんなに私は狂喜することでしょう。

あゝ縛られたい、どうかママが私の思っているような人でありますように。

不意に頭へひろがってくる悦虐への希求はたけり狂った私の血液を波浪に揺れる小船のようにゆり動かすのでした。

「さあ、最終に遅れますわよッ。では又、明日お願いしますわね」

被虐の幻想にとりつかれていた私はママの

声に目を覚まされました。

「お休みなさい、ママ」

「さようなら」

みどりと一緒に泣くように云った私は、後髪を引かれる想いで、ママの顔をじっと見ました。

「隅ちゃん、どうしたの、そんな情なそうな顔をして……」

正気に返った私は慌てて首を横に振ると、

「何でもないの。お休みなさい、ママ」

と云うなり、表に飛び出し、終電車に駆けつけました。同じ職業の女性が通りに溢れるように家路に急いでいました、もう春だと云うのに今夜は何だか肌寒く、私は思わず襟を合わせました。

みどりやひとみと別れて、一人、電車の吊り皮にぶら下ってから、私のママの写真を想い浮べました。

緊縛……鞭打……乗馬。

じっと佇んでいると、そんな言葉が私の脳裏を駆けめぐって、悦虐に対する異常な慾望は益々烈しくなりました。そして私は今宵も縄を手にして私の帰りを待っている筈の時子の事に想いをめぐらしました。私をこのようなマゾヒスチンに仕立あげた時子。その相住い

のアパートへ妖しげな血を燃えあがらせた私は、物怪につかれたような足どりで、薄暗く点された街灯の下を只、急ぐのでした。

(二)

仲居をしている時子は私より、一足早く帰って既に床についていました。隣の二帖の間には四、五日前に田舎から尋ねてきた時子の親戚の少年が眠っています。名前は勇吉と云って十五才だそうです。静かに衣服を脱ぐと私は薄いスリッパのまゝ、時子の横にもぐりこみました。

「あゝ冷い。いつも遅いのね、あんたは」

「ごめんなさい」

手を伸ばしてスタンドの灯を消すと、時子にしがみつきました。肌理のこまかい、なめらかな豊かな肌は、同性である私にとっても蠱惑的なものでした。時子の体臭が蒸せるように匂います。私は、ほっと安堵したような気持ちになり、ぬくぬくとした体温が私に伝わるのを、心よく受けとめていました。漸く全身が温りに包まれたとき、闇の中で時子に握られた両の手首が思いきりググッと脊に持上げられ、合わせて組まれました。布団の中に用意されている麻縄で手首がひしひしと縛ら

れると、俯伏にされ首縄をかけられました。時子が縄を引くにつれて両手首が脊でしわれるので、肘の関節が灼けつくようになります。時子はそれでも縄をゆるめてくれず、腕が折れそうになるまで引きしぼって固定しました。そして二の腕から乳房の上部を締めあげられた私は「痛いッ！痛いわ」と俵のように緊縛された身体を布団の中でもがきました。文字通り嚴重な高手小手に縛りあげられた私は、今夜の縄目の厳しさに顔をしかめながら何かあったのだろうか、時子に……。と思いました。

「何う？ 今夜の縄目は」

時子は私の耳元で囁きます。

「いい気持だわ。とってもきついよね」

「そう。朝までそのまま眠るのよ……」

「いやよ、そんなの。もっと早く許してよッ。」

私、とっても疲れているの。何うかしたの？ 今日」

私は苦痛に歪んだ姿態の中から尋ねました。時子は暫く黙っていました。

「私ね、勇吉を縛りたいの。いじめてやりたいのよ」

と囁くと、意味ありげに笑いました。目をみはって驚いた私は

「だ、駄目よ、そんなことしちゃ。いや。可哀そうじゃない。私を縛っていいじゃないの」

私は時子の考えていることを知って勇吉のことを危惧しました。何も知らない無垢な勇吉までが時子の眼に捕えられ、網にかけられようとしているのです。後の言葉を遮るように「未だ子供じゃないの。ねッ、お願いだから、そんなことしないで」

緊縛に動かし得ぬ身を振って訴えました。

「隅子、私に意見する気なの」

時子の声の調子がガラリと変わりました。

黙ってしまった私に

「もう一度いってごらん。お前は私の何だと思っているのッ隅子」

ギョッと臀部がつねられ、「ウーウッ」と私は、その痛さに思わず声にならぬ呻きを発しました。

「シッー勇吉に聞えるじゃないの。馬鹿ね」

加虐の快びにひたっている時子は、私の意見がましい言葉によって、冷静になるどころか。反対にサジスチンの血を燃え上らせていたのです。

(三)

私達三人が起き出して、遅い朝食をしたためたのは、太陽が高く昇ってからでした。うららかな陽光は暖くこの部屋にもさしこんでいました。私の手首には明け方になって、やっと解かれた縄目のあとが、ありありと痣になって残っていますので、勇吉に見付からぬようにそっと隠しました。

「うちの店のママね、小馬に乗るのが好きなんだって」

私は時子に話しかけました。

「そう。乗馬ってとてもいいものだと言わないの」

「ママは『素敵でしょ』などと云って写真を見せていたけれど、ママはあんなに大きいでしょう。小馬がおし潰されそうで可哀そうだったわ」

そう云った私は勇吉の居るのに今さらのよに気付いて、暗示的な話し方になったのを後悔しました。

「弱いものを苛めるのが好きなのよ。多分」キラリと瞳を光らせた時子がズバリと云ったので、私は思わずぐくりとなりました。

「そんなこと、云わないで。変だわ。ママもね、そんな云い方するのよ。小馬に跨って

鞭打つ気持ちでたまらないわ」だって「あゝ、どうして私はこのような話し方ばかりしてしまうのでしょうか。」

冷静な仮面をかぶった時子は

「ちっとも、変なことないじゃないの」

「そうかしら……」時子は昨夜の加虐を追求するように、私の顔をじつと見つめました。

「私だって馬に乗りたいわ。ただ手近に無いだけよ」

そう云ったとき、時子の双眸は妖しく光り輝いたように思えました。そして、その眼はおとなしく食事をしている勇吉の上にそがれているのです。

勇吉はおとなしい無口な少年でした。農村の生れにふさわしく、健康そうな褐色の皮膚と、くりくりと引きしまった身体をしています。異常な欲望を少年に燃えている時子の様子に私は戦きました。遮るすべのない私は一種のスリルともつかぬ恐怖が背筋を走るのを感じました。

私が食卓を片付け終えたとき、勇吉に向った時子は叱るような口調で

「勇吉ッ、裸になってごらん。姉さんはね、お前がどんな体格をしているのか、見たいの」と云って勇吉を自分の前に立たせました。

何か叱られると感違いしたのでしょいか、怖れたような態度だった勇吉はその言葉を聞くと元気を取戻して「ハイッ」と返事をし服を脱ぎはじめました。

「シャツも脱いで。そう、パンツだけになるのよ」

時子はどんな計画を胸に秘めているのでしようか。期待と危惧と、そして興奮がいり混った奇妙な心理のうちに、私は時子と一緒に少年の若々しくなめらかな肌を見つめました。

「そこへ、四ッん這いになるのよ。馬のように」

激しい口調を以て勇吉を頤でしゃくりまし



た。年上の女の厳しい威圧に自由を奪われた玩具のようになった勇吉は素直に四ッん這いになりましたが、云い様のない羞恥を、何をされるのかと問いたげな瞳に浮べていました。

時子の手には、勇吉のズボンから引きぬいた皮バンドが握られると

「隅子、勇吉の背中に乗るのよッ」

無難作なうちに有無を云わさぬ口調で命じました。戸惑った私は

「乗るッて、跨るの？ この子に」

「そうよ。隅子にお馬の稽古をさせてあげる。いまから」

「だって時子」

「何だって云うの！」

一瞬ためらった私でしたが、立ち上って皮バンドを一振りした時子の眼光に射すくめられて逡巡も反省も失ってしまい勇吉の背に馬乗りにどっかりと跨りました。

膝を折ってあしゆびの先を軽く畳に触れただけで、全身の力をぬいたので、のしかかった重みに少年の背はぐつと下りました。勇吉は手足を懸命につっぱって、私の全身の重みに堪えているようでした。

「手綱がいるわね」

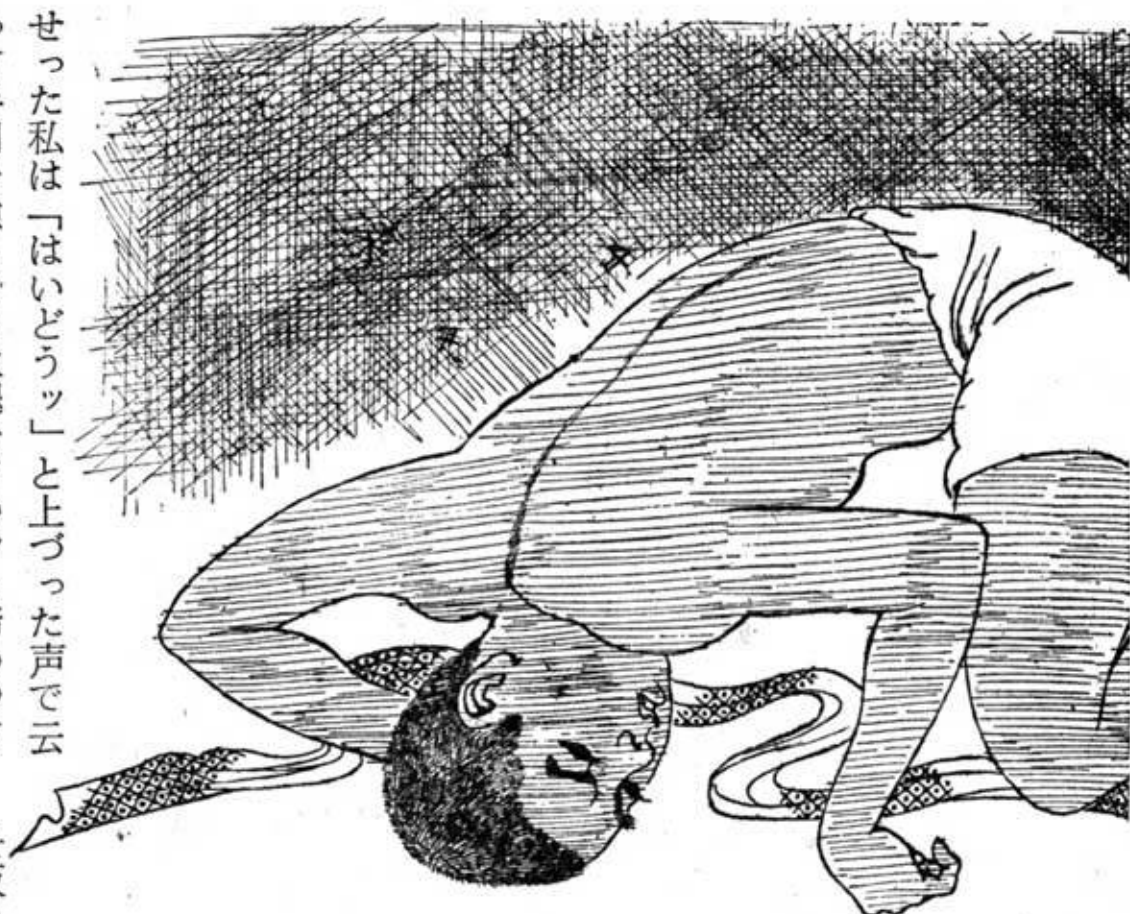
そう云った時子は赤い扱帯を持ってくると勇吉の歯の間に細く擦った部分を挟み、耳の下から後頭部に一巻きして、両端を纏んでぐつと引張りました。舌も動かせない程締められた勇吉は「ウ、ウ、ウ」と呻きました。唇の端から頬にかけて痛ましく喰込んだ扱帯を時子は私に手渡しました。

「シッカリ手綱を持つて、隅子」

私は扱帯の両端を握り、ぐつと引き締めました。手綱を持つと上体は安定しました。軽く足のおやゆびの端を畳に触れさせているだけで私は完全に少年馬に跨った姿勢になりました。手綱に力を籠めたので眼下にある勇吉の顔は半ば上向き加減になり、息苦しそうに見えました。ママが小馬を鞍上から責め苛み苦痛に怒張する筋肉に抑えきれない満足を見出した心境が読めたように思えました。

「前進ッ」

時子は命じました。と同時に皮バンドが唸って、私の腰あたりを「ピシリッ！」と大きな音をさせて打ちおろしたのです。激痛が私の身体をつきぬけ、私は思わず「アッ！」と声をあげて、のけぞりました。狙いをつけてもう一度振り下そうとするのを目にして、あ



せった私は「はいどうッ」と上づった声で云って手綱を強く引き太腿をぐいッと締めつけました。鞭の唸りに勇吉も怖れ戦いたのか、つっぱった手足を交互に慌てて歩きました。狭い部屋はすぐ行き詰りとなり私はその度に馬首をめぐるぐると歩かせました。少年の胸は弾力を以て波打っていました。勇吉の微妙な筋肉の動きが歩みにつれて私に伝っ

てきます。時子は部屋の中程に立って皮バンドを振り上げ打ち下して私達を威嚇します。それは何時、私の背に炸裂するかも知れないのです。

「はいどうッ、はいどうッ……はい」責め足りない渴きを感じた私は、夢中になって勇吉を歩ませ、勇吉はまたただ夢中で這いづり廻りました。愛らしい少年の顔は苦渋の汗と涙にまみれていました。

あゝ加虐者、時子は何という責苦を考え出すのでしょうか。それは時子の周到な計算のもとに編み出されたものに相違ありません。

私はひたすらに時子の鞭を怖れ、その私をして愛らしき少年を馬として責させることによって時子は悪魔的な喜悦と興奮にひたっているのです。これを仮りにダブル責めとでもいしましょうか。

このようにして、馬の動作を強いられる勇吉、鞭を強いられる私でしたが、その反面に於て私は少年に跨っているということに血を逆流させているのでした。そしてまた弱者を苦しめる切なさ、犇々と己れの哀れさに身を包んでいる私でもあったのです。

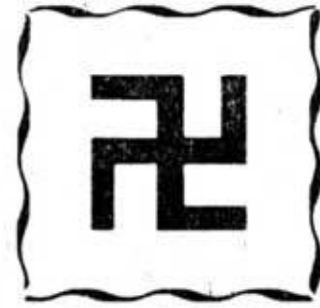
華奢な身体つきといっても、私は二十二才四十五斤はたっぷりあります。少年の勇吉にとって軽い筈はありません。唾液と汗にまみれた手綱のもとに「ウフ……ウフ……」と勇吉は声にならぬ呻きを発しながら、呼吸も絶えだえになって、よろめきながら這いつづけました。全身から汗が噴き上っています。私のスラックスも汗ばんできました。勇吉はときどき、のめるように躓き、私の上体は傾いて落ちそうになります。

ピシリッ！と私の背に再び鞭が振り下されました。「ウッ……ウッ」のけぞった私がぐっと手綱を引き絞ったとたんによりめくような躓きを見せて、少年馬はガックリと力がぬけ、どうと俯伏に這ってしまいました。

勝ち誇った微笑を浮べた時子は、私の背といわず肩と云わず続けざまに鞭打ちました。「アッーアッー……許してッ」

腹這いのまゝ身悶える力もなく、ぐったりと死んだようになっている勇吉に、なお跨ったまゝ私は全身をうちふるわせて、マゾヒズムの陶醉の極地に落ちてゆくのでした。同じように、身も心もくたくたにすりへらされた勇吉のおし殺したような、むせび声を自分の膝下に聞きながら……… (完)

奇態体験小説



||
(まんじ)

男色無情

昭和二十年――。

終戦当時は、私は中学生だった。

敗戦の痛手に打ちのめされた南京在住数千の日本人は、今迄の反動として中国人や勝誇った地方の雑軍に乱暴されたり、心ない子供達の悪罵や打擲を受けて苦しまなければならなかった。

動揺した邦人達は家財の整理投売りを初めた。私は頼みとする父が赴任先の漢口から戻って来なかったので、どれだけ心細い思いをしたか分らなかった。家財道具を整理するの

にも、子供と侮った中国人は法外な安値を吹っかけ、夥しい品物が混雑にまぎれて盗み去られる始末だった。

一月余りも続いた混乱の末に進駐してきた国府の精鋭新四軍に依って南京市内の日本人は、城外獅子山の旧日本軍兵舎集中営へ寝具と行李一個、それに僅かな身廻品と一緒にトラックへ積込まれて収容された。嘗ての勝利者も今でははじめな捕虜の身になり下った邦人達の変化はひどいものがあった。収容所の中では毎日のように無責任なデマが乱れとび、不衛生な設備からコレラが流行して、タバタと人が死んだ。

正宗五郎

戦々競々昭和二十年も暮れたが、待ち侘びる父は依然として漢口から戻らなかった。私の周囲には、今迄近づきのなかった老若男女が渦巻いていた。定員二十名の部屋に五十人からの人が荷物と共に詰め込まれたのだから、食事時の混雑といふ、就寝時の狭さといったら大変なものだった。畳一帖に二名という部屋割が原因だったが、種々の職業に携っていた一般邦人の中に、身分を偽った元軍人が潜り込んでいたせいもあった。

彼等元軍人達は何かという団結して血氣盛んな体力や粗暴な言動に物言わせて部屋の中を我物顔で振舞い、暇さえあれば花札賭博に耽って、力のない一般邦人や女子供達は部屋の隅で小さくなって怯えている有様だった。営内のそんな悲惨な状態では、学校の教師も無力で授業がとぎれとぎれに行われるに過ぎなかった。しかし、こんな鼻つまみの旧軍人グループの中にも人格の立派な青年がいて、好意を持った娘達がモーションをかけることも珍しくなかったが、中でも志摩青年は図抜けた存在だった。

秀でた眼、高い鼻、白いトックリ・セーターが良く似合ってアポロの様に均整のとれた肢体をいつも忙しくいつも動かして常に私達

収容者の為に骨身を惜しまず働いてくれるのであった。殊に年端もゆかぬ中学生の私が使役に狩り出されたり、家族持ちの中に一人取り残されるのを見て、一入不憚に思ってくれたのだろうか、作業の時は決して無理をさせないよう気を配ってくれたし、乏しい食事に腹が減って堪らない時には、炊事から焦飯のお握りを作って持って来て呉れたりした。又何より有難かったのは、賭博の開帳で身の置き所がなくなった私を散歩に誘ってくれたり天気の良い日には、集中營の端にあった丘に上って周囲をかこんで満々と水をたゝえたクリークや高い城壁を眺めながら枯草に腰をおろし、故郷の話などを交すのだった。

志摩青年は文学にも造詣が深く、私に和歌や俳句を手ほどいて無聊を慰めてくれたりした。「冬空に機銃据えあり収容所」「城壁に日は入り寒さ増しにけり」という当時自分の作った幼稚な句を今も覚えてるが、このような彼の親切が孤独だった私にとって、どれだけ精神的な支えになったかしなかった。

彼は売薬で有名な北陸は富山市の出身で、その薬専から幹候に志願したそうで、私の郷里のK市とは隣県同志という間柄だったので、九州人の多いこの部屋では殊更話が合っ

たというわけだった。そんなわけで二人が余りにも仲睦まじかったものだから、仲間の兵隊達から、やれ志摩の稚児さんとか、同性愛だとか、兄弟ではないのか等と再三冷やかされたが、二人共そんな陰口等にはお構いなしに日と共に親密を加えていった。

収容所の中であったにも拘らず、元兵隊を含めた適齢期の独身者達は、戦時中に性を抑圧されていたせいとか、在留邦人中の婚期の遅れていた娘さんや以前水商売をしていた女性達と一緒に内縁の妻といって同棲したり、野合が行われたり、風紀は乱れるにまかすといった有様だったが、志摩青年はあれほど女性の間に人気があったけど身持が固く、ついで、そういう浮いた話はきかなかった。

咽喉が滅法好くて、どんな歌でも一度耳にすると直ぐ器用にこなすので、父譲りの音痴の私には只々感心するより外なかった。つきあえばつきあう程尊敬と信頼感を増してゆくのであったが、尊敬が抜きさしならぬ好意となつて私の胸に根を下し出したのを気づくにはまだ間があった。しかし、その中、のっぴならぬ破局が訪れたのは昭和二十一年の正月明けて間もない厳寒の夜の事であった。

其の時私は一日の仕事が終って、炊事場の

裏に設けられた野天立のドラム缶の風呂に入っていた。集中營での入浴は週に一回、それも一人五分間入湯とあっては石鹸も使えず、私が次第につのる不潔感に堪えきれなくなつた時、志摩青年が此の炊事の連中がこっそり使っている風呂へ連れてきて懇意な人に頼んで呉れたので、時々しまい風呂へ入れて貰うようになった。皆が入浴を済ませて帰ってしまった後のこととて気兼ねをしたり急ぐ心配もなく、野天とて十一時も過れば人気もなく暗さの中に星明りがあるだけだった。

誰もいないのを幸い、ドラム缶の縁に腰かけ頭上の星の瞬くのを眺めているのも存外、風流なものだった。「おい五郎、お前一人なのか？」突然横柄な声が近づいてきた。それは広く肩をいからした皮ジャンパーに乗馬ズボンの日頃から弱い者いじめばかりして、私の最も嫌いなタイプの下士官上りのSだった。此の男は昔板前だったとかで、時々炊事へ手伝いにきてはうまい汁を吸っているという噂のある四十男である。

「けえッ、此の野郎、炊事でもねえ小僧っ子の癖に女のように長湯使っていやがる。」

何が不機嫌なのか、私が風呂の中に立辣む程の権幕で罵倒を浴びせかけると、唇を噛ん

で身を沈めた私の前に立ちはだかって煙草を二、三服して何か思案をめぐらしている様だったが、大きく煙を吹きつけると、
「五郎、ちょっと其処へ来い。志摩の事でち

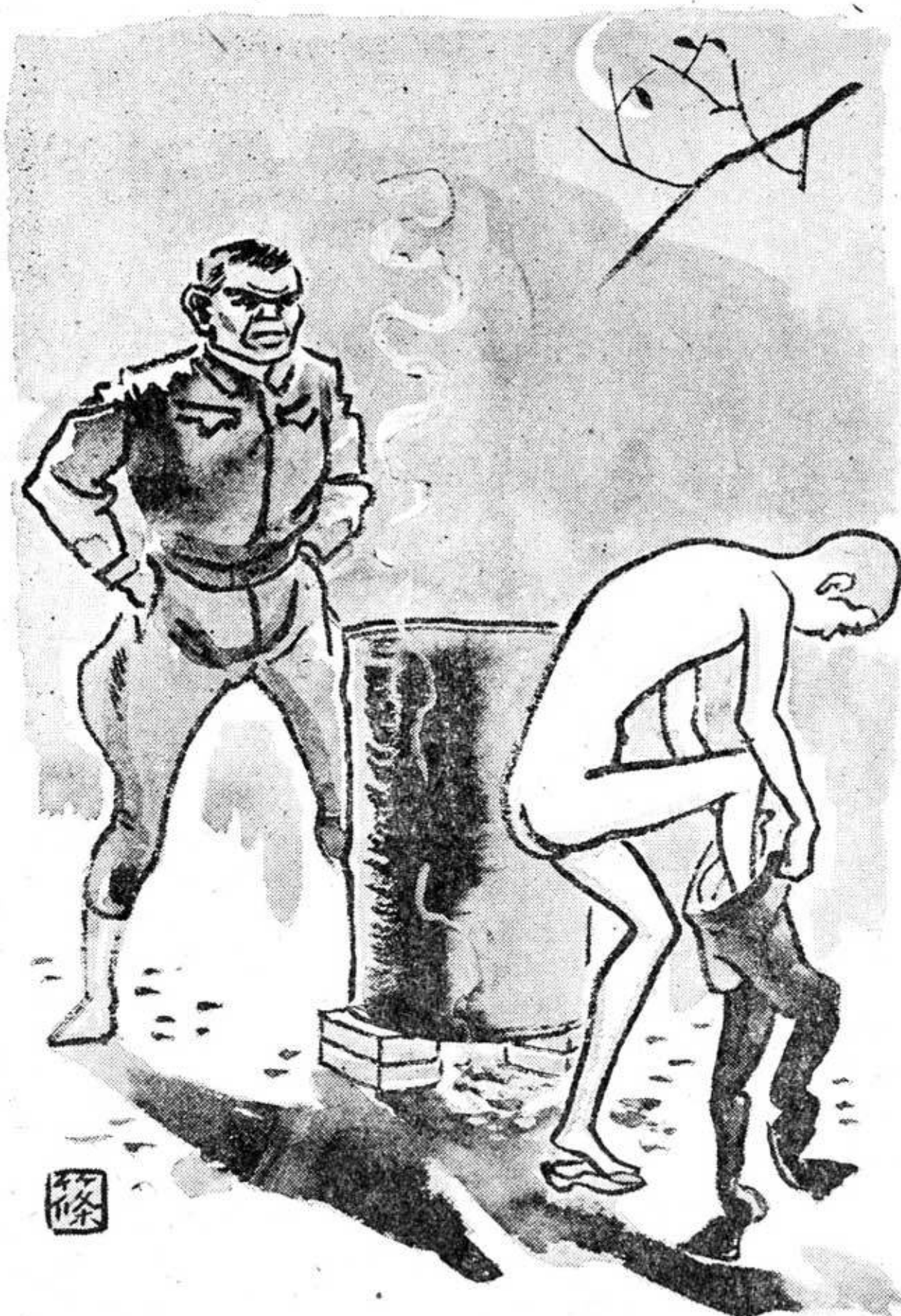
よつと話があるんだ」

と言った。私は何かしら彼のそぶりに不安を感じられて、はじめはぐずぐずしていたがドラム缶の風呂の火が消えているので、此の

寒空に早くも湯の冷えだす気配を見てとると思いきってドラム缶をまたぐと急いで身体を拭いて衣服をまとった。Sはその間中、蝮の様な目でじろじろと私の全身を眺めていた

が、私が学生服を着け終ると先に立って歩き出した。

一体どんな話なのか、私には想像もつかなかったが、志摩の事という聞きたい気持もあった。Sに導かれるまゝ、暗い城壁の隅へついて行つた。此処は炊事や浴場に使用する石炭置場で、余り人の来ない兵舎からは見通しの悪い所だった。Sはこゝまで来たら大丈夫と思つたのだらう、ぐるりと向きを変えたと私の手をぐいと握つた。私は瞬間、鳥肌が立つのを感じた。
「ど、どうしたのです？」思わず声が震えた。
「貴様、いつも志摩と山へ行つて一体何をしてるんだ。馬鹿つたれ、おかま掘られやがって」
彼の下卑た言葉は私の脳天をぐわんと打って私は此の時始め



て聞いた不思議な言葉が頭の中をぐるぐると走り回った。五年生の時、あの晩に刻み込まれた福田邸の寝室での出来事が瞬間、浮かんで消えた。

「俺はな志摩が部隊にいた時、Tにこっそり可愛がられたのを知っているんだぞ。奴はなTが此処へ来て春子とくっついてるので、お前にちよっかいかけているんだ」

SのいうTとは、部屋でボス風をふかして羽ぶりをきかせている大阪出身の土建屋で、背中や二の腕に刺青を入れている男だった。

此の時私は志摩青年の秘事を暴露したSを殺してやりたい程の憎悪にかられて夢中で飛びかゝった。Sは非力な私を雑作もなく押倒すと自分のズボンに手をかけた。その際に飛び起きて脱兎のように走り出したが、すぐ脱走や盗難除けに張りめぐらされた鉄条網に追いつめられてしまった。私は必死になって彼の手から逃れようと焦って鉄条網のすき間へ身体を潜らせたが、彼は猿臂を伸して私の肩を掴かむと、遮二無二、石炭の上に押し伏せてしまった。

じたばた暴れる中に有刺鉄線にふれた私の服がビリッビリッと鈎裂ける音がした。Sは俯伏せになった私の背中へ馬乗りになって膝

頭でぐいぐいと押さえつけた。余りの痛さに私は思わず悲鳴を挙げ動く事を止めた。私はこうなるまでに随分抵抗して暴れたのだが、どういふわけか声を挙げて救いを求めるのを忘れていた。というより叫べなかったのだ。こんな所を人に見られては、と、そればかりを考えていた。

身動きする度に学生服の金ボタンが胸の下の有刺鉄線に触れてカチカチと音を立て、私は衣服ごしに刺さる刺の痛さを避けるのに精一杯だった。ジー、ジー、と凍りついた石炭山の下で地虫の音が籠って耳に震えた。私は腕の上に伏せていた顔を両手に押付け、じつと観念の眼を閉じた。

と、この時、石炭を踏んで近づく足音。

「おーい、五郎ちゃん」

遅くなった私を案じて探しに来た志摩青年だった。Sは舌打ちして身を起した。駆け寄ってきた志摩青年は星明りに震えている私の石炭殻にまみれた鈎裂の服と、ふてくされているSを見ると、矢庭にSに飛びかゝって、激しい斗争が展開された。

何回もの殴り合いの応酬があったが、矢張り年若い志摩青年の方に分があった。形勢不利と見た卑怯なSは隠し持っていた匕首を取

り出して切りつけた。これはいけないと思った私は、急を知らせるため走れるだけ走って部屋へ応援を求めた。Tが真先に駆けつけてくれた。引続いて他の人達も。然し既に後の祭だった。志摩青年は血溜りした石炭置場に胸を刺されて横倒れていた。激昂したT達に追われて逃げたSも、警戒の歩哨に脱走と誤認されて自動小銃の集中を浴びて命を落したというのも自業自得の結果だった。

私の為にあたら夢多き二十二才の青春を、異境の收容所の土に非業に散らした志摩青年の死は、後に残った私をどれだけ歎かせたとか。悲歎にくれた私がクリークに身を投じなかったのは、この傷ましい事件の直后、間もなく漢口へ出張していた父が重慶の引継をすませて私の元へ帰ってきたからだだった。

一月十日夜、遂に第一次の引揚が始った。下関(シャカン)の駅から住み馴れた思い出多き南京の街に別れを告げる夜汽車の気笛が鳴り渡ると、常蛾の爪といわれる利鎌の様な細い月が獅子山にかゝり、私は毎日のように今日の引揚の日を待っていた志摩青年の事を思い出して大粒の涙が次から次へと、列車の振動につれてこぼれるのであった。

連載小説

宇宙のどこかで

……無期懲役囚の手記より……

佐 治 麻 造

珠枝の結婚

珠枝の許で奴隷の屈辱を受けて早くも一年近い月日が流れ、逮捕されて五年目の春を迎えました。段々近所の邸の奴隷達の様子も分ります。寛大な哀れみ深い主人に買われた奴隷達は幸せなものです。苛酷な主人を持った奴隷達はみじめなものでした。しかし、これは如何とも出来ません。取扱いに對して不服等、「一言半句いや態度に出すことすら許される身ではないのです。私の御主人である珠枝は中位いの所で、余り懲戒を課されませんので助かりました。しかし戒具だけは実に厳しく施すのです。檻の中での後手錠は一夜たりとも赦しては貰えません。」

「この様な事、お願い出来る分際ではございませんが……お慈悲でございます。檻の中では……せめて……前で飯めて頂けませんでしょうか……」

きげんのいい折、全身に哀願を表わして、手を合わせてお慈悲を願ったのですが、手錠を持った珠枝は、冷たく顎をしゃくるばかりでした。

或る初夏の晩、珠枝は浮き浮きと、

「私ね、とうとう婚約しちゃった!」

近頃、私を辱ずかしめるのに余り興味を持たなくなった原因が分りました。

「秋には結婚するのよ。そうなるとお前をどうしようかしら? こ

の家に置いとくんなら女奴隷の方がいいしねえ。売り飛ばして何か買っちゃおうかな。それとも、連れてって慰さみ物にしようかしら？ まあ、彼とよく相談して見るわね。ホホホホ、何、妙な顔してるのよ」

白い足で蹴り倒します。

「お、おめでとうございます」

「フフフ、人並みの口、利くわね。彼氏はねえ、検事局に勤めてんのよ。次席検事様！ 私には頼もしいけど、お前にとっちゃあ震え上げる様な方だね」

珠枝は面白そうに私のおびえるのを眺めながらからかいます。その後、度々邸へ来る様になった相手の男性を垣間見て、理由もないねたましさに胸を掻きむしられる様でした。

「やっぱりね、お前も連れてくことにしたわ。今ね、新らしく家を建ててんの。お前の檻も造りつけにしてやるつもりよ。ホホホホ、嬉しいのかい？」

彼氏に夢中になった珠枝は、ランデブーの首尾如何によっては、私に当るので敵いませんでした。

「今日の靴の磨き方は何よ！ あの人には恥かかせちゃったわ。性根いれて働かないと、彼氏に言っつて、死刑にしてしまおうわよ。嚇かしじゃなくてよ。あの人、商売だものね」

骨の芯から震え上った私は、しおしおと窄衣、逆海老の懲戒を受けました。

夏も終わり、新居も殆んど出来上って、私は何かと支度の下働きに追いつまれます。其の頃は、もはや浴室での奉仕もさせられませんでした。大奥様やお千代にこき使われて、近所の丘の上に建てら

れた新居の整備をさせられ、寝室のダブルベッドと、片隅の壁に埋め込んで造られた鉄の檻とを見て、涙が止め度なく流れました。挙式の当日はお千代と私だけがガランとした邸に残りました。

「一体どんな気がするの？」 考えて見りゃ、お前も可哀想な男やなあ。ちよっと肩もんでんか……」

眼の回る様な忙しさが済んで虚脱した様です。今朝、気の立った大奥様から珍らしく打たれた鞭あとが未だ痛みました。

「今度は足やで。フフフ、お嬢様のお足とは大分違うやろ。よしよし、もう、ええ。うちな、ちよっとひるねするよって、番しとりや。大抵の人やったら来やはっても、ほっとき。ウーン、どっこいしょ、と。揮あけたろな。早よ行っといで……」

外は霧の様な秋雨が降っていました。

「ええ雨やな。縁起ええで。手え出しいな。そやそや、こないしといたろ……」

顎で命じられて、揃えて差出す両手を手錠が噛み、鼻環に結ばれました。

「台の上に坐っとりや。奴隷やさかいな。悪う思いなや。御苦労やったなあ」

お千代は、お茶を淹れて啜り乍ら

「新婚旅行は極楽島やて。地獄島の監獄の典獄ちゅうのかいな、その大将が旦那様の友人やそうな。お前、あすこの監獄にブチ込まれてたんやろ。監獄見物もしやはるそうやで。お嬢様のこっちゃ、又お前をそこへ帰しとうなりはるか分らんで……。フフフ、十日程したら帰って来やはるさかい、前の日位いから向うへ行ってお迎えせないかな。阿呆！ お前が行くんやで……」

涙がジワリと流れました。

それからは、珠枝夫妻の新居で、下男下女兼用の日々を送りました。珠枝は、料理と衣服の手入れ、それも上等なものだけ位しかせず、内外の掃除、洗濯、炊事の下働き等、朝から晩迄こき使われます。そして寸毫の落度でもあれば容赦なく鞭や懲戒を加えられ、哀れな声で赦しを哀願する他ありません。旦那様は、検事という職業柄、奴隷の私等、全く品物と同じと考えられているのでしよう。碌々言葉も掛けてくれず、命令も言葉少く唯一度だけで、まごまごすれば蹴り倒されるだけでした。

一日の労働に疲れ果てた体で、寝室を這いずり回って奉仕した後、檻へ蹴り込まれます。檻の格子扉の外側にはカーテンが垂れて居り、眼で見ることは出来ませんが、それだけに余計に聞える物音や衣ずれ、語らい等が胸を引き裂く様でした。

此の檻というのが、おそらく珠枝の考えによるものでしょう。床は一面サンドペーパー状のもので張ってあります。何年経っても後手錠は寝苦しく、何度も寝返りを打ちますが、其の度に体中のあちこちがこすれてすり剥けると云う残酷なものでした。ですから、蹴り込まれる際に打ちつけた額や肩や膝頭は、見るも無惨に血を渗ませます。血を見るのを余り好まない珠枝は、二、三日ですぐ蹴り込むだけは止めました。私の汗と脂で効果の薄れた床の張替えも私の仕事で月一回位の割合で取替えさせられるのです。ヤスリの目に大小の差がある中から、私の働き工合に依って珠枝が選ぶ訳で、最も荒い目のものを敷かされた時などは、とても横になって寝られたものではありませんでした。

私を人間とは思っていない二人は、私などお構いなしに振舞い、眼のやり場に困ってしまう事も度々です。用便は日に三回と定められ、それ以上は絶対に革褌を開けてくれません。

日曜日は大抵揃って外出し、其の間は檻に入れられて、戒具や鞭の手入れをさせられました。衛生上の見地から風通しのため、体中のすべての錠や枷を外され、一枚のガーゼを与えられて何時間かを過す訳ですが、其の楽しさは云い現わし様もない程でした。その代り飲まず食わずです。

そんな時、珠枝は大抵、意地悪く、私の食事や水を満たした食器を檻の外の手が届かない所へ置いて行きます。ダブルベッドの側のテーブルには果物等がありますし、帰りの遅い場合など、空腹と渇きに堪えかねて、鉄棒の間から両手を出して空を掴んで咽喉を鳴らすのでした。

用便が出来ないのも辛いことで、夜も更けて帰らない時などは、全身をふるわせて耐え忍ぶ他ありません。寝室の一隅の檻の中で洩



らしたりすれば、どんな懲戒を加えられるか、分ったものではないのです。

しかし、三カ月程して、中古の奴隷車を買求めてからは、日曜日の外出毎の楽しみも、ちょいちょいフイになりました。遠くへ行く時はいいのですが、工合の悪いことに二軒程の所にゴルフ場があり、屢々そこへ出掛けるからです。

駐車場の鉄柱に繋がれて朝から夕方迄、出入りする人々を見えますと、余りの相違に、つくづくと悲しくなるのでした。

白い手が伸びて、鎖が私の鼻環から外れました。今日も一日ゴルフを楽しんだ二人が車に乗り込み、私は痺れた足を踏みしめて立ち上がります。駐車場係りの少女が近寄って来て、コンクリートに埋め込んだ鉄環についている足枷を私の両足首から外して呉れました。ピシッと右の腿に鳴る革鞭。

「ヒ、ヒーツ」

珠枝の手の手綱に、容赦なくグイグイと鼻を操られて、車を曳出しました。

其の夜、一日中、後手錠で締め上げられていたために、つい粗相して紅茶をこぼしてしまい、窄衣をつけられて庭で鼻を吊られました。苦しみ呻く私には一べつすら与えず、居間で暫くダンスを楽しんだ二人は、やがてベッドに入り、寝室の窓のカーテンに映るピンクの淡い光を横目で怨めしく見乍ら、私は涎れを垂らして苦吟し続けるのでした。

○

「私ね、此の頃、少し太ったのよ。そら……」

自分の両腿の間へ手を挟み乍ら珠枝がいました。一時やまって



いたのが、また復活して、一緒に入る場合を除いて、浴室での苦しい奉仕は毎日、課されます。今日も、珠枝の足を正座の腿に乗せて、丁寧に洗いました。

「何云ってるんだ。仕事は殆んど私にさせて、自分はブラブラしてるだけじゃないか。太るのは当り前だ……」

と心の中で罵り乍ら、それでも動作は慎重に、きわめて丁寧

湯を掛けて流しました。

「でもね、あの人、太った方が好きだって」

くそっ。勝手にしろ！と胸の中で呶鳴り乍ら、湯舟に入る白い肌の後姿をギリギリする思いで切なく眺めます。

「近頃、お前は益々引緊って来たわね。鞭と窄衣とヤスリで鍛えて貰う御蔭よ。ホホホホ。けど、私、本当に倅せだわ。：お前はどうか？」

「ハ、ハイ。本来ならば、おそろしい監獄で呻吟している身でございますのに、御蔭様で……こうして、奴隷にして頂いて：何と御礼を申上げていいやら……」

「ホホホホ、そうお。そんなに喜んで居てくれれば、私も高いお金を出した甲斐があつてよ。そうそう。監獄で思い出したけど……。お前の居た地獄島の監獄ね、見物したわよ。聞きしに勝るきびしさねえ。皆、よく我慢できると思うわ。私なんか先ず十日ともたないね。自殺してしまうわ」

珠枝は自殺防止剤ノイロンを知らないのかしら？できるものなら私だってとうに自殺しているのに、と思ひました。

「お前ね、私になぶられるのが口惜しかったら、そうお云いよ。いつでも帰して上げるからね。どう？　ホホホホ……」

監獄の苛烈極まる苦役は、思い出さずえゾツとする様です。情けない事乍ら、奴隷として傍において貰うことを、ひたすら哀願する他ありませんでした。

「丁度ね、典獄さんに反抗した女囚が鞭でなぐり殺される所を見たのよ。あまりもの凄かったので途中で顔をそむけちゃったわ。アア、いいお湯だったこと……」

或る日のこと、土曜日のことでしたが、旦那様と落合う約束をしていた珠枝夫人は、私を檻へブチ込んでおいて、いそいそと出掛けました。

「おそくなるかも知れないけど、今晚帰るからね。そら、手を後へ回して！」

所在なさに、後手錠の身をソツと転々反側し乍ら、帰りを待ちました。

「一晩でいいから、いや、一時間でもいい、あの柔かいベッドに寝てみたいなあ……」

そう考えて悲しくなりました。待てども待てども帰りがなく、とうとう夜が明け、ひるも過ぎてしまいました。空腹と渴きもさること乍ら両方の便意が激しく身を苦しめます。忍耐の限度をとうとう超えてしまい、ともかくホツとしました。革褌の気味悪さ！　意地の悪いもので、それから一時間と経たないで、夫人が帰ってきました。悔恨と恐怖に身を震わせて檻を出ます。

「可哀想だったわね。帰るつもりだったんだけど……。さ、済ませてください！」

革褌の後部のダイヤル錠を合わせようとする珠枝夫人の足下に身を投げ出して、赦しを乞いました。

「何だって？　一昼夜とちよつとじゃないの。何とまあ、だらしないんだらうね」

舌打した夫人は、庭の水道の所へ私を追い立て、齒枷と革褌を外しました。

「水を使わずに綺麗におし！」

手を洗い乍ら事もなげにいます。夫人がどうしろといっている

のかは明白です。こぼれない様に革褌を両手で抱いて、涙を流して心から哀願泣訴しましたが、駄目でした。

夫人は遠く離れて面白そうに眺めています。生れて初めての事とて、情けなくて情けなくて胸が張り裂けそうでした。夫人に冷酷に急かされ、ゲーゲー云い乍ら死ぬ想いで自らの物を再び自分の体内へ処理させられました。

「ホホホ、そんなことさせるの嫌だけどさ、たまにはいいだろ。悲しそうな顔してるわね。アア面白かった！オヤ、未だ大分残ってるじゃないの。お前、私に逆らう気？」

絶対の至上命令とは云うものの、私はとうとう号泣して身悶えしました。

「フフフフ、泣いたって駄目々々。私に反抗したら、どうなるか分ってるでしょ」

本当に此の時ばかりは、珠枝が鬼の様に思えました。再び全身をおのかせ乍ら必死の努力で少しずつ咽喉を通し、全部を処理させられました。

「どうだった？今日はそれで何も食べなくていいわね。ホホホホさ、勘弁して上げるから、褌を洗って、口もすすいでいいわ」

○
珠枝に買われてから四年近くの月日が経ち、珠枝は赤ちゃんを生ましました。

入院中は、私は実家の方でこき使われ、なぶりものにされました。お千代の外に、若い女中もいて、此の女中には本当に泣かされました。

唯一の楽しみの食事も、途中で食器を取上げられてしまったり、

口で雑巾掛けをさせられたり。中でも、四つ這いにさせられて市場へ御伴させられた時の口惜しさは忘れられません。

「十一号！長い間、使ってたけどね、此の子が出来たでしょ、だからお前を処分して、まとまったお金を積立てておいてやろうと思ってるの。明日、仲買人が連れに来るわ」

ある日。玉の様な赤ちゃんを抱いた珠枝に言い渡され、薄々は知って居りましたが、少し悲しくなりました。品物同様の身、いつどこへ処分されようと致方ありませんが、新しい境遇に対する不安と、一抹の名残り惜しさに胸を詰まらせました。其夜は、特別のお慈悲で、すべての戒具を外されて檻に入れられ涙を流したのでした。翌日、ひる前に、最後の鞭を貰い、奴隷仲買業者に引き渡されました。

「戒具やなんかも全部つけとくわ。ハイ、これ委任状。手続きお願いしますわよ。これ十一号！まだあと、二十四年間あるのよ。辛いだろうけど、おとなしく勤めなきゃ駄目よ。あ、首環だけ残して下さいな。しまっとくから」

涙を流してお礼をいい、手錠を嵌められるべく、若い婦人の係員に両手を揃えて差出しました。懲戒具等の入った重い袋を背に、トポトポと曳かれて登記を済ませ、嘗て勤めていた会社のある都市の奴隷商の店へ連れて行かれたのでした。

奴隷商店にて

奴隷商店では名実共に品物として取扱われました。在庫品ですから無理ありません。戒具を全部外され、頭を刈られ、シャワーを浴び、前手錠だけ嵌められて、伝票と一緒に処理されて、小さな独

房へ入れられました。二十程の独房には半分程、男女の奴隷が繋がれて買手を待つて居ます。廊下には数人の人々が行き来して品定めしたり、店員の説明を聞いたりしていました。在庫品を傷めない様、房内では前手錠だけで、毎日一回の戸外運動の際は足錠だけ追加され、鞭を当てられたりするのには、よっぽどの時のことでした。見物にくる人々が房の前に立つ度に、全身を調べて貰います。世間は中々好景氣らしく、十日程の間に在庫奴隷は殆ど入れ替わりました。

「いや、奥様。近頃は工場の方からのお求めがもうございましてな。却って女奴隷の方がダブつき気味でして……。若い、丈夫な男奴隷は飛ぶ様ですよ。只今の所、丁度一匹だけお役に立つかと存じているのがございますが、若くて丈夫で、ただ刑期が少し長うございましてな。少々お高いんでございますが……。ホラ、これでございませう」

店員の人と一緒に、あか抜けした和服の婦人が立ち止まり、私は立ち上って身体を見せました。房の入口の上に掲げてある私の経歴を見ます。

「ウン。いいわねえ。けどいくらなの？え、まあ高いわね。もう少ししまけてよ」

いろいろやりとりの末、とうとう此の婦人に買われました。

「お届け致しますようか？」

「いえ、いいわ。連れて帰るわよ」

「ではと、手続き一切、当方で致します。此の委任状に御署名を……」

婦人店員に手早く戒具を施されました。

第一種に似た手錠に、前で嵌め替えられ、同じ様な足錠そして鎖

で結ばれ、鼻環をつけられて婦人に引き渡されます。

「前に居た奴隷のが、そのまま残ってるんだけど……。戒具の寸法替え、サービス出来ない？」

「へへへ……。実費で致させて頂きます。ではと……」

体中の寸法を調べられた後、鼻繩を曳かれて外へ出ました。

曳かれて入った所は大きなバーでした。嘗て屈辱の姿で現場検証に曳き回された辺りに近い、南の盛り場から少し奥へそれた落着いた町の一面です。裏口から入り、巧みに空間を利用して造られた更衣室等の小部屋を通り、店に通ずる通路の床に坐らされました。壁に檻の格子扉が冷く光って居ました。

「君ちゃん！ ちよっとおいで。ええものを買って来たわよ」

二十才にはまだ遠い娘さんがサンダルを引っ掛けて、更衣室の隣の小部屋から出て出ました。

「あんたも長いこと一人でえらかったやろ。ここ暗いなあ、店へ連れて行き！」

ガラスと片付けられた昼のバーの内部。かなりの店でカーブしたカウンター、配置された十数個のボックス、そして小さい乍らもステージ迄ありました。冷い床にひれ伏して、服従を誓い、お慈悲を哀願致しました。私は、もはや此のマダムに買って貰った奴隷の身の上なのです。バーで奴隷勤めとは、と、これからの屈辱の日々を想って悲しくなりましたが、詮方もないこと。正座し、うなだれて手錠の両手を膝におき、マダムのキリリとした白足袋を見乍ら、言葉をかけて貰いました。

「くどう云わんかって、もうよう分ってるやろな？此の君子さんの云うこと、よう聞いて、かげひなたなしによう働かなあかんで。三

月程前に刑期が済んだ前の男は、ほんまにええ奴隷やったで。人間並に扱ってやったら涙流して喜んでたわ……。御近所も詰ってるし、

町中やし、それに女の子が多勢居るとこやさかい、余っ程気心が分る迄は、戒具はきついで……」



そこへ先刻の奴隷商店の店員がやって来ました。

「あ、もう来たの？お君ちゃん、檻の中に、戒具が積んであるやろ。あれ渡して上げてんか」
「奥さん、名前はどのお付けですか？」

「ああ、首環ねえ。そのままでもいいわ。番号だけ打ち替えてね」

「承知しました。ではと、三日ばかりお待ち下さいまし」

「早くしてよ。不便だから。御苦労さん」

「ママさん、その間どうしやるのん？」

「檻へほり込んだくのよ。様子も呑み込めるやろうし……。もうちょっと辛抱してな。じゃ、檻を掃除させておやり」

一米に二米、高さ一米三〇位の檻を手錠のまま掃除し、鉄棒を磨きました。檻の入口は通路

の壁の下の方にあり、入ると右手は更衣室の内部に面して居って、その床は檻の床から六、七十センチ高くなっています。檻の天井の上は、すぐ物入れになって居り、なまめかしい匂いがたちこめ、壁にはきらびやかな衣裳が掛けられて、数個の化粧台や小椅子等もありました。更衣室の床に立って見下ろしている君子に監視されて檻の固い木の床を拭き乍ら、どうして工場に買って貰えなかったんだろうとつくづく情けなく思いました。

「ホラ、これを磨きや」

鉄棒の間から油布と革鞭を投げ込まれました。久し振りの手錠のままの労役は本当に不自由でした。

「済んだかいな。ここへ連れておいで……」

自分が今手入れたばかりの革鞭で、全身を一ダース程打たれ、齒を喰い縛って呻きます。更に君子からも半ダースばかり。

「云つとくのを忘れてたけど……お前の名前はギロって云うんだよ。

分った？ ホホホ。ギロ！ 床をお舐め！ ウフフフ……そうそう……

……。鞭痛かったやろう。忘れんときや。じゃ、戒具が出来て来る迄檻に入つとり……。アラ、鍵、どこへやったかしら……」

後手錠にされて檻へ入れられます。君子にザンダルで尻を蹴り飛ばされ、床の便器の蓋に額を打ちつけた私は、口惜しさに身もだえ致しました。ガチャン、ピーン。施錠の音が冷たく響き、これで完全に此の店の奴隷となりました。

「アラ、とうとう又、買いはったわ」

「あ、ほんと……。若くて、いい体してるやないの」

夕方になって出勤して来た店の婦人達は、賑やかに着替えや化粧等し乍ら、私の品定めをしました。当然、覚悟はしていた事乍ら、

哀れみとさげすみの眼でジロジロ眺められますと、本当に恥ずかしくて恥ずかしくて、穴に入りたくなくなります。

檻の上にある物入れに何か物を出し入れする人が檻の前に立ちますと、自然に下から見上げる恰好になりますので、本当に切なくなりました。シュミーズ姿の若い娘さんが檻の前にしゃがんで見下ろし「名前は何で貰ったの？」

煙草の煙を私の顔に吹きつけました。

「ハ、ハイ……。ギロでございます。何卒お慈悲を……」

「あら、それじゃ前の奴隷と同じね。ギロ二世という訳やな」

三人、四人と寄って来て、いままでのことをいろいろきいては、からかいます。

「へーえ。重罪人じゃないの。それを、あと二十年ばかりで赦して貰えるとは儲けたわねえ。けど、これで又、お店もピカ／＼になるわね。しっかり働くんやで。ママさん、仲々きついわよ」

「あの鞭あとごらんよ。大分やられたのね、縞馬みたい。けどお君ちゃん喜んでるやろな。楽になるよって……」

「奴隷って、ほんまに便利やなあ。どんなにこき使っても口答え一つせえへんし。けど若いのに、眼の毒やな。辛いやろと思うわ。向うむいてたらどうやの？」

「泣いてるやないの。あんまり苛めんといたりいな。可哀想に……。これでも男やで」

婦人達は脂粉の香りをまき散らし乍ら笑いました。やがて聞えて来る賑やかな店の気配、絶え間ない嬌声と音楽。私は床に顔押し当てて忍び泣きました。

酒場の奴隷 (1)

這いつくばって店の残り物をあてがわれ、口で便器の蓋を開け閉めし、女給達にからかわれ辱すかしめられ乍らの三日間を過しました。マダムは二階に住み、君子の室は更衣室の隣りです。店の名は紫園と云い、かなりハイクラスらしく女給達も粒折りでした。二人のバーテンにも、檻の入口の鉄棒越しに挨拶しました。マダムの旦那様も三日目の夜泊まり、お慈悲を哀願しました。

「早く働かせろよ」

「ウン。だけど戒具が未だ出来て来ないのよ。明日、電話して見るわ。ね、早く寝ましようよ。エントロは駄目ねえ。何だか臭いわ。もっといい処理剂ないかしら……」

「便器じゃないよ。臭いのは、此奴の体さ。明日にでもよく洗ってやれよ」

其夜、まっくらな檻の床で横になって、微かな二階の物音を聞いて居ますと、嵌められた後手錠の無念さに歯ぎしりして身をものがくのでした。

翌日、おひる前に、戒具や懲戒具が届けられました。マダムが自分で吟味し乍ら施します。

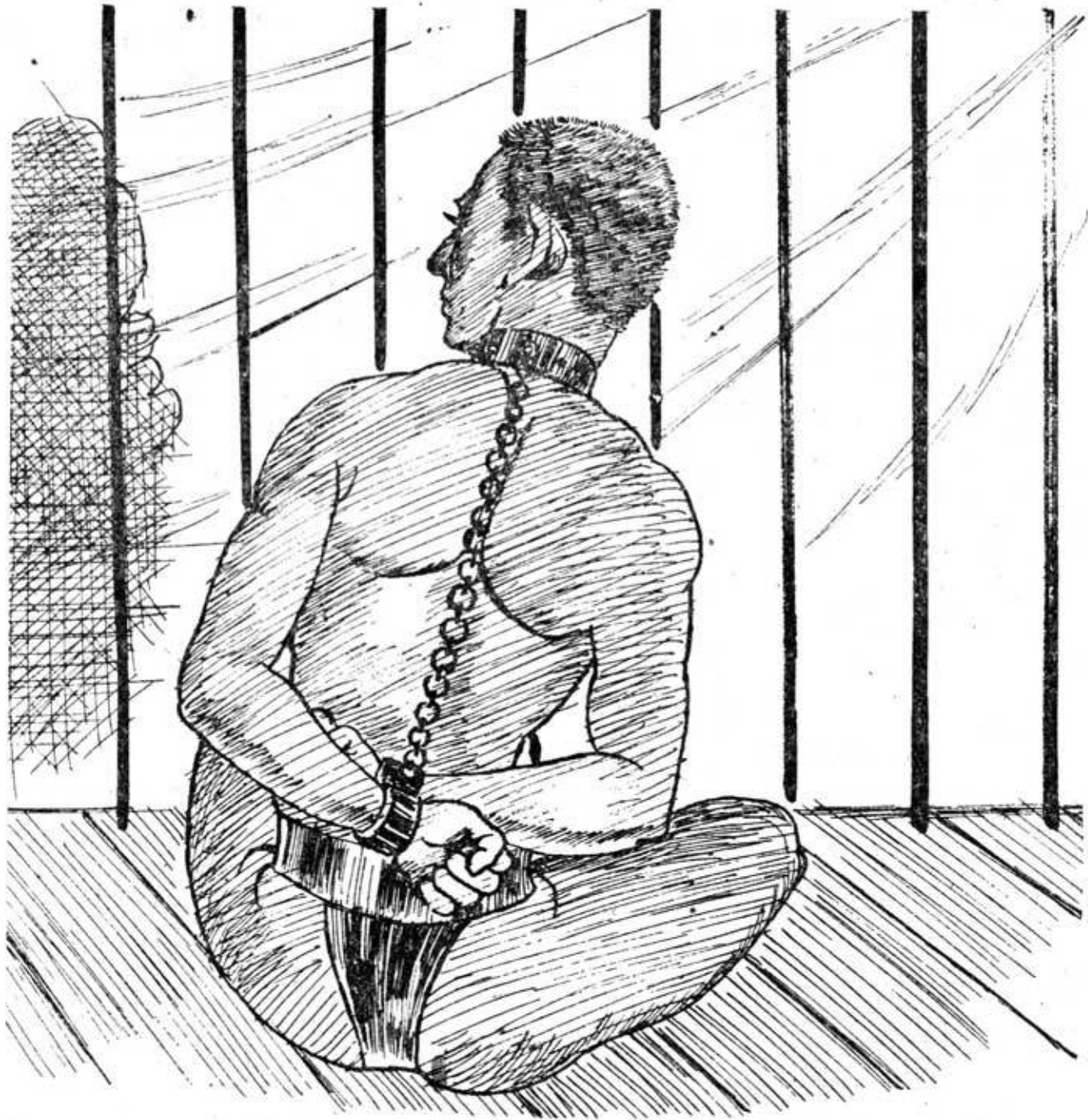
「万一のことがあったら、他人様に申し訳ないものね」

鼻環がつけ替えられ、首にガッシリした鋼鉄の首環が嵌め込まれます。何度目かのこと乍ら、腹の底から屈辱感がこみ上げて来るのをどうしようもありません。齒枷は、前齒三枚程を固定する仕掛のもので、口の中央に突出しています。ビンタをとるのに便利な構造で顎を動かさない点では、珠枝に嵌められて居たものと全く同じ効

果がありました。ズシリとした頑丈な腰枷、そして褌には再び入念に錠を施されます。経験のある男性にしか分らない切なさです。股の付根に食い入る革褌。膝枷は少し変った構造のもので、膝の上下を締める革枷は今迄のと同じですが、左右の膝を繋ぐ鎖は、三十五センチ程の鋼鉄の管の両端から出て居り、その管にダイヤル錠やツミ等があって、鎖が出る長さを調節できる様になっていました。マダムは、鎖を全部、管の内へしまい込んでしまいましたので、私の膝は、管の長さ以上にひろげられませんし、又、それ以下にすぼめる事もできません。今迄の手錠足錠を外され、肘に革枷を嵌められ、腰枷の両側にそれぞれ三十センチ程の鎖で繋がれました。豊かなマダムの前にじっと立って、次々と容赦なく施し嵌められる戒具を甘受して居りますと、当り前の処置を受けているのだとは云え、奴隷の悲哀が身に泌みました。最後に手錠です。労役する時でも手錠かと悲しく思い乍ら両手を差出して、先ず左右別々に鋼鉄の手枷を嵌め込まれました。

ガチン、と身に泌みる嫌な音と共に、鋼鉄の環が手首にピッタリと隙間なく閉まります。第三種手錠と同じ様に、繋ぎ合わせる鎖の挿入孔があり、又固定するための突起もあります。挿入孔の錠はダイヤル式のものでした。長短いろいろある中から、マダムは二十センチ程の鎖を取って私の両手の枷を繋ぎ合わしました。鞭を背に吊り下げられます。

「これでお終い！ 当分そうして働くんですよ。檻の中じゃ勿論、後手よ。ホラ、ごらんよ。まだ他に、重い足錠も、胸鎖や腋鎖もあるんですよ。窄衣も電気鞭も。そっちの手錠は、見たら分るやろ。締まって痛いやつやで。嵌口具も、捕縄もあるし……。何とか云うたらど



う？ 口は利ける様にしてあるんやから」
「お手数をお掛け致しました。戒具ありますがどう存じます。こうして働かせて頂きます。何か…させて下さいまし…」

それから、君子に鞭で追われ乍ら、店の掃除をさせられました。初めての膝枷の不自由さ加減！

肘は動きを拘束され、両手首は二十センチしか離れません。手枷の重さ！締上げられた腰枷は、体を曲げると息苦しい程です。喘ぎ喘ぎ、ガニ股の珍妙な恰好で立働く私の姿を、マダムはカウンターに腰掛けてジュースを飲み乍ら眺めていました

「じゃ、お君さん、ダイアルのコンビネーション、知ってるわね。用便は日に二回でいいわよ。ちよっ！又、水をこぼして…。お舐め。と云っても舐められないのやったわ。横ッ面、なぐっておやりよ」

肩位迄しかない君子の前に立ちすくんで、往復ビンタを食っている私を後に、マダムは集金に出掛けました。更衣室と、君子の部屋の掃除、そして道行く人々に嘲笑され乍ら店の前を洗い磨き、カウンターの中で食器類を磨かされて居りますと、ぼつぼつ店の人が来ました。年若いバーテンにコップの磨き方がなっていないと叱られ、激しくビンタをとられ、手錠の両手を合わせて泣き乍ら赦しを乞いました。自分の檻の中を掃除し、便器を始末して、糞便処理剤を入れ、漸く用便を許されました。檻へ入れられ、鉄棒の外に並べられた女給達の靴やはきものを手入れさせられます。ままならぬ両手で二十人近い人々のはきものの手入れは中々えろうございました。

「あら、手錠外して貰えないの？可哀想に」

「お嬢様。勿体ないお言葉でございます。奴隷の身でござ



檻の鉄棒に額を寄せ、五度六度と靴先で小突かれ踏み付けられ、身もだえしてお詫びしました。グリーンと頭を蹴られて後ろへ倒れます。

「もう一回！ はよ起きいな」

もがいて起き直るや否や、再び蹴倒され冷笑を浴び、五回六回と繰返され、胸が煮える思いですが、絶対服従の身は口答え一つすら出来ず、さんざんなぶられました。

「これ位で赦してやるわ。明日から性根入れてやりや！」

「瞳さん、あんた残酷ねえ。可哀想やないの。ホラ、泣いてるわ。手を後で括られてるのやで。ギロちゃん、辛抱しな。可哀想に！」

「白樺さん、あんた、あかんわ、そんなに甘やかさせちゃ。奴隷やないの。ちよっとも可哀想なことあらへん。これから、ちよいちよいからかって苛めてやるねん」

酒場の奴隷 (2)

其晩も女給達は、あらかた帰ってしまい、二、三人残って帰り支度を急いでいました。

「ギロちゃん、これ上げるわ。サアお喰べよ。齒の枷は嵌めてないんやろ？」

仰ぎ見ますと、白樺さんの優しい顔が逆光線に仄白く見えます。鉄棒の間からチョコレートのかけらが床に投げられました。口で拾って貪り喰べます。

「ママさんや、お君さんには黙っとりや。うちが叱られるからね。そやけど辛いやろなあ。うちらが蒲団の中でねてる間……」

いますから、当り前でございます。ただ、思う様に綺麗にさせて頂けませんのが申訳なくて……」

閉めた店の中をざっと片付け、手枷の鎖を除かれ、顎をしゃくられて自分で後手錠にして腰枷に固定致します。久し振りに自分で施す後手錠に、監獄を思い出しました。檻へ蹴り込まれ、あてがわれた残り物を犬の様にガツつきます。

「ああら、あの恰好ごらんよ。フッフ、恥も外聞もないのね」
帰支度の女給達に嘲笑われました。

「朝迄、手はあのままにしとくのかしら？」

「当り前やないの。寝るのに、手はいらへんわ。あ、ちよっと、君子さん……叱っというてよ。これ、此の靴！ これで磨いたつもりなのかしら。底に土がついてるわ」

「アラほんと。お姐さん、いいからそれで蹴っておやりなさいよ。ギロ！ いつ迄皿を舐めてるねん？ 頭をこっちへ出しいな」

「彼氏に抱かれて、と云わんかいな」

傍らの一人がルーージュを塗り乍ら半畳を入れます。

「楽々とねてるのに、お前はそうして一晩中放つとかれるのやなあ。手錠、せめて前で嵌めてやったらええのに。うちらやったらよう寝られへんわ……」

「白樺さん、心配せんとき。監獄で何年間か、そないして暮したんや、慣れてはるよって……」

「そやそや監獄で思ひ出したけど、ホラ、桂さんね。お店の集金使い込んで捕まった人。今頃どないしてるやろ？」

「確か懲役六年の筈よ。どこかの監獄で呻いてるでしょうよ。裸で括られて……。懲役囚にはね、足首にも重い鎖がつくのよ。胸も鎖で締めつけられて痛められるんやて……」

「アラ。もうずっと前にママのところへ御詫びの手紙が来たそうよ。二級って云うのかしら？ 大分、楽になったって……。奴隷は嫌だから懲役で辛抱するそうよ」

白樺さん達は連れ立って帰りました。

「ギロや、おやすみ。涙流してるやないの。ホホホ……」

二日おき位に、戸外運動を兼ねて、君子に曳かれて買物にお伴します。同じ様な境涯の男女の奴隷達もしばしば見当りますし、諦めては居りますものの、矢張り少しは恥ずかしうございました。殊に町の中で、小娘の様な君子に叱られ鞭を当てられる時は、情けなくて涙がこぼれました。虫の居所によつては、第一種足錠を嵌められ、しかも重い鉄丸をつけられることもあり、そんな時には千切れんばかりの足首の苦痛に、悲しい呻声を洩らし乍ら、膝をひろげたままの恰好で町中を曳かれて行くのでした。

或る夜のことに、私が檻の中で女給達のはき物を手入れしていますと、

「じゃ、預かっときますわ。ゆっくりしてね」

マダムの声が聞え、微かな鎖の音と共に一人の女性が通路に連れ込まれました。通路の物入れの中の、私の戒具の中から何か取出されます。

「手をお出し」

カチャカチャと其の女性の両手に手錠が嵌められた様子です。

「ウツ、冷たいですわ」

「ぜいたくお言いでないよ」

首に鉄鎖が捲き付き錠を掛けられ、檻の入口の向い側の壁に繋がれた女性は三十二、三の女盛り。グレーのドレスを着て、髪も人間並みに整え、化粧さえしていましたが、マダムがスカートをめくつて、膝枷を検査し、

「おとなしくしてな、あかんで……」

と頬に平手打を喰わせて、そのまま立ち去った処から見ると、女奴隷に違いありません。うなだれて、手錠の両手で首の鎖を悲しうにまさぐっています。私に気がついて

「アラ、仲間がいるのね。お互い情けないわねえ」

私は口を利いて、若し君子にでも聞かれたら、と思ひますので黙って仕事を続けました。

「私ね、まだあと八年以上あるのよ。御主人様のお伴をして温泉へ行って来たの。真直に帰ったらいのに……こんなところへ寄るのよ。辛いわ」

奴隷の分際で、温泉行とは。しかも人間並みの恰好をしてと羨ま

懸賞募集

選外	佳作	秀作	優作
本誌三月分進呈	〃	〃	一篇に付
	二千円	五千円	一万円

〈読者原稿〉〈告白と手記と体験〉

☆賞 金☆

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数には制限ありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」とエピソードを書いて下さい。
- 一、締切は別に定めません。入選作は最近号より発表いたします。
- 一、賞金は掲載一カ月後にお送りいたします。

しく思いましたが、彼女には又、彼女なりの悲哀があるのでしよう。
「この近くにね、私が以前勤めてたお店があるのよ。そこへ連れて行かれたらと心配で心配で……」

其夜、女給達の話しているのを聞きますと、彼女は恐れていた通り、昔勤めていた店へ、女奴隷姿で連れて行かれたらうございまして。

「めぐり合わせとは云うものの、ちょっと哀れだったわねえ。どんな気持がしたやろなあ」

「一条さん、あんた見に行ったんやろ。おっちょこちよいやなあ」「ウフフフ、パトカーの音したよって、ひまやったから見に行ったってん。面白かったわ」

「先ず終身懲役ものね。けど阿呆やな、あの女も、奴隷やないの。我慢したらええのになあ」

「一体どないしたんやの？」

「つまりやな。あの女奴隷がね、恥ずかしがって入りやらへんねん。御主人が怒りはって、手錠嵌めて引き摺りこみはったもんやから、すぐ分ってしまうがな。女の子はあらかた替ってしもうてるし、ママさんも知らん振りしてたらしいんやけど、一人だけ古い人が残ってて、それが又、仲の悪かった人やねんて……」

「それで喧嘩になったの？」

「ウウン。からかわれたり、頬ぺたなぐられる位のこととは泣き泣き我慢してたらしいわ。そやけど、その人が図に乗って、しまいに顔に唾吐きかけたんや。それでとうとうカッとなってしもうてグラスを投げつけよってん。もう死物狂いで暴れよったで」

「へーえ。けど、こんなとこへ連れて来るのが、いかんわなあ」

「そやねん。御主人の方も大分、油絞られてたで。後手錠にしとかな、いかんわなあ。なんぼ女でも」

「けど、凄かったわよ。めっちゃくちゃに暴れるのを、婦人警官が三人

がかりで押え付けて、裸にしてさ、三十もなぐったかしら？革鞭で。グツタリして口から泡吹いて死んだ様になってるのよ。それをパトカーへほうり込んで連れてっちゃったわ」
私にはその女奴隷の心持がよく分ります。先程、乱れ毛を手錠の両手でかき上げながら私に話しかけて来た美しい顔を思い浮べて、可哀想で可哀想で堪りませんでした。反面、其の勇気の程に、ほとほと感じ入りました。

(未完)



連載小説

狩 獵 者

(第七回)

佐 度 槐

新 川 工・画

死の浣腸

「オイ、立つんだ！」

杉田に呟鳴られて、尾瀬達郎は、渋々と立ちあがった。

「こっちへこい」

山科が処刑室の扉を開ける。

腕力に自信のない尾瀬ではなかったし、わずかの時間ながら、消耗した体力も回復してきていたが、丸裸に素手では、四人の男を相手して、とうてい勝ちみはない。

だが、もし、そこを処刑室だと知ったら、

たとえかなわぬまでも、尾瀬は、必死の抵抗を試みたに違いなかったろう。

部屋の中央には、木製だが岩乗な、高さ一メートルあまりの台が据えられ、そばの小卓には、三〇CCの浣腸器と、薬液の入った二本のガラス壺がのっている。口の広いその壺は、一つが透明で、もう一つは茶色だった。

尾瀬は、入院中に浣腸の経験があるが、その知識からは、加虐と結びつくものはなにもなかった。

「この上に仰向けになるんだ」

云われるとおりにになったが、台は巾が狭い

うえに長さは膝までしかなかった。

司慎之輔を除いて、あとの三人は忙しく動き、尾瀬の躰は台に固定されていく。

両腕は台の脚に括りつけられ、胸と腹の二カ所にもグルグルとロープが巻きつけられ、自由になるのは脚だけになった。その脚も、別々に足首を括ったロープを思いきり頭のはうへひかれ、見るからに不様な恰好になった。つまり、もっとも浣腸しやすい姿勢をとらされたわけである。

「腸の中をすっかり掃除するんだ。吸収をよくするためにな」

慎之輔の云っているのが聞えたが、尾瀬にその意味が判る筈もなかった。

南は、浣腸器をとると透明な壺からグリセリン液を吸いあげた。もちろん、南は、浣腸器をとり扱うのは、これがはじめてだった。

尾瀬は、病院で浣腸したとき、「力をぬいて」と、なんべんも看護婦に云われたのを思い出した。しかし、不自然な姿勢のせいか、力をぬこうとしてもうまくいかない。

「痛ッ」と尾瀬は顔をしかめた。

「続いて二本分やりな」

尾瀬の眼からは死角になっていたが、声の近さで、慎之輔が南の手許を覗きこんでいるのが判った。

不規則な生活のせいか、尾瀬の排便は必ずしも順調ではなく、かなりの量の便が溜っていたのだろう。搾るような痛みで、下腹が硬直し、冷汗が噴きだし、悪寒のように痙攣が走る。

「親分——」

南のほうがたまりかねて、慎之輔を見た。

「もういいだろう。杉田、便器をやれ」

極限まで抑圧を強いられただけに、解かれると堰をきられた勢いだった。

やっと、腸の蠕動に伴う痛みがおさまって

からも、直腸の灼熱感、なお残像のように消えなかったが、おかまいなく、またしても固い嘴管が襲う。

数回くりかえして、

「よし、そっちはかたづけろ」

そう命じて、慎之輔は、自ら浣腸器をとると、茶色の壺から中の液体を吸いあげた。

「尾瀬さん。なにか云い残すことはないかね？ 得意の絶頂にあるあんたを殺すのは、ちよつとばかりかわいそうだが、俺は自分の意志を曲げることはできない。ホラ、この浣腸器に入っている液体は、恐ろしい毒薬だ。こいつを注入すると、たちまち腸壁から吸収されて、まもなく命を奪うのさ」

恐ろしい死の宣告をうけながら、しかし、尾瀬は、ほとんど反応を示そうとはせず、ただ不快そうな表情でおし黙っていた。

浣腸殺人というプロットは、いかにも荒唐無稽で人をくっているし、ピストルかナイフをつきつけられたのならともかく、浣腸器で威されたのでは、恐怖が実感とはなり難い。まして、尾瀬自身には、慎之輔に殺される理由がまったくないのだ。

尾瀬が本気にしないのを見ると、慎之輔の眼は、いっそう悪魔的になった。

防禦の術のない尾瀬は、兇器と化したガラス筒の近づくのを避けられなかった。

慎之輔は、慎重に少しずつ薬液を押し出しておわると、そのまま尾瀬のようすを注視した。尾瀬の苦悶がはじまるまでに、一分とはかからなかった。

突然、胸内がひっかきまわされるように苦しくなり、呼吸困難におちいったのである。

尾瀬は愕然とし、俄かの軀の変調が、死の前兆であるかどうかを見極めようとするように、カッと眼を剥いた。

腹が痛みだした。やっぱり浣腸薬だったんだと思おうとしたが、腹痛は急激に強まり、堪え難い激痛となった。

「痛い！ うう、うう、痛いよウ、ああ、ああ、うっッ——」

、毒性の効力を確かめた慎之輔は、はじめて浣腸器を手許に引いた。

もし軀を拘束している縄がなかったら、尾瀬は、文字どおり七転八倒しただろう。

「痛い、苦しい、なんとかしてくれ！ うう、う、うッ、苦しい！ 死にそうだア……！」

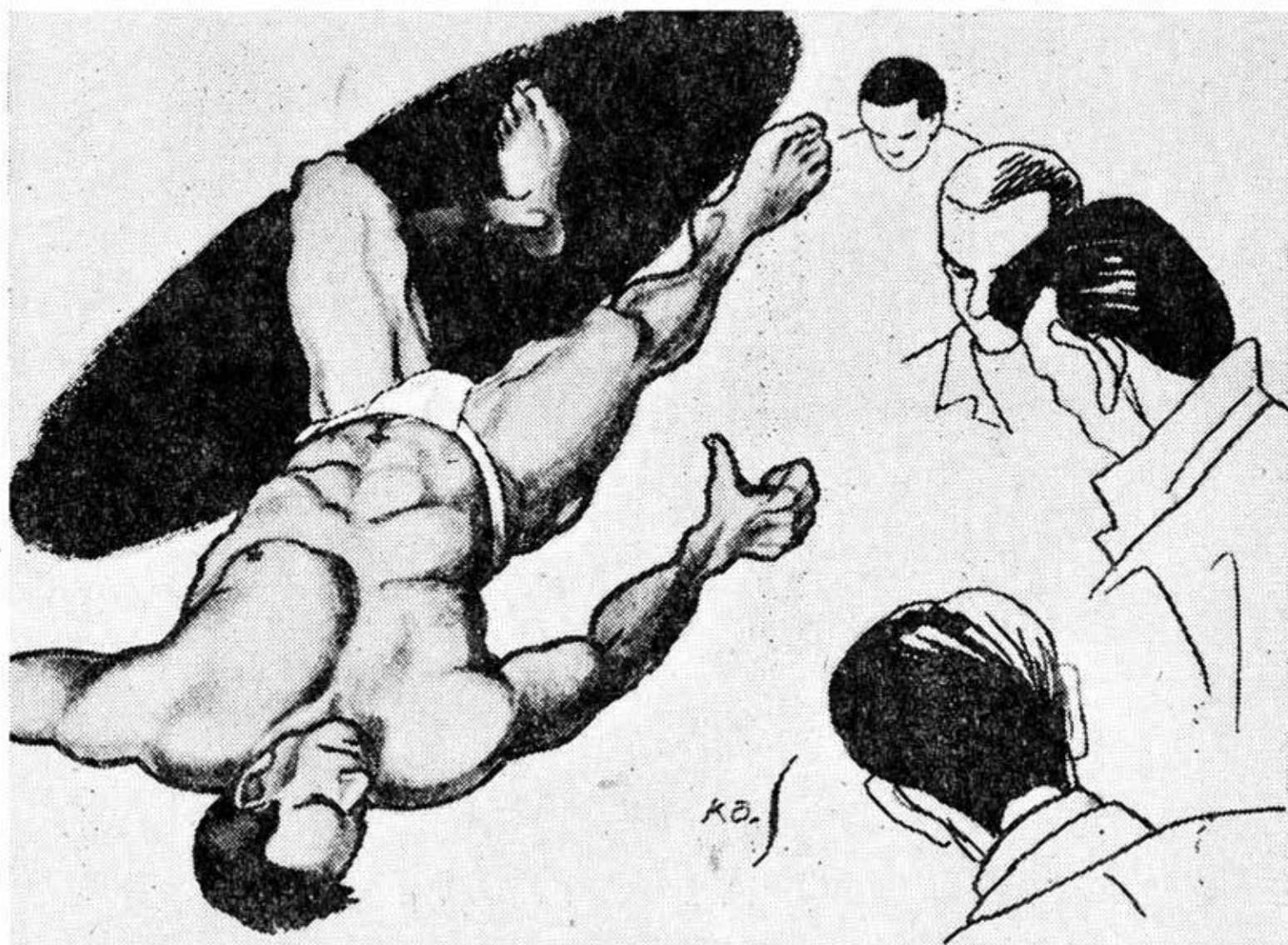
絶叫しながら、黄色い水を吐き、夥しい発汗にまみれた。唾液の分泌が亢進して、嘔吐のあいまにもダラダラとよだれを流し、宙を

睨んだ両眼からも、涙がとめどなく溢れる。

××映画の直営館××劇場は、開館前から、きっぷを買おうとする人々が、長い列をつくっていた。それは、日曜日だったからでもあったが、上映中の映画が、偶々、尾瀬達郎主演のものであったことが、それに拍車をかけていたのも事実である。

入口の横手には、ベニヤ板を切りぬいた三メートル以上もありそうな尾瀬の全身が立っていた。もちろん六尺褌一本で、毒々しいペンキの絵ながら尾瀬の特徴をよくつかんで描いてあり、映画に関心のない通行人にも、その巨大な看板は、イヤでも眼についた。

その看板は、大きすぎるため夜もかたづけられなかったし、二面の壁を背にした内側の三角形の空間は、見とおすことが困難だったから、もし、あの偶発事が起こらなかったなら、まだまだ発見は遅れたかもしれない。



きっぷを買う行列に、二、三人のチンピラじみた青年が無理に割りこみ、列からはみだした少女が、よろけたはずみに、例の看板の横の、わずかな隙間に半分、軀を入れてしまったのだが、とたんに、「キャアッ!」という、とっぴょうしもない悲鳴が迸った。そこにいわせた人々は、いちようにギョッとし、少女のほうを見たが、彼女の顔はまるで血の気がなく、ものも云えぬように唇をわななかせている。

チンピラふうの青年は、はじめ、自分たちが突きとばしたからだと思ったらしいが、すぐに、なにか変事があったのだと覚った。

「なんでえ。どうしたんだよ?」

「ヒ、人が、死んでる!……」

「なんだって、どこに?」

「そ、そこ……」

少女は、片手で顔を覆うと、もう片方の手で看板の後を指さした。

半信半疑で隙間に首をつっこん

だ青年の一人は、俄かに緊張した面持になると「オイ」と仲間に見くばせする。三人がかりで看板をずらせると、グニャリとした感じで、いきなり裸の人間が倒れかかってきた。どよめきが起こり、反射的に跳び退いた人々は、また、ひしめきながら死体に寄り集まる。

「あッ、尾瀬達郎じゃねえか？」

誰かの叫びに騒ぎは一層大きくなった。

当局は、関係者の証言で、死体を尾瀬達郎だと確認すると、直ちに解剖にふした。その結果、毒物が検出され、有機燐化合物による中毒死と断定された。

捜査会議の席上、速水錬太郎部長刑事は、ついに意を決して、確証も確信もないことを前おきしてから、やくざの木島、中学教師の高津、運転手の沢本、そして、今度の尾瀬を含め、四件の殺人の酷似性と共通点をあげ、連続殺人事件として、捜査を根本的にやりなおすべきではないかと、意見を具申した。

それには異議をとねえる者もあり、反論もしたが、結局、一面捜査でいくことに決まり、迷宮入りの汚名を挽回すべく、捜査陣は一段と強化された。

第五の獲物

二月には珍らしい小春日和に、デパートの屋上は、家族連れで賑わっている。

「ああ、暑い。なんてえ気違い陽気だ——」

山科は、上衣を脱って風を入れながら、大股に売店へ近よったが、

「なんだ、ジュースばかりか」

と不機嫌な表情になった。

「レモネードもございますか——」

売子は、にこやかに云う。

「おなじようなもんだな。まあ、いいや、そいつをもらおう」

壘を驚嘆みにして、フト振りかえった山科は、一緒にいる筈の司慎之輔が見えないので、慌ててあたりを見まわした。

慎之輔は、すぐに見つかった。彼は、十円硬貨を入れて覗くしかけの望遠鏡に、背中を丸くしてしがみついていたのである。

(子供じゃあるまいし……) 山科は、ゆっくりと慎之輔のほうへ歩いていくと、

「なにが見えるんです？ 裸の女、イヤ、男でも見えるんですかね」

からかうように声をかけたが、やっとレンズから眼を離れた慎之輔は、

「山さん、見つけたよ！」

と、低いが意気どんだ調子で云った。

「獲物ですか？」

かわって山科がレンズを覗くと、ありふれたビル建築の工事場が見えた。いくつもの黄色いヘルメットが、陽に反射して鮮かだ。

「ホラ、一人だけ、上半身裸になっている奴がいるだろう」

慎之輔の云う男を探すのに苦労はいらなかった。季節はずれの暖かさとはいっても、裸になるほどの気温ではない。おそらくは、威勢のいいところを示すために、上半身を露出しているのだろう。まだ陽に灼けていない皮膚は、ほどよい浅黒さでつやつやと輝き、ガッチリした骨組みの逞しい躰つきだった。ヘルメットの下には、よく光りそうな大きい眼があり、なにか唳鳴っている貌には、粗暴を誇りとしている男の剽悍さがうかがわれる。

「なるほど、岩乗そうな男ですナ。早速、調査しましょう」

「イヤ、調査はぬきにしよう」

「ホホウ、また、ずいぶんと惚れこんだモンですナ」

「それもあるが、今日中に捕えんとな。明日はまた寒くなるかもしれん」

「て云うと？」

気温がどう関係するのかと、山科は、ちょ

つと首をかしげた。

「とにかく、これからいつてみよう」

「善は、いや悪は急げですか。お伴を……」

「いや、独りでいい。自動車は俺が乗るから、あんたは先に帰っていてくれ」

土建会社、大崎組の小頭、稲葉祐吉は、

「おい、なにをモタモタしてやがんだ！ い
い若えもんが、骨身を惜しんじゃ、お天道さ
まに笑われるぜ」

と、適当に呶鳴りつけては、人夫の尻を叩く。彼の呶声は、耳をつんざく騒音の中でも不思議によくとおりの、荒くれ男どもをヒヤリとさせるのだ。だが、稲葉は、ただ威張りちらして人夫を督励しているだけという類の人間ではない。危険や困難の伴う仕事には、率先してそれに当り、しかも、胸のすくような技倆をみせるのだった。

稲葉が合図の片手をあげる、そんななにげない動作にも、彼の筋肉の部分々は、キビキビと小気味よく躍動する。

慎之輔は何枚かのスケッチをとりながら胸が疼いた。

稲葉が、慎之輔の存在に気づいたとき、すかさず相手の視線を捕捉した。へだてのない

笑顔で、最初の言葉をかけたのである。

「いい駄をしていきますね。無断で描かせてもらいましたよ」

「絵描きさんかね？」

二十七才の若い小頭は、少してれて、無邪気に嬉しそうな表情をみせた。絵には興味をもったことはないが、自分の駄が画家の関心をひいたのを知ると、くすぐったいような気持で、慎之輔の抱えている赤い表紙のスケッチ・ブックを眺めた。

「どうだろう、モデルになってももらえないかね？ 礼はじゅうぶんにするつもりだし、仕事にさしつかえないよう夜一時間ぐらいでいいんだが」

「モデルか。俺にできるかな——」

「難かしいことじゃない。ただ裸になつてくれればいいんだ」

「やっぱり裸になるのか」

「そう。嫌かね？」

「嫌じゃねえですよ。裸になるくらいおやすいことだ」

「よし、じゃ、決まった。仕事のおわる頃、迎えにくるよ。これは謝礼の半金だ。とってきたまえ」

慎之輔は、千円紙幣を一枚、稲葉に握らせ

ると、ひとまず工事をたち去った。

はじめて画家のアトリエへ入った稲葉祐吉はキョロキョロした。雑然と見馴れぬものが並んでいる中で、未完成の百号のキャンバスが一際、眼をひいた。四人の裸男が、死んでいるような恰好で描いてある。

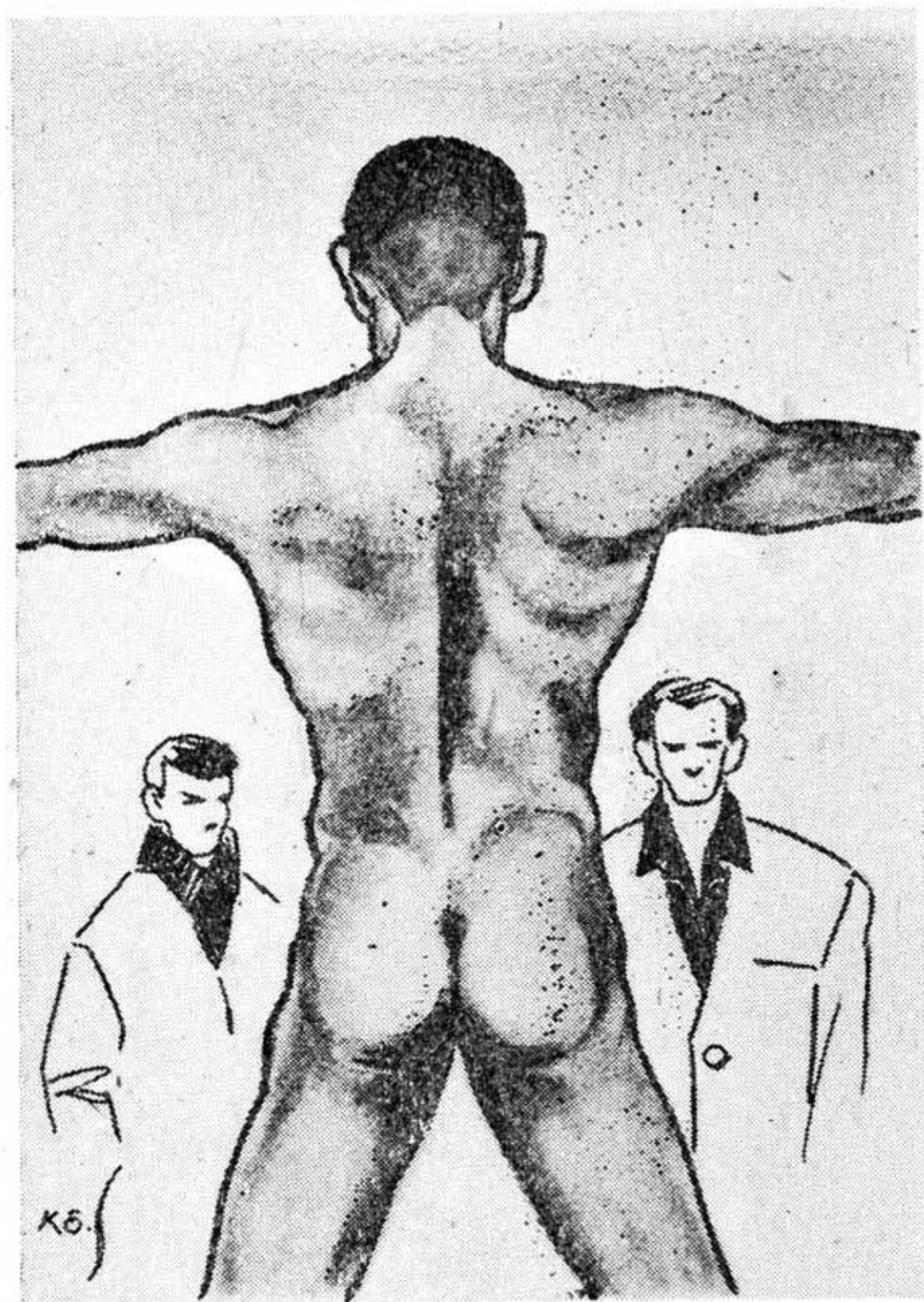
(ヘンな絵だな)

と思ったが、やがてそこに、もう一人の人物が描きこまれる予定だとは知らないから、きわめて上機嫌だった。自家用車はもっているし、大きなアトリエはあるし、年は若いが入品からしても、偉い絵描きに違いないと、独り合点で決めていた。それに一時間、裸になるだけで、二千円という報酬は悪くない。

アトリエに待たされてから、まだ十分も経っていないが、そろそろ退屈になった。彼は、手あたり次第にスケッチ・ブックを開いてみた。どれも男の裸体ばかりで、女は一枚もない。つまらなくなつてスケッチ・ブックを投げだしたところへ、やっと慎之輔が入ってきた。

「ヤア、待たせたナ。すぐにはじめよう。裸になつてくれ」

慎之輔は、ガス・ストーブに点火すると、



服を脱ぎはじめ稲葉を見つめた。

「身に着けたものは全部、脱ってくれよ。モデルは素ッ裸でなくちゃいけないんだ」「そうかね」

既にジーパンも脱いで、越中褌一つになっていた稲葉は、風呂へ入るときの気軽さで、いわれる通りになった。

天稟の筋肉質は反復される労働で仕上げをかけられ、見事な男の裸像を完成している。

慎之輔は、やや固くなつて突っ立っている稲葉の囲りをゆっくりと歩きながら、なお仔細に軀を点検していたが、その瞬間に、彼の運命は決定していたも同然だった。

いつもなら、山科の綿密な調査によるから、

当りはずれはまずなかった。しかし、今度だけは例外だった。せつかく捕獲した獲物だが、

生きたまま放してやる場合も考えられたのだ。慎之輔は肉体のどんな小さな部分でも、もし気に入らぬ箇所があれば、被虐者としての価値を認めなかったのである。

「よし。君の運命は決まったよ」

ニッコリすると、慎之輔は、上衣の内ポケットから、小型の拳銃をとりだした。

「お、おどかすなよ。本物か？ ソレ……」

慎之輔がなにをしようとしているかは判らないながら、黒く光る小さな凶器を、稲葉は薄気味悪そうに見た。

「本物だとも。こうして引き金をひけば、たちどころに君の命はなくなる」

「じよ、冗談はよしてくれ！」

「恐かったら、俺にさからわんことだ」

「さからうもんか。このとおり、素ッ裸にもなったんじゃないか。このうえ、どうしろというんだ？」

「とにかく、俺の命ずるとおりにすりゃいいんだ」

「判ったよ。なんでもする。だから、そのぶっようなシロモノをしまってくれ」

「フフ、そうはいかんよ。君は腕力が強そう

だからな」

針

短い時間に稲葉はずいぶん汗をかいたらしい。腋窩に手をやってみると、冷たいものが指に粘りついた。

(金になるんだ。しょうがねえや)

と、心で呟いたが、彼はもともと、自嘲するような神経はもっていない。まして、済んだことをクヨクヨするのは、彼の性にあわなかった。それでも、毒気をぬかれたように、なんとなく冴えない顔色をしていた。

芸術家にはとかく変人が多いということは聞いているから、おどろくにはあたらないと思いつながら、慎之輔にいだきはじめた畏怖の念は消すことができなかった。平然と慎之輔がたばこをだすと、稲葉は、越中禪をとって着けようとした。

「まだ、まだ。君の役目は終わっちゃアないよ」

そう云われて、稲葉は、まだ慎之輔がなにも描いていなかったのを思いだした。彼は、おとなしく、禪をまた下においたが、慎之輔は、たばこを啜えりと、あいかわらず拳銃をもてあそんでいる。

「描くんなら、早くしてもらえねえかね」

慎之輔は、ニヤリとして扉を開けると、

「でろ」

と顎をしゃくった。

「ここで描くのと違うンか？」

「いいから、でるんだ」

「でも、このままじゃア……」

「俺の家だぞ。かまわん」

廊下にでると、今度は「歩け」だ。後からくる慎之輔は、拳銃を擬したままだった。

稲葉は、だんだん、わけが判らなくなってきた。しかし、本気にしろ、冗談にしろ、飛道具で威されていたのでは、なりゆきにまかせるよりしかたがない。

とうとう地下室にきた。

そこに予期せぬ三人の人物を見た稲葉は、さすがに己の裸身を意識したが、男ばかりだったので、いささかホッとした。

第一拷問室には、スチール・パイプを組立てた「鉄棒」のような枠が立っていた。ただ「鉄棒」よりは巾が狭く、それは、標準体格の成人男子が、両腕を水平にあげて、手首が左右の支柱へとどく長さに設計されている。

「こっちへこい！」

杉田と南が、いきなり稲葉の腕をとった。

その威嚇的な態度に、稲葉は一瞬、気色ばんだが、慎之輔の拳銃が抵抗を封じた。

稲葉は、大の字の姿勢に、スチール・パイプの枠へ、手首と足首とで固定された。

どう見ても、一種の磔だが、軀の背面も完全に露呈している点が、いわゆる梟木による磔とは趣を異にしている。

「おい！ 俺をこんなにして、どうしようてンだ？ 俺はモデルをひきうけただけだぜ」
いくら度胸のいい男でも、軀の自由を奪われては不安にもなる。まったく、これでは、なにされようと相手の思うままだ。アトリエでの、慎之輔の豹変ぶりを考えあわせてみても、稲葉には気にかかることだった。

拳銃を内ポケットにおさめた慎之輔は、稲葉を、あらためて観賞するように眺めた。
「にいさん。もうこうなったら、男らしく覚悟するんだナ」

「覚悟？ なんの覚悟だ」

稲葉の太い眉がピクリと動く。

「もう逃げられないことをさ。それから、拷問に堪えること。もう一つ、殺されることをだ」

「なんだと？ 俺が、なぜ、そんな目に遭わなければアならねえんだ」

「わけが知りたいか？」

「あたりめえよ。わけもなく痛められたり殺^ばらされたりしてたまるもんか！」

「それなら、おしえてやろう。つまり、おまえが俺の気に入ったからさ」

「……！」

「ハハ、判らないとみえるな。だが、もっと詳しく説明したところで、しよせんおまえには通じないだろうよ」

慎之輔は冷たく笑い、山科に向かって、

「オイ、準備はできてるな？」と云った。

「ええ、いま、南がとりに——」

山科が答えおわらぬうちに、南は、小さなボール箱を持ってもどってきた。蓋をとると、中には畳針がギッチリと詰まっている。

「見たか、にいさん。この太い針は、全部で五百本ある。こいつを、一本一本、おまえの軀に刺していくんだが、なアに、注射だと思やアなんでもねえさ」

慎之輔は、一本摘まみ上げた針を、稲葉の鼻先に持っていくと、意地悪そうにチラチラさせる。

「よしてくれ！俺は、注射は大嫌いなんだ。それに、何本も針を刺すなんて、とんでもねえよ」

土建会社の小頭ほどの男が、たかが針ぐらゐにビクビクするのは情けないが、稲葉みたいなタイプの人間にままあるように、彼は、注射が大の苦手だった。しかも、五百本の針を軀中に刺されると聞いては、稲葉でなくとも寒気がするのは当然だろう。

「お願いだ！。なあ、勘弁してくれ。助けてくれよう」

ベソをかかんばかりに哀願するのにはかまわず、山科たちはそれぞれに数本の針を握ると、稲葉をとりまいた。

「痛ッ！」

稲葉は大げさに顔をしかめる。

痛みは瞬間だけだったし、激痛というのではない。しかし、前といわず後といわず、軀のあちこちに次々と刺されると、しまいには軀中を疼痛が這いまわる感じで、がまんがしきれなくなる。

刺されるたびに、ピクピクと筋肉を顫わせ「ムッ！」と咽喉の奥で泳いでいた稲葉も、ついにたまりかねて、

「やめてくれエ。やめてくれよう。もう、がまんできねえ」

と、ふたたび喚きだした。

三人のうちに、一番熱心に針を刺している

のは、やはり南だった。彼は、ただ突き立てるだけではなく、皮膚を摘みあげて、プツリと刺しとおした。貫通する場合は痛みも倍になり、稲葉は脂汗を滲ませた。

箱の中の針が次第にへるにつれて、稲葉の軀は針鼠のようになっていく。

三人で手分けしても、五百本の針を刺すには、そうとう時間がかかる。稲葉の苦痛は、まだまだ続くとみなければならなかった。

心臓部だけを除いて、針は頸や顔面にまで突き立てられた。四肢や背面は、比較的堪えやすかったが、前面となると痛みはともかくとしても、ひどくこたえる。稲葉も思わず絶叫した。

やがて、稲葉の軀には、五百本の針が残らず突き刺された。

針を刺すときの痛みが瞬間で消えるのは、一本か、せいぜい数本の場合だ。五百本の針を刺されたままの軀は、全身が熱をもち、ズキズキと疼き続ける。

稲葉が喘ぐごとに、針の林もそよぎ、銀色にキラキラと光って、酷たらしくも妖美な光景を展開した。

(以下次号)



曾って私が住んでいた町内に通称蛸壺と呼
ばれ、雪や雨降りだと絶対に駄目だが天気さ
えよければきまって姿を現わし甲殻を干すと

いう、いささか世間さまの生活に疲れて序で
に人生を世渡りしている(としか思われない)
一つの群落があった。

にせよ今や遠くなりけりの明治の生れであ
ることには間違いないから、一事が万事、国
粹者らしく、何んでも壮年の折、海底に沈ん

その何世帯かの中に元老株みたい
に奉られ、身なりこそ薄汚ないが天
性頗る明朗であり、しかも何処かで
性別のポイントを間違えたものか、
終生、赤べんべの女装に身をやつし
て平然たる、磯貝平六と名乗る老夫
婦者がいた。

金があるのか無いのか、年がら年
中、二人揃って派手に？ 外出する
のを見かけたことがない代りに、い
ったん、この巷に先ず異例の豪華な
自動車でお迎えでもあろうものなら
一カ月でも二カ月でも家(と云って
も軒が傾いた粗末な平屋に過ぎない
が)を鍵一つかけるでもなく明けて、
留守番に猫が一匹と云う徹底した職
人？ 気質振りを発揮……巷に伝わ
る噂さ通りだとすると、さしずめ鑿
一丁でどうかする彫もの師か、姿
顔に似合わず器用に寝布団に絵を描
いているらしいと云われているが、
真偽の処は今以て判らない。いずれ

だ幕末の船の紋章を調べにもぐった時、たま
たま海女でありしよな——の今の女房と懇
になったという伝説がある程、夫婦仲は頗る
円満のようだ。

ただ、ほんの二、三度の交際でしばらく足
が杜絶しているうちに、区画整理とやらですつ
かり跡かたも無く蛸壺が片付けられ、敬愛す
る平六夫婦の行方がそれっきり判らなくなっ
たのは惜しいが、頑固な性分にも憎くめない
人氣があったこと故、何処かで新らしく設営
の上、相も交らず蛸壺を掃除していることだ
ろう。

「ホ、ホウ……見なさるかネ。余っ程、物好
きな御仁とお見受けするが、いって見れば世
スネ者の馬鹿遊びごとでさア。元も筋もねえ、
まア何んとか夫婦揃ってのお慰み物……
聴けば神奈川の方面にも、あつし見たいな馬
鹿ン者（女装のことらしい）がひとりいなさ
るそうだが、男が嫌ンなって荒海の中で白く
滑っつい昆布を探しとるうちに女になつて了
った……いや、そればかりじゃない、旅順攻
撃の折、二〇三高地で虫ケラのように戦死し
た同僚の姿が余りにもみじめで、これが全部
女であつたら死に際もさぞかし美しかったで
あろうと思うと、矢も楯も堪らなく女物を着

たつていうさまでさア。お蔭でまだ一度も神
経痛を患つたことがねえ。——世間様が何ん
といおうと、磯の女貝は心からの女気違いじ
やないつもりですがネ……」

「女装は別に日本国憲法で禁じている訳で
もありませんから自由でしょうが、外にまだ
理由がお有りじゃないですか？ 例えば肘鉄
砲を喰わせた女性に逆襲するためとか……」

「……などと設問する新聞記者かたぎが嫌い
だから喋りたくねえンでがすよ。まア、年寄
りには年寄りの自由度を認めて頂くことです
な。腕に覚えがあるとは、びた一文もいわね
えが、生れつき頭の芯が狂つとると見えて、
人の裏をかくのが好きでネ、寺小屋（小学校
の意味だろう）で竜の絵ばかり描いとった。
雑貨屋へ奉公中、正月風にな々と竜を書いた
らよく売れて、褒美に一錢五厘、貰ったこと
がある。吉原……（と云って女房の顔をちょ
いと見る）へ行つて女郎の白い縮緬の腰巻に
一寸八分の観音様のお姿を描いたら、居続を
三日間、許され、大いに面目を施したのはい
が、帰えり途、土手八丁の笹藪で、襷を破き
危ふく金を落とす処だった。それから云う
ものは金も貯らないがケチのついた襷を廃業
して湯巻一本、もっとも鎮台（昔の軍隊のこ

とらしい）で虱に苦勞して襷が嫌やになった
のも原因だね」

「と申されちゃ、衛生学上、男物に見切りを
つけたということになりますが、何も肌着に
限らず長い女の袂の着物では不便だし、名所
名物蛸壺の絵画館長として自他共に忙しい
のに、ひよんなはずみで癩癩でも起りませ
んか？」

「起す前に沈静剤として絵の一つも描くね
え。絵ばかりじゃねえ、瓦のかけらから時代
物の布っぱしに至るまでのガラクタ物をいじ
くり廻わすのが生れつき好きで、欄間を彫る
ばかりが能じゃねえンで……左様、そのコレ
クシヨンという奴でさア。ただね、さつきも
云った通り、人一倍、偏屈な性分だから、風
変りな物でないと、朝から糧が咽に入えらね
え」

「じゃ一つ、色々とお蒐めになって居られる
でしょうが、氣楽に糧が咽喉に入るような物
を拝観出来ませんか。この間は淀君の湯文字
に触らせて頂いて大いに反響を呼びましたけ
ど……」

「あれは、わしの家内が海女の時、嵌めとつ
た腰巻なんじゃよ。塩風で風化すると何んとも
云われぬ味合いを持つからのう。アハッハ

ッハッ……それは兎も角、今日は……そのメモ帳に何んと書かれましたな。『絵画館探訪』……とは、また恐悦至極。土台、絵画じゃありませんぞ。奇怪ヶ島から無理強いして蒐めたような怪画ばかりで、観る人が見たら阿呆かいな……と云われる邪画ばっかしを丹念にファイル（この間、何処かの大学の先生が訪てこないな外国語を教えて呉れましたっけ）したまでで、毒にも薬にもならん処が取り得でしょうネ。まア、そんなつもりで御要望とやらの入場無料の美術館から見て頂きますかな。——その前に一ことお断りして置きたいことはあなたにはそれ相当の理由があつてわしの方へ理窟を云われても、一切御用下げと願いたいです。要するに、何んと云うか、こう開き直ってキザな問答をやつて悦に入っているのが大嫌いな性分だね。繰り返すよ、うだが理窟なんぞ無え処が生命だ位は知つておいて貰いたいです……おっと、頭を縮めてくぐつて下さいよ。壁をぶち貫いて作った偉大なる蔵物館ですからネ……ぶつかった方が損ですぞ」

「……成程、御苦心の跡が見えるようですね。くぐり戸を境目にあちらが作業室でこちらが展覧部屋という処ですネ」

「写真は止めなさいよ。どうせ元が出鱈目なンだから、あなたが頭の中へ蔵（しま）つて置けばそれでいいんだよ。そして何かの時に憶い出して復元すれば、手を拍（たた）かないうちに天井の竜が鳴いて来る……もっとも本物の日光の鳴竜は、せん頃、焼けて了つたがね。冗談は扱（あ）て置いて……と、これは、つまり『強（い）られた黒田節（ぶし）』って奴で御覧の通り……」

「縛られてますネ。何んとまアお可哀（あは）れそうに、一体どうしたんです？ 荒縄で後手に縛り上げられた女性は見た処まだ若いじゃありませんか」

「これには別段深くはないが、少々訳があつてネ。確か大正三年青島（チンタウ）が陥落したお祝いに米倉を改造した俄（にわか）か舞台で、名もゆかりのお米さんが踊つた……のがこの黒田節。もっともその折の衣裳は、こんな近代模様じゃなくて黒紋付に、おきまりの緋縮緬の長襦袢を着て（昔は女の長襦袢と云えば赤にきまつていた。湯文字もそうじゃったけど……）ひと際、美しかった。この君（きみ）とわしが、さる厩屋（うまや）で恋をして末は夫婦と誓つたのを横から焼いたのが分限者だった醸造元の小伴で、またその父（ちち）っあんがいけなかった。独逸軍の青島がどうなろうと敵は本能寺に在り、嫌がるお米さん

を散々口説き落として手許におびき寄せ、皆んなの前で踊らせたのはよいが、半分は心の中責めてやろうって思案していたンだから始末に負えないじゃないか。とうとう何かのはずみで大勢、見物衆の居ると真ん中で踊り衣裳を着たお米坊を荒縄まで持ち出して後手に縛りあげ、その上、先祖代々と云う商売道具の大盃まで動員して地酒をなみなみと盛り『よーシッ、よく舞い居った。褒美に酒をとらせるぞ。ぎゅッと一氣に呑めッ』なんて殿様氣取りの施主はそれでよからうが、まるで海の水でも呑まされるようなお米坊の方は堪らない……。そうだろうて。これは夢でも何んでもない。本当に腹一杯処か溺れた蛙見たいに呑まされるンだから。第一、帯や紐で締めつけられた踊衣裳の女の身体に取っちゃ正に地獄でさア。ひでいことしやがる……って口惜しがつても厩屋と御殿とは月とスッポンでどうにもならなかった。泣いたねえ、ぼろぼろ泣いたよ。米倉の柱の蔭で今に覚てろって腕をさすつたが、舞台の方を見ると『さアもう一息、ぐっと……干すンだ。両膝（ひざ）をうんとふん張つて……飲みとる程に飲むならば、これぞまことの黒田武士、じゃない、およねっばうだッ……さア、あと一升だ。もう一寸

の辛抱だよ。春の弥生のあけぼのに、およねっぼうの膝のあたりを見わたせば、紅燃ゆる山桜、麓の里こそ恋しけれ……：そうだ、その意気でなくっちゃいけねえって……」

「一寸、言葉をさし挟むようですが、そのお米さんとやらいふフィアンセは、もともと踊りが出来たンですね」

「出来るから港屋の大旦那が遮二無二に横恋慕したって訳よ。理窟もへチマもない、ただもう、お米坊をわしにとられたことがえらく癪に触わったンだから。柱の蔭で、えい、それならいいだろう。まさか人目のある中で咽をしめるようなことは無えだろうナンて半分、高を食って注目していると、八分通り呑んだ跡始末を更に催促して、つ

まり残酒の整理なんだが如何に踊の素養があるにせよ、もうこうなっちゃ、からきし駄目だネ。酩酊をとっくの昔に通り越している。



その証拠に、ふん張った両膝頭に震いが来て着物の裾が浪を打って次第に広がって行くんだ。もういけねえな、今だって昔だって同ン

じだあネ。踊る時、臍が見えねいように行燈ばき（前の開かない裾除けのことらしい）を締めているそばからじかに女の赤いメリンス

の腰巻が見え出して来た……好きな男の前ならいいが……いや、よくねえ。第一、淫でいけねえんだ。あっしは今でもそうなんだが無精者の癖に肌着だけは洗いざらしの新らしい奴でないとか気が済まねえたちでね。処がそのファイアンセとか云う米っぺいの赤いメリンスで一っぺんに百年の恋が覚めた」

「しかし折角探し求めてデートしたファイアンセの君じゃありませんか」

「一言に云って不潔。だから、あの額に入ってる絵は米の一人娘で二代目って訳さ。母親にあやかっただけのようなポーズを取って貰った奴を似顔描きが描いたのを貰ったまで……」

「急に話が結論になっちゃって、よく呑みこめないんですが、米さんの下着に失恋してどうしたんですか？」

「結局、わしの眼、つまり視力がよすぎるから赤いメリンスの汚れ具合から、これはいかに、由緒あって女郎の湯文字を貰うなら話は判るが、厩屋の恋なら余計、馬糞臭くなるだろう。馬なら我慢するが我慢出来ないのが人間さなのだ。妙なもんだネ、あれ程、切齒扼腕した筈のお米坊を抱くのが急に嫌やになって、遠目の桜としやれた……正に対岸の火事が鎮火した態たらくだネ。それっきり女と逢

わねえうちに隣村さ嫁っこに行っちゃったが、女の子を産むと風邪が元で死んだのが、もうかれこれ四十年前と云うから、額入りの娘はひょっとすると係に当るかも知れない。お粗末な昔話しさ……」

「色々伺っていると世紀の『老いらくの恋』をなさったようでもあり、また一面、産婦人科の先生がどうしても心から恋が出来ない（場合が多い）のと同じように、普通なら逆上するであろう処の（平気な人もいるが）女の下着が却って仇となって、折角の黒田節を見送ったという結末になりそうですが、ただ一つ俯に落ちないことは、満場の中でわざわざ荒縄まで持ち出してお米さんを、しかも後手に縛ったという、いや縛らざるを得なかった根拠といえますか、そのあたりの説明がボケて態よく見逃されていような感じがするんですが……」

「まあ、一口にいつて見れば港屋のダンツクが少々おかしいんだネ。あとで聴いた話なんだけど、大旦那の嫁いびりは当時、相当有名であつたらしく、お米坊を諦めた件に來た別の嫁っ子を伴が出掛けた留守居の頃を見計らかつてはしっこく追いかけて廻わしたという……いや、広い屋敷内を追いかけて廻わして

いるうちはまだ罪にならないが、その内に八方塞りの納戸に飛び込む……もう駄目だネ。早目に所用が終つて伴の金吉が帰つて来る。例によつて父あんと嫁が居ない。それなら多分ここだろうと閉め切つた納戸の戸をこじあけてみると……別段、伴の領域は犯してはいない至つて品行方正な親爺なんだが、赤い長襦袢一枚にされた嫁が古びた梁から吊るされてる。島田の鬚も乱れ、猿轡を咬まされたまま麻縄で肉がくびれるように後手に縛られ宙吊りに下つた女の身体を白足袋の処を握つては右廻りにしたり左廻りにしたりして廻わしているんだネ。ただこんな女の姿をじっと眺めているのが無上の楽しみだったらしい。

だから、お米坊をあんな風にしたのも、つまりは面白ろ半分で、手頃な梁でもあつたら多分、吊り下げてやろう位は思ったかも知れない。処がこの大旦那が亡くなると妙なもので、嫁さんの方が忽ちげっそりしちまつたもんだから、伴が親爺見たいなことをやり始めた……。終いには漁師町だから家の裏はすぐ海になつてゐるが、その海に嫁っ子を湯文字一枚にして漬け、潮水でベトベトするのをお馴染の梁に吊るして白昼、堂々と折檻するようになった。またこれをやらないと今度は嫁

さんの方で納得しない……この辺の模様を、おせっかいにも絵にしたのがこれなんだ（後日、機会を見て御披露申し上げます）

「仲々粋の効く連続物語ですネ。淡水よりは塩水、パンティよりは曲線美丸出しの湯文字、柱に縛られるよりは吊るしの絶対絶命振り……恐れ入りましたね」

「と云うような訳で異説『黒田節』は一先ず終りを告げたんだが、何事に依らず女体を（男体でもかまわぬが）より一層、訓練するには、口先きや身振りだけでは駄目だね。外人が日本に来て、何が一番魅力的だと訊くと、きものを着た女の、しとやかさだという。その女の身体を逆さまにすると、しとやかな女のきもの……となるが、それじゃ実物を御覧に入れましょうで、ずらりと着飾った芸妓を呼び出し、

へ尾張名古屋は城でもつ、ハイッ……

とばかり気合諸共、逆立ちにして見せる。

裾が乱れず一本立ちになるには丸一年以上かかるといわれるが、熟練すると片方の足の上へ膳を乗せ片方の足の指先でお酌をするそう。まさかそれ程でなくとも、両足の上へ宴会に必要な色々な物に乗っけてお座敷の中を歩き廻る位は平っちゃらだそうで、客の方が

寧ろ汗びっしょり……は殊の外、外人には大喝采だと云うことだ」

「……となるには月月火水木金金という意気込みで練習しなければならぬ。角の甘辛屋のアン蜜は美味いだの、石焼芋のおさつは、さぞかしうまかろうなと考えながら逆立ちしてると、諸に着物が捲かれて赤いお腰しが出て了う。程よくチラツカセ見せるものと云われている長襦袢でさえも本興行には一切禁物なのだ。だから……あら、御免なさい。失礼、ドタン……を繰り返しているうちに、それでは両手を縛りましょう。腕でなくて肩で支えて御覧なさい。身体を中心は顔で、頬っぺたで加減するんですよ……と心なき師匠の手で後手に縛られ、それでも倒れて裾が捲くれるなら、止むを得ません、紐で固定して置きましょうでな訳で、見習いの芸妓の卵は先輩の逆立ち姿を横眼で見ながら長時間の折檻に遭うという。多分、嘘であって欲しい情景を描かしたのが……つまり、これですネ」

「あんたの方が話はうまいや。腕さえ立ちや、わしと代ってもいい位。正にその通り……。強て云うならば、なるべく目立たないきものを着ることだろうて」

「上から下まで白地綸子縮緬ずくめで固めれ

ば上品な白のさちほが出来上ります。処で画題はどうなります？ まさか芸者のお逆立ちじゃエロが先き立って下品になり兼ねないし……」

「『オリンピックに備えて』が正解だね。お座敷だってトラックと何等変りはないし、何も走り廻るばかりが選手でもあるまいし、チャンピオンが襖をあけてへハイ、今晚は……って挨拶したって悪くはない筈。何あーに、オリンピックまでにはまだ大分、日数があらあなア。心配することは無え……」

「仲々お上手な英語入りで恐れ入りました。額縁も怪しいまでに凝っていて、正に怪画館を表徴するかの如し。物好きもここまで来ると正しく気狂同然……」

「何か云いましたかね。理窟は一切いいことなしですよ。理由があっても無くても縛ろうと云うのには、おとなしく縛られていれればいいのです。その典型的なのが、この八百屋のお七ですよ。御覧なさい、この無条件降伏振りを……」と指差した白無垢の馬上姿？ の娘が有名な火あぶりのお七だそうだが、塗りの冴えない水彩絵具だと見えて肝心なポーズそのものがボケているのは惜しい。もっとも本篇に挿入したそれらしき挿絵は筆者がカメ



ラで盗写するのを禁められた苦しまぎれに再
現した模写物であるだけに、少々主観的なも
のが入った点はお許しを得たい。ただ面白い
ことに、このお七の絵の横に多分モデルが着

たと思われる衣裳の一式が繫けてあった。ま
さか、お七がこんな姿で曳き廻わされたか
どうかは別としても、これ、この通り……だ
ったと云われと、成る程、それは可哀そうな

ことをしたなア……と異常な心理が働く（ン
だそうだ）。現に平六先生の細君の話による
と月のうち一っぺん位は、このお七の衣裳を
着せられて、六畳の間を歩き廻ると云う。

「……で、その火あぶりお七にな
った気分は如何です？ 拝見する
処、相当苔の立ったお七姐御のよ
うですが……年期の入ったという
意味ですよ」

「お浜（細君の名）が演れば、ま
あまあの処だが、わしはからきし
駄目だね。十六のお七と六十……
いや、年はいいいつこ無しだ」

「処で……、この八百屋のお七な
ンですが、表札によるとどうやら
執行猶予のようで、ぼさッ——と
坐っているのも恰好がつかないの
でこうした……という処ですか」

「場処は日本橋でも伝馬町でもか
まわぬ。要は人目の多い処であれ
ばよい。これは始めから理窟じゃ
ないよ。有史以前、前代未聞の女
の火焙りを執行しようとしたが、
刑場が準備不足で早い話が、お七
を縛りつける桧の柱が注文先の木

曾の山中から届かない。その上、火を放って焚やす薪や粗朶の類が長雨に祟られて生乾きだと云う始末。まあ、そんな物は微々たるものかも知れんが、非人の連中に伝染病が蔓延してお七に最期の止めの役を果す乳房焼きの専門非人がまだ定まらない。非人でさえあれば誰だっていいじゃないかとけしかけても現に眼の前に燃えている女の胸を頃合の処を見てハダけるなんて熟練工でなければ第一、手元が狂ってろう。十円玉一つで正面の鬼に向って癪癪玉を投げ飛ばすのとは訳が違ふんだ。その他、埋める穴だの、検死の場所だの焼かれる前には是非、絵草紙に残こして置きたいと云う浮世絵師共の控え部屋もなくちゃ困るし伝馬町から鈴ヶ森まで生理的な要求も無視しては可哀いそうだから、お七専用の厠所も必要だろう……と云う風に世紀の火焙りを前にして今や鈴ヶ森の大刑場は上を下への大騒動（……だと想うんだネ）。——一方、お七の方から見れば、大江戸八百八町の皆さんが全員、鈴ヶ森に見物旁ら来て下さる訳にも行くまいし、そうなれば一人でも多く生前のわたしの顔を見て頂き度い。その次に案んずるのは生れて乗ったこともない裸馬に乘せられて落ちずに上手に曳き廻わされるか知ら。覚悟

の上とは云え、罪人風に厳しく後手に縛られたら途端に気を失なわないか知ら。放火の罪を犯したのだから両手を縛られるのは仕方がないにしても高い馬の背に跨って名物のカラッ風でも吹いたらどうしよう……と云った、誠に純真な如何にも女らしい危懼の念にかられている。若し、そうだとすれば一刻も早くお七の願いを聴いてやるべきであるという奉行所の温いお慈悲と取計らいで急拠、お七を晒らす場処が作られ、裸馬の代りに木製の三角馬が出現、活き仏として一飯一碗の水が供えられるうちに日の出刻から日暮れ時まで木馬に跨って衆目に晒らしたのであった……と云う」

「何事もトレーニングですな。昔の娘さんは我慢強かった。前以てこれだけの試練に耐えたればこそ本番の鈴ヶ森が壮観であった訳がうなずけますネ。異説鈴ヶ森お七火焙り余聞と云うことにもなりますか」

「この執行猶予という処が味噌だよ。この絵の題名はまだつけては居らんが……お浜、この間これがいいと云ったのは何んだつけ、

へお仕置を待ち焦れる悲恋のお七
少し長いなあ、そうじゃなくて

へ早く火焙りにして頂戴……には間違いは

ないが余りにも現代語に近いから

へ三日間の命、か、あと三日、……としたのかい？いずれにせよ、可哀いような女ではないか」

「……処で、妙なお訊ねで失礼になるかも知れませんが、雨上りに御主人さま（平六居士）がこのお七の扮装をして陽たほっこをしてみたら、どう云うことになりますか知ら。また、そこへ幸か不幸かお迎えの車が来る。阪東三津五郎丈のような気持ちになつて早々と左棲を取られますかどうか、どうでしょう？」

「駕籠で迎えに来る江戸時代なら、少々骨ばつて気の毒だが当然表へ出るだろうよ。鈴ヶ森へ行けといわれれば、行ったかも知れないネ」

「色々、どうも有難う御座いました。黒田節といい、女の逆立といい、またあと三日のお七の姿といい、その外まだ沢山お有りでしょうが、偶然、縛られた女ばかりで、この分だと布団の絵も、さぞかし髪をふり乱した……、これは冗談ですが、まるで故人になった何んとか云う画伯の絵を見るようで、この上、更に虫が喰った折檻用の青竹だの、播州皿屋敷のお菊を吊ったつるべの縄の切れ端しだの、雪姫がはいたという半端の白足袋、

さては浦里が雪の上に転ころがって汚した湯文字と云った掘出し物が拝見出来ると……」

「正気で仰言るなら精薄児にでもならなけりや駄目だネ。教養が邪魔をすると折角、裸になつて浅草エンゴを歩こうとしても歩けねえのと同じだアね。もうこれからの世の中てえものは、縛られた女は珍らしくなくなる。縛りたかつたら縛ればよろしいンであつて、時たま活動マク（と仰言る。勿論、映画のこと）を見に行つても、好きで飛び込んだ職業だから營業的に縛られているとしか思えぬ女役者（スターの意味であらう）ばかりだから面白くも何んともない。もう大分、久しく活動や芝居なンてものは見ないがネ……」

「と、すると一カ月も家を明けられるのは何か外そとでその事実、面白い事でもなさつて居るのですか、お二人揃つて……」

「別に無いねえ。先頃は漁業会社の社長の御注文で等身大、総絵で柳橋菩薩……といつちや何んのことか判るまいが、御最眞ひいきの綺麗どこをモデルにして魚に縁えんのある女舟を彫つたんだが、鯛とか比目魚とか鮑あわびと云つた海の幸さきを舟になぞらえた女の身体に巻きつけるのに苦労したねえ。しかし、そこは魚屋の総元締だけに、本当の奴をビニールで包み女の身

体を適当に太い縄でぐるりと巻いてそれに挟んだ。何しろ女の両手は使えねえようになつているのだから縛られたも同然だ」

「また、話の芽が出たようですが、何の呪まじないですか？ そんな妙な物を作らせるなんて……」
「判らねえな。春になるからつて梅や桜が一挙に咲いちゃ、まずいんだネ。大いに漁とれて罐詰め用にはければ会社がもうかるんだらうから、一種のお守り位に考えたんだらう。あとで聴いたら、その女は2号さんだった。道理で社長が、おいッその帯も取れよと云つたら長襦袢一枚になつて、いとも簡単に縛られるんだネ。どうもこの節は女の方も至極ドライだから少々味気無いねえ。この分で行くと今に白昼堂々と囚人見たいな女が続々歩くようになるかも知れねえ」

「まさか一挙に月世界に旅行するようにはならないでしょうが……、色々今日は、古びた中にも楽しみ在り、温古知新とでも云うのでしようか、お訪ねしたただけの甲斐がありました。どうかこの上ともに御長命の程を。そして、アブ界（飛んで来て刺す嫌な蛇のことではありません）の為に、助言サセツシヨウを賜らんことを切にお頼みして置きます。兎角、物事調子がよいと誰でもアグラをかきたくなります

し、不勉強にもなりましようから気を付けなければなりません。よくよく考えて見れば、縛る縛らぬなんて事はどぶ水の中でブツブツ湧いているメタングスみたいなもので、臭いのを我慢すれば結構、火力が効いて煮たきが出来る……とすると男一匹、長命したかつたら惚れた女の一人でもジックリ縛ることですか」

「まアそう云うことになるだらうな。そして何んでも好きなことをやつたらいいじゃないか。大いにやるべし、甲殻こうかくを干して命いのちの洗濯を行うべしだよ。お湯の中でも花が咲くと云うではないか。これに懲りずにまたいらっしやい、今度は布団ふとん芸術でも御覧に入れるかな。御最眞筋の鏡の間も、もう直き竣工しゅくこうというから……アハッハッハッ……いや失礼しました」

因みに本怪画館に蔵有の未紹介の逸品について、いづれ改めて他の機会にご披露、親しく同好の士（若しあれば……）の御批判を仰ぎたいと思っている。



貴君が今、奇クをはじめ貴重な文献や写真や絵画やその他コレクションを持っていてとします。貴君が独り者で、アパート生活でもしているなら全く問題はありません。又家族生活をしていても、他の人達が全部理解ある人達ならばこれ又問題ありません。ところが皆が皆こうした恵まれた環境にあるとは限らないでしょう。すると秘かにこれを持っていないなくてはならなくなるわけです。その場合、どうしたら一番良いでしょう。

先ず、机の抽込に入れて鍵をかけておくというのが誰でも考える一番手っ取り早い方法でしょう。

谷崎潤一郎の『鍵』によると、この夫婦は互いに秘密の日記をつけ合いながら、これを手文庫に入れて鍵をかけておいたといいますが尤も鍵の主人公は時々わざとこの

鍵を置き忘れて奥さんに自然に読ませるよう仕向けたと言いますがそれは兎も角として抽込に入れておくことは一番簡単な方法です。然し鍵をかけておくことは、既にそこに秘密が存在することを示すことになって、他人の好奇心をそるわけです。

秘密や大事なものは、存在することに気付かれないことが第一で抽込に鍵をかけておく位では秘密の存在を示すばかりか、相手が本気になって盗み見るつもりなら不可能でなく、スチール製の金庫ならばこじ開けることは難しいにしても、これでは秘密の存在を益

々知らせるといふ結果になり、第一普通の家庭では一寸大ゲサでしょう。

では次に、天井裏に置くことはどうでしょうか。何処の家でも押入れの何処かに、天井へ上れるように天井板が釘付けにしてない場所、いわゆるあらため口がある筈です。ここから上って天井裏に置くことも一法でありましょう。然し絶対安全確実というわけにはゆきません。その他、押入れの隅に置くとか、抽出しの裏や机の奥に細工して入れるとか、いろいろ工夫はあるとしても、結局大同小異ということになりそうです。

そこで、こんな方法はいかがですか、少し本格的になりますが、もし大都会にいる方なら、倉庫会社にトランク・ルームというのがあって衣類とか書画骨とうその他何んでも預ってくれる制度があるので、これを利用するわけです。トランク、行李、茶箱、長持その他なんでも好みの容器に入れ封印をして預ってもらうのです。これ

だと絶対に人に見られることもないし可成り大量でも保管してもらえます。但し、何時も手許に置いて楽しむというわけには行きませんが……

次にもう少し手軽にするには貸金庫というのがあります。これも倉庫会社や銀行がやっている筈です。但し、これはトランク・ルームと違って容積は余り大きくないから大して入りません。

それから、もっと手軽にやろうと思えば大きな駅などにあるロッカー・ルームというのを利用することですが、これは一日当りの保管料が高つくので長期保管には適しません。他に世間周知の駅の一時預けというのもありますが、これも文字通り一時預けなので問題になりません。

私は右に挙げた方法の外に、もつと手軽で良い方法はないものかと考えますが、まだ思い当りません。現在のロッカー・ルームをもつと長期保管も引受けるようにし（半年か一年単位）料金を安くすれば案外受けるのではないでしょう。か。皆さんはどうしておられるのか、よいお知恵があったら、是非とも御教示いただきたく存じます。

秘密の楽しみとその守り方

小林 清雄

狸と姫君 左次朗

姫君の御輿

裸の女のみこしだ、ワッシヨイ、ワッシヨイ



告白 凌辱と云う名の電車

中島満子 文と画

サディステ
イックな主人
に仕えており
ます、私の生
活の一面をお
知らせしたい
と思います。
次々と変った
趣向で私の肉
体を責める主
人の傾向が、
近頃では徐々
に私の内面的
なものに向け
られていくよ
うです、精神
的な凌辱を衆
人環視の中で
加えて、私が
煩悶する様子
を観察しようと云う新たな
悦びを見出し
たようであり
ます。

今日も私は屋前の閑散な電車の
中で人々の視線を一身に集めて、
辱ずかしさに消え入りたいばかり
の気持でおののいた経験を持って
おります。

と申しますのは薄茶色のスーツ
のタイトスカートの短い裾からネ
ル地の桃色のお腰がこぼれている
からです。このように坐席に腰掛
けた場合、ピッタリと太腿に貼り
ついたタイトスカートの一層短く
引張られて、反対に露出した私の
丸い膝小僧に、まといついたお腰
が不様に顔をのぞかせて隠しよう
がないのです。脚はストッキング
なしの素足でハイヒールを穿いて
おります。どんなに慾目に見て貰
ってもピンク色のスリッパがはみ
出しているとは思って戴けないで
しょう。このお腰がスリッパであ
って呉れたならと、心のうちでど
れほど思うことでしょう。手持不
沙汰な男性は勿論のこと、何かに
読みふけているような人まで私の
顔と膝の辺りにじろりと一瞥を

呉れます。
(洋装に腰巻か。時代錯誤も甚だし
い女だな。それにしても、もう少
し何とか隠せないものかなあ。セ
ンスの無さと無教養が丸出しだ)
人々の眼がそのように云って私
を嘲っているように見受けられま
す。好色そうに、奇異な眼つきを
絡ませてくる若者もいます。女性
の眼は私を完全に軽蔑しきってお
ります。

主人はと云えば、向いの座席に
坐って、その人達と同じように、
他人のような顔をしてチラリチラ
リと私の方に視線を投げかけてい
るのです。無関心な表情をしてい
ますが、どうせ(帰宅したら、ど
んな恰好に縛ってやろうか)など
と考えているのでしょう。

このような姿で、じっと俯向い
て顔を赫らめながら凌辱に耐えて
いる私の苦しみをおわかりになっ
て戴けるでしょうか。

下着にスリッパは許されず、肌
の一部のように喰い入っている小

お馬の稽古

ハイシー、ドオドオ、お馬のけいこ

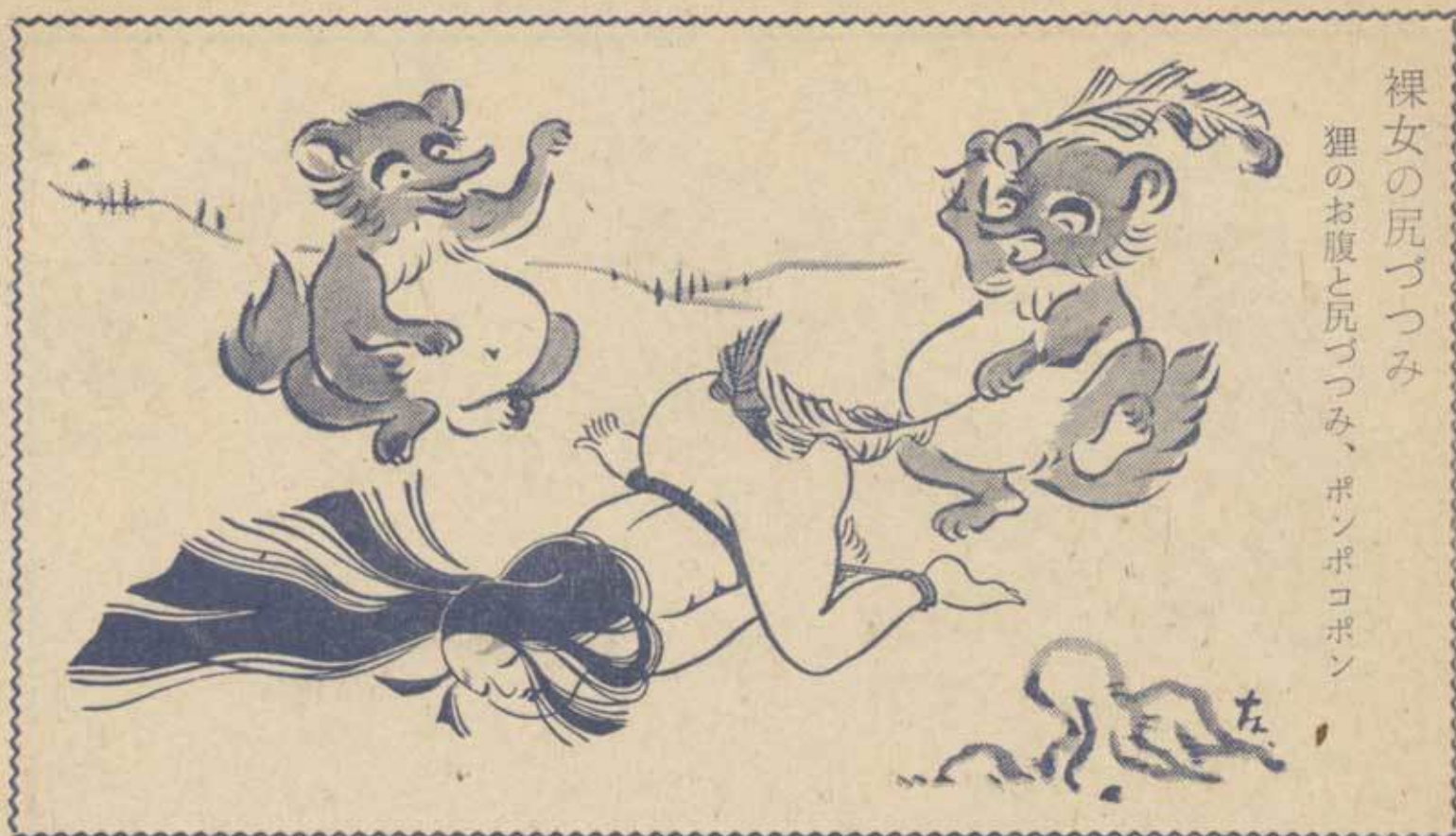


さなショート
パンティの上
からしめたお
腰を、タイト
スカート裾
から故意に二
三糞ばかり、
のぞかせるの
が、絶対的な
主人の云い付
けなのです。
立っている
時はまだしも
腰掛けた場合
には、お腰の
裾の合わせ目
が丸出しとな
って、桃色の
なかに鮮やか
に浮き出して
いる水色の線
までが私自身
の眼の中には
つきりと飛び
込んでくるの
です。

洋装にお腰
という不調和
なスタイルを
私に強制して
加虐する主人の意地悪な着想をど
れほど怨めしく思っているか、ど
うかお察し下さいませ。
女は主人の命令には、それがど
んな命令であっても少しも文句を
いわずに聞くのがあたりまえだと
思っている主人のことですから、
私などは人間とは思っていないよ
うです。言葉の通じる動物だぐら
いにしか考えていないのではない
でしょうか。私は今まで、縛られ
たりムチで叩かれたり、それはそ
れは、ひどい仕打ちをされてきま
したが、でも、それはそれで、主



人には何事も絶対服従を誓ってい
る私のことですから、辛抱できな
いこともなかったのですが、今日
という今日は、本当に穴へでも入
りたい程の恥ずかしい思いをいた
しました。
しかし私は、次に主人はどんな
ことを命令するだろうと、空恐ろ
しいながら、ほのかな期待を抱い
ているのですから、私って不思議
な心理の持主ですわ。この不思議
な気持を主人は見透して、わざと
人間扱いをしないのかもしれないま
せん。



裸女の尻つつみ

狸のお腹と尻つつみ、ポンポコポン

『女装切腹』願望

望月玄太



立腹切腹大娘

私は貴誌を愛読して、いよいよ考えを新たにしている。次のアイデアはどうだろうか。いや、アイディアだけでなく、実際にできるものならやってみたい。これは三十八才にな

る中年男の単なる空想であろうか。
一、女形について
女形というのは、お芝居などに出てくるあの女形役者をいうものでもなく、又世にいう「オカマ」を言うのでもない。しかし乍ら帰するところは或は同じかもしれないが、それは性転換を意味するものではない。即ち原形（身体）に多少の医学的技術を加えて女形になることである。勿論私は三児を持つレッキとした男性である。性

転換をしたいとは思ったことはいが、今いう女形には常々なってみたいと空想している。

それは先ず身体の輪郭を女形にし、乳房は女性の三分の一程度の大きさとする。或は胸を豊かにして男性のシンボルは普通の二分の一に小さくする。勿論男性としての機能はそのままとして。体毛は女性と同じように脱毛（電気などによって）する。

腰部、四肢その他身体全体（頭部及び顔面を除く）は整形手術或は注射等により女形とし、できれば肌色も白くし全身の皺もなくしたい。

二、女装について

元来は男性であるが、前項により女形となり、そして女装するには心から女になる気持がほしい。そして又その女装は単に上着が、その服装になるというものでなく女形とはなったが、これが仮りに外面に現われない部分であってもその服装に適するように身体を整えることである。

頭は勿論「カツラ」によるが、

△あとがき▽鳥獣戯画をまねて人獣戯画とでも申しましょうか、日頃人間にいじめられている獣にかわって画面で人間に仇討ちというわけです。

遊び疲れて高いびきグーグー



これは二、三種ぐらい欲しい。又化粧品も全身用を含めて一通り備えたいし、女物の下着、衣類などは、はき物を含めて和洋各一通り備えたい。又この外、装身具の一通りも欲しいと思っている。

斯くして同好の女性二、三人と共に女装して温泉などに行ってみたいと思う。私はそれらの女性と共に自分も真の女性として行動してみたい。

三、女装切腹について

私の女形女装論は女装切腹で結論が出る。

いや、それが最終目的かもしれない。

貴誌の女性切腹に対する各諸嬢の告白を読んで私も数回やってみた。皆川さんや古くは不破さん程度までにはならないまでも、現在の私の腹部には縦に横に数本のその跡ができています。しかし、男性そのままの姿での切腹は物足りない故に女形になるか、或は女装してやってみよう。

その方法は三つ位考えている。

1、一人個室で裸で行うのである。時刻は夜の十一時から午前一時頃。場所は人里はなれた山小屋を欲するが、諸道具運搬の不便がある故適当な家屋の一室、そしていつかの不破和子さんの告白記にあった様に、三面鏡ぐらい備えてければ三方鏡のある部屋が欲しいものだ。

備えつけ道具は、その他に腹切刀をのせる三方、香炉、花（なるべく沢山）腹切刀（これは必ずしも短刀とはいわない。少くとも剃刀程度の切れ味のもの）もちろん床は畳であるが、その上に流血時を考えて白ビニールを敷く。

それから、もう一つ準備したいものは、座布団、枕及び睡眠薬である。

ある。これに私は完全なる一切の女装を整えて臨むという心算である。そして鏡に写った女（？）がその着物を脱ぎ、全裸（イヤリング、ネックレス等はつける。又ブラジャー位はつけても良い）になる。先ず睡眠薬を服用した後、香をたき、鏡を見乍ら切腹を行うという段取りになる。

切り終えたなら流血はそのままにして、座したまま膝の前に枕を置いて、それに打ち臥し、ぬいておいた着物を背からかけて、電灯を消したまま眠るというやり方である。

2、1の方法と殆ど同じであるが女装のまま着衣でやるのである。

3、切腹に至る要領は1に似ているが、マゾ的切腹愛好者の女性と着衣のまま向い合い、前を開いてお互いに相手の腹を切る方法。私はこの三つの女装切腹を是非実行してみたいと思う。考えただけでも胸がわくわくする程素晴らしいアイデアである。

四、最後の私の願望としては、皆川さんや桐原さん、不破さん等の切腹愛好者や切腹実験者と会う機会をつくって頂きたい。即ちこれらの人達との座談会などを貴社の主催でやってもらいたい。



—編集部選—

玉稿落穂拾遺抄

まえがき

いろいろな事情で誌上で掲載できない原稿の中でも、原稿用紙で半枚か一枚くらい、素晴らしい責場面を描いたり或はアブシーンを展開させたりしたものがああります。

これから、それらの中で、これだと思つたものを抜き書きして紹介してゆきましょう。つとめて短くとも独立して読むに耐えうるものを選んでゆく考えですが、要約

ではなくて抜き書きです故、説明不十分の箇所もあるうかと思ひますが、その点お含みおき下さい。

○ 誘拐妻 (愛頼苦真素女)

けれども、もつと恐ろしい事が待ち受けていたのです。

「こっちへ来い！」

頭の毛をつかまれ無理矢理、黒光りのする革の台につれてゆかれうつぶせに寝かされました。

「誰か来て——エッ」

何回この言葉を叫んだでしょう。無意味だとわかっていながら怖さのあまり叫ばずには居られなかったのです。先ず両手をひろげられ鎖につながれ、両足ももうこれ以上やると股が裂けるかと思う程、思いきり開かれ、これも又鎖で止められてしまいました。

八編集部註▽これから以後、無理矢理浣腸されるシーンが長々と続きます。浣腸マニヤには刺戟的な場面の展開ですが、誌上掲載は憚られます。八ミリの撮影、奇妙な鉄の帯などの使用される場面があらって、第二章の「水責」へと受けつがれるのです。

——「寒い」そう感じた時、ザア——と音がして冷たいものが全身を

走りしました。「ウ——」目をあけて最初に飛び込んだのは真白のタイルでした。

「どうして、こんなところに居るのだろう」

そう思って更にあたりを見回すと、毛むくじゃらの二本の足が立つているのです。「誰だろう」見上げると、ああッ、あの男が立っていたのです。私はすべてを思い出しました。

「いくじなし奴、さあ立てッ」

耳をつかみ、それを上へひっぱるのです。「アアッ」痛さをのがれるため、無意識の中に立ち上っていました。

床には先程まで私を責めぬいたあの鉄帯、皮紐、猿ぐつわがころがっていました。この責具の為に私はこの男と結婚、いいえ、奴隷として一生働かされねばならなくなつたのです。

○ 妖婦お秀の方 (荒森充助)

「秀之進、その女の両手を延ばして結わえておけ」

中央に棒を当て左右力一杯ひろげさせ、ぐるぐる巻きにされた充江はハリツケ柱のように、秀之進幾三郎の二人に棒の両端を肩にの

せて宙吊りにされた。

「う——む」

腋の下の痛みで充江は思わず声を出す。額からは一面に脂汗の玉が浮いている。

「お殿様、私には夫となる者が決まっております」どうぞお許しを。

「それで、余の命に背いたと申すのか？」

「ハイ、そのお方のために……」

「余とその男とどちらが大切か」

「私には私には……」

「余の言付けがきけぬと申すか」

「ハイ私には定つた夫が……」

「充江、その男が、それ程恋しいのか」

「ハイ」

「こやつ、言わせておけば、にくき言葉。よし、それではその男に二度と会えぬようにしてやる」

傍の鞭をとると、乳房めがけてピシリ、ピシリ、と打ちおろす。

「アッ、お殿様、お宥しを……」

「今度はこちらか」

尻をめがけてピシリ、ピシリ。

「あ——ア、ヒイ、ヒイ」

鞭を逃れようと足を空に蹴る。

ピシリ、ピシリ。

背、乳房、尻、にと鞭はとぶ。

白い肌はみるみるうちにミミズ腹れとなり、赤紫色になってゆく。

「これでもか、これでもか」
「ヒイー、ヒイー、ヒイー」

大きな乳房をぶるぶるとふるわせ、足をばたばたとばたつかす。腹は苦しさに浪打ち、額、背中、胸一杯に玉の様な汗を流し、目は血走り口は大きく開かれ、ハアハアと喘ぐ。

「充江、殿の御言葉きけますか」
「お許し下さい。お方様、私には二世を誓った人がおります」
「こやつが！」

忠之公の手にした鞭は充江の二つの乳房の間をめぐって飛ぶ。充江の眉はつり上り、下唇をきゅつと噛みしめて、苦痛をこらえる。

「秀、その手燭をよこせ」
お秀の方より忠之公に手燭の渡るのを見た充江は、次に来る恐ろしい責めに気も狂わんばかりに暴れ出した。

はかない抵抗、身体の重味とものがく程喰い込む縄に、髪は乱れてざんばらとなった。左右に伸びた腋の下に手燭を近づけた。

プーンとおう異臭、
「アゝゝ、ヒー、ヒー」
この世とも思えぬ悲鳴――。

鼻と紐と私 (中村良子)

「ねえ、そんなこと勘忍して下さい。本当に、もう……」

「わいは変つとるから、どんな事をしてかまへんか？云うとったやろ。えゝ、かまへん云うたんと違うんか？」

「でも、そんなこと、あんまり」
「そやから、どんな酷い事でも厭らしい事でもしてもええか、始めから断つとった筈やで。まあ、おとなしいになれ。動いたら余計、痛い。ほら、じっとしとけよ」

片手で私のアゴを押さえ紙ハサミを大きく開き鼻の付根まで押し付けて放しました。

「痛い！」

飛び上る程痛い。予想していたよりずっと痛い。

「痛い、痛い、取って下さい。早く早く、辛抱出来ません。痛い、早く。」

顔をふりまわしながら鼻声で頼みました。主人はにやにや私が痛たがっているのを眺めているだけです。あゝ痛い。鼻が根元から切り取られる様に痛い。思わず大きな声になって叫びました。

「あゝ切れる切れる。痛い痛い。助けて、助けて――」

私の声の大きさに驚いた主人はあわてゝ紙ハサミを取り外し大き



な手で私の口をふさぎました。

「アホ、大きな声を出すな。びっくりするやないか。山の中の一軒家と違うんやぞ、アホ」

今挟まれた鼻の付根の辺りを指先で触り

「どないもないワ」

口を抑えられた為、大きく鼻で息をして居る私のふくらんだ小鼻を指の先で押したり撫でたり摘まんだり、そして又、ブタの鼻の様

に上へ押上げて穴を抜きました。

「ふふゝゝ、何とも云えんなあ」
そういつた主人は口を近づけ、私の左の鼻孔に当て、プーと息を吹き入れました。

男臭い息が鼻孔に入ってくる気持悪さ。それから口の手を一寸放したかと思うと頭の後から左手を回し、又しっかりと口を抑え私の首を曲げて仰向けしました。
「うーうーうー」

絵画に於ける緊縛の構想とアイデア

向 井 功 一

最近の奇クの充実した発展ぶりには、唯々頭のさがる想いがしてこれに絶賛を与えても、決して過言ではあるまいと信じます。

然し敢てここで苦言を述べればそれは現実的には不可能で、あくまで夢想的な存在として自己の欲求を抑圧しておかねばならないかもしれないが、勇を鼓して断乎として実現化を叫んでみたい。

一、絵画に描かれる女性について。

絵画に描かれる女性の大部分が未成熟な女学生等を余り扱わず、その殆どが成熟した二十才以上の女性であることは、社会的倫理の観点からその規律を破らぬよう配慮されてのことであろう。誠に良心的で、商業雑誌特有の営利の爲には手段を選ばぬ方法をきっぱり破棄して一線を劃していることは奇クの特徴でもあり誇りとするところだと思いますが、絵画は写真と異なる点に於ては、その幻想性を十分満喫してくれる面と、非現実の中の理想を種々瞑想することにより、自己陶醉と自己満足とを

与えられ、絵画の世界だけの幻影によるこびを感じるものだと思うのです。

そこで、この十七、八才の未成熟な女学生の絵を載せてもそれは人間のサドに対する本能的な欲求故に幻想的なイメージの雰囲気からはみ出しはしないと思います。二、女性の下着について。

私はサドであると同時に徹底した下着マニヤでもあります。

奇クに出ている写真や絵画の女性に着用している下着のうち、特にパンティについてであるが、その殆どが、キャルマタ、パンティ類でズロースやブルマースが少いのにな不満を抱くものも少なくないと思います。

何故パンティよりブルマースの方がより魅力的なのだろうか。ブルマースは股から腿にかけて裾をゴムでしばってあるところに、隠された神秘性と言おうか、より大切なものをこれで保護してあるのだという感じを与えるもので、又神秘的な恥辱的な下半身の外形を容



易に現わそうとしないところに、それを何とか探ろうとするもののサド的なムードが、何となくそこからかもしれない出てくるものである。それにパンティやキャルマタ一では、余りにもわかりすぎる程鮮明に、その姿態を明からさまにしていまい、そこに与える刺激、サド的な欲求、満足感は半減してしまうものである。

特に女学生の穿いている運動用黒ブルマースのあのダブダブしたヒダのある感触、その裾のゴムが太腿をキュッとしめつけた感じは

如何にも精力的なピチピチした健康美をかもし出している。またメンスバンドをいろいろの女に穿かした絵を種々の角度から緊縛してみるのも面白い。

特に女学生にメンスバンドを着用させて、その上から黒ブルマースを穿かせる手法なんかを絵物語的に仕組み緊縛してゆくのも興味を湧かせると思います。

次におしめカバーですが、ピンクや黒、紺色、紺色のゴムおしめカバーを着用させてゆく経過を連想させるようなもの、サド愛好者

にとつては楽しいものです。

私のアイデア

一、ある女学生の被虐

○新聞の三行広告でアルバイトに応募した女学生が連れ込まれたのは、とある別荘の地下の密室であつた。

○セーラー服、スカート、スリッパを脱がされた女学生は、白いブラジャーと黒ブルマースだけにされて革手錠、口には嵌口具を嚙まされて呻いている姿。

○鼻の部分を除いては頭から鉄仮面のような革マスクをすっぽりとかぶせられ、胸には革ブラジャー、ゴム製ブルマースを穿かされて呻いている姿。

○両手を天井の鉄鎖でつながれ胸には鉄製ブラジャー、腰には鉄製パンティを穿かされて呻いている姿。

○寝台に体育用シャツ、ブルマース姿で大の字に仰向けに革錠で四肢をつながれ、メンスバンドの替ゴムできつく猿ぐつわされている姿。

○同じく寝台に、おしめ、ゴムのブルマースで大の字に仰向けに四肢を縛られ、頭は革マスクで寝台に固定され、口の部分にゴム管が差し込まれて塩水が流し込まれている姿。

○鼻部だけを残して他を包んだゴムマスクをかぶせられている若い女性。ピンクのブラジャー、黒ブルマース姿でゴムマットの上に四肢を革錠で留められている。その横にブラウスやスカートが投げすてられていて、人相の悪い男が椅子に坐っている。

○黒光りのする鉄製の縫いグルミをすっぽりと着せられた少女がさらに今まさに鉄仮面を無理矢理にかぶせられようとしているところ。

○前後左右に動き、回転も出来て寝台にも代用出来る鉄製のX字台架に、美しい女学生が革ブラジャーと体操用黒ブルマース(但し

横がホックで留められ縛られたまま着脱出来る仕掛になっているもの)姿で四肢をそれぞれ革錠で留められ、その側の椅子にセムシ男が羽毛を持って眺めている。というような場面。

○仕掛椅子に両手両足を固定して緊縛された女学生。スイッチにより、その肘掛が動き、椅子の脚も同時に回転して寝台と変わる。衣服をひき破られて、ブラジャーとズロースだけとなった女は、男に防声の革轡を口に嚙まされて、冷水を浴びせられて、もたえ苦しんでいるところ。

○身にびたつとひつついたズロース、ブラジャー。今度は両足に巻きつけて電気責めを試みようとする場面。今まさにスイッチを入れられんとして、観念の眼を閉じた女学生。これら一連の絵物語を絵画化して頂きたいと思ひます。

○黒髪を三つ編みにした十七、八才の女学生が、全身縫いぐるみの黒なめし皮を着せられて、大型トランクに詰められ、国際奴隷売買団の手によりどこかへ運ばれようとしている場面等を絵物語で描写する。



《鼻責めノート》M生

鼻の障子に木綿針で糸を通す。穴が塞がらないようにだんだんと太さの異なる紐を通しておくと、やがて鉄環でも入れられる穴になる。然し鼻の穴の中のことだから誰にもわからない。プレイの時は鼻に鉄環を嵌めて吊り上げることも出来るし、牛のように鼻環をつけて曳き回すことも出来る。美しい人に飼われた家畜として鼻環を持って愛玩用として弄ばれたら、どんなに楽しくとだろうと空想して、今日も私は一人で鼻吊りのプレイに耽る。



佐渡宇呂雄 作・画

オムニバス絵物語

『尿 流』

(によりゆう)より抜粋

薄いナイロンパンティ一枚にさ
れた由紀子は天井の梁から垂れ下
っているマニラ麻のロープで両腕
を背中合せに固く縛られていた。
長時間の緊縛にもめげず、由紀
子の美しい肢体はみずみずしく輝

き甘い肌の匂いをほのかに漂わせ
ていた。由紀子は既に八時間以上
も同じ姿で縛られていた。後手に
高く上った両腕はしびれたように
知覚が失せ、ロープですられた白
い手首に血がにじんでいた。

今まで必死になって忪えていた
ものが、今にも耐えきれなくなり
そう、それが由紀子にとって、
何よりも耐えがたい責苦となって
彼女をおそっていた。

ウェーブのある房々とした黒髪
を前に乱してうなだれている由紀
子の美しい横顔は、激しい尿意の
苦痛に蠟のように蒼ざめていた。
全身を包むしめっぽい夜の冷氣
が、いっそう生理の要求をつのら
せた。

ああ、どうしよう――

由紀子の気持は混乱していた。
いままで幾度か同じ苦しみを味
った事はあっても、今度は立場が
違っていた。眼の前で数人の男達
が、好奇の眼を光らせながら、身
悶える由紀子を意地悪く見下して
いた。

時間を経過すると共に尿意はま
すます激しくなってきた。目を固
く閉じた。ワナワナと打震える太
腿をたまらなさそうによじらせ
た。身を前に折り、じっと息をつ
めていた。もうこれ以上、意志の
力だけで尿意を抑制することは出
来なかった。

由紀子は死ぬほどの羞恥と絶望
に気が遠くなるのを覚えた。

ふんどしの歌

清水ゆり子作詞

一

青い海原 ふんどしの海
ぬれた素肌の黒光り
キリリと締めた ふんどしは
日本男児の心意気

二

やまとなでしこ ふんどし乙女
肌もさやかな小麦色
ピッチリ締めた ふんどしは
あなたに見せたい美しさ

三

緑の祖国 ふんどしの国
私の祖先もふるさとで
さらし木綿の ふんどしを
りりしく締めて働いた

四

アジアアフリカ ふんどし仲間
ビキニスタイルお嬢さん
いきな姿よ ふんどしよ
締めて歌おう ふんどしの歌

〇

メロデーとしては、「青葉茂れ
る桜井の」や「しあわせの歌」な
どによく合います。前者の場合、



貼り薬と絆創膏 (お喋りの奥様向)

遠藤春一

<通信>

絹川文代さまへ

大のファン 梶井景一



絹川文代さま、私は貴女の大的ファンです。貴女がああ秀麗な姿態を本誌の口絵に現わして以来、私は毎月本誌の発行が待ち遠しくてたまりません。書店で雑誌を手にする時、先ず何をさしおいても貴女の口絵を見るのです。貴女の姿を見て始めて私は安心して他の記事を読みます。

貴女の個性に満ちた華麗なマスクと脚線美、そして卓越した演技力には全く惚々いたします。誰かが言われたように、貴女は本当に緊縛の女王としての貫禄が十分だと信じます。私の永遠の恋人である絹川文代さまよ、どうか、いついつ迄も、私達のために誌上を飾って下さい。お願いします。

はじめの「ふんどし」は一気に元氣よく、後の「ふんどし」は一句一句、心をこめて歌うことになりました。「しあわせの歌」の場合は終りにリフレインとして、次の句をつけるとういでしょう。

○

また「夏は来ぬ」「夕空はれて秋風吹く」「浜千鳥」などの曲で歌うときは、最後の節を切り捨て終りのところを、すべて「ふんどしよ」とすればよいでしょう。

どなたか、もっと良いメロディーを、更にもっとイカス歌詞を作って下さいませんか。そして、大っぴらに歌いましょうよ。

前号のこの欄で「トクホン利用の猿轡」として紹介しましたが、この貼り薬(トクホン以外にも色々ある)を用いてピタリと口をふさぐと、お喋り封じには妙薬です。手ではがせば難なくはがすことが出来るのですが、ひとたび両手の自由を奪われたら最後、お得意のお喋りもピタリと止まること、ごらんの通り。是非一度お試しのほどを――。

縛り方教室

神奈原 順一

(又は緊縛方法に就いて)

確か休刊以前の旧号に於て、モデルは春日ルミ、伊吹真佐子の両嬢と思いますが、アート紙二頁に亘って緊縛の順序が分り易く写真で表現して居りましたね。

その後は一回も右の様な方法とはって居らない様ですが、我々マニヤは先ず、緊縛写真を見て満足しますが、次第に実際これを試みたくなるのは当然のこと、存じます。然し過去に於て何千葉となく発表された緊縛写真の中で、我々が同じ様に緊縛できるものが、果していくらあるでしょうか。(写真だけを見て)事実、私も写真を見ながら妻を写真通りに縛ってみました。が、どうしても写真通りに出来ないう結論を得ただけでした。

その理由は、一番最初の部分が分らない事、次に末端の縄がどこにあるか分らない事です。恐らく他の同好者の方も試みられたこと、と思いますが、時折読者の緊縛写真として掲載されたのを見ても、単調平凡で緊縛の最も原始的な後

手、胸に二三巻程といったものが殆どで貴誌に掲載されるような複雑さは少しも見受ける事が出来ません。

これは勿論、環境経験等の相違も大いに原因している事と思われませんが、我々を指導する意味に於て標記の様に「縛り方教室」の様なものを作つて是非、公開してもらいたいものです。

尚、その具体的な試案を左の通り記してみます故、御検討頂ければ幸甚です。

「縛り方教室」試案

- 一、連載ものとして毎号違った緊縛方法を説明する。
- 二、緊縛方法を写真入りにて説明する。写真は十枚乃至十五枚程度とする。
- 三、相当誌面を必要とする関係上アート紙又はグラビヤ頁ではなく本文中に掲載する。
- 四、使用する縄の長さ及びその種類を明記する。
- 五、その効果を挙げるため、モデルはなるべく裸体とする。(以上)



こじきはりい

乞食鍼医の特別患者

遠藤 春一

「どうだ、この針は木綿針だからチクリチクリと、少しは痛いぞ。そら、この柔かな白い肌にチクリチクリ、ほらほら、真赤な美しい紅玉がぶっくりと浮んだ。イヒヒヒヒヒ、この針は痛いぞ、痛いぞ。チクリ、チクリ」

「あゝ、やめてやめて。お願い、針だけは刺さないで。あゝゝ」

「ウッフフ、その悲鳴が又なんととも言えない音楽だて。そら、もっと

と鳴くんだ可愛い、小鳥さん。チクリ、チクリ、チクリ。」

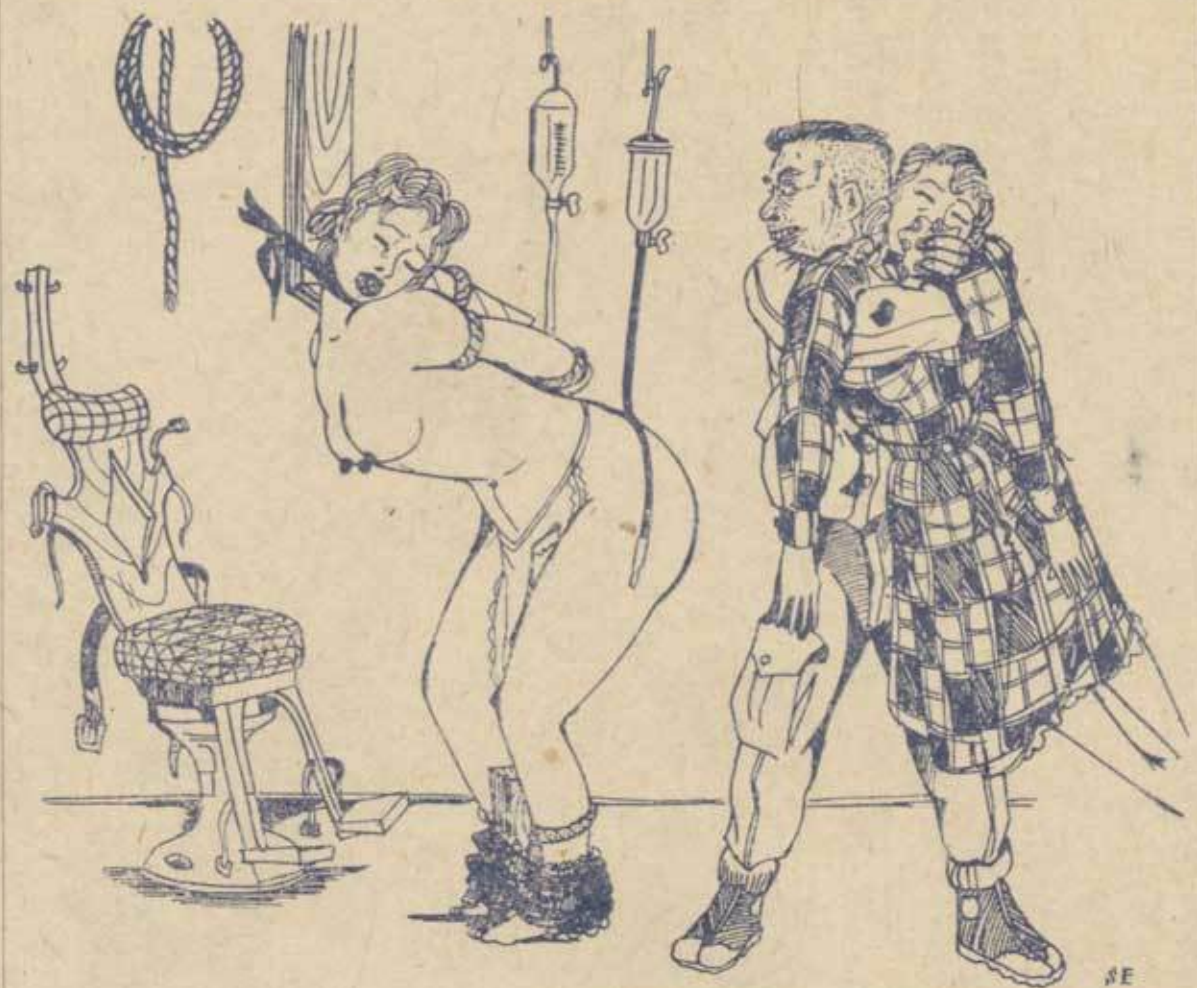
「い、いや——勘忍して、針だけは針だけは止めて。痛い、痛い」

「心配しなかつたていゝんだよ。ほら、この通り熱い湯をたっぷり準備してあるからナ。傷口は十分温めてあげるヨ、とび上るほど熱いタオルでな。」

「ゆ、ゆるして、人殺し。」

(おしまい)

浣腸椅子のいけにえ

文・勝・山・村
画・一・春・藤・遠

五百CCはたっぷり入るイルリ
ガートルになみなみと浣腸液を満
たして、豊富な肉体のうら若き女
性に対して、心ゆくまで浣腸をし
てやったら、どんなに楽しみなこ
とだろうか。もろもろの浣腸マニ

ヤの夢を代表して、私の考案にな
る強制浣腸用の椅子を御披露する
ことにしよう。
おしなべて妙齡の婦人に浣腸と
いえば、とんでもないと拒否され
るのがオチである。しかし、有難

いことには、浣腸といえは便秘を
なおすという医療的效果がある。
便秘は婦人の美貌にとっては大敵
なのである。女性是谁でも美しく
なりたいたいという本能を持つ。こ
ういった三段論法からいえば、女性
は浣腸を好まなくてはならない筈
のものであるが、浣腸に伴う羞恥
も、又、女性にとっては大敵なの
であらう。

女性にとっては、たえりた
ような羞恥、これこそ我々浣腸フ
ァンにとっては、何ものにもかえ
がたい魅力なのである。羞ずかし
がり嫌がる女性に対して無理矢理
浣腸を強制するところに、サジス
チックな浣腸のムードがむんむん
とむせかえるのだ。

一見何の変哲もない椅子ではあ
るが、この椅子を仔細にぐらんに
なればお分りの通り、頸、胸、腰
足と、それぞれ思いのままに椅子
に固定することの出来るベルトが
備えられてある。

連れ出しましたグラマーは、腰
にエプロンをつけております。エ
プロンというものと浣腸とを結び
つけてお考え頂ければ、自らその
効果を分って貰えたと存じます。
さて、浣腸マニヤの皆様。ごゆっ
くりお楽しみ下さい。

緊禪 一番

六尺禪男生

五月号拝見、佐度槐氏の「狩
獵者」に大感激。禪一本の責め
が披露されていたので早速実行
してみたが相手がないのでプレ
イにも限度があり、良き相棒と
春宵を禪一本の素っ裸で思う存
分責めたり責められたりして明
かしたい欲望に、五尺六寸、十
七貫の身体がうずく。

高校二年の夏から八年間、緊
禪一番に生きる小生にとって毎
日が禪で明け禪でくれることは
いうまでもなく、毎朝窓を開け
六尺一本で行う体操が日課で寒
中でも欠かしたことはない。四
六時中愛用していることは勿論
職場の風呂でも、これみよがし
に晒すので同僚間でも有名にな
り、銭湯でも例外なく注目され
ているが、これがまた愉しみの
ひとつ。こういう小生にとって
東京禪会のニュースは、この上
もない感激。今すぐにでも、禪
一本のままとび出したい位い。
くわしい連絡方法など、是非教
示してもらいたい。

少年受難シリーズ いかさまの仕置

三本 隆・画

やくざの間では『いかさまバクチ』が露見したときの私刑は惨酷をきわめるものと相場がきまっている。この少年は遊興費を稼ごうとして幼稚ないかさまをやって暴露し、殴る蹴るの暴行を受けた末、もう二度といかさまを使えないようにと、両手首を梁から吊された。



親分の命令で乾分達は、よってたかって、このいとけなき少年に対して血の制裁を加えるのであった。殺さない程度に馴って馴って半死半生の目にあわせ、そのあとで簀巻きにして近くの川へほり込むのだ。殆どどの者はこれで命を失ったが生き永らえたものは命を助けられた。

物干の洗濯物

A・T 生

○昨年の二月、交通事故で約半年入院したことがあった。
○病院の裏は中位の料理屋で窓のガラス越しに、その物干場が丸見えであった。
○午後になると、その物干の竿にピンクのパンティや赤いお腰、それに時には真黒の月経帯が、ぼたぼたと雫をたらしていた。
○手持不沙汰な僕は、毎日物干しに上ってくる小娘を待つようになっていた。今日はどんなものを干しに来るだろうかア、と。
○五列に並んだ竿に掛けられるのは殆ど女物ばかりだった。メンスバンドの同じものは約一カ月の周期で干されていた。
○悩ましげなネグリジェやブラジャー、ズロースなどが、我物顔に風に吹かれていた。
○やがて窓際まで歩けるようになって僕は、そんな下着をつける人の顔を自分の目でじかに見たいと思った。夏がきて、洗濯物が所狭しと並ぶ頃、僕は傷が癒えて退院した。

屍に敷かれて死にたい

谷本ツトム

○毛を真赤に染めた、おそろしく肥った女だった。殊に太股からヒップにかけてのポリウムは見事なものだった。

○貧弱な体の私は彼女と比べたら三分の二位いしかなかった。私の両腕は彼女の逞ましい手でしっかり押さえつけられ、それだけで私はもう身動き出来なかった。

○脂ぎった濃厚な体臭が、むんむんと立ちこめて、私は一瞬、頭がくらくらするのを覚えた。○気がついた時、私の顔面は彼女の蛇性のような股で埋めつくされていた。私は窒息から逃れようと鮎のように口をパクパクさせて空気を求めた。

○息がつまるということは、なんとという苦しきさだろうか。耳がガンガンと鳴って、次第に意識が蒙ろうとしてきた。

○やがて、苦しみが消えると恍惚とした法悦境が訪れた。私はこのまま彼女の屍に敷かれて窒息死したいと願った。こんな安楽死が此の世にあるだろうか。



「妊婦を縛る」

菱谷 正

陽春の候迎え何かと御繁忙のものと存じます。小生以前より貴誌は拝見しておりました。色々の事情もあり個人的に購入してあります。貴誌に馴れ染めてから早や十年余り、その間秘かに創作、PHOTO等温存して居ります。

声のサド演技

小川 消一

親戚の子供の後見人となったので、その確認のため、或る日の午後簡易裁判所を訪れた。暫く廊下で待たされてから検事の部屋へ通された。三坪ばかりの殺風景な部屋で机が二つあるきり。私の逢っている検事の他に、副検事というのか、検察事務官というのか、一人の娘を取調べていた。

その女は十六か十七位あどけない顔立ちだったが机の下に揃えているサンダル履きの素足の爪にもマニキュアが施されていて、なんとなく年に似合わぬ頹廢的な雰囲気気を漂わせているように感じた。

同封致しました写真数葉は小生が最近撮影したものです。御高評を頂ければ幸甚です。「妊婦を縛る」と題した一連の作品で、モデルは平田妙子当二十五才で三カ月になります。これを機に積極的に作品をまとめてみたい所存で居りますが、種々御鞭撻の程お願いします。ネガはまだ若干ありますので、御返事によっては至急引伸し致します。



その娘が突然大きな声で泣き出したのである。否泣くというより慟哭といってよい激しい泣き方であった。私は途中で入ってきたのだから、どういう話のいきさつなのか、さっぱりわからなかったがとにかく、只ごとでないといった泣きようで、傍で聞いている私は非常にサジスチックな感興にかられたものである。

これが若し、この十六、七の娘の演技であつたら、本職の俳優もハダシの声の名サド演技であつたと思う。私の用件はすぐ終つたので、そのあと、どうなったか知る由もないが、今でもその時の泣き声が耳に残っていて、忘れることができないでいる。

奇クサロン読者投稿

「乗りますわよ」

佐藤きみ



関東の大会で快気売っているはしたない女でございます。何分にも文章にかけては自慢じゃございせんが、からっきし駄目なんでございますが、御誌のはしくれに投稿させて頂きませ。私たちの間では御誌を大層愛読しておりますが、実際にプレイすることにかけても、そりゃ凄いでございますよ。

さて、私は如何生まれつきまし

たものか、とにかく馬乗りになるのが、三度の御飯より好きでございます。まして、立派なお嬢さん方が乗馬クラブ等で意気揚々と馬に跨っておられるのを見るにつけ、どれほど羨んだことございませう。まあ愚痴をいっても仕方ないことで、手近なところで乗馬の醍醐味を満喫しないことには私はいても立ってもおられないのでございます。近頃室内乗馬、所謂人

間馬のプレイが映画に小説に盛んに書きたてられておりますわね。然しどれもこれもみな生半可なものでございますよ。私達の間では皆さんの考え及ばないようなアイデアを持っているものが少なからずあります。

この図を御覧下さいませ。私が跨っている馬を。馬で申しますならば未だ三才駒というところでございます。人間馬でも手綱からはたきの尻尾まで揃っておりまして。う。おまけに歩く度にチリンチリンと額の鈴が快い音を奏するのでございますよ。私が遠乗りをしている積りで満身汗みづくで喘いでいる若駒をなおも責めているところを描いてもらったのです。私の乗り方は、それこそ徹底したものでございますよ。生優しい乗り方は致しません。身も心も馬になりきっている現在でも、私の調教には悲鳴をあげて哀願するのですからね。

桜の刺青の手前から調教には容赦をしないのです。今日は特別に鞭は許してやっているでございます。私の考えますのに、本当の馬よりも余程乗心地がよいように思うのですが、どんなものでございましょうか。

何しろ、どれほど辛かったか、重たかったか、又どれほど私が非道い調教をしたかというようなことを聞きとることが出来るのでございませうからね。馬が口を聞くのでございますから、サディスチンの私などは馬の感想を聞いた上でその意表を衝いて責め苛むことが出来るのですものね。たまりませんわよ。破れ障子や襖を眺めながら、ゆうゆうといつまでも、へたりこむまで若駒を歩ませるのも、いい気持なものでございますよ。自分は汗みどろの苦しむ馬にされたくは跨っている私に厳しく鞭打たれているのは、どんなに辛いことでしょうかね。

「奇クサロン」の

原稿を募る

読者サロン向きの原稿を募ります。御遠慮なくドシドシお寄せ下さい。掲載の分には薄謝を進呈いたします。

創

作

汚れた診察室

水野裕紀子

「三田くん、ちょっと来てくれたまえ」

院長に呼ばれて、三田悠子看護婦は、うす暗くなった診察室に行った。会計の鈴木さんは五時になると直ぐ帰る習慣だし、同僚の藤野さんは休んでいるので、婦長の谷さんが宿直に来る八時ごろまで、この小さな病院は悠子だけが残ってしまったのだ。院長の杉田医師は、やってくる悠子を見ていた。

「なにか……」

「まあ、そこにかけてたまえ」

副院長の千葉とちがって、杉田の陰気ではねばしたものいい方が日ごろから悠子はきらいだ。ことに一週間ほど前、患者の婦人に、あやしげなふるまいに及んでいる杉田を診察室でのぞき見してからは、この病院のイヤな空気がたまらなくなり、辞表を出そうと思っていた矢先でもあった。しかし悠子は、青白い顔に髭の濃い杉田院長が、いつもとちがった目つきで執拗に自分を眺めまわしているのを敏感に感じて、悪い予感がした。

「じつは、君にこんなことをいうのも何だが……」と杉田は回転椅子に腰をかけながら、「先日から、ついこの間までのあいだに、麻酔薬の瓶が盗まれたんだがね」

あ、それなら……と悠子はいおうとして顔

をあげた。しかし杉田は悠子の方を見ず、低い声で押しつけるようにいつづけた。

「こんなことは外にもれると、たいへんなことになる。それに外の人間がはいってきて、あれを棚から盗みだして行くのはむづかしいことだよ。いずれにしろ、やった人間をさがし出して、充分、責任をとってもらわねばならんのだが、君は心あたりないかね」

そういわれると、それを悠子に依頼した千葉副院長の名が直ぐ口に出なかった。副院長が往診先から至急にという電話だったので、瓶ごと持って行って渡したのだが、それを院長に報告するのを忘れていた。院長は副院長から聞かなかったのであろうか。ともかく、この嫌いな院長の前で副院長の立場を悪くするようなことをいいたくなかった。

「まさか君ではないだろうナ」

「いいえ!……でも」

「でも、何だね?、犯人を知っているというのかね」

「——犯人だなんて」

「犯人じゃないか。院長の私の知らぬまに、モヒの一〇〇瓦瓶が消えてなくなる。これが犯罪でなくて何だね」

「でも、まちがいつてもありますわ」

「ばかな！まちがいで病院の薬棚から薬品が消えたり出たりしてたまるものか！」

院長の一言にあって、悠子はだまりこんだ。

「とにかく持物を調べさせてもらおうよ。ハンドバッグを持ってきたさい」

悠子は不快をおさえて立ち上った。

「待て、わたしが取ってくる。どこだね」

「右から二番目のロッカーです」

「よし」

院長はドアを開けて出て行った。日はとっぷり暮れてしまつて患者もなく、悠子は杉田と二人きりでこんなイヤなことをしているのは一刻もたまらないと思った。

「これだね。開けていいかね」

「どうぞ」

悠子は杉田をにらんでいた。もしかしたら私を困らせるために、空瓶でも入れたのではないか。……しかし、それは杞憂だった。

「コンパクトにパス入れか……三田悠子、二十三才、君は三なのか。手紙がはいってるね。彼氏だな、これが……え、そうだろう」

「……」

「ふうん、色んなものが入っているが、モヒはないようだね。じゃ、これは返す」

杉田は、ハンドバッグを膝にして全身を怒

りでみなぎらせている悠子の若々しい体をなめずるように眺めまわした。

「身体検査をするから、白衣を脱ぐんだ」

悠子は、はじかれたように顔をあげた。

「そんなこと。ばかにしないでください」

「何をいう。きのうは鈴木くんも藤野くんもやったんだ。やましいところがなかったら、イヤということはあるまい」

「いやです。先生なんかにはさわられるの。考えてもいいやです！」

悠子は叫んでいた。

「静かにするんだ。お前が持ち出したと白状したものがいるんだ」

「……」

「ものがモルヒネだからね。警察沙汰になると、うるさいよ。さわりはしないから、立つて私のいうとおりにしなさい」

「……」

「立て！」

悠子はビクンとして立ちあがった。不当なと思つても、大の男にどなりつけられると女の悲しさに、なぜか全身がちぢみあがるのだつた。膝がガクガクした。

「白衣をとりなさい」

脱いだ上衣を杉田は自分の机に置いた。

「靴下にガーターをつけているね。そうだろう」

ぴっちり腰についたタイトスカートを目でなぞりながらいうのだ。

悠子は、うなずく。

「ガーターをはずして。上靴も脱いで」

だまつて悠子は、いわれたとおりにした。

「そうしたら、そのブラウスの前をはずして両手をあげて歩くんだ。そこを」

ふっとたまりかねて悠子が拒絶のようすを見せると、

「早くしないと誰か来るぞ！」

と激しく叱咤した。ああ誰か来たら助けを呼ぼう。困るのは先生じゃないの。そう悠子が憎しみの目で杉田を見ると、杉田は憑かれたような目で悠子を見すえた。

「歩け、歩け。どこにかくしたか調べてやる。手をもっと高くあげて歩くんだ！」

悠子は歩きだした。ブラウスのホックをはずし素足になって床板を踏んで行く女を、杉田は飽かずに眺めながら「歩け、歩け」と、くり返した。

悠子は疲れ、髪も乱れてきた。目をうつろにして唇をかねて、顔を杉田の方からそらすようにして室の隅から隅へ歩きまわる。

「二十分、歩くんだぞ！」

杉田が時計を見て「よし」といったとき、悠子は思わず倒れかけた。

「待て、壁にもたれて立つんだ！」

あえぎあえぎそうすると

「足を開いてみる、できるだけ大きく」

悠子は、がっくりと膝をついた。

「だめだ、その下にはいているものもぬいでほしいね」

「かくしていません！」

最後の力をふりしぼっていった。

「なに、かくしてない？わかるものか。じゃ

君は、あの薬を知ってるかね」

「あれは…あのモルヒネは副院長先生が…」

「なに千葉くんが？」

「往診先から御請求でしたので、私が持って行ったのです」

「でたらめをいうな！」

「いいえ、本当です」

杉田は思わず興奮したように立ち上ると、乱れた髪の垂れさがっている悠子の顔をぐいと、ねじ向けた。

「…本当です、先生」

悠子は頭がぼーとして院長の怒りにおののいていたが、杉田は薬の行先がわかったとたんにそのことは忘れはて、日ごろは近づきたい悠子が自分の掌の中でびくびくしていることに快感をおぼえた。髪も衣服も姿態も乱れ果てていうにいわれぬ風情があった。

「なぜ、それを早くいわなかったのだね」

「だって…だって先生がはじめっから私を悪いときめていらして…」

そこまですと悠子は泣きだした。裸足のまま床に倒れて泣きくずれた。

「よろしい。それが本当なら今夜は帰きなさい。あとで私が千葉くん電話してみる」



悠子は氣をとりなおして服を直しながら、興奮していたので思わず口走った。

「私、今日かぎり、この病院をやめさせていただきます。ちゃんと糺しもしないで、さっきのようなことをなさるなんて……あんまりです。それに……いつか女の患者さんに、ひどいことなされたのも知ってますから。先生こそ責任をおとりになるといいんですわ。御自分の病院だからって、あんまりです。」

杉田はそれを聞くと、ぎくりとして顔をあげた。さすがに顔色が変わり狂暴な目つきに

なったのは、悠子があまりにも無知だったといえよう。

「三田くん、すまないと思っている。まあ、待ちなさい。車で送るから……」

悠子が返事もせずに靴下をはいている間にガレージの方へ「オーイ、林、林」と呼んだ。運転手の林とひそひそ話しこんで悠子が出てくると有無をいわずその車に押しこんだ。

三人を乗せた車は一時間ばかり人通りの少ない裏通りをぬって行った。山道になって十分ほど行くと、道ばたに物置小屋があった。

告白

ウエスト矯正の体験

古井 慎也

私が女性化願望のあまり、実験した努力の一端をお知らせ致したいと存じます。

私は、それを実行した当時は、女性化する条件として蜂の胴のように細い腰になることが、先決問題であると思いこんでいました。それがこの苦しい実験に私を追い込んだともいえましょう。

蜂腰を目標に、手取早く「締めつける」ことを考えた私は、最初にニッパを使いしました。きつく締めれば、それだけ早く細くなる道理、と単純に考えて、強靱な布が胴にくい込むようにして、締めつけたもので

す。締めれば締めるだけ苦しいのは当然ですが、紐のように布が真中に寄ってしまつて、無恰好にお腹をふくらませるばかりか泳えきれないような苦しみばかりで、目的の効果があまり期待出来ないことを思い知らされました。

だが、蜂腰の魅力を忘れ得ない私は、ニッパの代りにゴム紐を使うことを思いつきました。「押売」をすぐ連想する、あの丸ゴムの紐を四、五十米も買い求めて、胸の下辺りから、少し強めにひっぱりながら体に巻きつけるのですが、余り強くも弛く

木蔭に車をとめて運転手が小屋を調べた。

「こゝでいいでしょう、先生」

「うむ、林、少し離れて見はっていてくれ。十分もしたら、この女を黙らせるから」

「ふん、お楽しみですぜ」

二人は日ごろ、いいかげんな仲間らしい。運転手は噛んでいた楊子をペッと吐くと、それでも見張りに立って行った。

杉田は口をふさいで抱きこんでいた悠子から引きおろして憎々しげにその腕をつかみながら小屋につれこんだ。乾いたわらの上に投げ出された悠子は声をつまらせ、スカートの裾をなおしている。その膝を蹴りあげた。「あっ」

仰向けに倒れるのへおどろかゝりスカートを、肌着を、むしりとる。ピリッと裂けたスリップの下から、白いまるい乳房がおどり出た。杉田は右手につかんだ悠子の衣服で、その白い体をめった打ちに打ちすえた。

「ああっ、あっ」

短かく叫び、のたうつ悠子、土足をあげてその体をぐいと裏返し、まるまるとした臀へ杉田はとうとう馬乗りになるのしかかった。

「どうだ、女め、馬め。泣け、泣け。そして許しをこうのだ」

もなく適当にひっぱりながら、重ならないように正確にウエストを巻き締めてゆくのは、相当の苦勞と根氣を要する難事業でした。ちよつと油断すると、弾力のあるゴム紐は、生物のように、いうことをきいてくれません。コツをのみこむまで、何回も失敗を重ねたものです。

絶えず、じわじわと胸を締めつけるゴム紐の肌着は、最初はさほどに感じないものですが、時間が経つてくると、いてもたっても居られぬ位いの苦しみを私に感じさせて来ました。でも私にはその絶え間のない圧迫感を好ましい気持ちで耐えることが出来ます。感覚と視覚を通してウエストの絞られているのが、まざまざと自覚することが出来るからです。時にはぐしゃぐしゃにもつれ、ずり下って、時間のかかる巻き直しをせねばならぬことも一再ではありませんでしたが、私は根氣よくその圧迫感を求めて巻きつけたものです。

目標の蜂腰は期待した程の効果はありませんでした。でも感覚の上ではたしかに絞っているのですから、自己満足は出来たことはたしかです。時には、ゴム紐の代りに、物干し用に使うビニール被覆の麻縄を用いたこともありましたが、でもこれは、ウエスト矯正の目的ではなく、マゾヒスチッ

クな痛覺を求める以外に考えられません。せつかく「うん、うん」呻きながら巻き終えても、二十分とは我慢がしにくいからです。その点ゴム紐ですと、相当に強くても締まる代りに伸びもしますので、何とか、我慢出来ないこともありませんので、私はもっぱらゴム紐を使用したものです。

だが、あまり強く締めつけては、同じウエストを締めつけるにしても、健康帯や、胃下垂防止等のものとは根本的に違いますので、健康にはよくないことは否定出来ないでしょう。事実、私もゴム紐の圧力にいてもたっても居られないような苦しみを、五、六回も続けて我慢し通しますと、体中から冷汗が絞り出されるように、滴り落ちぞくぞくした悪感を覚え、急に寒く感じてブルブル震え出したことが、一再ならずありました。慌ててゴム紐を解き放すと今度は、急にカーッと全身が火照ってきて頭が割れるように痛むのです。

このような経験からして、私はもう限度以上と思われるウエスト絞りはせぬことにしました。ニッパで、四十五糎位にまで締めて二、三時間、我慢できる私のウエストは、その矯正の効果か、耐苦修練の結果か、私自身にも判断としないのです。

悠子は悲鳴をあげた。動物のような杉田が一心の底から恐ろしく、ふるえあがった。しきりそれで責めたてると、杉田は悠子を仰向かせてふみにじった。

「許して。ああ、ひいっ、許してーっ」

「さっきのことを、もう一度いえ。いえるならいってみろッ」

「許して下さい。いえません！いえません！先生の……決して……あッ」

「これからは私の女になるのだ。病院にいていう通りにするんだ。いいな！」

「ああ……ええ……しますから、どうぞ許して。ああ、もう、もう……」

やがて林が車を、そっとまわしてきた。悠子の白い肉体は雑布のようにふみにじられ責めたてられて、あられもなく伸びきっていた。日暮れのころは、あれほど高慢で誇らしかった女が。

しかし杉田医師の悪徳は、そう長くは続かないことであろう。医師という聖職にかくれて多くの看護婦を、患者を、巧みに毒牙にかける彼も、いつかはその弱い女たちによって何かの報復を受けるであろうし、社会の目も又、いつまでもフシ穴ではないであろう。

「奇譚三十九夜物語」

(第七夜)

辻村 隆

霖雨が音もなく、しとどに窓を濡らす、生暖かい宵でした。

例によってクラブに立ちこめる紫煙——。雨足を見つめて、気懶るそうに、めいめいグラスを手にして、八人の退屈男は、ソファ―に体を投げ出して、誰かが話の口火を切るのを心待ちにしているのです。

ゴルフ氏の持参した、伊藤晴雨の画集や凄惨な責写真が、中央のテーブルに、ところ狭しと散らばってありました。

彼が、自他共にゆるす、晴雨の蒐集家であることは、既に好事家の間では隠れもない事実でした。

晴雨をめぐる雑談に、先刻一しきり華が咲いて、つと軽い空白が部屋に流れて、人々は暗黙のうちに、ゴルフ氏に、今宵の話の皮切

りを期待していたのです。

周囲に気圧されて、ゴルフ氏はやおら体を起して、暫くは考えを纏めるように、煙の輪を宙に画いていたのですが、聴て、意を決したのか、物憂げな彼等の視線に向って、口を切りました。

第十八話 湯責めの一考察

「諸君に、先刻来、御覧願った晴雨のコレクションは、いわば、私のほんの一部分に過ぎないのです。既に戦前より、伊藤氏へ直接お願いしたものや、又、東京都文京区の粹古堂主、伊藤敬次郎氏に御依頼したもの等を加えて、その大半は私の手許に集められていると、過言ではないのです。」

特に私が、興味を持ったのは、晴雨氏が、自分の体験より割出した、各種の責めの貴重なる記録なのです。

吊し責め、松葉責、雪責め、水責め、湯責め、その他枚挙にいとまのない位いに晴雨氏は責めの実録を発表していましたが、その中で私は彼の言う、湯責めを実際に女に行なった事がありました。

一応、御参考迄に、晴雨氏が、その著書の『責の話』に書いた責めの種々相のうち、湯責めに関する項を、ここで読み上げることになります。

(前略)——女に特に快感を与える責めの方法として湯責がある。

これは家族風呂等に於て行われる方法であって、成るべく細い丈夫な麻縄を以て裸体の女を縛るのであるが、此の場合に堅く縛る事を怠ってはならない。緩く縛れば後に縛り直す事が困難な斗りでなく、快感の半ばを失うからである。前記の如く此の場合は女の乳の上を避けて右の二の腕と左の二の腕との間を極めて固く縛り、その余りを以て、女の内股から臀部を縛るのであるが、それは女が歩行に差支えなき程度でなければならぬ。次で乳と胸を除いて、他の部分を細い縄を以て十分に縛り上げて、女を浴槽の中に入れて入浴の形式をとるのだが、此の場合、最初は温かい湯に入れて、後になる程熱い湯にする方がよい。入浴時間は出来るだけ長い方がよいが、余り長時間は有害であるから、実際について加減すべし。責める方の男性は女の身体を抱いて浴槽の中に入れておくと、湯の為に縄は段々緊縮して、女は苦痛甚だしく泣き叫ぶ事があるが、これを以て女の苦痛と見ることは出来ないで、むしろ女はこれによって快感を得るものと思われるから、責める男は、決して女を哀れと思うべからずと云うことである。但し此の責め方に限らず、双方合意の上なら

では行ふべからずという事を記憶せねばならない。それから十分に女を責めて後、女を平臥させて十分に介抱すれば、女は全く恍惚境に入り、温泉情緒を満喫する事が出来る。但し女の身体には、半日程縄の痕跡を止むるもの故に、其の点十分に用意を要するもので、筆者の実験談を正直に記しておく。——(原文のまま)

私はこれを試したくて仕方がなく、或る女——勿論、晴雨氏の謂う、双方合意の上で行える女です。家内ではないのですが——に意を決して実行に移して見ました。恰度、四年前の四月頃でしたでしょうか。

正直に申し上げて、相当マゾヒズム性を帯びた、囲ってある女です。大抵の責めなら今迄も我慢し、むしろ、それによって、被虐者特有の愉悦を覚える様なたちの女です。年まで申上げる必要もないのですが、四年前のその頃で二十九才でした。

その日、再三再四、晴雨のこの項を熟読した上、私は女に逢いました。女はその日の私の意図など、勿論知る筈ありません。

私は女の家に出向いて、早速、風呂を立てるように云いつけました。瓦斯風呂ですので、水を張って、点火さえすれば、放っておいても勝手にわく便利よさです。

私が来れば、当然、緊縛や責めが始まるものと、女は常日頃、観念しております。私が、あれと云っただけで、女はすぐ立上って、押入れを開くと、古びたトランクを持出しました。大は登山用の太い頑丈な綱から、小は、細引よりも細い縄まで、十数本が、トランク一杯にぎしりとつめてあるのです。

私はその中から、比較的、使って柔かくなつた、鉛筆程の太さの、なるべく古い縄をとり出しました。



女に裸になるよう申しつけますと、易々として、素直に、私の目前で、着物をぬぎ捨て赤い腰巻一枚になって、乳房を両手で抱きかかえるようにして、その場にしゃがみます。この年まで、子供のない女の体は、年不相応に豊かに円味を帯び、乳房は娘の様に、ふくよかに張り切っていました。

腰巻もとらずと、嫌が応でも、私の眼には、女の腰から臀へかけての点々とした灸の汚点が、白い肌に浮び上っているのを、見ぬわ

けには行きませんでした。

この灸の跡が、外ならぬ、私によって烙印せられたものであって見れば、今更、取りかえしのつかぬことと思っても、誰を恨むすべもないのです。

湯責めの話から余談にそれますが、この灸は、私が女の不実を知ったある一事に、ついて、一時の怒りから、カッとなって、座敷机に女をうつ伏せに寝かせ、机の四脚に、女の手足を括りつけ、尚動けぬよう、胸から腹まで机ごとぐるぐる巻きに縛りつけて口には舌のかまぬよう濡れ手拭を押し込み、その上から猿轡した上、特別大きい艾を双つの臀にのせ、線香で点火したのです。

一分——二分、赤く黒く、艾は煙を上げて皮肉に迫ります。女の顔は紅潮し、眼は血走り、激しい苦痛に、体は蠕動します。呻きが猿轡から洩れ、押し潰された悲鳴が部屋に艾の煙と共に充満して、さながらの焦熱地獄です。盃程もあろうかと思われる艾はジリジリと肌を焼き、ブスブスと肉の奥深く、くすぼっていました。肉のこげる匂いが、激しく私の鼻をつく頃、女の顔は、紅潮から蒼白に変わっていました。苦痛の限界を示す様に咽喉がなりました。私は大急ぎで艾を臀より除去し、縄を解いてやりました。ぐったりと伸びている女を、夜具に運び、冷水を含ませました。気絶寸前、女は正気を取り戻しました。見るも無惨に臀の肉は焼け爛れておりました。激しい苦痛にもかかわらず、女はうっとりとして恍惚の眼を私に向けていたのです。

斯くして私は、その後も、腰に、そして隠しどころに、腿



に、事あれば、この肉の焦げる臭気に、えも云われぬ感覚を楽しんだのです。けれど、一時の嗜虐の灸責めが、一生の跡をいついつ迄も、女の肌に残したのです。女が美形であればある程、灸責めは止めた方がいいと、一言、老婆心で申し上げたかったので、とんだ道草になりました。

扱、話は戻りますが、この女には、それまでに、相当の責めは実行しておりました。非道い灸責めを始め、吊し責め、梯子責め、その他、縛りは枚挙にいとまありません。女は又、私のこの嗜虐に応えて、可成りの我慢強さを見せました。一時間縛り、二時間縛り——さては最高六時間四十分縛りなど、緊縛の最高時間でしょう。

諸君も緊縛を試される場合、時間をはかって、この縛りなら何時間、又、強烈な縛りなら何十分と云う様に、タイムをとれば、女の忍耐



の限界が現われて面白いと思います。

かくするうちに、どうやら風呂の準備も整ったようです。晴雨の説く如く湯責めは緊縛しなければならぬと云うので私は左右の二の腕を犇々としめ上げ、縄がかなり肉に喰い込む程強く縛りました。申し合せの如く乳より上は縛らずに、二の腕を後手で吊る様にして肩にかけ、続いて余った縄で股縛りにしました。よちよちと女は浴槽に歩を運びます。湯加減は少し生ぬるい感じでしたが、私は女を抱き上げて、湯舟につけました。湯の上層部が熱くなりますので、私はたえず、湯舟の湯を棒で攪拌しておりました。

じつとりと女の顔が汗ばみ、息づかいが激しくなってきた。折を見て、一度、女を浴槽から引きあげ、甲斐甲斐しく石けんを全身にぬりつけて洗ってやるのでした。ざぶざぶと頭から湯をかけ、泡を洗い落して、再び、女を湯舟に沈めました。湯は既に熱くなっていました。縄目に触れますと、それは、実にぴったりと皮膚に喰込み、小指すらさし込めぬ程に、固く喰い入っていました。既に感覚がないのか、二の腕を試しにつねり上げて、女の顔に痛さは現われませんでした。全身に廻る、極度の緊縛痛は一局部のつねりやひねり、咬みには、とっくの昔に麻痺しているのです。

女の顔一杯にぶつぶつと玉の汗が吹き上り、酔った様に顔面は紅潮してまいりました。頃合を見て、私は女を浴槽よりひき上げ、バスタオルでくるむと、倒れかかる女を抱きかかえて、夜具に臥せしました。縄をといてやろうかと云うと、女は無言で首を横に振りました。水分を吸いきった縄は、もはや肉体のあちこちで、皮膚に浸

入し、私は縄をとく術に、はたと困惑したのです。刃物を皮膚と縄目に挿し入れようにも、這入りきれぬ程に縄は強くしまりきっていました。

私は手首を縛った個所を、かみそりで、皮膚を切らぬよう、静かに刃を当てて引きました。二、三カ所そうして切り放して、漸やく、女は縄目から解放されました。鮮やかな縄目が、縛った縄の跡その儘に、赤く実にくっきりと、女の体に染め出していました。

私のタイムでは、浴槽に浸した第一回が四分——、第二回が一分三十秒でした。結局それ以上は有害ではないかと思ったのです。

晴雨氏の談話中には、浴槽中での時間の説明がなく、実際について加減するべしとだけです。マゾ性の強弱によって、夫々その差はあっても、大体こんなところでしょう。

最近、縄の上にビニールで被覆した洗濯用のロープや、ビニールだけの緊縮せぬロープも出て来ましたが、ビニール縄の場合は緊縛しても、湯につかると、反って逆に、柔軟性を帯びて、伸長するものもあって、綿ロープや麻ロープとは逆効果です。

責めと云う事を念頭におかず、唯、単に女の自由を束縛して浴場に望む場合は、ビニール縄を使った方が、解き易くもあり、又、女の肉体をしめつけもしませんし、すぐ拭けば乾きますので、便利かと思えます。

最後に、晴雨氏の謂うこの湯責めによって、女に特に快感を与えた云う印象はありませんでした。マゾの女をうまく飼育すれば、何も湯責めによらなくとも、充分、女の満足する方法は、他にいくらもあるようです。

泉下の晴雨氏に、この事実を告げ得ないのは残念ですが、いずれ

にしても一代の嗜虐人伊藤晴雨の死は惜しみても、尚余りあるものです。晴雨氏を偲んで、いやとんだ私の、ばくろ話になりました……。」

×

×

×

ゴルフ氏の自伝は終わりました。人々は今更の様に、改めて、大嗜虐人、伊藤晴雨の遺した足跡の、写真をあれこれととり上げて見るのでした。中でも庄巻は確か二回目の夫人と称される人の、臨月の妊婦逆吊しの写真で、流石に、度胆を抜かれる凄さです。この臨月の婦人の二分以上の逆吊しにもかかわらず、生れた子供が平均以上の体格で、健康であったことなど、嗜虐に生きる、退屈男達にとっても、正に得がたい、実験の記録に違いありませんでした。上半身裸体で、野外での逆吊しの写真ですが、時代の推移を思わす如く、その人の髪は長く地上に垂れ、膨らんだ腹部の低下からか、腰から下、白布で蔽った部分は異常に歪曲しているのです。必ずと云ってよい程、その写真は上下を逆さまにして、クラブの面々はその人の顔に見入りました。逆吊しにしては苦痛の陰もなく、眉毛の濃い、一文字に結んだ唇は、その人の気性の強さを如実に物語っておりまして。その顔は、当時の晴雨氏の作品の、あちこちに散見せられる顔でもありました。

「私を引合いに出して恐縮ですが、今宵は、皆様方の体験談で行こうじゃありませんか——」

ゴルフ氏が、写真に見入る一同にそう呼びかけました。

「じゃあ、私が手軽いところで一席やりますかな——」

と受けて立ったのはドクター氏です。

「私の商売が婦人科ですので、ドンピシャリには喋べり難い点もあ

るのですが、この席上では余り話題にのぼらない浣腸のお話で、ドクター見聞録と行きましょう」
そこでドクター氏は丹念に揃えた、短かい口髭を二、三度、意味ありげにこすったのです。

第十九話 こまつた娘たち

「五味康祐の『こまつた妹たち』という、ビート族を描いた小説が、松竹の炎加世子等で映画化されています。あの小説の内容を、その儘、映画には到底、表現し尽せないでしょうが、こまつた娘たちは、何処にもいるものでして……。と云うのは、私の病院の看護婦仲間で、奇妙な遊びの、『浣腸ごっこ』と云うのが流行った事がありました。大体手術の場合、殆んどのクランケに対して浣腸を実施して、排泄さしておくのですが、これは勿論プレの仕事なんです。」

浣腸の方法は、イルリガートルによる方法を実施しておりますがプレにとって、この浣腸に一旦、興味を持ち始めると、たまらなく面白いそうです。それと共に併用するのが、カテーテルによる排尿です。この両者を終えて、各種の手術に入るわけですが、恐らく、クランケにとって、特にギネ特有の若い婦人層のクランケにとっては、如何に同性とは云え、イルリガートルと、カテーテルは、羞恥以外の何ものでもないです。

U子と云う准看でしたが、彼女がそれに、異常な興味を抱いている事を、私はフトした事から知りました。

外のプレなら事務的に行うことが、U子が当った場合、いつも時間が長引くのです。

夕暮れで帰宅も急ぐことがあって、私はジリジリする思いでクランケの来るのを待っていました。卵管結索の永久避妊手術で、オペラチョン自体容易ですが、矢張り開腹から縫合まで三十分はかかります。

私はシビレを切らして、準備室の扉を、思わずノックもせず開きました。

呀っとU子は、振向いて声を立てました。それも道理、ベッドにうつ伏した苦いクランケのアヌスに直結したイルリガートルのホースは二本目であったからです。二十六才のその若い美貌の人妻の腹部は、既に液体で膨張して、畦腹にまで膨れ上っているのです。浣腸の許容量以上であった事は一目瞭然です。

——どうしたんだい、そんなに……

思わず私の声は高くなりました。

——ハ、ハイ、あの、この方が便秘で仲々に大便コトが出ないと仰言るものですから……

ふと、頭を上げたクランケは、不審げにU子を見つめ、そして、自分の奇妙な浣腸の恰好を、医師とは云うものの、男性である私に目撃されて、途端にパツと頬を染めました。次いで、大慌てに

——看護婦さん、私、便秘だとも何とも申しませんことよ。貴女が出易いからと云っていつ迄もなさってるんじゃないの。

ときめつけたのです。

プレの責任は、医師の責任でもありますから、私は咄嗟に

——よし、分った。それ位でいいだろう。早く手術室へお連れしなさい。

そう云って匆々に戻ったのですが、その時、私はU子が浣腸マニ

アであることを判っきりとしたのです。若い人妻の、羞恥にとり乱した肢態が、臉に散らついて離れません。ギネの医師ともあるうものが、たかが浣腸の現場を見たからと云って、何をそう心を動かしているのだと、自分の心に叱りつけたのですが、U子の一件だけは、仕事を興味本位に取扱っていただけに、妙に心に引っ掛るものがあります。小器具備品、一切、任しきりにしていた私は、その時、又しても、ある不自然さに、ふと気付いたのです。

最近イルリガートルが頻々と割れたと云っては買い足していることと、カテーテルが不足している事です。私は足早に器具の陳列してある医療器具ケースを点検して見ました。二、三月前に問屋から入れさせた、三本のエネマシリンジが一本しかありません。それに特大の二〇〇CCの浣腸用の注入器も見当たらないのです。三〇CCの浣腸器も数本あったのが一本もありません。スポイト式の洗滌器も何処へ行ったのか――。

もうそうなると可怪しい事だらけです。検使用の硝子棒に腔温度計、それに最近、使わないので、隅にかためておいた、古いツベロ木膨脹子、ブージー等々……。

すっかり消毒やら一切をU子に任し切っていた迂かつさに、私は今更の如く、淡い後悔を覚えずにはいられませんでした。考える迄もなく、浣腸やら、奇妙な遊戯に使えるもの許りだからです。

U子はクランケへの浣腸に、異常な関心を示すと同時に、己れ自身も亦浣腸への興味に、何らかの方法で、その願望を満たしているに違いないと私は考えました。

兎も角、卵管結索を終え、一息ついて、私は腹心のS子と呼

びよせました。プレ全員が病院裏の寮で寄宿している組織上、その女許りの、禁男の動静を知るにはS子の様に、私とひそかな関係にある娘もつくっておかなければプレ達の動静は分らないからです。私はS子に、U子の一件を話しました。最初、スパイのような役目は嫌だと、駄々をこねたS子も、今ではすっかり信用のおける私のアシスタントになっていました。

――そう云えば、私も何だか、変だ変だと思っていましたの。U子のグループったら、時々遅くまで、U子の部屋に集っては、妙な声を出したり、急にシーンとなったりしては、お湯を沸かしたりしているんですよ。

――U子のグループと云うと誰と誰……？

――そうね。N子、M子、T子、この三人ですわ。あの四人はまるでSみたいよ。

何しろプレ全員で三十数人からいるのです。N子は内科、M子、T子は外科――それがどうして知り合ったのでしょうか……。軌を一にするものは、お互いの動物的な嗅覚と感触で分るものな



のでしょう。恐らく四人は、ひそかに、女同志で妖しい遊戯に耽っている事は、略々間違いないようです。

——何とか、彼女達の動静を知る方法はないものかね……。

——あの、仲間に入ることですわ。

事もなげにS子は、サラリとそう答えました。確かにそれは一番確実な探求方法です。私はS子に彼女達の集りが必ずや浣腸やアヌスへの願望に相違ないと云う事実をあきらかにしました。

——一寸、交って面白そうですわ。

S子も亦、むしろ興味をそそられたように浮々と快諾しました。

一週間、十日経ち、S子はどうかやら、U子のグループに溶け込んだ様です。

——いよいよ今夜お呼び出し……。新入者の歓迎会ですって。ええ、勿論、私が新入者——

素早く、私の耳許で囁いて、S子はチラリと片眼をつぶると白衣の裾をひるがえして走り去りました。

今更、多少、大人気ないようにも思いましたが、U子の秘密を知る喜びで、私も胸を弾ませて、S子の報告如何と待ち構える気配だったのです。

翌日、往診にかこつけて、私はS子連れて、病院の自家用車を行きつけのホテルに走らせました。私は白衣をぬぎ、S子も亦、走る車中で看護服と私服を巧みに着換えておりました。

——どうだった？。部屋に入るなり、私はニヤニヤと笑いそうになる心を押えて、Sに聞き訊しました。



——先生の坎は当たったわ。御想像以上よ。
——そんなに凄いかね。

——歓迎会だからと思って油断してたら、とんだ歓迎振りよ。部屋に入るなり、四人がものも云わず私を押えつけたわ。U子がリーダー格ね。イルリガートルでどんどん温湯を注腸するの。見る見る私のお腹はふくらんで苦しくなり出したの。口を押えられているので、夢中でもがいていたけど、まるで妊娠十カ月程にふくらんで、それから、皆の見ている前で、お腹の湯をすっかり出さされてしまふの。それが二回続いたら、お水のほか何も出なくなっちゃった。彼女ったら、このグループへ入る為の、洗脳じゃなかった、洗腸の儀式だって云うの。

私は思わず、唾をゴクリと吞んだ。

——いろいろと聞いたわ。浣腸の我慢くらべと云ってお互いに、エネマシリンジや、スポイトや、浣腸器などで、浣腸し合っては、誰が一番よく頑張り通すか。又、誰が一番沢山、注入出来るか。そして浣腸を終ると栓をするの、T字帯の様なもので。他にもまだまだあるらしいわ。

——全く驚いたね。

——もっと面白いことあるわ。導尿するでしょう。そしてすぐスポイトで温湯を注入するの。又導尿して、綺麗になったあと、スポイトで牛乳を注入するんですって

——うーむ、恐れ入った、困った娘達だ。

——随分、炎症起したり、雑菌が入ったりすることあるらしいけど、ミッテルはお手のもの。トリコマイシンや、サルファ剤で、適当に治しては、続けているって話よ。もうこの位でいいしう。これ以上、私の口からは云えないわ。集団的なSの異常性愛だわ。

私はU子達を如何に処分しようかと迷いました。これは飽くまでプライベートの問題だからです。けれど、医具がチョイチョイ紛失して、そんな行為に使われてはたまったものでない。U子さえ、何とか始末すれば、あとは何とかなると思いました。

そんな折も折、U子が突然盲腸炎になりました。ハームシャーレを除去し、イルリガートルで浣腸をうけるU子は、盲腸の激しい痛みも忘れたかの様に、恍惚とした顔で、S子の握る水止めの手許を見つめていました。もっとももっとと、まるで要求でもするかのように……。

アッペを機会に治癒後、友人の病院に転出させましたが、一旦覚えた浣腸遊戲に、U子は、今日も何処かの空の下で、只管に耽っている事でしよう。

ミイラ取りが、ミイラになる。そんな事がフト思い出されるのです。私の目を忍んでは、S子が、ひそかにU子を慕って遊び？に行く様になったからです。いや、とうとう私とS子との一件まで喋べっちまいましたね」

×

×

×

「随分、浣腸マニアは奇クにもありますね」

ナイロン氏は興深げにドクター氏に云いました。

「羽村京子に端を発した、浣腸イズムが、今では公然と奇クを濫歩していますものね。謂わば第二のセックスでしょう。紙一枚の、書くに書けぬ感情の吐け口が、自然そこへと話を落すのでしょね」

ドクター氏はワインを口にすると一同に云ったのです。
「だから、ドクター氏の今の話も、真実、女同志のSなら、当然、セックスだってある筈でしょう」

スバル氏がきりこみます。

「勿論ですとも、唯S子が、それ以上は云えないわと、逃げている所がミソですよ。それでいいじゃないですか。あとは御想像に任す。皆さんだっていざ自分の番となると、そうでしょう。ズバリいえるなら、スバル氏に、このあとを話して頂くとしましょうか——」

ドクター氏はワインの勢いも手伝ってか、スバル氏を指名したのです。

「やりますよ。だが本になって、全篇これ、伏字と脱落と、オミット、これじゃ仕方ないでしょうからね。私はやはりサジズムでゆくのが柄に合ってる様です」

指名された手前、止むなくスバル氏は重い口を開きました。

第二十話 鼻 環

「皆さん、体験談と云う触れ込みですから、これも私の体験談としておきましょう。

戦前、満州帝国、華やかなりし昭和十五年頃、私は奉天（瀋陽）の、或る貿易洋行に身を置いていました。

奉天の中央通りが千代田通り、右が浪速通り、左が平安通りと、東京、大阪、京都の名をとった大路が三条に放射線に伸び、その三路を横につなぐ通りが、奈良に名をとる春日町と、仙台からとった青葉町なのです。

夜ともなると青葉町は人浪にうづまり、日本人は征服者としてのよき時代を謳歌しておりました。

青葉町の一劃に平康里と呼ぶ、満人の紅灯街があるのです。開墾子と云って、西瓜の種でお茶をのみ、姑娘と語り、精々接吻か握手

をする程度なら五十銭でした。一元五十銭出すと、本式に泊まりとなり、一元なら一回O・Kと云うわけです。

内地よりの召集令状の報をうけとり、数日後に帰国を控えたある夜、私は満州での最後の想い出にと、平庫里の裏街の『見る見る看々』と你呀が呼び込む、シロクロの露路裏の巷へ、酒の酔も手伝って足を運んだのです。姑娘相手の単なる交わりの一夜よりも、もっと激しい、何らかの刺激を求めていたのです。

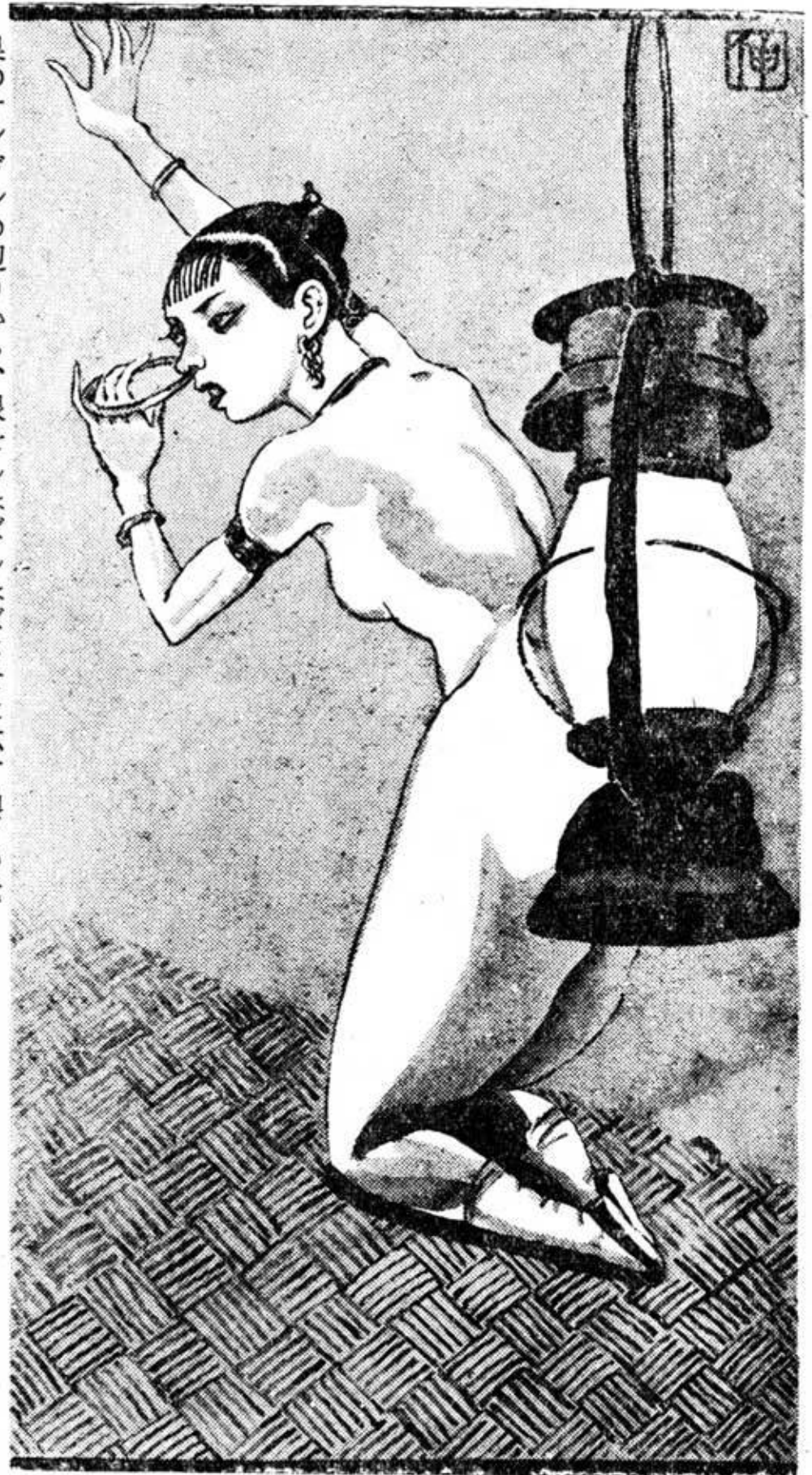
茲にはシロクロ始め、イヌシロと称するものや、換骨脱胎の小孩の哀れな見世物、グロテスクな片輪の姑娘の裸踊り——など、謂わば人生の敗残者の溜り場でもあったのです。協和服と云う、戦時中の国民服に似た服装で、私は冷かして歩きました。懐ろには、会社の同僚や、出入り商人に貰った餞別が百三十円程暖かくふくらんで如何に遊んでも、それは一夜では消費しきれぬ金額でした。

背広のオーダー一着三十円、奉天—大阪間十円なにがしの時代です。

映画「望郷」のカスバにも似た裏通りの迷路をさまよううち、私はぐっと服の端を引っ張られました。酔眼にもその引いた相手は夜目にも若い、未だ十六、七才の真紅の支那服を纏った姑娘でした。老人にはよくみかけるテンソクですが、この姑娘の足はまるで小学一年生程度の、六文か六文半の可愛い足でした。ピタリ足についた絹の靴が愛らしく、私は誘い込まれるように姑娘に手を引かれて、ぐるぐると露路を廻りました。

終始、彼女は無言でした。粗末な板戸を開くと、二坪許りの土間に、カンテラの灯が、にぶく回りを照らし出していました。

——噫、先生、来了、（まあ旦那おこし）



奥のオンドルの辺りから、眼をしょぼしょぼさせた六十過ぎの老婆が立って迎えました。

片言交りの満語で、二時間一円五十銭と云います。高いので値切ると、老婆は没法子メイフアーズ（仕方がない）といった顔で一円三十銭にしました。

条件は二時間、姑娘にいかなる事をしてもよいと云うのです。そして彼女が啞である事をその時、知ったのです。

謝々シヤシヤと一円三十銭受取った老婆は、それを大切そうに袋に入れ、忽ち声を荒げて、彼女に何事か口早に喚きました。素直に彼女は真

紅の服をスルリと脱ぎました。白い靴下と、絹の靴、それに耳環と、腕環だけが、彼女に残された唯一のアクセサリーでありました。

——姑娘、イヂメル、ヨロコブタタク、ナニシテモヨイネ——老婆はその服を折りたたむと片言の日本語でそう云ってさっさと持って出ていったのです。カンテラの許にほんやり照らし出された裸身に、青黒い斑点が点々と肌を染めていました。打擲の跡が歴然と現われているのです。不幸な娘——一瞬、私は、感傷的になりましたが、酒

の力は既に青麦の様な、発育の足らぬ姑娘を力一杯、粗々しく抱きしめておりました。あゝ、あゝと拒否する様に、彼女は啞の咽喉を動かしましたが、されるが儘に、汚れたアンペラの床に横たわりました。

私は手持不沙汰に、姑娘のひ弱な裸体を見下していました。二十才の私には、到底、弱い女をいじめる程の気力はなかったのです。思えば、私の実に純な時代でもありました。

私が不気嫌なのだと誤解した姑娘は、しきりに手真似で何か語りかけるのですが、一切が不明なのです。姑娘はフト羞恥を顔に走ら

せましたが、思い切った様に、オンドルの下から、直径十センチ程の丸い真鍮の輪をとり出しました。細いドライバーの先端だけのよ
うな棒で、環の一個所をひねると、小さいネジが外れて、環は二つ
にパクリと割れました。彼女は割れた環を自分の鼻孔へもって行く
と、少し力をこめて押し入れました。環の先端が、鼻の孔の右から
左に穿孔されて、彼女は再び、細い棒で、器用に小ネジを環と環と
に合してはめこんだのです。小さい顔の鼻に、丸い環が牛の鼻輪の
ようにぶら下りました。呆氣にとられる私に、彼女はニツと微笑み
かけて、アンペラの下から、数枚の手垢で汚れた、極彩色の稚拙な
絵を私に差出したのです。

絵の背景は、中国の上流家庭の様な華麗な、けばけばしさで調度
品やベッドも紫檀の極上の豪華なものに描かれていました。薄暗い
アンペラの寝床とは何と云う相違でしょう。

最初の絵には卓を囲んで麻雀をする大人達の横に、天井から鼻環
に縄を通して吊り下げられている、美しい姑娘の裸の姿が描かれて
ありました。宙にういた姑娘の足許におかれた火炉に、物々しげに
烙印をする鉄棒が赤く塗られて挿されており、二本の脚は熱さに耐
えかねて宙に踊っているのです。

二枚目は、四ツ這いになった姑娘の鼻環に縄を通して、大人が笑
顔で引っ張っている図でした。姑娘の後から、今一人の大人が、尖
端が房のようになった棒の鞭をふり上げているのでした。

三枚目は逆吊りになった姑娘の鼻環に、分銅が二つ吊られて、そ
れを揺すっている大人。

四枚目は両脚を鼻環に括りつけ、その足を天井から吊ってある猪
吊りの姿で、後手に縛った両手に分銅が二つ吊られているのです。

私の心臓は、それらの四枚の絵を見つめるうちに早鐘のように打
ち出しました。

悲しげな笑みをたたえて、啞の姑娘は、私の目前で鼻環を二本の
指で動かすのでした。

この狭い二坪足らずの土間で、絵の様な華美な惨酷図を現出さす
事は所詮、無理です。

私は我知らず、彼女の鼻環を引きよせました。よろよろとよろめ
いて、彼女は体ごと私の懷に倒れかかりました。

パツと離れると、大急ぎで、姑娘は土間の隅から、鞭打の細い棒
と、数条の縄をもち出して来て、私の手に持たせました。何とか一
円三十銭分だけの遊びをさせ様と、彼女はいじらしくも、必死に氣
を配っているのです。

私はドサリとそれを土間に捨てたのです。アンペラのベッドに腰
を降すと、姑娘を抱きしめました。あくどいにんにくと韭の臭氣が
ずっと鼻腔を撫でましたが、既にこれらの臭いに慢性化していた私
は、この名も知らぬ姑娘を、唯、力強く抱きしめ抱きしめしていたに
過ぎなかったのです。

軍隊の召集を控えて、私の理性は、辛うじて姑娘との交情を避け
ました。十中のうち十までが、病菌の保有者であると、常々教えら
れている私は、いかに若く無鉄砲ではあっても、流石に手を出しか
ねたのです。その代り帰国土産に、うんと非道い目に逢わせてやれ
——と心の底の何処かが囁やくのですが、目前に、鼻環をつけ、生
傷だらけの、痛々しい彼女の青白い肌を見ては、哀れさが先に立つ
たのでした。

私は帰り支度をして、酔もさめはて表へ出ようと思いました。と、

忽ち、何処からか先刻の老婆が姿を見せ、シーサン、タメアルネ。と嘲笑の如く、齒のない口を開けて、ニタニタ笑ったのです。

迷路に出た途端、二人の協和服の男が、私の顔を見て、意味ありげにやりと笑いました。私はぐっとにらみ返してやりました。

——フン、何も知らねえんだな。さっきからのお前のザマがよ、手にとる様にすっかり見られてたんだぜ。若い男が素手で帰っちゃあの女が泣くぜ——

私は愕然としました。私達の行為自体が既に又「見る見る看々」の対象物でもあったわけです。あゝ、何もしなくて本当によかった——。

迷路はさながら地獄図絵。鼻環の裸の姑娘を鞭打ち、責める地獄の盲者の浅ましい姿を、誰かが覗き見している。服を持ち出され、事のすむ迄出るに出られぬ、あの啞の姑娘の、何と幸せ薄き生業な

望 願 化 馬

彼の幻想

柳手智市

私は、半坪足らずのせまい靴脱 靴音に耳を澄ます。初夏とはいえぎ場のコンクリートの上に、ピタ ランニング・スタイルの膝にコンリと正座してドア越しの廊下の クリートの冷氣が泌みる。

ることよ。恐らくは、売られ、啞にされ、粗食に甘んじ、鞭に泣き、鼻環に哭いて、うらぶれた露路の片隅に、ごみのように散って行く事でしょう。思い出す度にうら悲しい、スバル氏若き日の純情の コマです。

スバル氏の話は終わりました。霧雨は、とめどなく降り続いて居ります。

物悲しい、やるせない様な気分がクラブに満ち満ちて、ワイン氏が、何ものかを振払う様に、勢よくソファから立上るまで、誰も皆鼻環の啞娘にそぞろ一抹の同情の想いを致していたようです。

クラブの紫煙は、明け放された窓から、夜の雨に散って行き、それと共に八人の退屈男も、それぞれに重い腰をあげたのでした。

(第七夜おわり)

廊下を挟んで両側に十五ずつ、三十部屋のアパートの住人達の足音は、靴、下駄、草履、サンダル等、種々雑多な響きを持って入り交じる。その中から、私はたった一つの靴音を、敏感に、そして正確に聞き分けるのだ。

その靴音が扉に近ずくと、私はノックがされるまでにドアを静かに開けなければいけない。入口は狭い。私が坐っているのは、足の踏み込む余地があるので、私は平伏して、お迎えの礼を済ますとすぐに向きを代え、四ツ這いになって、背を差出す動作に移らなければいけない。このタイミングがむつかしいので、平伏は正確に、しかも丁寧に行わねばいけないし、背を差出す動作がそのために遅れてはいけない。ハイヒールが、ドアの内側に一歩踏み込まれるのと同時に、平伏をし、歩く歩調と



変らぬ速さで他の足が前に出される瞬間に、背を差出す必要があるのだ。一瞬でもハイヒールの主が停まらなければならぬようでは及第とはいえないだろう。

歩いているのをスッと掬い上げるような調子で、ハイヒールの主を私の背の上に載いて、私は静かに、だがモタツカないように居間を通り過ぎて、ベッドの横の洋服簞司の前まで這って行って、背中の主の腰を下す場所が、ソファな

り、椅子なり、ベッドなりに、私の意志ではなしに替ってから、改めて正座し直して、眼の前にブラブラしている素晴らしい脚線を描き出す足先から、ハイヒールを恭々しく両手掌に戴くのだ。

戴くと、すぐに捧げ持つ姿勢になって、膝行して、私の寝床の上に取りつけてあるシューズボックスに納め、直ちに引返して、改めて「お帰りなさい」のご挨拶の平伏をし、突出される足の爪先に接

吻を許してもらおう。

外出着と部屋着の着替を手伝わせて戴く時には、余程、細心の注意を払ってしないと、思わぬ平手打を受ける恐れが多分にある。主人は気が多くて毎日部屋着が代るし、今日はどれがお気に召すかということは、顔色だけで見とらねばならないからである。毎日、二つや三つの平手打は覚悟の上で、これと思うのを捧げ出すのだが、全部のものが気に入らなくて、部屋着は十五着あるのを、一着に打ずつでことごとく否定し去った上に、シューミーズ姿で過す場合も再々あるという、むら気な美しいご主人様だから、余程の慎重を要する。

勿論風呂場でのお世話も、慎重と丁寧を必要とするが、食事の配意は一層に気を使う。食卓の足許に正座して、主人のフォークの動き方を見上げる時には、全く気がでない想いだ。私の食事である残りものが少くて、私がひもじい思いをする時程、嬉しく感じることはない。

帰宅から風呂場までの時間がタッピングよく快適に運び、食事が気に入って残りものが少い時にはきまって、主人は、私を馬にならせて、部屋中を乗り廻す。多分腹ごなしのお積りだろうが、そんな時は、私は必ず満腹している訳はないのだから、ズッシリとした主人の体重に押し潰されそうでもヨタヨタと這いまわる。グイグイと胴を締める脚に力加わり、つんのめる程の強い尻打ちに、私は幾度か、悲しいイナナキを挙げ、息を喘がせながら頑張ろうと努力するのだ。

私が、押し潰されそうになるのをやっとなぐって這い廻っているのを、背中のご主人は面白そうに見下しながら容赦なく乗り廻して、含み笑いをしては、尻打の合間に首の後を叩いたりつねったり擦ったりするのはこたえる。だがその苦しみこそ私の生甲斐なのだ。

○ ○ ○
彼は、天井の破れたのを眺めながら、そんな幻想を描いていた。

悪魔の日

―ある切腹マニヤの告白小説―

黒 岩 鉄 矢

パー「アガサ」の常連となった私は、そこでユミ子という女を知った。彼女は、若い女の切腹する姿をじかに自分の目で見たいという私の夢を一万円の代償で実現してくれることになった。

その日、私は三十五ミリカメラを肩に「アガサ」の二階にある彼女の部屋を訪れた。

(五月号所載「悪魔の日」前篇の梗概)

私がウットリ見とれていると、彼女は「ブラウスまた着るんでしよう。一番上のボタンだけかけときましようか」といって、一旦脱いだブラウスを手にとった。私の気持はまるで見透しだ。それからスカートのホックを上の一つだけ外して左手の親指を内側にかけてグイと臍のあたりまで押し下げてから三宝の上の短刀の鞘を払い、抜き身を一旦三宝においてから更めて逆手に握って膝の上に軽くおき、左手を脇腹の腰骨より一寸、上部にあて

て、少しく腹の皮を引っばるようにしてから私の方を見て「どう？ これで」といった。私は彼女の演技の余りの美事さに、思わず息を呑んだ。彼女は膝の上の短刀を左脇腹に擬した。切尖と皮膚との間は、せいぜい一分、その間隔を正確に保ちながら、ゆっくり右に移動さしていく。いつの間にか歯を食いしばって眉をよせ苦痛の相を見せている。右手を十分、脇腹まで引きおわると、ガツクリ力を抜いて膝の前面に落すまで、私は夢中で予定の十枚のシャッターを切った。

「こんどは着物よ。着換えるまで下に降りて頂戴」といわれた時にはホッとして急にはげしい渴きを覚えた。ものの十五分もしただろうか、「もういいわよ」という彼女の弾んだ声を聞いたときには、気持もかなり落着いていた。彼女は、すっかり白無垢に着換えて黒い帯をしめて蒲団の上に端座し「どー？」といってニッコリした。そして「あたし何だか、とても嬉しいの。早く始めましょうよ」というなり坐ったまゝ帯を解きにかかった。解いた帯をうしろにやってから、しごきをほどいて膝を縛り、腰紐を思い切って下腹、ほとんど腰骨にかかるくらいにキリリと廻してから、両手を懐ろに入れたと見るや、ゆるん

だ胸元がパツと左右にわれて、なだらかな肩の線と張りのある乳房、それから特に今日のために締めたらしい純白のお腰が一気にあらわれた。

それから、前の時と同様にして短刀を逆手に握ると、いたずらっぽく目で一寸、私を見てから、急に身体をかがめて、腹のくびれに短刀のきつ先を少し挟んで「どおこれ！」とおどけて見せた。私が慌てて「馬鹿なことするな！」と短刀を取り上げようとすると、その恰好が可笑しいといってケラケラ笑い出した。

着物での演技は、前回以上の出来栄であった。今度は左脇腹にあてた手の指の間に切尖をさし込み、短刀と一緒にジリジリと右に移動させた。恰度、流れ出す血や腸を片っぱしから押えるかのように。苦悶の表情も一段と真に迫って、短刀が進むにつれて喰いしばった歯の間から低いうめきさえもらす。私は何度ギョツとしたか分らない。私は興奮に慄える手で夢



中でシャッターを切り、気がついた時にはフィルムは、すっかり終わっていた。

私は「ご苦労さま、やっとすんだ」といっ

たとたん、ほとんど立って居られないようなひどい疲れに襲われた。おまけに足は、ぶるぶる慄え、咽喉はカラカラに渴いていた。最初の一枚を撮ってから、どれだけ時間が経ったのだろう。考えて見ると、そんなに長くはない筈なのに、私には半日以上にも覚えた。私は流しに降りて水を飲み煙草を吸おうとしたが、手が慄えてマッチが擦れない。とうとう諦めて又、二階へ上ったら、驚いたことに彼女はまだ肌も入れず放心したように坐っている。私が再び「もういいんだよ。御苦労さま」というと、彼女は私の顔をしばらく見つめていたが、急にきまり悪そうに小さい声で「今度は、あたしからお願いがあるの」と前置きしてから彼女のいい出したことは私を驚かした。

「あたしって、どうかしてるんでしょか。こうやって切腹(彼女がその言葉を使うと、いかにも愛らしくいじらしい)の形をしていると全身がキューツと引きしまるようない気持ちになり、いよいよ短刀を

お腹に当てると、そこから身体じゅうに、うずくような感じが伝って、夢のような気になるのよ。それで若し、あたしが、あたしの好きな人と一緒に切腹が出来たらと考えたときに、たまらなくなっちゃったの。次郎さん、後生、お願い。一度でいいから、あたしの切腹の相手になって下さい」「だって短刀は一本しかないしそれにカメラはもうしまっちゃったし」と私が云いかけると、彼女は少し怒ったように「写真なんかいいじゃないの、いやならいいわ」という。「しかし、刀が一つじゃようがなからう」と私が答えると、彼女はしばらく考えていたが、

「心中のときは女は気が弱いから大抵男の人に先ず殺して貰うでしょう。だから切腹だって何も同時でなくてもいいと思うの。あたしは女ですから気おくれがして中々お腹に短刀が突き刺せないでしょ。そこで貴方があたしと同じに双肌脱ぎになって切腹の用意をした上で、あたしのうしろから抱くようにして刀を持ち添えてお手伝してほしいの。あたし自分の大好きな方にお腹を切っていただくなんて考えただけでも……」私は即座に「お安い御用だ」といって双肌を脱いだ。一瞬、彼女はまぶしそうな顔をした。

今度は一本の短刀を二人で持つので私は柄を、彼女は刃を持つことになった。私は彼女に大判のハンカチ二枚を渡した。彼女はそれを幾重にも折って叮嚀に刃にまきつけ、何度も握り工合を試した。私が彼女のうしろにまわると彼女は白いお腰を左手でグッと押し下げ右手にハンカチを巻いた短刀を握って「早く」と私を促がした。私は自分の左手を脇腹に当てた彼女のその上に重ねて右手で短刀の柄の方を軽く持ってしばらく彼女の膝の上に手を休めた。突然彼女は左腕で私の腕を抱えこむようにして、下から私の顔をふり仰いで「嬉しい」と一言いった。私はこの時ほど彼女の顔を美しく思ったことはなかった。

それから恐ろしい事が起った。短刀をもった彼女の手に力が加わったと思ったとたん、ジリジリと手許に引かれた。私は「危い！何をすると」と叫んで引かせまいと柄を握りしめた。彼女は力を抜いて「大丈夫よ」といって「ククッ」と笑った。しばらくすると又、彼女の手が力が加わった。私は慌てて又、柄を握りしめた。

こんな遊びを繰り返していれば、いつかは取返しのつかない大事に至るのは火を見るよりも明らかなのだが、二人ともプレイに夢中

になっているので、それに気づかない。彼女は刃を手前に引こうとする。私は引かせまいと柄を握る。何回目かのこうした遊びの最中に彼女の足がしびれたのだろう。膝をもそもぞ動かしたはずみにお腹の位置が少しく狂って、アッというまに切尖が皮膚にさわった。しまったと思って上からのぞき込むとまだ血は出ていないが、小さい薄桃色の三角形の切創が見えた。が彼女はまだそれに気付かないらしい。もうこうしてはいられない。「離せ」と叫んで、柄を思い切り前方へ引っばるつもりで、間違えて力まかせに手前に引いて了ったのだ。

それまでは彼女の引く力と私の押える力とが辛うじて釣合いを保っていたのだが、今度は私の満身の力が彼女の力に加わったのだからたまらない。グザッとはかりに刃は三寸近くも彼女の腹に喰い込んだ。

アッと思ったのと「ヒー」という悲鳴と同時に叫んだ。私は「離せ、離せよ」と叫んでなおも刃を抜こうとしたが、彼女は手を緩めるとなお深く突き込まれるとでも思ったのか、狂気のように押さええはなさない。そのうち苦痛のために左向きに身を捻ったので刃は更に右手に内臓を一寸ほど剔った。新らし

い悲鳴が起った。流れ出す血汐はコクコクと音をたてて刃に伝わり彼女の手も私の手も真赤に染め、更にそれが手から滴り創口から流れ出し、彼女の白い腰巻はたちまち半ば深紅に染まりシートの上から畳の上までみみずのように留っていく。「次郎さん、あんたは……」とまで云った彼女の言葉も、あとは苦痛のため続かない。彼女の両乳房とも玉のような汗で光って鮮血の中に流れ込んでいく。

突然彼女は「もうだめ、殺して」と叫び出した。私がためらっていると「早く、引くの」といって盛んに首を右に振る、右に向って一文字に切れという意味だ。私は「ユミ、御免よ」といいざま力まかせに刃を右に引き絞った。一寸、二寸、腹は次第に口を開いて切り口から白い寒天様の脂肪が見える。それが一緒に切れていく。その下にうす青い膜が見える。腹膜なのだろう。それも一緒に切れていく。三寸、堰を切ったように腸が出はじめたもう血はほとんど出ない。四寸、腸はどんどん流れ出す。彼女の呼吸はすっかり浅くなった。五寸、全身に痙攣が起った。乳首がピクピクとした。六寸、私は彼女の耳許に口をつけて「俺も行くぞ、まってろ」と囁いた。瞬間彼女の苦悶の顔が上半分は泣き顔、下半

分は笑い顔に変わった。その顔が急にゆるんだと見ると、首がグラツとゆれて、身体が支えを失った棒のようにドウと前にのめった。

× × ×

人間は彼が感受し得る限度以上の衝撃や興奮を受けると、一時空虚な放心状態になるらしい。彼女の絶命を見届けてからの私が正にそれだ。世間がシーンと静まりかえったようだ。数分前まで私の慌て方が可笑しいと云って笑った彼女が今や生命のない一個の物体となって横たわっているのが不思議なようだ。気がつく、私の両手は二の腕まで血で真赤だ。しかし着物には始めから双肌脱ぎになっていたのと彼女の背後にいたため血痕らしいものは見えない。私は先ず流しに行こうと階段を降りた。

流石に足がふらつくが手が血だらけなので手摺につかまることが出来ない。仕方なく壁に背中を押しつけたまま、擦るようにして横向きに降りた。流しでは、いくら洗っても中々血がとれない。見る見るうちにタイルが真赤になっていく。私はたわしで力まかせにタイルを擦った。やっとのことでも手もタイルも赤味がとれたので、ちょっと匂いを嗅いで見てから肩を入れた。幸いなことには流しの水は

そのまゝ大下水に入るようになっていたので流した血が人目につく気遣いはない。それから又二階に上りカメラを肩にかけてから今一度死体を見た。血はすっかり凝固していた。再び階段を下りて扉を開けようとしたら人影がすぐ前を過ぎるのでハツとしてまた閉めた。今出るところを見られてはまずい。しばらく鍵孔から外を眺めていたが頃合を見計らって思いきって戸をあけた。とたんに余りの明るさに頭がクラクラツとした。

それから怪しまれまいと思って胸を張って歩いたが普段そんな歩き方をする自分でないのに気がついて少し肩をおとした。こんどは妙にギコチない。平常を装うということは、こうまでむつかしいものかと思った。しばらくすると行手に交番が見えた。しまった。別の道を通るんだ。しかし今から引き返しては怪しまれる。私は度胸をきめてその前を通りすぎた。幸い巡査は向うを向いていて、私に気づかなかった。私も遂に巡査を恐れる身となったのか。

家に帰ると妻が乳房にハンカチをあてながら去年生れた子供に乳を飲ましていた。二階に上ってから気をしづめようと横になると妻の乳房と白いハンカチが目に見え浮かぶ。すると



ユミ子が私のハンカチを膝の上で、叮嚀に幾つにも畳んで刃に巻こうとしている様を思い出した。と、突然、雷に打たれたような気がした。しまった、ハンカチを置き忘れた。それも私のイニシャルまで付いているのを。今からでも遅くはない。取って来ようと階段を半ば降りかけてハタと立止まった。待て、この事件が知れるのは時間の問題だ。この時になって私が再び現場を訪れるのを目撃する者が出たらどうする。飛んでもない。絶対にいかん。しかしハンカチが……取りに行くなら今だ。一刻を争う。私は思い迷って階段を上ったり降りたりした。全身がカーッと熱くなって一面に汗ばんだ。いても立ってもいられないというのはこんな気持を指すのだろう。とにかく現場の近くまで行って見よう。様子を見た上

で何かうまい思案が見附かるかもしれない。

露地から往来に出てしばらく行って角を曲ると「アガサ」が見える。家の前には既に五六人の人がたかり、戸口には巡査が立っている。「もうおそい」と思うと却って氣持が落着いた。私はそばの煙草屋でピースを買って「なんかあったんですか」と聞いた。「それがあんだ、女給さんが双肌脱ぎでお腹を真一文字に」話し好きらしい太ったおかみさんは仰山に右手で腹を切る形をした。それから「さっきのマダムの顔色ったらなかったわ」とつけ加えた。「マダムは帰って来たんですか」私は馬鹿なことを聞いてしまった。

おかみさんは妙な顔をして「帰って来たから大騒ぎになったんですよ!」「で犯人は」またしてもバカなことを聞くとおかみさんは目を丸くして「自殺ですよ。あんだ」「いや犯人じゃない原因だ」と私が慌てて云うと彼女は「それがねー別にないらしいんですよ。何でも前の日にマダムに一万円無心して断わられたんで面当てじゃあなかるうかともいうんですけど、一万円はどこで都合したのか紙入れの中にあっただっていうし、もっとも以前に仲間の女給さんの前で『あたし死ぬときは昔のお侍のように切腹したい』といったこと

があるんですとか」この最後の言葉は可成り私を安堵させたが、いつまでこの口の軽い女を相手にしていると自分が何を云いだすか恐ろしくなったので逃げるようにして帰った。

夕方になると噂は家の方にもひろまって来た。それによると警察では女の力にしては傷が深すぎるのと、切腹のお膳立てが揃いすぎているのに不審を持って擬装殺人の線で指紋をとったり事件前後に出入した人間を目撃したものがないかと「聞き込み」を開始しているとのことだ。私は目の前が真暗になるような気がした。殺人となれば勝手を知ったものの、即ち常連が一応マークされる。それにハンカチのイニシャル、それに指紋、おお! 指紋はどれだけ残したことか。目撃者だって必ずいるに決まってる。最後に出るときこそ用心したが、その他のときは用心する理由もなかったのだから。

「ご免下さい」とさりげなく入って来る客を想像した。彼等はいつも最初はいんぎんだ。そのいんぎんさは次の瞬間、横柄に早変わりする。それから取調べ、留置所、検察庁、裁判、そして刑務所——ここまでは仕方がない、身から出た錆だ。しかし妻はどうする。会社は即刻減だ、退職金は出ない。明日からの生活

は。殺人犯の妻として近所からの白い眼、それに子供等は学校でどんな眼で見られるのだろう。しかも将来進学、就職、結婚、その時父が殺人犯と知れたら——私は両手で頭を抱えて声を上げてもだえまわった。

× × ×

ユミ子よ。昨夜以来考えぬいた。やっぱりお前の許に行くことに決めた。決心してみると氣持が晴れ晴れして今までの悩みは嘘のようだ。何故もっと早く決心しなかったのだろう。

この手記はもうじき終る。終ってからすることは机の上の短刀の鞘を払って逆手に持って心臓に直角に突き立てるだけだ。短刀をあてがってグンと半身を前にのめらせれば恐らく一分とたたないうちにお前のところに行けるだろう。人間の生命なんてはかないものだ。お前にはあのむごたらしい死に様をさせておきながら私がこんな楽な方法をとるのは卑怯だといわないでくれ。

お前はまた笑っているね、あの切腹の前に「うれしい」と云ってふり仰いだお前の顔が私の見たうちで一番美しい顔なら、断末魔に見せた半分泣いたようなお前の顔は私の一番印象に残る顔だ。お前は今その顔をしていく。ユミ子、その顔を続けていてくれ、すぐ行くからな。



—私の馬乗り歴—

どこまで話したっけ。そうそう、初めて人間馬にまたがった時のことね。それからあとも時々思い出しては、ああまたあんなことしたいなあって思ったけど、六年生頃になれば男の子と女の子は何だかパアッと別れちゃうし、それに中学の受験もあったりして、あんまり外で遊ぶことが無くなっちゃった。ママが入院したのが秋の終り頃だから——、そうか、パパは会社が忙しくって夜も遅いし、ね

ファンタジア

マゾヒスティカ

山本節男

えや相手の生活が半年も続いたかしら。

三人いたの、ねえやは台所ばかりすんのがタミヤ、奥の事はするけど主にパパの係りがアヤ、こいつは大分おばあちゃんだった二十八位いかな。それからもう一人はチイヤ。変な名前だけど但馬の方の娘で十七だった。私は十一位いだけど、もうずい分、大きくて、そろそろ女らしく……フフフ笑っちゃいよ。……クラスでは一番高い方よ。胸なんかもはってきて、セーターをきると男の子が変な目でみたりしたっけ。チイ助の奴ったら可愛い

い顔してるくせに時々憎たらしいこというの。いつだったか音楽会にきていくスーツをさ、その日まで間に合うように洗濯屋にいったのに、前の日の晩になって

“まだ参っておりません”

なんて、すましてんの。私は

“困ったわ、どうしよう”

と一人でくささってると、タミヤが

“あら、それなら、さつきチーさんが……”

チー助の奴、ニヤニヤしながら

“今日はエーブリル・フルでございます”

だって。

“こいつ、よくもだましたな”

私は少しカーツとしてチイヤにとびかかっていったの。そしたら私に手向いしてくるじやない。

“よし、そんなら徹底的にいじめてやる”

学校で男の子と取っ組み合いする位いへいチャラだもんだから“よき敵ござんなれ”とばかり組みついてやった。チー助も強かったけど、やっぱり御嬢様だから遠慮したのかしら。私が上になって押えつけちゃった。チー助の奴、畳の上にながながと伸びて、そのお腹の上に馬のりにまたがって両手で思いきり首をしめてやると、

“降参、降参”

といいながら、脚をバタバタして苦しがつた。そんな時さ、小川の事、思い出したのは、年上の女に乗っかるって何んだか男の子とちがうみたいだった。アヤが

“さあ、さあ、チイヤさん、あんたが悪いんだから早くおあやまりなさいよ。御嬢様も堪忍してやって下さいまし。もう降参してるんですから”

“いやよ、女中のくせに主人をだまして、その上、手向いしたんだから、さあ、どうだ、思い知ったか”

ほらさ、君なんか判る？あの気持ち——押え込んで股の間にしめつけてる時、下の奴がもがくと気持ちが悪くむずむずしちゃって、もっ

ときつく締めてやりたくなるの。ほんもののお馬にまたがった時に、ぐっとしめつけながら背中を後にひくようにして腰の力で下半身を前に押し出す時のあの気持ちよ。そうやって私もチー助の柔かいお腹の上でハイシ、ハイシとやったの。

“苦しい、かんにんして”

とか、すぐく大げさなんだけど、もうそうもがかないでおとなしくなったから、今度はもっと気分を出す為に、そう、これもお馬んときとおんなじ。逆にさ、上半身を前にこじめて少しお尻を浮かす様にして股の先の方で締め込んでやるの。そうすると、また苦しがつて身体を捻じろうとする奴を、ぐっと押え込む。そんなことを繰り返している中に、お尻が胸の上にきちゃって、スカートがめくれ黒いストッキングの靴下の上の方、靴下どめとこまで見えちゃう。自分のそんな格好みちやうと、余計、興奮しちゃって、とうとうお尻をずり上げて降参するチイヤののどに馬乗りんなっちゃった。チイヤの赤くなったほっぺたが私の太ももにペタペタとあたって、すごくいい気持ちだったわ。

“やい、どうだ。もうあんなことしないか”
“いたしません、決してしませんから御許し下さい”

“なんでもいうときくか。あたしのお馬になつて、よしというまで歩くか”

“ハイ、お嬢さま、何んでもいたします。チイヤが悪うございました”

“よし、それじゃ命だけは許してつかわす”

講談みたいな口調でそういって、私は頭をまたいで許してやった。うん、勿論、馬にしたわ。丁度、おさげに編んだ髪が二本あって手綱の代りになるの。アヤとタミヤも来て“おやおや、お嬢様ったら、お強い事。お馬のおけいこでございますか”

“そうよ、お仕置の為に馬にしてやった。お前達もいうときかないと、こうだぞ”

“ハイハイ何でも仰せに従いますから、どうぞ、お馬は御勘弁、御勘弁”

二人は、おどけて私の前にひざまずいて手を合わせた。私は、いばって馬にまたがったまま

“よし、おとなしく家来になるなら許してやる。コラ、ヨタ馬、さっさと歩かないか。ハイシ、ハイシ”

手綱を後に引くと、髪が痛いのか馬は思い出した様に歩調を早めたわ。全然いい気持ち。だって、自分の力で人間を馬にしたのは、これが初めてなんだもの。でも可愛いそうになったから一寸まがって、すぐ許してやった。だけど、それがきつかけつていうのか、馬乗りなんて、するまではなかなか決心がつかないけど、思い切つて乗っちゃえば、あとは気分が向けば、馬がいやだといったって、こっちが強引にまたがっちゃえば、おとなしくいうことをきくわよ。

それからチー助は勿論だけど、タミヤやアヤにも、ずい分、乗っかっていじめたわ。但し、パパやママのいない時にね、アハハ、シミツだもん。こんなことは、ねえ。

旅の一座流浪記

女^お形^{やま}緊^{きん}縛^{ばく}

阪東秀美

前記

浮草とはよく言いますが、本当にその浮草のように今日も明日も処を嫌わず流れて行く旅まわりの一座。なまじ名門ではないだけに、其の一座の毎日が種々変った話の種ばかり起

り勝ちで、素人さんには珍らしい出来事でも、其の道に入れば格別の事柄とも思えぬのは多いものです。此の告白は素人さんに打明けるわたしたち一座の体験の一つです。

わたしは当時の芸名が阪東秀美という其の

一座の若手女形でした。女形だけに又、告白や体験にも旅の恥はかき捨てじみた事も数あるのです。これは其の頃の回想記として書いて見たもので、文もまとまらず失礼なんです。が、女形緊縛の一種として読みすてて下さる事を望んでおります。

——〇——〇——

初夏五月の某日、わたし達の錦糸一座は、人口が約三〇〇〇と言われる浜に近い田舎町の「×万」旅館で遊びました。ドサ巡りと呼ばれる多くの小劇団に有り勝ちの、予期せぬ時に先乗りの手違いや興行主（太夫元）の都合で、其の日の舞台が中止になる事は別に珍らしくもないのですが、この日は劇場主の宅に不幸がありまして、とくに親身の扱いもして戴き、更に続いて仕事の世話もして下さるというので、錦糸一座は思い切って骨休めをすることになったのです。それに、運よく祭礼興行に買われた前日までの各座で満員の人気を得て、一度は久し振りに懐る具合も少しは暖かく、皆も上気嫌でした。

舞台衣裳を室中に吊り干し、ヅラ方^{かた}は手入れをしたり、天気もよし……で皆は浮きくと自分の時間を持って楽しめます。わたしは姐さん師匠（美也）と錦糸座長^{おやかた}と三人で茶を



飲み、つまらぬ話に興じていました。

そこへ先乗りさんが、主人の作って下さった次の興行地へダメ押しに出掛けていたのが満足した足取りで帰って来て、どの場所も割合やり易い活気のある町だったとか、この主人の顔も大したものだとかと笑顔で報告しました。その様子を聞き、座長も大喜びでしたが、その先乗りさんが座長に何か耳打ちしてから室へ、客を一人招き入れたのです。

この客はわたし達と同様で「湯島豊香」と言う一座の長をしている人で、十四、五人で巡業地によっては旧劇もやれるドサまわりの一座なのだそうです。錦糸座長とは大体、似

たような年配ですが、顔だちも仲々いいのでした。この豊香座長の出むいて来た話というのは、大体つぎのようなのでした。

一座はこの町から二里ほど南よりの田舎町で今夜の幕を開ける事になっているのに、運悪く演しものの立女形が非道い胃ケイレンを起し、寝こんでしまったのでした。其の太夫元の注文で「八百屋お七」を見せなくてはならない約束があつて困っている。世話もので歌舞伎の型はやらないが、他の幕は工夫して埋めるにしても「お七」だけは名指しのものでどうしようもない……と弱り切っている有様なのです。

結局の事は同業のよしみで見せ場だけでも「お七」役を一人助けて貰えまいかというのでした。相互に食いつ食われたの田舎まわり同志では、めったにない申出ですし、旅まわり仁義は仲々にむつかしいものなんですのに、あっちこちと心当りを走りまわっていた豊香座長の姿が想像されて気の毒に感じました。

助けておけば錦糸一座は今後

豊香一座の一枚上位に、万事が扱われる仁義は勿論のこと、こうした話が今後の世話を受ける各地方興行主へも道義上に良く重じられるという、同業の暗黙の規律が此の世界ではママあるので、満更、悪い話ではありませんが、それ以上に演しものを指された一座の面目が哀れでもあるのでした。座長に相談されて、考えていた美也師匠は

「秀さんには未だこんな話は無理だし、ねえ、座長、助けてあげようかねえ」と答えました。「うん、どうせ助けるなら、お前がいいだろうが、でも「お七」は大丈夫かなあ。うっかりトチったら、こちらさんに済まなひぜ」と座長は心配そうです。錦糸座長なら少しの覚えはあるでしょうが、新派を常打ちの美也師匠としては本当に初めてのものですから……。「いや、助けて戴けますなら、サワリの他は口舎せで演、つて貰ってもかまいません。実は、余ッ程のこと生人形で逃げようかとさえ思っていたのですから……」

生人形というのは舞台での見せ場をきめて登場人物は幕の開いてる間をジッと型を取って動かぬやり方の事です。だが美也師匠は「どうせやるならば、勉強させて戴く積りで口合せさせて下さい。サワリは身を預けます

からその様に……」と話は決まったのです。

大喜びで電話に出て行ったのを見送って、急にわたしは心配になりましたので

「姐さん、本当にいいのですか。『お七』は火責めやら何やらもあるのでしょ？ そんな事……」と問いかけますと

「ハハハハ、秀さんらしいね。そんな事はしませんよ。でも『やぐら』がある訳ね。ねえ、座長。一寸だけ型を見せて……」

それから二人の先生が話合って、室の中で「お七」の舞台合せを一時間ほどし、姐さん師匠もからんでザツと型を決めます。流石にわが座長も若返っての吉三ぶりは、慣れぬ内にも身腰が美しくきまり「お七」役の姐さんも忽ちこなします。芸の虫で吞みこみが早いのでした。一通りがまとまると、豊香座長は「いや、恐れいりましたね。実の処は、皆さんの劇場あとを追って掛けて来ましたので、噂にはよく聞きましたし、ポスターも見せて貰ったりしていましたが、どうにか今夜は息がつけますよ。あ、それから美也師匠、秀さんも是非、一緒にお連れになって下さい。素顔はすっかり男前ですが、わたしはポスターの粧り顔しか知りませんので失礼してましたけど、是非お遊びがてらに……」

わたしはつくづく自分の一座の格式を認識して、何となく誇らしい気持ちになっていました。こうして、わたしたち義兄弟は出かける事になってしまいましたが、さて、自動車へ化粧品や手廻りものを持ちこむ時になって、思い出して聞いて見ました。

「あの……町まわりもするんでしょうか」

「ああ、忘れていました。実は町まわりは、せめて内輪の者でと考えてたんですが、どうでしょう師匠、今夜の売りものなんで師匠の『お七』が出て戴けりゃあ恩に着ますよ。いやね、錦糸座長の前では言えなかったのですが、本当は秀さんには生人形を演って貰えますまいか……」

これには師匠姐さんも慌てて何かいおうとしましたが、わたしは袖を引いて

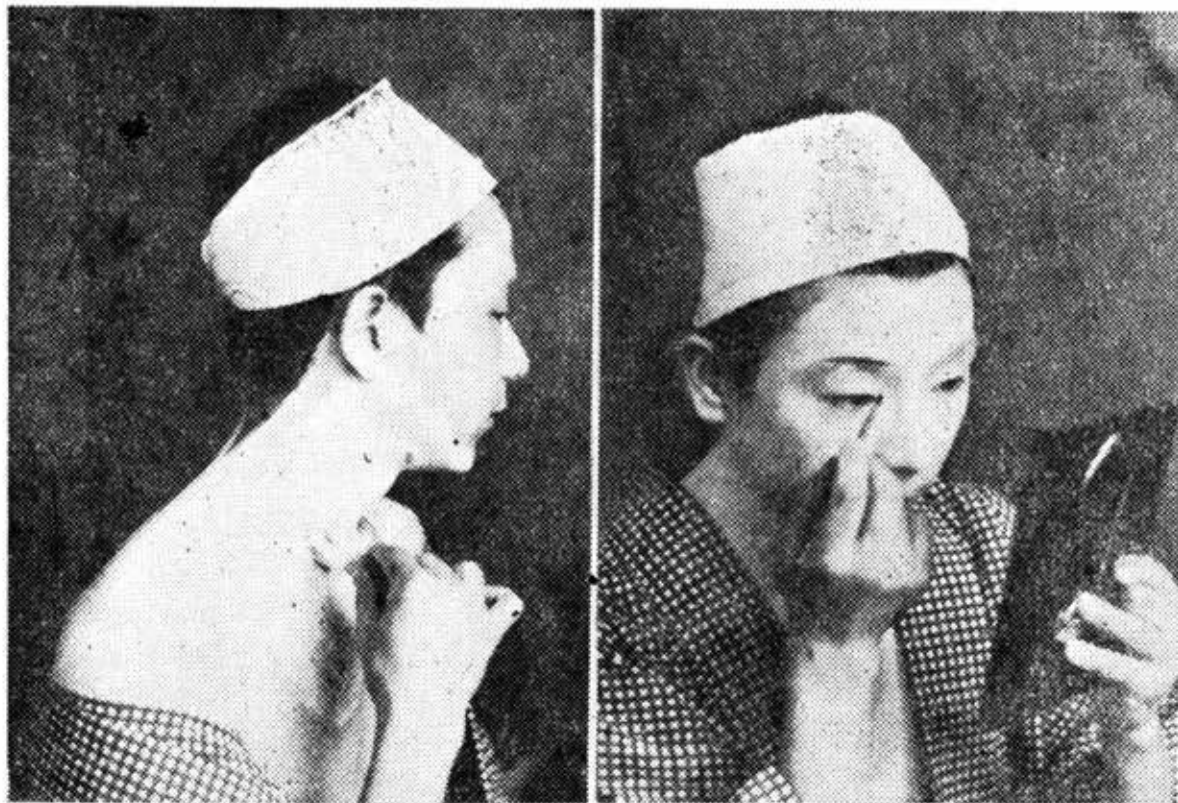
「姐さん、一緒に行けるのなら、どんな事か聞いて下さいよ。ねえ……」と、すぎる様にねだりました。座長は

「はい、実は今日の劇場の前二階になる所が丁度、まねき（呼びこみ看板）を使えるようなんで『お七』の幕あけ前の時間を秀さんに『お七』の責め人形を願えたらと思いついたのですが、師匠も秀さんも嫌だと言われるなら無理な願いになります。でも本当の話は、

何とかして今夜の収入を揚げないと、私の一座も割ってしまわねばなりません。この処、先乗りの動きが仲々とれなくて……」

と、いかにも思い余った有様なのでした。

さっき室での話では出ていなかった裏話だったので師匠とわたしは目を見合せてしまいま





す。宿の玄関口へ皆が出て来ますので詳しくは車の中で―と、とに角、乗りこみました。これでは今更に断わる事は出来ません。

自動車の中で話合いました。が、旅まわり同志の助けでどうせ演技も見ず、転に頼まれた

上は、一そ、トコトンまで豊香座長に身柄を預けて顔を立てましょう。若しこれで少しでも客が増えるなら、やり甲斐の有る役だろうと言う事になりました。秀さんの顔を見て、是非に！と切り出されたのも、嬉しい気持ちになったのでしよう。わたしは急に胸が躍って来ました。

劇場は人通りの多い街なみの突き当りに建っていて、見上げると成程、丁度、正面二階のあたりに恰好よく突き出しがあり、手すりで囲まれた全く生人形の飾り付けに適當です。『お七』の責め場を飾りたいと考えたのも無理はありません。電柱からライトが一本、広く劇場正面へあてられる様になっているので、益々効果的でした。わたしは不思議な興奮を覚えて師匠の手をしっかりと握りしめていました。

病気の立女形さんは小部屋で寝ていました。私達二人が承知しなかったら。此の一座にとって、この人の責任は重大な立場にあった訳ですが、やつれた色白い素顔は、いかにも旧派の女形らしく面長で目もとに陰の美男子です。僅かに笑みを浮かべつつ涙を

見せたのに、美也師匠も「どうか判りませんが今夜は任せて下さいよ。とに角、元氣にならなければあね……」と、いたわりを言います。

さて、それからは、この一座は生き返ったように賑やかになり、すぐ幹部の一人が奉行所の同心に、あと四、五人が捕方に粧りかかり道具方さんは高札たかふだを持って来ます。師匠姐さんが町まわりの都合で先に仕度にかかるんですから、衣装やヅラが出ました。見るとお決まりの黄八丈の他に荒縄が添えられていますので、二人共ハツと気付きました。師匠は裸馬にのって引きまわしの場をするらしいのです。咄嗟に氣をとり直した師匠は

「あの、縄は遠慮しないで力をいれてやって下さい。その方が効果も出るでしょうから」といいながら、わたしを見かえりました。意外な日に意外な一座で、姉妹のようなわたしたち二人共が縄目で責められ、衆目に晒される事になったのです。

師匠の仕度は、もはや定評あるだけに、座員はその出来上りに、すっかり驚きの声をあげました。さっき迄のキリッとした美也師匠の男から、化粧と共に女へ転身しきって行く妖氣と濃艶さ。『パッチリ』で思い切り濃く

塗った顔や、のど、胸もとや襟あしから背中、そして裾の乱れまで気にして、わたしに太ももまで塗らせたのです。

実物の美しさには座長も、すっかり気を吞まれた様子でした。襟をかき、乱れ毛を二、三本、白い頬にからませた師匠は、五月の暑気の中で重着をしても汗一つかかず、悩ましい身腰へ、座員が引きしぼる荒縄で高手小手にくくり上げました。思わず、うめく声も、もはや一人の女のそれになり切って、他人の座で早くも責めの晒しを受けているのですから、わたしは可哀想でたまりません。でも、この姿で荒馬の背にのって町をまわるなら、大入り満員は疑う余地もありますまい。

楽屋口を出て師匠は

「秀さんの責めが、帰って来る頃には出来る訳ね。楽しみよ。今日はツイてるわね」と囁きました。

抱きかかえられて馬上に座した師匠の「お七」は凄まじい色気がありました。「じゃあ行って来ます」と声がかかりますと、捕手の一人がチンドンをはじめ、姐さんの目の前に高札（罪状処刑を書いた板）が立ち、馬はユラ／＼と美女をのせて動き出しました。早くも寄って来る町の人たちは「やあ、女がしば

られてるのじゃ」と子供の声と共に、はやしたてました。ユラリユラリと襟足を深く抜いた人形のように白い顔を青ざめ、目をとじて……遠ざかって行きました。町まわりは約四〇分で済ますのだと座長は言いました。そして、いつまでも馬の上の「お七」を見とれる様にして立っているのです。無事に他座からの客を送り出した座長の顔には今夜の入りが早くも予期されてか、明るい微笑の中にも涙ぐんでいる様子でした。

楽屋に戻って、今度はユックリとわたしの責め場の粧りにかかる事になります。

姐さんには、わたしが塗ったのですが、今度は豊香座長が塗って下さるので、

「まねきは、わたしには勝手が判りませんし、お任せします。覚悟してますから」といい乍ら、心の中では町から帰って来る美也師匠にわたしのまねき人形を見てほしかったのと、他人の座で責め場を見せる事態に異常な誘惑を覚えました。

「本縄にしないと、かえって色気は出ませんし、どうせ余り動かないものですから、勉強する気で私に任せて下さいよ」座長はそういつて、真白い練白粉の皿へ板刷毛を浸ませてグイグイ胸から肩や背へかけて、素早いさば

きで牡丹をはいつつ塗り広げていきます。いっしか例の如く、冷めたい感しょくと脂肪の匂いに酔って来るところへ、座長は

「美也師匠が目の中に入れても痛くない弟子だとは菊さん（わたし一座の先乗り）に聞いたが、なるほど粧り甲斐のある肌だね」と、つぶやくのでした。首筋を残して顔をあとにしたのは、顔は、わたしに任せなかったのでしょう。でも板刷毛は二の腕から脇の下にまで走り、見る間に上半身、殆んどが白い女体に変ります。こんな本塗りになるのは久しぶりでしたし、他人一座での出来事、今日はじめて逢った人達が見守る中なので、化粧している内にも不思議な気持をそられて来ました。やがて、師匠姐さんと同じように足先きから、ひざ上までも白くされ、一体どうなるのかと心配している所へ、出された衣装が淡藍色の獄衣なので悲しくなります。それは、もう襟裏などに既に何度も使用された濃い「パッチリ」が白くしみ、背にあたる内側も真白く白粉がうつっているものなのでした。此の一座の恐らくは病氣になった立女形さんたちが、幾度か殆んど今のように半身を刷いて、此の獄衣で責めを受けた名残りでしょう。旧劇の一座ならとも角、わたしたち新派では

こんな事は余ッ程の時にしかありませぬのに……。

それを背に覆い腰を包んで、自分で顔にかかります。やはり身体つきが女に出来上っても結局は顔が女形の生命になります。今日は、とくに座長の言葉を主にして責め場の「お七」にする為、わざと口紅は淡く、まぶたには、ずっと青黛を引き、血の気の失せた顔に目ばりを茶に紅を多くしてクッキリ刷きま

した。ツラはつけないが、耳たぶまで白く刷いたその表情は、羽二重下地のままで既に凄艶な囚人になっていました。散らしのツラをつけて、鏡の前で効果的に撰ばれた桃色のお腰を締め、殆んど片肌がむき出しに襟を抜いて紐を締め、細帯をして着付けましたら、それは、わたし自身が見た事もないような「お七」の責め人形になってしまいました。

間もなく薄暮が迫り、劇場正面のライトを消しておいて、正面二階のまねき場になる所へ連れ出されまして、ふり仰ぐ人もない内に、急いで縄をかけられました。座長は流石に其の道の苦勞人だけあって、定法通りの縄に詳



しく、首へまわして絞ったもので前身へ菱目を締め、二の腕へもまわしておいて、余り見えぬから、うしろは省略する……と言い乍らも、思い切り後ろ手を高く吊るようにギリッと絞り上げました。覚え唇をかみ眉をよせてうめきましたが、座長は

「秀さんには済まないが、ほんとに、しばらくでいいから頼みますよ」と恐縮しつつ、あごに手をかけて引きおこし、紅皿の血糊りで白い唇のすみからタラリと滴たらせました。鏡をのぞかせて、

「こうしてありますから、動く事があってもその心得でやって下さいよ」と念を押しまし

た。つまり、責め場での女で動くようにと言うのでした。

余りに変り果てた自分の肢態や表情に段々倒錯しつつも、そっと下を覗き見ると、四米程の眼下に何事も未だ気附かず時間待ちしてる四、五名の客があります。ああ、今にあの人の好奇の目に晒されるのか、と自分の哀れにも悩ましい姿を考え、もうこうなっては、せめて一刻も早く美

也師匠が戻るのを祈りたいやら、一方では恥も外聞もなく、なぶり殺されたいという奇妙な気持で、わたしの心が熱くうづくのでした。

いきなり、わたしの正面から丸く絞った探照灯が輝きました。わたしは、それらしく眼を閉じ腰をよじて責めの姿を演じました。襟や片肌あたりに、乱れ髪がパラッと落ち、これは本気で、しばらく立てられた痛みが今更に身にこたえて、不思議に快くなりました。縛り上げられて、ライトの焦点に晒された、女になり切った男の姿は、見る者にどのような映った事でしょう。

瞬時を経て足元から、



「おーッ、見ろや」お七の晒らし人形じゃ。よく出来てるのお」という声が聞こえ、ワヤ／＼と騒ぎは広まって行くようです。ソツとしかめた眉の下ではなれた町通りを見ると、五人、十人と弥次馬が走り来るのです。しばらくの間に三十人位の男女が集まったのは驚きもしましたものの、どの視線も好奇と驚きと恥ずかしめの思いをこめて、痛いほど集中するのを感じ、次第に肌がじっとり汗ばんで熱くなって来ます。一寸、動いたら「ああやっぱり本ものの人間だ。すごいほどの美人じゃなあ」と波のようにざわめく有様！

「ありや本当に男じゃるか。どうじゃ、あの肩あたりの色気は……」と聞えて来るので、女形役者の命利につきる気がしました。まだ

くわたしを女と信じて見ている目が多いのでしょう。その内に不図、わたしはライトの柱の下に立っている男を見てドキッとしました。

わたしの一座の先乗りさんが何時の間に来たのか、ジツと晒しお七を見上げているのです。耳まで血が昇るほど恥ずかしい気がしました。こんな姿は、あの「舞台ならし」の夜以後は、舞台でさえ内輪の方に見せたことではないのですから……。本当に、わたしは晒される人の気持を感じました。菊さんは、わたしの目とぶつかり、申訳けない顔つきでソツと頭を下げました。でも矢張り、そのまま食い入るように見つめているのです。

思い切って演技をする動きに見せて、グイッと身をそりかえしました。その拍子に、囚衣の衿のあたりがユルリと下り、胸に締めてある乳当てがチラリとのぞき、息づくままに上下して、遂に白く塗った脇の縄のくくり目まで、獄衣を崩れおとしたので愈々どうにもなりません。肌はじつと

りと汗ばんでライトの中で白く光り、背中はずいぶんツーツと手首のほうへ汗が伝って来ます。

これ以上に身をもがくと、白粉の塗っていない所が出るかも知れません。その時は、やっぱり女形じゃった……と役者の芸をほめられるだけでは、わたしのこの死にたい位の恥ずかしさは消えないでしょう。

その時、町角からチンドンの音が聞えて来ました。町まわりの一行が、やっと戻って来たのでした。涙の流れて来る目尻で、師匠の「お七」が馬の背でゆられて来るのが見え、客のざわめきは更に高まりました。思い切つて、あごを下げ怨めしげに下を見下すと、チンドンの最後の鳴り渡る中で妖艶な黄八丈の美女が、胸もとから背の奥まで真白な白粉の肌へ乱れ毛を汗ばませ、後手にしぼられたままで、わたしを見上げます。もうわたしには弥次馬の声は何も聞えなくなっていました。本当は二人の「お七」が最高の妖気で対決する場面に声をからして騒ぎどよめいている筈なのに……

師匠姐さんの目は、わたしの涙の目とからみ合い、その師匠の切れ長い目は、意外に真に迫まった、半裸に近い囚人縄の責めにあえぐわたしに、酔いしれたようにギラ／＼して

いました。私は、羞ずかしいやら嬉しいやらで、師匠の濃い唇や目がニッと慰め笑った瞬間！生人形は動きすぎるな！の心得も忘れ果てた状態で、白い背を見せてゆらめき、高手小手にまわした縄をそのままに背負ってガックリとうなだれてしまったのです。

楽屋へ落着くと、

「師匠、おつかれ様でした。秀さんにも済まない事をしましたが、そのお蔭様で愈々人気が湧いて、今夜は久し振りに晴ればれした舞台がつとまります」と、ヅラを外しただけの二人のお七へ、座長や幹部さんが挨拶に来ました。想像以上に疲れてグッタリしている内にも、未だ凄まじい色気を発散している二人は、予期した以上の効果があつた驚きの目で、又改めて見まわすのでした。

その夜の入りは、さすがに予想通りの大入りで、二幕すぎには満員札止め（当時は木の札に大人と小人を書き入場券としたものです）となつて、一座は熱のこもった舞台を見せていました。新派のわたしには、マゲものの道具も仕ぐさも珍らしいものばかりです。満員の客の中には、わたしの責め人形に惹かれ、師匠の町まわりの晒し馬の妖美さに誘われて来た客も多いと思えば、矢張り嬉しい気持ち

でした。

美也師匠の舞台も順調に運び、一人で食う（演技で他人の演技を殺す事）ようなことはなく、相手役にまわる幹部によく合わせていた様子でしたし、袖幕へ入った幹部の人が「さすがにいい芸だよ。心配していたんだが、この“お七”には情がうつって可愛い位いだ。女形は二十二、三が一番いいところだねえ」というのですから、うれしくてたまりません。僅かに師匠の見せ場になった吉三との生木を裂かれる場や“やぐら太鼓”の場で師匠独得の色気が出て客席を異常にドヨメかせた位いで、師匠がこの座へ精一ぱいの華を贈っている気持は充分にわかりました。

舞台では晒しも引きまわしありませんので、二幕ものは程なく終り、小部屋で揃って仕度を解き、早目に劇場を出る用意にかかります。師匠の衣装をとりますと、肌襦袢が濃い白粉の移りと共に汗ばんでいました。

楽屋風呂に入って化粧を落し合うと、やっ

と男の世界に戻れた様な気になりましたが、役者の化粧している間の心理は誰も一樣に経験する不思議なものです。劇場を出る時は、本当に大任を果たした安心とつかれで、ゲッソリしましたが、宿に着いたら十二時に近く、錦糸座長以下、全部が室に揃っていて大変な御気嫌なのです。どうも先方から電話で今夜の助けて貰った礼やら大体

の客の入りを伝えて来ていたらしいのです。

「あんなに喜ばれたのは初めてです。助けに行つた甲斐が有りましたよ」と師匠がいうと、座長が珍らしく張り切つて

「あたり前だよ、こっちは最初から判つてたさ。こういうっちゃあ申訳けないが、助けに出した内身が違ふんだからね。おかげで俺も男を一枚も二枚も上げた処だ！」と大きな声で笑いました。わたしにとっては座長のこの一言が、縛られて晒された痛みや羞ずかしさなど一度にふつとぶ程、肝に浸みるようにうれしいものでした。師匠とわたしが助けに行つて、絶対に他の一座に劣る筈がないと口に出していったのを、はじめて聞いたのですから……。本当によい勉強になったものです。

昭和十九年の秋、時局柄、各座の合同やら演劇内容の戦時向きへの転向やらで多難な日が続いた揚句に、一座は都合で解散しましたが、当時の師匠は二十五？六？。わたしは丁度二十才でした。想い返えすと生涯、忘れられぬ多くの出来事を体験したり勉強したりしたわたしの青春期にとつて、貴重な其の頃だったものです。折りがあれば又、変つたものを発表したいのですが……当時を見かえては今でも流石に脂粉の香りは懐しく、不思議な気持をさそわれたりするわたしなのです。

（挿入写真は当時の阪東美也師匠のもの。）